花や星の名前に秘められている謎は、華やかで明るいなかにも悲哀を含んだ美しいギリシャ神話が解き明かしてくれる。
著者はそんな謎をたどってギリシャ神話から四十五篇余りを選び神々の世界を描く。
北欧の幻想的な神話を含めた美しい物語集。

カバーデザイン　道吉　剛

# ギリシャ神話

## 付 北欧神話

山室 静著

ギリシャ神話
〈付北欧神話〉
山室 静著
教養文庫
430
D
178
¥480

現代教養文庫

430

# ギリシャ神話

〈付　北欧神話〉

山室　静著

社会思想社

現代教養文庫

430

# ギリシャ神話

〈付　北欧神話〉

山室　静著

社会思想社

# 目次

## ギリシャ神話

## 北欧神話

# ギリシャ神話

アテナ女神

## 世界のはじめと神々

昔のギリシャ人は世界や人類の起りをどのように考えたろうか。

『聖書』を見ると、その巻頭にある創世記の最初にいわれている——「はじめに神天地を創りたまえり。」と。この世界そのものが神の創造物とされているのだ。ただ、そのエホバ（ヤーヴェ）の神が創った天地は、最初は形もはっきりせず、ただ真暗な何物も住まないどろどろの塊りだった。しかし、神はさらにそこに光を与えて夜と昼とを分ち、天と水とをわけ、地にはあらゆる動植物をつくり、空には太陽や月や星をすえて地を照らさせた。そして最後にこの地を支配すべきものとしての人間を、自分の姿に似せて創られ、六日がかりでこの世界を完成して、みずからこれを祝福され、第七日は休息されたとなっている。

これはイスラエル人のもっていた神話ないし信仰で、キリスト教はこの信仰の上に築かれてきた。それは唯一絶対の正義と愛の神が、天地万物を創造したという独特の考えだ。そこで、ほかのすべての神を排斥した。

それに対してギリシャ人は、ずいぶんちがった考えかたをした。イスラエル人の考えかたを一神論というなら、こちらは多神論で、じつにさまざまの神がいる。（その点では八百万（やおよろず）の神々がいる日本

の神話と似ている。」しかもその神々も天地を創造するというような大事業はしていない。そういう意味で、ギリシャの神々はイスラエル人の考えた神にくらべると、ずっと格が落ちるというか、いわゆる神々しさが足りない。それだけ彼らは人間的だ。

じっさいギリシャの神々ほど人間らしい神様は、ほかにはないだろう。イスラエルの神が人間を神の似姿として創ったのに対して、ギリシャ人はむしろ彼ら自身の姿に似せて神々を創ったといってい い。エジプトやメソポタミヤの神々が、巨大不動の圧倒的な姿をして、しばしば奇怪な動物の頭をつけているのとは、もちろんちがっている。そういう神々にギリシャの彫刻家などの刻んだ神の像を並べてみると、いかにギリシャの神は人間的で、自然で、そして美しいことか。これは人間思想史の上での、大きな転回、革命であったにちがいない。

話が少し脇道にそれてきた。ギリシャ人が天地の起りをどのように考えたか、その点にもどっていこう。

ギリシャの一番古い詩人ホメロス（紀元前一〇〇〇—九〇〇年頃）は歌っている。

「オケアノスは神々の親、万物の始まり。」と。

オケアノスは大地のはてにあって、ぐるりと大地を取り巻いている川で、あらゆる海も川も泉もそこから流れ出たもの、つまり彼の子供と考えたらしい。

まったくのところ、川は大地を養い、あらゆる動植物を育てるのだから、昔のギリシャ人が川を神と考え、その親分のオケアノスが万物の始まりと考えたのも、もっともだ。いかにもギリシャ人らし

い合理的な考えといっていい。昔のギリシャの娘たちが結婚の前にはすべて川に入って水を浴びたのも、おそらくそれによって神の祝福を受け、豊かに生みだす力を授かるためだったにちがいない。

しかし、このホメロス風の考えがすべてではなかった。べつに有力な考えが少なくとも二つあった。

まず、ニックス〈夜〉という意味）という真黒な翼をした途方もなく大きな鳥が、風によってはらんで銀色の巨大な卵を生んだ。この卵の中に金の翼をもった愛の神エロスが生まれ、彼がこの卵をわって出てきた時に天地が分れて、世界が創造されたとする考えがあった。

……黒いつばさのニックスが、
暗く深いエレボス（暗黒）の胸の中に
風にはらんだ卵を生んだ。季節がめぐって
待たれたエロスが生まれ出た。金の翼をかがやかして。

と、たとえば喜劇作家アリストパネス（前五世紀）は歌っている。

しかし一番まとまっていて、また広く知られているのは、前八世紀の詩人ヘシオドスが『神統記』に書いているものだ。以下それに従って大体を記してみる。

世界のはじめは、形もはっきりしないどろどろした塊りで、天も地も海もみなごちゃごちゃにまじ

りあっていた。これを、カオス〈混沌〉という。このカオスから最初に生まれたのがガイアだった。ガイアは大地を象徴した女神で、広い胸をもっていた。そこでその胸があらゆる神々の住所になった。このガイアから、愛の神エロス、暗黒の神エレボス、天の神ウラノス、海の神ポントスなどが生まれた。これらの神々を、ガイアはひとりで生んだのだという。

ところがガイアは、愛の神エロスのはたらきで、やがて、じぶんの生んだ天の神ウラノスと結婚することになり、ウラノスが、神々の王となった。この天と地とのあいだに十二人の子どもが生まれた。男の子が六人、女の子も六人で、ティターン〈巨神〉とよばれ、みんなとほうもなく大きい、力のつよい神だった。そのうち八人が兄妹同士で結婚している。

これを表にしてみれば次のようになる――。

| 男の神 | | 女の神 | 二人の間の子供 |
| --- | --- | --- | --- |
| オケアノス | ＝ | テテュス | 全世界の川や泉 |
| コイオス | ＝ | フォイベ | アステリア、レト（レトとゼウスの間の子がアポロンとアルテミス） |
| ヒュペリオン | ＝ | ティア | ヘリオス〈太陽〉、セレーネ〈月〉エオス〈あかつき〉 |
| ヤペトス | | （オケアノスの娘クリメネを妻にする） | アトラス、プロメテウス、エピメテウスなどの巨神 |
| クレイオス | | （天の光をさすものらしいが、はっきりしない） | |

クロノス＝レア　（女）ヘスチア、デメテル、ヘラ
　　　　　　　　（男）ハデス、ポセイドン、ゼウス

テミス（〈法〉〈秩序〉というような意味）　ゼウスとの間に〈平和〉〈正義〉〈季節〉などを生む

ムネモシュネ（〈記憶〉の意味）　ゼウスとの間にムーサイ（ミューズ）を生む

このほかにも、ガイアは、キクロペとよばれる巨人を三人、ヘカトンケイルとよばれる巨人を、これも同じく三人生んだ。キクロペというのは、〈雷〉とか、〈稲妻〉という意味で、ひたいの真中に、大きなまるい目がひとつついている巨人。ヘカトンケイルというのは〈百本の手〉という意味で、手が百本、頭が五十ある巨人だ。

ところがウラノスは、はじめからガイアの生んだ子をかわいがらなかった。それどころか、生まれる子どもを、かたっぱしから大地の穴の中におしこんでしまった。

母親のガイアはそれを悲しんで、とうとう復讐を思いたった。鉄で大きな鎌をつくると、穴におしこめられている息子たちをよびあつめて、

「おまえたちのお父さんは、ほんとにひどい人だ。この鎌であだをうっておくれ。」

といった。

子どもたちは、みんな乱暴なウラノスをおそれていたので、だれも返事をしなかった。でも、最後

に末の男の子のクロノスが元気をだしていった。
「お母さん、ぼくがやってみます。あんなじぶん勝手なお父さんなんか、どうなったってかまうものか。」
ガイアはこれをきいて喜び、クロノスに大鎌をわたした。
クロノスはその夜、ガイアの上におっかぶさるようにして裸で寝ているウラノスのところへ飛び出していって、大鎌で男の根をかっ切った。痛手を受けたウラノスは、それを恥じて二度とガイアのところへあらわれなかった。
ところで、切りとって海に投げすてられたウラノスのオチンチンのまわりには、海の波が真白いあわをたてて集まった。すると、そのあわのなかから、一人のすばらしく美しい女神が生まれ出た。これが美の女神といわれるアフロディテだとは、おもしろい話ではないか。
さて、ウラノスを押しのけたクロノスは、代って神々の王になったが、ウラノスは息子を呪っていった。「お前もやがては息子のために王座を追われるのだぞ。」
「いや、おれは断じて王座をゆずるものか。」とクロノスは叫んだが、父の呪いの言葉がやはり気になった。そこで、彼は妻のレアが生んだ子を次々に五人も呑みこんでしまった。
レアは悲しんで、今度生まれる子だけは何とかしてクロノスの眼から隠し、ぶじに育てて、ほかの子供たちの仇をも討たせたいと考えた。そこで遠く離れたクレタ（クリート）島へ行き、そこでこっそり赤ん坊を生むと、山の洞穴に隠した。この子が後にオリンポスの神々の首領になるゼウスであ

る。

レアはこうしておいて、赤ん坊の代りに大きな石をむつきにくるみ、クロノスに渡した。クロノスはそうとは知らず、いきなりその石をつかんで呑みこんでしまった。彼の横暴はいよいよひどくなり、兄弟のティターンたちと世界を荒らしまわった。

一方ゼウスは、山の洞窟でニンフたちに養われて、ぐんぐん逞しく成長した。蜜蜂はせっせと蜜を運んでくれたし、山羊はたっぷり乳を出してくれた。

いよいよ一人前になると、彼はまず女神メティス〈熟慮〉のところへ行って頼んだ――クロノスに呑みこまれた兄弟たちを吐きださせる薬を作って、彼に飲ましてくれと。メティスはいわれた通りに薬をつくり、クロノスに飲ませてゼウスの兄弟を吐きださせた。ゼウスはこの兄弟たちとオリンポス山にたてこもり、クロノスに戦いをいどんだ。

クロノスも兄弟のティターンたちをあつめて、オッサ山にたてこもった。はげしい戦いは、まる十年もつづいた。山はさけ、岩はとびちって、あたりの景色はすさまじいほどになった。それでも勝負はなかなかつかなかった。

これを見たゼウスたちの祖母ガイアが、クロノスの横暴をおさえたいと思っていたので、若い神々にひとつの秘密をおしえた。大地の底にとじこめられている、ヘカトンケイルとキクロペたちを助けだして、味方にすることだ、と。

ゼウスは、さっそく、ヘカトンケイルとキクロペたちを助けだした。助けだされた巨人たちは大よ

ろこびで、ゼウスがたについた。三人のヘカトンケイルは百本の手にそれぞれ大岩をつかんで投げはじめた。キクロペたちは大地の底からもってきた雷と稲妻をくれたので、ゼウスはそれをクロノスたちになげつけた。

さすがのクロノスたちも、これにはかなわず、とうとう敗れて、みんな地の底のタルタロスにとじこめられてしまった。タルタロスというのは、〈限りない闇の深淵〉といった意味で、大地のはずれのふかいふかい地の底にある地獄。天からなげた岩は、九日九晩落ちつづけて、十日めに大地に落ち、それからまた九日九晩も地の中を落ちつづけて、十日めにやっとタルタロスにつくのだという。地獄の城門には、大きな鉄の扉がはめこまれている。しかも、三人のヘカトンケイルがゼウスにいいつけられて厳重に見張っているので、クロノスたちは二どとぬけだすことができなかった。

こうして、クロノスたちをおいはらったゼウスは、ふたりの兄と世界をわけあうことにした。ゼウスは天をとり、ポセイドンは海、ハデスは地下の世界をおさめることにした。大地はみんなの共有ということになった。

こうしてクロノスの時代は終り、オリンポスの神々の時代がはじまるのである。

## オリンポスの神々

天をおさめることになったゼウスは、神々の王となって、オリンポスの山上に宮殿を造った。ほかの神々もこの山を住居にして、ゼウスの命令にしたがった。これからオリンポスの神々を中心にした、ギリシャ神話の時代がはじまる。

さて、オリンポスに住んだ神々の中で、ゼウスとその妻ヘラに、ゼウスの子供といわれる（ほかにも説があるが）アレス、アテナ、アポロン、アルテミス、アフロディテ、ヘルメス、ヘパイストスの七人と、ゼウスの兄妹のヘスチア、ポセイドン、ハデスの三人をふくめた十二人の神が有力だったので、とくにオリンポスの十二神と呼ばれる。

簡単にこの十二神の説明をしておこう。

一、**ゼウス**（ローマ神話ではユピテル、英語でジュピター）

「ゼウス、最も輝かしく、最も偉大な、雷神の神よ」とホメロスが歌っているように、天の支配者で、雨を降らしたり、雷を投げつける神と考えられている。彼は正義を愛して、嘘つきを許さず、ことにいったんたてた誓いを破ることを憎んだ。しかし、聖書の神のように万能でも、厳粛でもなく、たぶんに浮気者で幾人も愛人を作るかと思うと、妻のヘラにはよく欺かれる。いまの道徳から考える

と、かなり低級のところがあるが、これはつまり当時のギリシャ人の道徳観念を示すものだろう。樫（かし）の木が彼の神木で、ことにゼウスの神殿のあるドドナの森の神官は、その樫の葉のささやきをきいて神託を占ったものだった。鷲が彼の神聖な鳥とされている。

ゼウスと鷲

ヘ　ラ

アテナとポセイドン

## 二、ポセイドン（ローマのネプトゥノス、英語でネプチュン）

ゼウスの兄弟で、海の王。海の底にすばらしい宮殿をもっている。妻はオケアノスの娘のアンフィトリテ。彼が黄金の馬車で海の上を走る時は、波はひっそりと静まって、車は滑るように進んだ。また、白い波頭をたてて進んでくる波は、彼の飼っている馬だと見られ、人間は彼からはじめて馬を贈られたのだといわれる。

彼はまた地震を起す神として〈大地をゆすぶる者〉と呼ばれ、また地下の水の支配者として、泉の所有者とされる。絵ではいつも三叉の槍を持った姿であらわされる。その槍を彼はあらゆるものに突きさして砕き去ったり、泉をわき出させたりする。

大きなホラ貝を吹く海のラッパ手トリトンは、彼と妻アンフィトリテの子供。海の老人で、あらゆるものに姿を変える力をもつプロテウスは、彼の従者だが、また彼の息子とも考えられている。

海の神には、ポセイドンのほか、ポントスとネレウスがある。ポントスは〈深い海〉の意味で、大地母神ガイアの息子とされているが、海の擬人化にすぎず、あまり神話では活躍しない。ネレウスは

〈海の老人〉と呼ばれ〈信頼すべき、やさしい神〉（ヘシオドス）とされている。彼はオケアノスの娘ドリスを妻にし、二人の間に五十人の美しい娘が生まれた。これが海のニンフたちで、父親の名をとってネレイス（ネレイデス）と呼ばれる。その一人が一説では、ポセイドンの妻のアンフィトリテ、ほかに、トロイ戦争の勇士アキレウスを生んだテティスとか、カリプソー、ガラテアなども有名。

### 三、ハデス

地下の国、死者の国の支配者。すばらしく富んでいるため、またプルートン（〈富める者〉、ローマではプルートー）とも呼ばれる。一ど自分の手に入れたものは決して返さぬから、そんなに富んでいるわけだ。きびしい、おそろしい神だけれど、決して悪い神ではない。妻はペルセフォネ。この美しい妻を奪っ

ハデスと地下の国――中央はペルセフォネとハデス，下左端にシジフォスがみえる

ヘスチア（ローマ，トルロニア美術館）

てきた話は、あとでしょう。

**四、ヘスチア**（ローマではヴェスタ）

ゼウスたちの姉妹で、いろりあるいはかまどの守り神、家庭の保護者として非常に尊ばれたが、神話には、ほとんど出てこない。新しく生まれた子は、彼女の前につれてこられた後ではじめて家族の一員とみなされたし、食事の前後にはいつも彼女にそなえものをした。町にはすべてヘスチアにささげられた神聖ないろりがあって、そこには火をたやしてはならなかった。彼女は一生を清らかな処女として過した。

**五、ヘラ**（ローマではユノー、英語よみジュノー）

ゼウスの姉妹で、また妻。結婚をつかさどる神で、妻の保護者。ゼウスが浮気をすると大いに嫉妬して、その愛人をひどく罰したり、ちょっとしたことで怒って、大きな不幸を人間にもたらすこともあって、あまり立派な姿には描かれていない。牝牛と孔雀が彼女のお気に入りの動物だった。

**六、アレス**（ローマではマルス）

ゼウスとヘラの子で戦いの神。ギリシャ人は血なまぐさい残忍な神として、彼をあまり愛さなかっ

たようで、神話でもあまり活躍しない。ローマ時代になっては、マルスとして尊ばれた。

七、**アテナ**（ローマではミネルヴァ）

ゼウスの娘で、すっかり成人して鎧かぶとをつけた姿で彼の頭からとび出してきたといわれる。武装して生まれてきたほどで、彼女はたしかに気性のはげしい戦いの女神だが、戦うのはもっぱら自分の国や家庭を守るためで、決して戦いのために戦いを好むのではなかった。彼女は英雄や王侯の守護神とされるが、本質はむしろ市民生活の保護者で、手芸や農業（ことにオリーブ栽培）の守り神であり、くつわを発明して馬をならしたのも、彼女がはじめて人間に教えたことだとされている。のちには知恵や理性の神とされ、一生を娘として過したことから、純潔の化身ともされた。

アフロディテとアレス

彼女はアテナイ市の守護者で、有名なアクロポリスのパルテノンの神殿は彼女にささげられたもの。オリーブの木が彼女の神木で、ふくろうはそのお気に入りの鳥。

八、**アポロン**（アポロ）

ゼウスとレトの子で、デロス島に生まれた。神々の中でも最も美しい神で、また竪琴の名人で、芸術の守護者とされ、ミューズの女神たちが彼にしたがっている。また弓の名人でもあり、人間に初めて医術を教えた医者でもある。その上フォエボス〈光り輝く〉アポロンとよく呼ばれるように、光の神であり、真理の神、ときには太陽の神（べつに太陽の神としてはヘリオスがあるが）とも見られている。

パルナソス山の下にあるデルフォイの彼の神殿には、巡礼の群がたえず、そこの岩山の裂けめから立ち昇る蒸気をすって恍惚となった神官が、アポロンの神託を告げるのだった。月桂樹がこの神の聖木で、動物ではことにイルカとからすがお気に入りだった。

九、**アフロディテ**（ローマではヴェヌス、英語よみヴィナス）

美と愛の女神。さきには海のあわ（アフロス）から生まれたという言い伝えを記したが、ホメロス

レトとアポロン

によるとゼウスとディオーネの娘とされている。いうまでもなく美と愛の女神で、彼女の魅力には神々も人間も負けてしまうものとされ、彼女がいなくてはどこにも喜びはないとされる。

おもしろいのは、この美の女神が、神々の中でもよりによって、びっこでみにくい鍛冶の神ヘパイストスの妻とされていることだ。彼女のお気に入りは鳩であり、またつばめや白鳥、木ではミルテ（桃金嬢）。

十、**ヘルメス**（ローマではメルクリウス、英語でマーキュリイ）

ヘルメス

ゼウスとアトラスの娘マイヤの子。ゼウスの伝令役（または死人の魂の案内役）で足に羽のはえたサンダルをはき、さきに輪（あるいは蛇）のついた杖をもって風のように早く走る。神々の中でも一番頭のするどい、ずる賢い神なので、商業や貿易の、またおもしろいことに、泥棒の守り神になっている。

十一、**アルテミス**（ローマではディアナ）

アポロンと双子で生まれた女神として、ゼウスとレトの子とされているが、古くは先住民族の地母神として、多産と子供（人間や野獣の）の守り神だったらしいという。しかし神話時代になると、森と狩

りを愛し、純潔を愛する処女神として、一生結婚しないで過すことになった。純潔を愛する処女神だけに、気性がはげしく、なにかの辱かしめを受けると、無慈悲なまでに残忍な復讐をした。後で述べるニオベやカリストの悲惨な最後もその例だが、こんなことも伝えられている。アルテミスはあるときキタイロンの山中で狩りをしていたが、そこにきよらかな泉があったので、お伴の処女たちとともに、裸になって水を浴びた。そこへ同じく狩りにきたアクタイオン（アポロンの子アリスタイオスの子）が通りかかって、木蔭から彼女の美しい裸身をのぞいた。それに気づいた女神は、羞恥と怒りとで、アクタイオンを一頭の鹿に変えてしまい、彼がつれてきた五十頭の犬を主人に向ってけしかけた。無知な犬どもは、それが主人とは知らず、たちまち躍りかかって彼を八つ裂きにしてしまった――。

彼女は森と狩りを愛する女神として、あらゆる野生の動物を愛したが、ことに鹿がお気に入りだった。木ではサイプレス。

後には彼女は、月の女神セレーネ（ローマではルナ）や、闇の女神ヘカテと同一視され、三通りに

アクタイオンを射殺するアルテミス

姿を変えるものだとも考えられた。

十二、**ヘパイストス**（ローマではヴァルカヌス、英語でヴァルカン）

火と鍛冶の神。ふつうに、ゼウスが一人でアテナを生んだのに対抗して、ヘラが一人で生んだ子とされる。すべて完全で美しい神々の中で、そのためか彼だけは醜く、しかもびっこだった。それでヘラは、（あるいはゼウスが）天からこの息子を投げすてたともいわれる。彼はすばらしい鍛冶屋で、自分で黄金からつくった女弟子を相手に神々のためにすばらしい家をたてたり武器をきたえてやる。

もちろんこの十二神のほかにも、ギリシャ神話では愛の神エロスや女神デメテル、人間のつくり主といわれる巨人プロメテウス、ぶどうと酒の神ディオニュソスなどの有名な神があり、一段低い神として音楽や学芸の守り神ムーサイ（ミューズ）たち、泉や森に住む妖精のニンフ、半分動物のようなパーンやサチュロスそのほか、また神々と人間のあいだに生まれたさまざまな英雄が出てきて活躍する。それらについては、時に応じて説明してゆくだろう。

酔ってサチュロスに支えられるヘパイストス

ところで、オリンポスの山はどこにあるか。じつはそれがはっきりしない。ふつうにはマケドニアとテッサリアの国境にあるギリシャ第一の高峰オリンポス（二八八五メートル）がそれにあてられているが、同じ名で呼ばれる山はギリシャ世界のあちこちにある。また、最初のうちはたしかに神々はその山の上に住むと考えられていたようだが、後にはしだいに天上高く雲の上に住むものと考えられて、オリンポスは地上をはなれていった。これは神々の住居として当然のことだろう。

それはとにかく、神々はこのオリンポスの上で、ネクタル（神酒）を飲みアンブロシアを食べ、アポロンを親分にしたムーサイ（ミューズ）たちの歌や音楽やダンスを喜びながら、不老不死の楽しい生活を送るものと想像された。いかにも人間的な、生命の喜びにあふれた神々の姿だ。ムーサイというのはゼウスとムネモシュネ〈記憶〉の娘たちで九人（三人、七人などの説もある）あり、ローマ時代になると、その九人がそれぞれ学芸の各分野を分担して受け持つと考えられた。カリオペは叙事詩、クリオは歴史、ターリヤは喜劇、メルポメネーは悲劇、ウラニアは天文など。

ヘリコン山のミューズ

オリンポスといえば、すぐに連想されるのがオリンピア（オリンピック）競技だ。英雄ヘラクレスがエリスの王を破った記念にオリンポス十二神の祭壇を築いて、ゼウスにささげて始めたものとされる。前九世紀から行われたらしい。

## プロメテウス兄弟とパンドラ

　ところで、巨神とゼウスたちの大戦争が終って、ゼウスがオリンポスから世界をおさめるようになったある日、ゼウスは生き残りの巨神のプロメテウスをよんでいいつけた。
「ひとつ、粘土をこねて人間をつくってくれ。形はわれわれに似た形にするのだ。そうしたら、わしが息をふきこんで命をあたえてやろう。おまえはいろいろの知恵をさずけて、人間がわれわれをあがめて神殿をたてるようにはからってくれ。しかし、人間に不死の命をさずけるわけにはいかない。しばらく生きたあとで、わしの兄弟のハデスのおさめる国へやることにしよう。」
　プロメテウスは巨神ヤペトスの息子だが、〈先に考える者〉という名の通り、遠い未来まで見通すことのできる賢い巨人だった。だからゼウスが巨神たちと戦ったとき、弟のエピメテウスとともにゼウスのみかたをした。そこで、クロノス方についた父親のヤペトスはタルタロスに投げこまれ、兄のアトラスは、父親といっしょに神々をあいてに戦ったので、罰として、天が落ちないようにささえるつらい役目をいいつかったのに、プロメテウスだけは、神々を助けたてがらで、神々にまじってくらしていたのである。
　さてプロメテウスは、ゼウスにいわれたとおり、人間をつくることにした。まずデルフォイの神殿

の東北のあたりで、いい赤土をみつけたので、それをこねて人間の形をつくった。ゼウスはそれに命をふきこんでから、こういった。

「ではプロメテウスよ、人間にいろいろと生きてゆく知恵をさずけてやってくれ。ただ、火だけはやってはいけない。あれは神々だけの持ちものにしておこう。人間が火を使うことをおぼえたら気がつよくなって、われわれの手におえんようになるかもしれんからな。もし、このいいつけにそむいて、人間に火をやったら、おまえにはおそろしい罰がくだるぞ。」

こうして人間は生まれたが、はじめは、ほかの動物とちがわない、あわれな生きものでしかなかった。からだを包むあたたかい毛皮もなく、ライオンや熊のような強い力もないのだから、動物よりも、むしろみじめな生きものだった。ほら穴の中に住み、草やなま肉をたべて、寒さや野獣におびえながら、びくびくして生きていた。病気になったりけがをすると、手あてをする方法も知らないで、ばたばた死んでいった。

親切でかしこいプロメテウスは、そんな人間をかわいそうに思って、いろいろなことをおしえてやった。家や道具をつくること、地を耕して種をまき、実が熟したらそれを刈りとってうすでひいて粉にすること、犬をならして狩りにつかうこと、牛や馬や羊を飼いならして、すきをひかせたり、毛をとって布にしたり、乳をしぼったりすること――これらのことは、みなプロメテウスが人間におしえたのだといわれる。そればかりでなくプロメテウスは、人間に言葉というものをおしえ、文字をつかって読んだり書いたりすることまでおしえた。

金の馬車を駆るヘリオス

しかし、火がなくては、どうにもならない。食べものを焼くことも煮ることもできないし、道具も石でこしらえるほかはない。冬になれば寒さにふるえるばかりだった。

プロメテウスは赤あかともえる太陽を見あげて、ため息をついた。太陽はヘリオスの走らせる金の馬車にのって、ほのおをふきながら空をよぎっていく。

「あの太陽から火をとってきて、人間にやったら、どんなによろこぶことだろう。」

プロメテウスは思わずつぶやいたが、それは大神ゼウスから固くとめられていることだった。いいつけをまもらなかったら、どんなひどい罰をうけることか。

しかしプロメテウスはとうとう決心した。かれは弟のエピメテウスをよんでいった。

「おまえは、おれがどんなにあの人間たちを愛しているか、知っているはずだ。おれはあの人間たちがりっぱに生きられるように、いままでいろいろと助けてきた。だが、まだ人間の生活はみじめなも

のだ。そこでおれは、さいごに一番すばらしい贈物として、人間に火をあたえてやる決心をしたよ！もし火を人間にやったら、ゼウスがどんなにおこるか、それは知っている。しかし、その罰もよろこんでうけるつもりだ。未来の世界はきっと人間たちが支配するようになるのだからな。そこで、おまえによく頼んでおくが、おれがいなくなったら、どうかおれのかわりに人間のせわをしてやってくれ。おまえはすこし考えがたりなくて、ときどきばかなことをやるが、ゼウスにだまされてはだめだよ。」

こういいのこしてプロメテウスはオリンポスへでかけていくと、ヘリオスの通り道にかくれて待ちぶせた。

まもなく夕方になって、ヘリオスの馬車が山のいただきに近づいてきた。プロメテウスは持ってきたういきょうの茎をとりだして、その黄金の車輪にさわった。ういきょうの茎は、外がわはかたいが、中には白いやわらかいずいがあって、これに火がつくとじわじわとどこまでも燃えていくのである。

茎にすぐ火がついて、ずいに燃えうつった。プロメテウスはいそいで山をおり、アルカジアのふかい谷間にきて、そこではじめてたきぎに火をうつした。火は勢いよく燃えあがった。これが地上にともされた、最初の火であった。

プロメテウスのともした火が、美しく赤く燃えあがるのを最初にみつけたのは、この谷間に住むサチュロスたちだった。サチュロスというのは、山羊のような角と足をもった道化者で、踊りのすきな

野山の精たちだ。彼らは、たき火のまわりに近づいてきて、口々に叫んだ。
「この新しい生きものは、なんてきれいなんだ。それに、すばらしくうまく踊るじゃないか。こいつはとってもあったかいや！　おれはすっかり気にいったよ。」
サチュロスの親分のシレヌスは、そんなわけで、いきなり燃えあがった炎をつかまえてキッスしようとした。炎はひげに燃えついた。シレヌスのびっくりした顔といったら！　プロメテウスは腹をかかえて笑った。
あくる日から、さっそくプロメテウスは人間に火の使いかたをおしえた。どうやって肉をあぶり、パンを焼くか。どうやって青銅をつくり、鉄をとかして刀やすきをつくるか。また、木と木をこすって火をつくることもおしえた。こうして人間は、みるみる力をましていった。
しかし、それがゼウスに知れないはずはなかった。地上から立ちのぼる煙を見たゼウスは、プロメテウスがじぶんの命令にそむいたことを知って、かんかんにおこった。すぐにプロメテウスをよびだして、どなりつけた。
「よくも命令にそむいて、神々だけの宝である火をぬすんで人間にやったな。おまえはタルタロスにぶちこみ、あの虫けらのような人間どもは、みな殺しにしてやるぞ！」
しかし、プロメテウスはしずかにこたえた。
「あなたに罰せられることは、わかっていました。しかしわたしは、あの人間たちに火をやらずにはいられなかったのです。いちど火をやったからには、もうあなただって、人間たちから火をとりあげ

ることはできません。また、人間をほろぼすことだって、できないでしょうよ。申しあげておきますが、あなたにほろぼされたティターンたちのあだをうつために、やがて大地は途方もなく大きな巨人たちを生みだすでしょう。しかもこの巨人たちを、神々はたおすことができないから、オリンポスには危険がせまります。その時あなたがたを救うのは、ある人間――あなたと人間の女のあいだに生まれる一人のたくましい英雄です。さあ、こう申しあげても、まだあなたは人間をほろぼすつもりですか。」

あやまるどころか、逆に忠告するプロメテウスに、ゼウスはますます腹をたてた。雷のような声で鍛冶の名人ヘパイストスをよぶと、青銅のくさりでプロメテウスをしばって、世界の東のはずれのコーカサスの山につないでしまえと命じた。

「おまえはおかした罪のむくいとして、あの山の上に永遠にしばりつけられているがいい。冬は雪がおまえをうずめ、夏は太陽がおまえを焼くだろう。わしの命令にしたがわぬ者は、どんな目にあわねばならぬか、思い知るがいい。」

ヘパイストスはゼウスにいわれた通り、プロメテウスをコーカサスの山につれていって、しっかりと岩につないだ。

ヘパイストスが帰ろうとすると、プロメテウスはいった。

「ヘパイストスよ、あのゼウスだって、いつまでも神々の王としていばってはいられないのだ。あのクロノスとおなじように、やがてはたおれなくてはならないのだ。その秘密を知っているのは、わた

しひとりだが――」。

ヘパイストスはオリンポスに帰ると、プロメテウスのいったことばをつたえた。するとゼウスは、すぐさま使いのヘルメスをやって、もしプロメテウスがその秘密をおしえてくれるなら、鎖をといてやるとつたえさせた。しかしプロメテウスは、きっぱりとそれをことわった。

ゼウスの怒りは、爆発した。彼はすさまじい大鷲をコーカサスに飛ばしてやって、プロメテウスの腹を食いやぶり、肝臓をつつかせた。夜のあいだに、その傷はなおるのだが、するとまた鷲がやってきて、食いちらす。そこでプロメテウスの苦しみは、やすまる時がない。さすがの巨人もたえられなくなって、ときには大声をあげて泣き叫んだ。その様子があまりすさまじいので、コーカサスの山にはだれも近づかなくなった。

罰をうけるアトラスとプロメテウス

こうしてプロメテウスを罰したゼウスは、こんどは人間を苦しめる方法をあれこれ考えた。すると、いいことを思いついた。美しい女をつくって、人間たちにおくることである。

そこでヘパイストスに女をつくらせて、パンドラという名をつけ、これに息をふきこんだ。パンド

ラという名は、〈あらゆるものに恵まれた者〉という意味だという。

その名のとおり、神々は、パンドラに思いおもいの贈物をした。ヘパイストスが粘土で形をつくると、アフロディテが美しさを、ヘルメスがずるがしこさと大胆さをあたえ、アテナが美しいきものをきせる――といったふうに。

それが終ると、ヘルメスがパンドラをプロメテウスの弟のエピメテウスのところへつれていった。エピメテウスは、〈あとから考える者〉という名のとおり、少し考えのたりない男だった。彼はパンドラを見ると、その美しさに心をうばわれて夢中になってしまった。まもなくふたりは結婚した。

二人のあいだには、やがてピュラーという娘が生まれる。この娘はやがてデュカリオンというプロメテウスの息子で、人間の中で一番かしこい男と、結婚する。そしてこの二人は、ゼウスが大洪水をおこして、人類をほろぼそうとした時にも生きのこり、のちの人類の祖先になる。しかし、この話はあと回しとしよう。

さて、美しいパンドラが、ゼウスの考えたとおり、人間にとっての大敵になったたか。

エピメテウスの家には、プロメテウスが残していった箱が一つあった。箱は黄金づくりだったが、中にいれてあったのは、病気、ぬすみ、ねたみ、憎しみ、悪だくみなど、人間を苦しめるありとあらゆる悪だった。人間を愛したプロメテウスは、これらの悪が人間のあいだにはびこらぬよう、この箱の中にとじこめておいたのだった。だから、弟のエピメテウスにも、決してふたをあけてはいけないといっておいたのである。

ところがパンドラはこの美しい箱を見ると、夫はきっとこの中にすばらしい宝ものをかくしておくのだろうと考えて、あけて見せてくれとせがんだ。エピメテウスがどんなにこの箱はあけてはならないのだといっても、見せてくれなければ死んでしまうといって、きかなかった。

すこし頭のたりないエピメテウスは、パンドラにせがまれて、とうとうふたをすこしあけた。とたんに病気、憎しみ、ぬすみなどのあらゆる悪が、箱からとびだして人間の世界にとびちった。

パンドラも、さすがにこわくなって、あわててふたをしめた。すると、中から弱々しい声で、

「わたしも外にだしてください。」とよぶ声がした。

パンドラはおそるおそるきいてみた。「おまえはだれ?」

「わたし、希望よ。」というやさしい声が箱の中からきこえた。

考え深いプロメテウスは、ゼウスが人間をひどく苦しめた時のことも考えて、希望をもこの箱の中にちゃんと入れておいたのだった。こうして希望が最後まで人間のそばに残り、彼に勇気と力とをあたえることになったのだという。

正直をいうと、このプロメテウスが人間を作ったという、神話のほかにも、人間創造の話はいろいろあったようだ。ヘシオドスなどは、人類に「五つの時代」を考えている。このことには後で、ふれたいと思う。

しかしとにかく、プロメテウスが神々に反抗してまで人類に火をあたえ、人類のためにつくすという考えには、ギリシャ人の熱烈なヒューマニズムがあらわれている。悲劇詩人アイスキュロスは早く

『プロメテウス三部作』を作って、これを文学化したが、これはヨーロッパ文学の大きな伝統になって、近代でも詩人シェリイが歌い、アンドレ・ジイドが小説にするなど、今日まで繰り返し繰り返し扱われてきている。この神話こそ、ヨーロッパ精神をもっともするどく、よくあらわしているひとつだろう。

## ゼウスの愛人たち

### †カリスト

ゼウスはクロノスをたおしてオリンポスの主神になった偉大な神だが、その後の神話ではおもに浮気な誘惑者として登場している。ここではその三つを簡単に書いてみる。

ニンフのカリストは狩猟ずきの女神アルテミスの侍女の一人で、いつも女主人のお伴をしては、アルカジアの野山を狩りして歩いていた。女主人に忠実なのと、狩りがうまいのとで、アルテミスのお気に入りだった。

ある日彼女は、深い森の中でひと休みしているうち、深い眠りに落ちた。その美しい姿を天上からゼウスが見つけて、さっそく心を動かした。しかしカリストはきびしい処女神アルテミスの侍女だし、彼女自身も一生処女を守って過すことを誓っている女だ。これに近づくには、何かうまい手段をとらなくてはならない。

そこでゼウスは、自分をアルテミスの姿にかえて彼女の眠っているところへ行き、揺すぶって起した。カリストは目をさますと、「いらっしゃい、御主人さま、あなたはゼウスよりもなお立派に見え

ますわ。」

といって、彼を喜んで迎えた。ゼウスは彼女をつかまえて接吻して、とうとう必死で抵抗する娘を手に入れてしまった。

こうしてゼウスは満足してオリンポスに帰ったが、カリストはすっかり自分を恥じて、女主人のアルテミスに出来事を話すわけにもいかず、ひとり悄然と森の中をさまようのだった。

それから何カ月かたったある夏の午後、アルテミスと侍女たちは狩りにも倦んだので、ある涼しい小川で水を浴びて遊ぶことにした。ところがほかのニンフたちは、嬉々として裸になって水浴びをするのに、カリストだけは恥ずかしがって裸になろうとしない。

それでも友だちにせめられて、最後にやっと着物をぬいだが、お腹をかくすようにする。女主人はすぐさまなにが起ったかを知って怒り、さっそく彼女を追放した。

カリストはやがて一人の息子アルカスを生んだが、今度はゼウスの妻のヘラの怒りをかうことになった。ヘラはとっくに夫の情事に気づいていたのだが、いよいよ子供が生まれたのを見ると、憎しみを爆発させて、彼女の髪をつかんで地に投げつけた。カリストは慈悲を乞うて両手をさしのべたが、その手はもはや人間の手ではなかった。彼女はもはや牝熊に変えられていたのである。（ヘラによってでなく、アルテミスに変えられたともいう。）

一方息子のアルカスは、妖精マイヤに育てられ、さまざまのことがあったが、ペラスゴイ人の王となった。彼は賢明な王として、麦を栽培してパンを焼くことや、麻糸をつむいで布を織ることを教え

たといわれる。この子孫がアルカジア人である。
　さてある日、アルカスはアルカジアの野で猟をしていた時に、一頭の大きな牝熊に出あった。牝熊は彼に追いつめられると、いかにも訴えるような眼で彼を見つめるのだった。それは熊に変身させられた母親であったのだ。しかし、そんなこととは知る由もないアルカスは、槍で牝熊を刺し殺そうとした。
　こうなってはゼウスも放っておけない。彼は一陣のつむじ風を吹き送ると、母子を天上にさらってきて、星にしてやった。これが大熊星座とアルクトウロス（牛かい座の一等星）なのだという。
　ところがヘラは、じぶんの憎らしく思う母と子が、天にあげられて星になったのを見ては、虫がおさまらない。そこで海神ポセイドンにいって、
「どうかあの母子だけは、海に下りて水を浴びられないようにしておくれ。」
と頼んだ。ほかならぬ天の女王の頼みだから、その願いはききとどけられた。そんなわけで、この二つの星座だけは、ほかの星たちとちがって、決して地平線に沈んで海にはいることができなくなったのだと。

## †エウローペ

エウローペ（ヨーロッパ）はフェニキアのテュロスの王の娘だった。
ある春先のことだった。眠りにくい一夜をすごした彼女は、夜があけるとさっそく、侍女たちをつ

れて浜辺に出ていった。涼しい海風に吹かれながら、若い娘たちはさんざん走りまわったり、踊ったりした。ヒアシンスやスミレの花をつんだりした。しまいには裸になって、水を浴びもした。

オリンポスの上から下を見ていたゼウスが、それをみつけた。見ると、みんな若い美しい娘たちである。中でもエウローペの姿が、ひときわ光って見えた。

浮気者のゼウスだけれど、それでもこの時は、すぐにエウローペをどうしようというまでの考えはなかったという。ところが、いたずら者のクピド（エロスのローマでの名前、英語よみキューピッド）が、彼の胸に矢を射た。こうなっては、いくら大神のゼウスだって、じっとしてはいられない。恋のとりこになって、さっそくエウローペの水浴びしている浜辺へ下りていった。そして、とてもうまい計略をつかった。

彼はまず、雪のように真白い一頭の牡牛（三色まだらの牛ともいう）に姿をかえて、ゆっくりと娘たちのところへ近づいて行った。突然あらわれた大きな牛に娘たちは驚いたが、見れば世にも美しい牡牛だったし、とてもやさしそうなので、すっかり仲よしになっていっしょに遊んだ。草を食べさせたり、摘んだスミレやヒアシンスの花で、彼の頭を飾ってやったりした。牡牛はうれしそうに、娘たちの手にキッスしたりした。

エウローペは中でも少しおきゃんだったようだ。いきなり彼の背中にまたがった。牡牛はいよいようれしそうにしてそこらを歩き回っていたが、そのうちに水の中にはいって行った。と思うと、急に彼の歩みが早くなった。

エウローペ掠奪

エウローペはびっくりして、あわてて背中から下りようとしたが、もう牡牛はぐんぐんと沖をめざして泳ぎだしていて、どうにもならなかった。彼女は泣きそうになって、どうか侍女たちのところへ戻してくれと頼んだ。

しかし、牡牛はいった。

「なにも心配することはない。わしはゼウスだ。これから二人でクレタの島へ行って、あそこで楽しく平和にくらそうではないか。」と。

クレタの島は、なにしろゼウスがクロノスの眼からのがれて少年時代を送ったところだから、よく知っていたわけだ。

彼らはぶじクレタ島について、結婚式をあげた。エウローペは幸福な生涯を送って、ゼウスのためにミノスとラダマンテスを生んだ。これがクレタ王家のはじまりだとされる。

## †イオー

イオーはアルゴスにあるヘラの神殿の女祭司で、イナコス川の神の子といわれたが、すばらしい美貌の持主だった。
ある日ゼウスは、彼女が川から出てくるのを見て、その美しさにとらえられて叫んだ。
「美しい娘よ、そんなにしていて野獣が怖くないのか。わしが守ってやろう。わしは決して卑しい神ではないよ。」
しかしイオーは、相手がだれだか感づいたのか、いそいで逃げだした。ところがゼウスは、いつもの手をつかって一陣の黒い雲をよびよせると、すっぽりと彼女を包みこんで、とうとう自分の思い通りにしてしまった。
ところが妻のヘラがそれに気づいてしまった。ゼウスは雲で娘を包んだので、だれの目にもふれないものと思っていたが、ヘラが一面に日を浴びたアルゴスの野を見おろしていると、ある一カ所だけが、急に黒雲でおおわれたではないか。しかも夫の姿は、オリンポスの山には見えなかった。
いつも夫に欺かれつけていたヘラは、ただちになにが起ったかを見ぬいた。彼女はいそいで地上に下りてくると、その雲を吹きちらさせた。
しかしゼウスも、ぐずぐずしてはいなかった。雲が吹きはらわれる前に、さっとイオーを一頭の若い牝牛に変えてしまった。

世にも美しい若い牝牛が夫のそばに立っているのを見て、ヘラには事情がよくわかった。それでも彼女は、少しもそれに気づかぬふりをして、夫にたずねた。――いったいこのふしぎな牛は、だれの持物かと。

「それは知らん。いきなり地の中からあらわれたのだよ。」

と、夫はいつにも似げなく単純に答えた。すかさず、ヘラはいった。

「では、これはわたしへの贈物にしていただきますよ。」

正直に事情をうちあける勇気がなかったゼウスは、薄情にも愛人を裏切って、それに同意してしまった。

ヘラはしてやったりと、夫が今後もう決して彼女に手が出せないよう、牝牛をアルゴスの手に渡して、彼に見張らせることにした。アルゴスはふつうの二つの眼のほかに、背中に第三の眼があったとか、さらには全身に百の眼があったとされる男で、二つの眼が眠っている時でもほかの眼がいつでも目ざめて見張っているのであった。

こんな怪物に見まもられていては、イオーは昼も夜も気の休まる時がなかった。ある日彼女は、イナコス川の方へさまよって行って、父親に事情を訴えようとした。しかし、彼女の姿を見ても、父親も姉妹たちも、それがイオーだとは気づかなかった。

とうとう彼女は、蹄で砂の上に文字をかいて、自分が牝牛に変えられた事情を知らした。父親はそれを読んで泣いたが、どうすることもできなかった。そこへたちまちアルゴスがやってきて、邪険に

イオーを引きはなすと、遠い牧場へと追いたてていった。

薄情なゼウスも、イオーの悲しみを見ては、もうじっとしていられなくなった。そこで伝令のヘルメスをやって、アルゴスの監視の眼から若い牝牛を救い出させることにした。

ヘルメスは羊飼いに身を変えてアルゴスに近づくと、あしの茎でつくった得意の笛をふいた。その美しい調べに、思わず怪物もすべての眼をとじてうっとりと眠りに落ちた。

すかさずヘルメスは剣をぬいて、その首を切り落した。頭は山腹をころげ落ちていったが、ヘラは急いでそれを拾い上げると、その百の眼をとって孔雀の尾羽にはめこんだ。そこで孔雀はいまでも尾にあんなにたくさん眼をつけていることになった。

こうして、イオーはアルゴスの監視はのがれたけれど、まだ完全な自由はえられなかった。ヘラがなおもあぶを送って、しつこく彼女を苦しめたからだ。イオーはどこにも安息の場がえられず、さまよいにさまよった。ついにはボスポロス海峡を渡って（そこでここをボスポロス、つまり〈牝牛の渡し〉という）アジアに渡り、最後はエジプトのナイル川の岸まで行った。

そこの川岸で、彼女はもう一度愛人ゼウスに、どうか自分の苦しみを終りにしてくれるように頼んだ。ゼウスはその頼みをきいて、ヘラにその復讐を思いとまってくれるように懇願した。ついにヘラも承知したので、ゼウスは彼女をもとの姿に戻してやった。

こうしてイオーは、ナイル川の岸で、もとの姿を取り戻し、ついにはエジプトの女王になって、幸福な生涯を送った。後には彼女は、エジプトの女神イシスと同視されるようにまでなっている。

## デメテルの悲しみ

美しいニュッサの野（シシリイ島のエンナの野だという説もある）で、ある日ペルセフォネは仲よしの少女たちと、花を摘んで遊んでいた。
ペルセフォネは女神デメテルの娘で、この親子はだれからも愛されていた。デメテルは親切でやさしかったし、ペルセフォネはまただれよりも美しい、明るい性質の娘だったから。彼女はまた、娘という意味で、コレと呼ばれている。
少女たちは、花をつんでは髪にかざる花冠をつくっていたのだ。あたりには、ばらや百合やヒアシンスが咲きみだれていたので、みんな持ちきれないほど摘むことができた。
ところが、そのときペルセフォネは、遠くのほうに一本のすばらしい花が咲いているのをみつけた。いそいで走っていってみると、それは一本の茎の上に百の花をつけた、めずらしい水仙のような花だった。しかも、何ともいえない、いい匂いをはなっていて、そのために空も海も大地もうっとりと酔っているふうだった。
ペルセフォネはかがんでその花を折ろうとした。
とたんに大地がぽっかりと口をあけたかと思うと、四頭の真黒い馬がひく戦車が、目のまえにおど

り出た。車の中には、暗いおごそかな顔をした男がすわっていた。男はすばやく戦車からおりてペルセフォネをだきかかえると、車の中へはこび、また馬にむちをあてて、さっとその大きな穴の中に姿を消した。とたんに大地は、またもとのように合わさってしまった。

少女たちがペルセフォネをさがして、その美しい水仙の咲いている場所へやってきた時には、もうペルセフォネの姿はどこにもなかった。

少女たちはしきりに遊び友だちをさがしたが、どこにも見あたらない。そのうちに夜になったので、少女たちはしかたなく家へ帰り、ペルセフォネがいなくなったことをデメテルに話した。

デメテルはおどろき悲しんで、すぐさまたいまつに火をつけて娘をさがしにでた。そして娘の名をよびながら、陸の上といわず海の上といわずさがして歩いた。しかし、だれひとりペルセフォネのゆくえを知っている者はなかった。

こうして十日たったとき、物知りのヘカテに出あったので、

「わたしの娘がどこへいったら知らないか。」

ときくと、ヘカテはこたえた。

「この目で見たのではないけれど、わたしはたしかにあの子の声をききました。だれかにさらわれていくみたいに、泣き叫んでいましたっけ。どこへいったか、それは知りませんが。」

そこでデメテルは、こんどはヘリオスにたずねた。太陽の馬車にすわって空をかけているヘリオスなら、地上でおこることは何でも見ているはずだから。はたして、ヘリオスは知っていて、本当のこ

とを教えてくれた。ペルセフォネは、ハデスがじぶんの妻にするために地下へつれていったのだと。

これをきいたデメテルの悲しみは、急に怒りにかわった。彼女はもうゼウスのそばにいるのが、いやになった。兄弟のハデスに彼女の娘をさらって行くことを許したのは、ゼウスにきまっていたからだ。デメテルはオリンポスの山をすてて、どこまでも歩いていった。ちょうどエレウシスまできたとき、太陽が西の山にしずんだ。

デメテルはそこの泉のそばにすわった。泉の上には二、三本のオリーブが、ほの暗く枝をひろげていた。

ちょうどその時、エレウシスの王ケレオスの娘たちが、頭の上に水がめをのせて水をくみにやってきた。デメテルが悲しそうな顔をしてすわっているのを見ると、娘たちはやさしく声をかけて、なぜそんなに悲しんでいるのかとたずねた。そしてデメテルの話をきくと、娘たちは同情して、彼女を家に招いた。こうしてケレオスの家にいくと、ケレオス王も妃メタネイラも、娘たちといっしょにやさしくデメテルをなぐさめた。

彼女は蜂蜜をまぜたおいしいぶどう酒を出されたが飲まず、農民たちが収穫どきに飲むハッカをまぜた大麦湯を所望した。そしてそれをたっぷりと水さし一杯飲みほすと、ようやくいくらか元気づいて、妃メタネイラの手から、生まれたばかりの王子デモフォンを抱きとってあやした。王子は彼女の胸に抱かれて、いかにも楽しそうに見えた。メタネイラは喜んで、どうか王子の乳母になってくれると女神に頼んだ。

こうしてデメテルは、ケレオス王の館にとどまることになった。彼女が世話を引き受けると、王子デモフォンは、みるみる若い神と見まがうばかりに、美しくたくましく成長した。それは女神が、王子を神々の食物のアンブロシアで養い、夜はまた炎の上にその身体をかざして、死すべき部分を焼きすて、彼に不死の生命を与えようとしたからであった。女神は王の一家の好意に報いるために、ひそかに王子に不死の生命を与えて、神々の仲間に加えてやろうと思っていたのである。

ところが、まだその仕事が完成しないうちに、なにかの不安を感じた母親のメタネイラが、一夜、女神と息子の部屋へ、様子を見にきた。見ると、鍵穴から赤い光が洩れている。いそいで扉をあけてみると、乳母がかわいい息子を真赤な火の上にかざしているではないか。

「まあ、なにをするんです！」

妃は恐怖の叫びをあげて、女神の方へ突進した。デメテルは人間の不信を怒り、仕事を中断されたのに腹をたてて、少年をつかんで床に投げすてた。まだ不死の生命をえていなかったデモフォンは、そのまま息が絶えた。

それからデメテルは、女神としての姿をあらわして、自分の名を名のった。彼女の全身は光り輝き、さしもの広い王宮も、ために眩ゆいばかりだった。怖れかしこんで床にうちたおれたメタネイラに、女神は自分のために立派な神殿を建てるべきことを命じておいて、王宮を去った。やがてその神殿ができると、デメテルはオリンポスの神々とは別に、ひとりさびしくそこに住みながら、いなくなった娘ペルセフォネを、いつまでもなつかしんでは、涙にくれる日々を送るのだった。

彼女はもうだれとも口をきかず、決して笑い声をたてなかった。すると、大地も木も草も偉大な女神の悲しみを自分の悲しみとして、木は実をつけず、畑の麦は芽をふかず、野には花ひとつ咲かなかった。

オリンポスの山の上からこれを見ていたゼウスは、デメテルの悲しみと怒りをなだめてやらないと、あらゆる生きものが死んでしまうだろうと怖れた。そこで彼は、ヘルメスを地下の王ハデスのところへやって、ペルセフォネを母親のデメテルのところへ帰すように命じた。

ところがハデスは、ペルセフォネを帰してやるまえに、ざくろの実を一つ与えた。それというのも、ペルセフォネがいつまでも自分をおきざりにしないことを願ったからで、なにしろ地下の国のざくろの実を一粒でも味わった者は、誰でもまた、地下へ戻ってこなければならなかったのだから。

やがて、ハデスの御殿の戸口には迎えの馬車がよこづけになった。ヘルメスが真黒い馬にむちをあてると、ペルセフォネをのせた馬車は風のように走って地上に出た。こうして馬車はまもなくデメテルのいるエレウシスについた。

ペルセフォネが馬車からおりてただひとりになったとき、いまにも太陽は西の山に沈もうとしていた。泉のところまでくると、ひとりの黒い長い喪服をきた女が、泉のそばにすわっていた。それこそ、ペルセフォネを失って悲しみにくれているデメテルであった。

デメテルは足音に気がついてふりむいた。と、目のまえに娘のペルセフォネが立っているではないか。デメテルは喜びにあふれていくどもいくども娘をだきしめていった。「ほんとによく帰ってきて

くれたね。もう二度と手ばなしませんよ。」

しかし、ペルセフォネはいった。「お母様に会えたのはうれしいけれど、わたし、いつまでもあなたのところに留まっているわけにはいきませんの。ヘルメスがここへつれてきてくれる前に、わたしはハデスがくれたざくろの実を、いく粒か食べてしまったんです。この実を味わった者は、半年後にあの人のところへ帰らなくてはならないのです。それにわたし、あそこへいくのをそういやとも思いません。そりゃハデスは決して笑うことがないし、御殿は暗くて陰気だけれども、あの人はとてもわたしにはやさしくしてくれますもの。でもお母様、悲しまないで。あの人は毎年六カ月のあいだは、わたしがここへきてあなたといっしょにくらすことを許してくれましたもの。さあ、前のように楽しくくらしましょうよ。」

娘に手をとられて立ちあがると、デメテルの気持もおさまり、いつか笑顔になってきた。大地も、その上にはえる草も木も、それを見てデメテルの怒りと悲しみがとけたのを知った。そこでふたたび木々は実をつけ、花々は美しく咲きみだれ、おだやかな夏のそよ風をうけて、畑には黄金の穂が波うつようになった。

こうして六カ月が楽しくすぎると、ヘルメスがあの真黒い馬をつれて迎えにきて、ペルセフォネはまた暗い地下の国へ戻らなければならなかった。

それでも母親のデメテルは、娘はそれほど地下の国で不幸なわけではない、それに半年たてばまた戻ってくるのだと考えて、みずから慰めた。それにしても娘がまだ無邪気な少女で、友だちと楽しく

ニュッサの野で花をつんでいたころのことを思っては、なげき悲しむのだった。
こういうわけで、この大地の上では、ペルセフォネが地下へくだる半年の間（あるいは三カ月ともいわれる）は冬になり、地上に帰ってくると春になって、それがまた半年つづくのだという。ホメロスの頃からそう遠くない時代にできたいわゆる『ホメロス風讃歌集』の中の「デメテルにささげる歌」は、この神話をあつかって、こんなふうにはじまっている——。
「かしこい神、髪うるわしきデメテルと、踝ほそきその姫の物語をはじめよう。はたたがみの見はるかすゼウスの許しにより、ハデス王が姫を掠め去った。姫は、黄金づくりの太刀をはき、よき実を恵むデメテルのそばを離れて、胸ぶくよかなオケアノスの娘たちと戯れ遊び、また花を摘んでいた。やわらかな牧のほとりで、薔薇、サフラン、さては美しい菫をもとめて……」（小川政恭訳『ホメロス風讃歌集』から）
こんな冒頭だけでは、この歌のたぐいまれな美しさを感じてもらうのは無理だろうが、少しは察してもらえようか。
デメテルとはデ＝メテル、つまり〈母なる神〉の意味で、おそらくオリンポスの神々がギリシャに入ってくる前の、先住民族の大地と穀物の母神だったろうという。そのためか、彼女はオリンポスの神々の中では、別格あつかいになっている。彼女はよく麦の穂をもった姿であらわされる。けしと水仙も、彼女の愛する花だ。ペルセフォネは〈娘〉という意味。
この母と娘の美しく悲しい神話には、季節の移り変りがみごとに形象化されていよう。また、人間

トリプトレモスの旅だち――右はデメテル

をふくめたあらゆる生きものの、青春と老年、死と甦りの秘密をあらわしていよう。それが私たちの胸を深くうってくるのだ。

別の神話では、デメテルはケレオス王のもう一人の息子トリプトレモスを養い子にして、広く世間の人々に農耕とデメテルの祭りを教えるために、羽のついた車にのせて送り出したと伝えている。

ローマ神話では、デメテルはケレスにあたり、ペルセフォネはプロセルピナとなっている。

## 神の怒りと復讐

### †デュカリオンの洪水

神は嫉みぶかいものだといわれる。『旧約聖書』の神エホバ（ヤーヴェ）は、自分以外の神をおがむことをイスラエルの民に禁じて、その教えに人々がそむくと、ノアの大洪水を起して人類を滅ぼそうとしたり、ソドムとゴモラの町を火で焼きはらったりした。

ギリシャの神々は、イスラエルの神ほど絶対の権力をもたないし、道徳的にもきびしくなかったようだが、それでもやっぱり時々ひどく人々を罰している。その罰しかたは、あまりに勝手で、気まぐれで、しかもあまりに残忍に見えるような場合もある。しかし、それはたいてい、人間があまりに自分の力や能力を誇って、神をないがしろにし、神と力をくらべようと試みる場合だ。そういう人間の不遜な行為や考えは、神にとっては辛抱できないものだったのであろう。

中でもノアの洪水の話に似ているのは、ゼウスが怒って堕落した人類を滅ぼそうとしたデュカリオンの大洪水の話だ。

それは青銅時代の末の話である。さきに人類をプロメテウスが創った話を書いたけれど、それ以前

にも人類発生の物語があったらしいことは、そこでもふれておいた。ヘシオドスによると、最初の人類は「黄金時代」の人たちで、当時はまだオリンポスの神々は生まれず、クロノスが支配していたのだという。その時代の人々は神々に似た生活を送り、年もとることなく、あらゆる苦労や煩いを知らぬ平和な黄金時代を過していた。大地は蒔かずして十分な実りや果実をつけた。

この種族が眠るように大地の底に沈んでしまうと、今度は「銀の時代」が来た。その人々もなかなかすばらしかったが、黄金時代の人類にくらべるとずっと劣っていた。そこでゼウスは彼らを滅ぼして第三の「青銅の人種」をつくった。ところが彼らは、なるほど逞しかったが、おそろしく乱暴な争いずきの人種で、青銅の武器をふるって戦いあってばかりいた。そこでゼウスは愛想をつかして、地上に大洪水をおくって青銅の人種を滅ぼすことにしたのだという。

もっともこの洪水の話は、アポロドロスの書いたものにあるだけで、ヘシオドスは大洪水にはふれておらず、青銅人種がたがいに殺しあって滅びた後に、テーバイやトロイの戦いで活躍した「英雄の時代」が来たとしている。

ところで、プロメテウスのつくったという人類と、これらの黄金や銀や青銅の人種、さらにその後につづいた鉄の時代の人種との関係は、どうもはっきりしない。

それはとにかく、アポロドロスによると、ゼウスは青銅人種の無法に腹をたてて、天からすさまじい雨をおくった。ギリシャの大部分は水びたしになり、テッサリヤの山は裂け、ペロポンネソス半島の方までひとつづきの海になった。いくつかの高い山の頂上がわずかに水面に顔を出しているだけ

で、人もあらゆる生物も次つぎに溺れ死んでいった。
ところで、ここにデュカリオンという男がいた。彼はあのプロメテウスの息子で、テッサリヤに住み、エピメテウスとパンドラの間にできた娘ピュラーを妻にしていた。彼は先見の明ある父に教えられて大洪水がくるのを知ると、その助言でノアのように一つの大きな箱を作って、必要なすべての品物を積みこみ、妻のピュラーといっしょにその中に逃れた。箱は九日九夜水の上を漂わされたが、ついにパルナソスの頂上に着いた。ついに雨がやむと、彼は箱から出て、犠牲をささげて大神ゼウスに自分の命を助けてくださったことを感謝した。
ゼウスは喜んで、使いのヘルメスをやり、お前の望むことは何でもかなえてやろうと伝えさせた。プロメテウスの息子にふさわしく、デュカリオンは答えた。
「やっぱり人間をこしらえさせてください。」と。
ゼウスはその望みを許して、石を拾って肩ごしに後へ投げるようにいった。そこでデュカリオンがいわれたように石を拾って肩ごしに投げると、それはみんな男になり、ピュラーの投げた石は女になったのだという。（ほかの伝えではデルフォイの神託によって〈祖母の骨〉——つまり大地ガイアの骨である石——を投げたとなっている。）
これが現在の人間——鉄の時代の人類の起りであるらしい。

## †タンタロスとニオベ

地獄に落されて永遠の責苦にあっていることで名高いタンタロスは、ゼウスの息子の一人で、小アジアのリディア(あるいはフリギア)の王だった。もとは神々のお気に入りで、オリンポス山上の神々の食卓に招かれ、死すべき人間には決して味わうことのできない神酒ネクタルや、神々の食物アンブロシアを味わったものだった。そのために彼は、不死の生命をさずかったのだが、それがかえって仇になって、あとで地獄に落ちても死ぬことができず、永遠に苦しまなくてはならなくなるのである。

彼がなぜ地獄に落されたかの理由は、神々の食卓の秘密を人間にもらしたためとか、ほかにもいろいろといわれるが、次に記す事件もその大きな一因だろう。

ある時神々は、彼の招きに応じて彼の王宮を訪れ、食事をともにすることになった。ところがタンタロスは、神々に最上の御馳走をするつもりだったか、それとも神々をためすつもりだったか、たった一人の息子ペロプスを殺して大鍋で煮て、これを食卓に供えたのであった。

さすがに神々は欺かれなかった。彼らは恐怖と嫌悪をもって皿を突きのけると、今後とも人間にこんなすさまじいことをして神々を試みるような真似をさせぬ見せしめに、彼をハデスの池に投げこんで永遠の飢えと渇きに苦しませることにしたのであった。彼はその池で、首まで水につかっている。しかも彼が水を飲もうとすると、水はすっとひいてしまって、どうしても彼は渇きをとめることができない。また頭上には果樹が枝をたれてりんごやいちじくや梨やらがたわわに実っているので、彼は

手をのばしてそれを取って飢えをみたそうとするが、そのたびに枝はさっと高くはね上って、決して手がとどかないのであった。

殺された息子のペロプスは、神々がまた生かしてやった。しかし、娘を失って悲しみに沈んでいたデメテル女神が、うっかり肉を一口食べて、肩の骨の一片を砕いてしまった。そこで神々は、象牙でつくってその骨を補ったという。

このペロプスは、生きかえってから以前にもまして美しくなり、神々、ことにポセイドンに愛されて、ヒッポダメイアという美女を妻にし――そこにもおもしろい話があるが――まずは幸福な生涯を送った。

しかし、このタンタロスの一族はあまりに誇りが高くて、そのために神々の呪いが終始つきまとったようだ。のちにギリシャ軍の総大将になってトロイの町を落して凱旋したが、自分の妻のクリタイムネストラに殺されたアガメンノン、その子のオレステスやエレクトラ、またトロイ戦争そのものの原因になった美女ヘレナなど、いずれもこの家系の出である。

しかし、わけても悲惨な運命をたどったのは、このペロプスの姉妹のニオベであろう。

最初は彼女の生涯は、まことに恵まれているように見えた。ゼウスの子といわれるテーバイ王家のアンフィオンに嫁して、七男七女をあげた。（六男六女あるいは十男十女ともいう……。）

夫のアンフィオンは音楽の名人として名高く、こんな話が伝えられている。あるとき、彼と弟のゼートスは、テーバイの守りを堅くするために、高い城壁を築くことにした。ゼートスは力自慢で、か

ねて兄が音楽などに耽って、武技やスポーツで身を鍛えることをおろそかにしているのにあきたらなかった。そこで、この際大いに腕前を見せて、やがては兄にとって代ってテーバイの支配者になりたいと願っていた。

ところが、いよいよ重たい岩を運んできて城壁を築く段になると、アンフィオンはみずからは手をくださずに、ただ竪琴をとってひきながら、岩山からテーバイへと歩いて行くばかりだった。しかも大きな岩たちは、彼が歩むにつれて、ごろごろところがって彼の後からテーバイまでついてくるではないか。

ニオベの子供たちを射殺するアポロンとアルテミス

こうして彼はみごとに弟をうちまかして、安らかに幸福にテーバイを治めていた。しかし、思わぬところから悲劇がやってきた。それを招いたのは、妻のニオベだった。タンタロスの娘の彼女の中には、あの父親の神を神とも思わぬ不敵な精神が潜んでいたのだ。

彼女は高貴な家柄に生まれ、名高い王の妃になっていた。富にも勢力にも欠けるところはなかった。しかも七人

の息子はみな逞しく美しく、七人の娘はまたそろって美貌をうたわれていた。とうとう彼女は、父親のタンタロス以上に、神を神とも思わなくなった。彼女はテーバイの市民たちが女神レトを礼拝するのを見て、こう叫んだ。

「お前たちはレトのために香をたくの？　わたしにくらべたら、あの女神が何でしょう。あの人にはアポロンとアルテミスと、たった二人しか子供がないのに、わたしは七倍ももっていますよ。それにわたしは女王なのに、あの人はどこにもいられなくて、小さなデロス島までさすらっていった宿なしじゃないか。いっそレトの代りに、わたしをおがみなさい！」

こんな不遜な言葉は、きっと神々にきかれて罰されずにはいないものだ。アポロンとアルテミスは、さっそくオリンポスから下りてきて、狙いのはずれたことのないその弓で、片っぱしからニオベの子供たちを射ち殺した。（ある伝えでは男女一人ずつは殺されるのをまぬがれたとなっている。）アポロンは男の子たちを、アルテミスは女の子たちをねらって。

ニオベは次々にたおれてゆく息子と娘を見つめるきりで、体を動かすこともできず、口ひとつきけなかった。石のように凝固して、ただ涙を流すだけだった。ゼウスが見るに見かねて、そのまま彼女を石に変えてやった。しかし、彼女は、石になってもまだ、いつまでも涙を流しつづけるのであった。彼女が化したその石は、いまでもリディアのシピュロス山の上にあるという。

## †くもにされたアラクネ

この話も神の怒りを示す有名な一つだが、それを伝えているのはローマの詩人オヴィディウスなので、神の名はローマ風に呼ばれている。

小アジアのコロポンの町にアラクネという娘がいた。父親のイドモンは染物の名人として名が高かったが、娘はまた機織りにかけては、ならぶ者のない腕前をもっていた。とうとう彼女は自分の腕前を鼻にかけて、オリンポスの神々でもわたしほどたくみに機は織れないだろうと自慢するようになった。

それがオリンポスのアテナ（ローマ風にいえばミネルヴァ）の耳にはいった。アテナはヘパイストスが鍛冶の名人であるのとならんで、神々の中では第一の機織りの名人であり、あらゆる工芸の守り神になっている女神だ。自分の織る布が、とうてい人間などには真似のできない、精巧で美しいものと思っていた女神は、ただの町人の娘アラクネのそんな思い上りを、聞きすてにすることはできなかった。

女神はコロポンの町まで出かけて行くと、老婆の姿になってアラクネを訪ねて、彼女の慢心をいさめたが、自分の腕前にのぼせあがっていた娘は、その忠告をうけつけなかった。

「そんならわたしと織りくらべをしてごらん。」

と、アテナ女神はいった。アラクネは躊躇もせずにそれに応じた。

二人は機台をすえて織りはじめた。二人は虹色にきらめく美しい糸や、金糸銀糸を惜しみなく使って、たがいに秘術をつくした。

女神はたちまちに、オリンポスの十二神と、神にこらしめられる人間の物語を四隅にあらわした、すばらしい布を織りあげた。それは神でなくてはやりとげられぬ一つの奇跡だった。しかしアラクネも負けてはいなかった。アテナ女神が織り上げると同時に、彼女も一枚のすばらしい布を織り上げたが、そこには神々と人間の女との恋の物語が世にも美しく織り出されていた。いずれの腕前がまさっているかは、ほとんど見分けがつかなかった。それほどアラクネのわざはすぐれていたのである。

あらゆる技術と工芸の守護神としてのアテナは、人間がこれほどたくみなわざを見せたなら、これを心から祝福してやるべきではなかったか。しかし彼女は、いよいよ腹を立てて、いきなりアラクネの織った布をずたずたに裂くと、手にしていたおさではげしく娘を打ちすえたのであった。

アラクネは絶望して首をくくって死んだ。これを見て女神の怒りはけじめてとけ、また悔恨が彼女の胸を少しばかり嚙んだ。女神は娘の屍をとると、これに魔法の水をふりかけた。アラクネの体はたちまち一匹のくもに変った。そしてたくみに織るわざだけが彼女に残されたのであった。

## †シジフォスのうけた罰

シジフォスの場合も、タンタロスに似ている。彼も地獄に落されて、永遠の労役を背負わされたのだ。

彼はデュカリオンの孫にあたり、コリント王をしていたが、人間の中で最も狡智にたけた人物として、死神をさえ欺いたことがあった。彼が地獄に落された理由は、いろいろに伝えられるが、次の話が一番ふつうに行われている。

ある日彼が何気なく空を仰いでいると、一羽のすばらしく大きな鷲が、人間の娘をさらって、遠く海上に見える島の方へとんで行くのが見えた。かしこいシジフォスには、その鳥はどうやらただの鳥ではなく思われた。

「これはまた大神ゼウスが鷲に姿をかえて、いたずらをしたのかもしれないぞ。」

と、彼は考えた。

そこへアソプス川の神がやって来て、自分の娘エギナが突然に行方が知れなくなったことを話して、彼の意見を求めた。シジフォスは自分の見たことを語って、エギナをさらって行ったのはたぶんゼウスではないかと思うといい、鷲のとんでいった島を指さして教えた。

アソプスは娘を捜してその島へ出かけたが、ゼウスは電光を投げつけて彼を追いはらった。しかも、この秘密の隠れ家を教えたのがシジフォスだと知ると、怒って彼を地獄に投げこんで、永遠の責苦を負わせることにしたのだという。それは重たい岩を山の上までころがし上げることであったが、シジフォスが力をつくしてようやく山の上までその岩を押しあげるが早いか、岩はまたたちまち猛烈な勢いで急坂をころがり落ちて、かくてシジフォスの労役ははてる時がないのであった。

ところでゼウスは、さらって来た愛人の名にちなんで、その島にエギナの名を与えた。そしてゼウ

スとエギナの間にはアイアコスが生まれたが、これはトロイ戦争の勇士アキレウスの祖父にあたる人である。

# 伝令の神ヘルメスと音楽の神アポロン

ヘルメスはまえにいったオリンポス十二神のひとり。ゼウスの使者で、死人を地下の国へおくりとどけるのも彼の役目だ。だから羽のはえた靴をはいていて、風よりも早く走ることができる。頭のめぐりがはやく、すばしっこい性質なので、商業や貿易の神とされている。

ところがおもしろいのは、この神が泥棒の守り神になっていることだ。そのわけは、次の話を読んでみればわかると思う。

ヘルメスはゼウスの末っ子として、アルカジアのキレネー山のほら穴で生まれた。母親は巨人アトラスの娘マイヤだ。彼女はヘルメスを生むと、うぶぎにくるんで、ゆりかごの中にいれておいた。ところが半日もたたないうちに、ヘルメスはのこのこゆりかごからはいだして、そこへはってきた亀をつかまえると、肉をえぐりだして甲羅に穴をあけ、それに六本の糸を張って、それをはじいて音をだして遊んだ。これが竪琴のおこりだという。

それほど早熟のすばしこい神だった。夜になるとテッサリヤのピエリアまで出かけていって、そこで草をたべていた牝牛をみつけると、五十頭もぬすんできた。しかも、あとをつけられるといけないので、足あとがさかさにつくように、うしろむきに追いたてたてきたものだ。

こうして盗んできた牛の二頭を神にささげ、のこりをキレネーの山の中にかくすと、知らん顔でまたゆりかごの中にはいって、例の竪琴をひいて遊んでいた。

ところで、ヘルメスがぬすんできたのは、ゼウスの息子のアポロンが飼っている牝牛で、見張り役を太陽のヘリオスにいいつけておいたのだ。朝になってヘリオスが見ると、だいじな牛が五十頭もたりなくなっている。ヘリオスはあわててアポロンにそれを知らせた。アポロンはひどく腹をたてて、さっそく捜しにでかけた。

あちこち捜して、アルカジアまできたとき、一団のサチュロスに出あったので、彼らにも牛を捜すことをたのんだ。

そこでサチュロスたちが、アルカジアの谷間という谷間をさがすと、たしかに牛の足あとと思われるものをみつけた。ところが足あとは、ぬすまれたピエリアのほうへ向ってついているではないか。

「この足あとを見ろ。こいつはどうもへんだぞ。牛どもはきっと、ばけものに魔法をかけられたんだ。」と、親分のシレヌスがいった。ほかのサチュロスたちも、その足あとを見ておどろきあきれた。

そのとき、山のむこうからふしぎな音がきこえてきた。それはヘルメスのひく竪琴だった。

そんなこととは知らないサチュロスたちは、はじめはばけものの声かと思って恐れたが、もともと音楽ずきの精たちのこと、だんだんひきつけられて音のするほうへやってきた。

すると、おどろいたことに、その音は深いほら穴の中からきこえてきて、しかも牛の足あとがそこら一面についている。

もう、まちがいはなかった。そのふしぎな音は、牛泥棒がたてているにきまっている。
「出てこい、出てこい、牛泥棒め！」
サチュロスたちは、おっかなびっくり叫んだ。
ところが、ほら穴の戸をそっとあけて出てきたのは、おそろしい怪物ではなくて美しいニンフだった。そして、やさしい声でいうのだった。
「サチュロスさんたち、なんでそんなにお騒ぎになるの。あんまりやかましくしないでよ。わたしはいま、ゼウスとマイヤの子のおもりをしているんだから。」

サチュロスとヘルメス

「そりゃ、失敬。でも、おこらないでくださいよ、きれいなニンフさん。ぼくらはべつに悪気があって来たんじゃないんです。ただ、あのふしぎな音がぼくらをひきつけるもんでね。あれはいったいなんの音で、だれがあんな音をさせているのですか。」
こうシレヌスがきくと、ニンフは笑ってこたえた。

「その子がひいているのよ。ヘルメスといって、とてもふしぎな子なの。まだ生まれて一日しかたたないのに、もうびっくりするほど知恵があってね、亀の甲羅に糸を張って楽器をこしらえて、それをひいているのよ。あなたがたのきいたのは、きっとその音でしょう。」

「亀でこしらえたって？　牝牛でじゃないかね？」　と、シレヌスはきいた。

「そりゃ、糸は牛の腱で張ってあるわよ。」

「じゃあ、やっぱりそいつがアポロンの牛をぬすんだんだ。」と、シレヌスがいうと、

「まあ、ゼウスさまの子どもを、泥棒よばわりするの。生まれたばかりの赤ちゃんに牛がぬすめますか？」と、ニンフのキレーネはおこった。

シレヌスとニンフのキレーネがいいあっているところへ、サチュロスのあとをおって、アポロンもやってきた。

彼はサチュロスたちの話をきくと、ほら穴の中にはいっていった。

ヘルメスはにこにこしながら、ゆりかごの中で竪琴をかかえていた。

「チビさん、ぼくの牝牛をどこへ隠したんだ。白状しなさい、いくらおまえがゼウスの子どもでも、タルタロスの地獄へなげこんでしまうよ。」

しかしヘルメスは、へいきでいうのだった。

「アポロンさん、あなたの牛なんか、ぼくは見たこともありませんよ。ぼくはまだ生まれたばかりの赤ん坊で、ゆりかごの中で眠っているきりなんだ。スティクスの川（死の国をかこんでながれている

川）にかけてちかってもいいけれど、あなたの牛なんかぬすみはしません。その証拠に、このほら穴には一頭も牛なんかいないでしょうが。」

アポロンは子どもがあんまり平気でうそをつくのにあきれて、思わず笑いだしてしまった。彼は、ここへくる途中でバットスという老人にあったが、老人はヘルメスが牛をぬすんでくるところを見ていたので、アポロンにその様子をくわしく話してくれた。だからなにもかも知っていたのだ。

「まったくたいしたものだよ、おまえは。これからはおまえを泥棒の王さまとよぶことにしよう。でも、いくらうまいことをいってもこのアポロンをだますことはできないよ。だいいち、牛の足あとがちゃんとこのほら穴までつづいているじゃないか。まあいいから、オリンポスまでおいで。おやじのゼウスに、この裁きをつけてもらおう。」

こういってアポロンは、ヘルメスの首をつかもうとした。

これはいけないとばかり、ヘルメスはすばやく、竪琴をひきだした。するとふしぎや、アポロンの腕はしびれたようになってしまった。しかもその美しい音色にうっとりとして、牛をぬすまれた怒りもわすれてしまい、じぶんでその楽器がひきたくてたまらなくなった。

アポロンは、とうとう手をだして叫んだ。「ぼくに、その竪琴をおくれ！　そしたら、牛をぬすんだことはゆるしてやろう。ぼくの杖もおまえにやって、おまえを神々の伝令役にしてやろう。ただ、二度とぼくの家畜をぬすむなよ。」

そのとき、天の高みですさまじい雷がなって、ゼウスの声がきこえた。「ヘルメスよ、そうするが

よい！　おまえの竪琴をアポロンにやるのだ。そうすればアポロンは音楽と歌の守り神になり、九人のミューズ（音楽をつかさどる女神）が彼につかえるだろう。おまえはオリンポスにきて、神々の伝令になるのだ。」

ふたりは、ゼウスの命令にしたがった。

アポロンは竪琴をうけとり、ヘリコン山へいって、ミューズたちと楽しく日を送った。ときどき隣りのパルナソス山へも遊びにいき、やがてそこのほら穴に住む大蛇ピトンを退治したりした。パルナソスのふもとにあるデルフォイの神殿は、アポロンを祭ったお宮で、ギリジャでももっとも有名な聖地である。

ヘルメスはたった六日で若者になったといわれる。おませなヘルメスは、まもなくある羊飼いの少女がすきになり、ふたりのあいだには子どもが生まれた。ところが、生まれた子をひとめ見るなり、娘は悲鳴をあげて逃げていってしまった。子どもの頭には山羊の角がはえ、足も山羊の足で、あごには長いひげがはえていたからだ。でも、とてもほがらかでよく笑う、おもしろい子だった。

ヘルメスがその子をうさぎの皮にくるんでオリンポスへつれていくと、神々はみんなおもしろがって、パーンと名づけてくれた。

パーンはやがて父親につれられてアルカジアに行き、ここでずっと家畜の番をしてくらした。彼は父のヘルメスに似て、音楽が好きだった。羊飼いたちがよく吹くシリンクスという笛は、彼が川岸にはえているあしを切ってこしらえたのが、はじまりだという。だからシリンクスは〈パーンの笛〉と

も呼ばれる。
パーン（ローマではファウヌス）は笛をふき、家畜の番をして野山をさすらっては、暑い夏の午後なんかには、よく川岸の草の中で昼寝をするらしい。フランスの詩人マラルメの有名な詩「牧神の午後」は、そんなパーン（仏・フォーヌ）の暮しに寄せた詩で、それにつけたドビッシイの美しい曲とともに、大変よく知られている。

## ぶどうと演劇の神ディオニュソス

ディオニュソスは大変有名な神だが、ギリシャ神話の中では新しい神で、ホメロスやヘシオドスの時代には、まだ有力な地位をしめていない。

彼はテーバイの王女セメーレとゼウスの間に生まれた子だといわれる。大神ゼウスは彼女に夢中になって、スティクスの川にかけて誓った――お前の望むことなら、どんな願いでもかなえてやろう、と。すると、妬み深いゼウスの妻ヘラが、彼女にとんでもない願いを吹きこんだ。こうしてセメーレは、自分の愛人にいった。

「あなたは天の王様で、電光を投げつける主だそうではありませんか。わたしを本当に愛してくださるなら、そのあなたの壮麗なお姿をありのままに見せてください。」

ゼウスは愛人にこういわれて困った。どんな人間でも、ありのままの彼の姿を見たら、うちたおれて死ななくてはならないからである。しかし彼は、もはやスティクスの川にかけて、どんな願いでもかなえてやると誓っていた。この誓いは、大神ゼウスでも破ることはできなかった。

ゼウスがその偽らぬ姿でセメーレを訪ねると、彼女はたちまち焼け死んでしまった。しかし、彼女はもはや身ごもっていた。ゼウスはいそいでその子を取ると、ヘラの目にふれぬように自分の脇腹に

入れて育てた。やがて月みちて生まれたディオニュソスは、ニュッサの野のニンフ、ヒュアデスたちに育てられた。ヒュアデスというのは〈雨をふらす女たち〉という意味の名だ。ゼウスは後に彼女たちの労をねぎらって、天上にあげて雨を降らす星にしてやった。牡牛座の頭の方にある群星がそれだという。

そんなわけでディオニュソスは、火と水の子であった。焼けこがすような炎熱によって孕まれ、すずしい露によって甘く熟する南国のぶどうのように。

大きくなると、ディオニュソスは国々をさすらった。彼はリディアやフリギアをさすらい、ペルシャ、バクトリヤ、さらにはインドまで行ったといわれる。そしていたるところでぶどうの栽培や酒つくりを教えた。彼は神と讃えられて、彼のゆくところには彼を讃えるふしぎな祭りが起った。こうして彼は、しだいにまた故国の方へ帰ってきた。

ある日、ギリシャに近いある海辺を一艘の海賊船が通りかかった。と、そこの岸辺に一人の美しい若者が立っているのが見えた。それは紫の外套をまとい、暗褐色のふさふさした髪を逞しい肩の上までたらしたディオニュソスだった。海賊たちは彼の姿を見て考えた——これはきっとどこかの国の王子かもしれない。こいつを捕えておいたら、あとで莫大な身代金が要求できるだろうと。

海賊どもは岸辺に船をつけて彼に躍りかかった。こうして男を捕えてきて、荒縄でマストに縛りつけようとしたが、おどろいたことに、縄は男のからだにふれるやいなや、端からボロボロに切れてしまって縛ることができない。男はそのままそこに坐って、さも楽しそうに微笑をうかべて海賊どもの

海上のディオニュソス

やることを眺めている。
　舵取りの男がそれを見て叫んだ――
「これはきっと神にちがいない。すぐにはなしてやらないととんだことになるぞ！」
　しかし船長もほかの船員たちも、彼を嘲って相手にしなかった。こうして帆をあげて出航したが、今度は船が進まない。そのうちに、甲板の上に香ばしいぶどう酒の匂いが流れるかと思ううち、みるみる帆柱からは葉が出て蔓が帆桁や帆綱にからみつき、花が咲き、ふさふさと実がたれ下った。海賊どもは今さらのように驚きあわてて、舵取りに船を岸辺へつけさせようとしたが、もう遅かった。捕えられていた男は、一頭のすさまじいライオンになって、彼らをめがけて咆哮をあげてとびかかってくる。海賊たちはあわてて海にとびこんだが、あの舵取り一人をのぞいて、みんなたちまちイルカに変じてしまったのであった。
　多くの土地をさすらったディオニュソスには、さまざまの伝説がまつわっている。トラキヤの王リュクルゴスを罰した話、クレタ島の姫アリアドネがテセウスに見捨てられたのを救って、これと結婚した話、亡き母をたずねて地下の国へ赴いた話など。

これらのさすらいの間に、彼の名声はしだいに高くなり、彼はぶどうと酒の神として熱狂的な崇拝者に取りかこまれるようになった。

ことにマイナデスあるいはバッカイと呼ばれる女の信者たちは、半裸の姿で野山を走り回って、清らかな泉や小川で水を浴びては草の上で眠り、山羊の乳をしぼって飲んだり、野獣をひき裂いてなまのままで食ったりして、狂乱と至福のないまぜになった生活を送ったらしい。ディオニュソスの崇拝には、没我的な自由と陶酔の喜びと、血なまぐさいほど野蛮な乱痴気騒ぎがまじりあっているが、それはたしかに酒の神にふさわしいことといえよう。

美と秩序を愛するオリンポスの神々の間では、彼はたしかに異端者であり、秩序の破壊者だ。だから古い秩序を守りがちな為政者は、とかく彼の礼拝を押えようとしたらしい。エウリピデスの『バッカイ』が描いている次のような物語は、そのことを示すだろう。

ディオニュソスが故郷のテーバイに戻ってきて、彼の礼拝をその地にうち立てようとする。れいによって、毛皮をまとい、きづたを飾った杖をうち振って、熱狂して踊ったり歌ったりする女たちの群が、彼のあとにしたがっている。テーバイの王ペンテウスは、ディオニュソスの母セメーレの姉妹の息子で、ディオニュソスにとっては従兄弟のわけだが、そんなこととは知らず、恍惚として歌ったり踊ったりしている奇妙な女の群と、酒に酔っぱらったように赤い顔をしているその指導者を見て、こんな気違い沙汰は止めさせなくてはならないと考えた。王は彼らを捕えて投獄することを命じる。テーバイの神聖な予言者、盲目のティレシアスがそれをいましめる。

ディオニュソスにささげものをするマイナデスたち

「あなたが拒否しようとしているのは新しい神ですぞ。彼はゼウスに救われたセメーレの子で、デメテル女神とならんで地上の人間にとっては最大な神なのですぞ。」と。

ペンテウスが見ると、予言者の白髪にもきづたの冠があり、その肩には獣の皮がかけられていた。王はこの予言者も狂女たちにたぶらかされたものと思い、あざ笑って彼を追いやった。

そこへ部下の兵士たちがディオニュソスをつかまえてきた。兵士たちのいうには、彼は少しも抵抗しなかったという。ただ女たちは牢に入れたが、縄は自然にちぎれるし、牢屋の扉はおのずと開かれて、みんな山へ逃げていってしまったとのことだった。

ペンテウスはいよいよ怒って、ディオニュソスを獄に投じるように命じた。相手はいった。

「あなたがわたしに対して悪をなせば、それは神々に対して悪をなすことですぞ。」

王はそれでもかまわずディオニュソスを投獄させたが、彼はやすやすとそこから出てきて、かえっ

て王に、自分の眼で見た奇跡の示すところを信じて、この新しい偉大な神の信仰を受けいれるようにすすめた。しかし、怒りくるったペンテウスは、相手を罵ったり脅迫したりして追いはらった。そればかりか、女たちが逃れた山の方へその後を追っていった。

ディオニュソスの信者として山へ逃れた女たちの中には、テーバイの女も沢山まじり、ペンテウス王の母や姉妹もその中にいた。いま王が山へ彼女らを追いかけてやってくるのを見ると、ディオニュソスはその本性の最も暗い半面をすさまじい姿で示した。彼は女たちをすべて狂気にさせたのである。狂気したマイナデスたちは、ペンテウスを野性のライオンと思いこんで、彼の母親を先頭に、みんなで躍りかかって八つ裂きにしてしまったという。

ディオニュソスが酒の神であってみれば、一方で自由解放の喜びを与える面をもち、他方で狂気と破壊の野蛮にずり落ちる面をもつのも、ふしぎではないかもしれない。だからこの神の崇拝には、人間を神的に昂揚させるところがあるとともに、血なまぐさい獣性に誘いこむ危険もあった。ところがギリシャの知恵は、いつの頃からかはよく知らないが、そこに大きな変化をもたらした。

ディオニュソスの祭りはぶどうが芽をふきはじめる春先に盛大に祝われたが、その祭りはやがて劇場で行われるようになり、偉大な詩人たちがディオニュソスにささげる劇を書いてそれを上演することが、その最大の行事になった。祭りは五日間にわたって行われたが、その日には市民たちはすべての俗事を放棄して祭りに加わり、牢獄の中の囚人さえもが釈放されて、その喜びに加わることができた。その劇を書いた詩人や、舞台に立つ俳優や合唱隊の人たちは、すべてこの神の召使いと見なされ

た。いまでもディオニュソスが演劇の守り神とされ、劇場の垂幕などによくぶどうの房が彼のシンボルとして描かれているのは、そんな理由からである。

彼はまたぶどうの神として、冬には枯れ、春になるとまた芽をふく神であり、死んではまた甦る不死の生命をもつ神として、キリスト教が入ってくる前の古代世界の人たちに、大きな慰めを与えたらしい。

あの『英雄伝』の著者プルタークは、娘が死んだ時に、妻を慰めて書いている。

「一度肉体をはなれた魂は消えてしまって、なにも感じなくなるなどという人があっても、そんな言葉には信をおかないように。われわれはあの宗教的兄弟国の仲間としてバッカス（つまりディオニュソス）の神秘が与える神聖な約束を知っているのだからね。われわれはわれわれの魂が不壊で不死なことを、疑うべからざる真理として信奉しよう。」云々。

# 月と星の神話四つ

## †セレーネ（月）とエンデミオン

太陽（ヘリオス）と月（セレーネ）は、ギリシャ神話ではあまり大きな役割をしていない。これはアポロンとアルテミス（ローマではディアナ）がいて、彼らの役割をかなり奪ってしまっているからしい。

セレーネの神話で一番有名なのは、彼女と美少年エンデミオンとの愛の物語だ。

羊飼いのエンデミオンが
彼の羊の群を牧場(まきば)にはなしているとき
月神セレーネが
彼を見て恋して、後を追った
天から下りて
ラトモスの牧場に来て

彼にキスして傍らに身を横たえた
祝福された少年は
身じろぎもせず寝がえりもせず
永遠にまどろむ
羊飼いのエンデミオンは。

前三世紀の詩人テオクリトスはかく歌っている。エンデミオンはここでは羊飼いとされているが、王だったとも猟人だったともいわれる。しかし、いずれにせよ絶世の美少年だった。セレーネは彼に恋するあまり、いつでも自分の好きな時に愛人を訪れて夜をいっしょに過したく思い、ゼウスに頼んで（あるいは彼女自身で）不老不死の永遠の眠りを少年に授けたのだという。

こうして女神は、夜な夜なエンデミオンをラトモスの山に訪れて、美しい愛人を接吻で覆うのだった。しかし少年のからだは温かく、生きて息をしていたけれど、まるで死んだようにひっそりと横たわって、身動きすることもなく、女神の愛撫にこたえることもなかった。

こうして月の女神は、愛人を自分の思うがままにしたけれど、そんなわけで、それはただ彼女自身を苦しめるばかりで、重たく吐息させるのであった。

## †カストルとポルックス兄弟

天上の双子座の星になったといわれるカストルとポルックス（ポリュデウケス）は、スパルタ王ティンダレオスの妃レダが、ゼウスに欺かれて身ごもった子供だとされている。ゼウスは白鳥に身を変えて彼女に近づいて、ついに彼女と交わったのであった。やがて月みちて彼女は巨大な卵を生み、この卵から子供がかえったが、レダはティンダレオスの妻として王の子をも宿したので、生まれた四人の子供のいずれがゼウスの血をうけ、いずれがティンダレオスの子であるか、関係はややこしく、いろいろ説がある。

ふつうゼウスの子とされ、したがって不死の生命を授けられていたのは、ポルックスと、トロイ戦争の原因となったあの美女ヘレナとなっている。カスト

ディオスクロイの帰還――レダの姿もみえる

ルとクリタイムネストラ――彼女はトロイ戦争の総大将アガメンノンの妻になったが、後に夫を刺し殺した――の二人は、ティンダレオスの種で、したがって死すべき人間の子であったとされる。しかし、カストルとポルックスの兄弟は、しばしばディオスクロイ、つまり〈ゼウスの息子たち〉と呼ばれている。

二人はともに勇士として名高く、カストルはことに戦争がたくみで、ポルックスは拳闘の技にすぐれていた。彼らはテセウスやヘラクレスといっしょにアルゴー船に乗り組んで金羊毛を捜しにも出かけたし、カリュドンのいのしし狩りにも参加した。ところが二人は、叔父レウキッポスの娘をさらって妻としたことから、ここに親戚同士で争いが起り（あるいは牛のことで争って）従兄弟のイーダスとリュンケウスと戦って、カストルはイーダスの手にたおれた。ポルックスは投槍でリュンケウスをたおしたが、イーダスは逃れるところをゼウスに電光で打たれて死んだ。

こうしてゼウスは、ポルックスをつれて天上に昇ったが、ポルックスは兄弟のカストルと別れるのを喜ばず、カストルを死者の間に残して自分だけ不死の生命を受けるのを肯じなかった。そこでゼウスは、この兄弟が一日おきに天上の神々の間と、地上の人間の間でいっしょに暮すことにして、双子座の星にしたのだといわれる。その近くに、母のレダは白鳥座の星になっている。

兄弟はギリシャでも、後のローマでも広く崇拝された。ことに航海の保護者と考えられ、嵐の時などに船の帆柱に立つ聖エルモの火は、彼らの使いだと考えられた。

## †天馬ペガサスとベレロフォン

秋空にかがやく星座ペガサスは、翼をもった天馬で、風よりも早く空を駆けて疲れることを知らないといわれる。

彼はペルセウスに退治されたメドゥサの首から、あるいは地に流れ落ちたその血から生まれ出た馬だったが、生まれるとすぐにオリンポスに飛んでいって、ゼウス大神の雷霆（らいてい）をはこぶ役目をしていた。ある時彼が、ミューズの山であるヘリコン山の岩を蹄で打つと、そこに有名なヒッポクレーネ（〈馬の泉〉の意）の泉がわき出た。そのほかにも、彼の蹄の一撃でわき出たという泉は、各地にある。

こうして天馬ペガサスの名がいよいよ高くなるにつれて、これを捕えて自分の乗馬にしたいと望む者が続出したが、彼を捕えることは人間の手ではむずかしかった。

ところでその頃、コリントの町にベレロフォンという若者がいた。彼は馬使いの名人として知られたコリント王グラウカス王の子（本当の父は海神ポセイドンだともいわれる）で、美貌でまた力たくましく、あらゆる技にすぐれて、ほとんど神におとらぬ人物とされていた。父王はすばらしい馬を育てようとするあまり、これに人間の肉を食わせた。おかげで馬はたくましく成長したが、気が荒くなって、ついに王を振り落し、彼を引き裂いてくらったのであった。こうした父親の不幸な前例があるにもかかわらず、ベレロフォンも馬に対しては異常な熱情をもっていて、なんとかして天馬ペガサス

を手に入れたいと願った。
　彼はついに予言者ポリュイドスの助言をえて、アテナの神殿に行き、自分の熱い願いを神に訴えた後、その祭壇のそばに横たわってまどろんだ。はたして夢に女神があらわれて、彼に告げた。
「目をおさまし、ベレロフォン、ここにお前の熱望しているあの馬を虜にする品物があるよ。」
　女神の手には、なにか黄金に輝くものがあった。ベレロフォンは跳ね起きた。見ると、女神の姿はもはやなかったが、目の前にすばらしい純金のくつわが置かれてあるではないか。
　彼はそれを摑むと、勇躍してペガサスを捜しに出かけた。馬は有名なペイレネーの泉で水を飲んでいた。そして彼が近づいても、あたかも彼を待ち受けるようにしていて少しも騒がず、おとなしくくつわをはめさせたのであった。アテナ女神の魔呪の力が、もはや彼を捕えていたのだ。
　こうして天馬は、ベレロフォンのものになった。いまや彼は天をも自在に飛ぶことができた。こうなっては鬼に金棒というところ。彼はペガサスに跨って多くの功業をたてた。中でも名高いのは、怪獣キマイラを退治したことだ。
　ことは彼が誤って自分の弟を殺したことから始まる。そこで彼は、自分を清めてもらうためにアルゴスのプロイトス王の宮廷に行ったが、ここで王妃の邪恋を退けたため、怒った彼女はベレロフォンが自分を犯そうとしたといいたてて、夫をそそのかして彼を殺させようとした。しかしプロイトス王は、自分が食卓を共にした客を殺すことをはばかった。食卓を共にした客を裏切るのは、大神ゼウスの最も好まぬところだったから。

そこで王は、自分が手をくだすことなくしてベレロフォンの命を絶つべく、一計を案じた。遠いアジアのリュキア王にあてて「この手紙持参の者は、即刻そちらで命を絶ってくれ。」という意味の手紙を書いて、それを持たして使いに立たしたのであった。

道は遠く、道中にはさまざまの危険があったが、天馬ペガサスをもっているベレロフォンは、やすやすとリュキアに着いた。王ははるばるとやって来た客人を心から歓待して、九日をすぎるまでプロイトス王の手紙を開かなかった。九日がすぎてはじめて読んで驚いたが、もはや幾度となく食卓を共にした客人を殺すことは、彼にも好ましくなかった。そこで王は、その地の人々をひどく苦しめていた怪獣キマイラを退治に、彼を出してやった。頭はライオン、胴は山羊、尾は物凄い蛇で、口からは炎をふくこの怪物を相手にしては、どんな勇士も今までは生きて帰ったことがなかったから。

しかし、ペガサスをもっているベレロフォンにとっては、この怪獣も物の数ではなかった。彼はキマイラの吐く炎もとどかぬ上空を悠々と飛んで、身を少しも危険にさらすことなく、その強弓で相手をたおしたのであった。

こうしてベレロフォンはかえって名声をあげてギリシャに帰った。プロイトス王は、その後も幾度か彼を危地に使いに出してみたが、いつもベレロフォンはみごとに使いをはたして帰ってくる。とうとう王は彼と和解して、自分の娘を彼に妻として与えた。

いまやベレロフォンの栄誉と幸福には欠けるところがなかった。こうして久しく時がたったが、ついに彼のこれまでの生涯の大きな成功は、彼をしていっそう大きな野望を起させた。彼はペガサスを

駆ってオリンポスの頂上にのぼり、不死の神々の間に自分の席を要求しようと考えたのだ。
しかし、これは人間に望みうる限度を越える野望だった。ベレロフォンは慢心に目がくらんでいたのだが、天馬ペガサスは彼より賢かった。馬ははじめて主人のいうことを聞こうとせず、ベレロフォンを振り落して、自分ひとりオリンポスのゼウスの厩に飛び帰った。そしてふたたび大神の雷と稲妻を運ぶ役目をした。
ペガサスに去られたベレロフォンは、以後神々にも憎まれる身となり、人々の目をさけて国々をさまよい、さすらいのうちにさびしく死んだ。

## †オリオンとさそりとプレアデス

オリオンは、ポセイドンあるいは大地ガイアの息子といわれる、ボイオチアの若者だった。巨人のように背が高い美男子で、狩りの名人として知られたが、またどうやら女に目のない方だったらしい。いろんな恋物語が伝えられている。
中でも有名なのはキオス島の王の娘メロペーに求婚した話だ。彼はメロペーを愛するあまりに、せっせと狩りの獲物を女のもとに運んだ。娘の父親のオイノピオン王は、ついに彼に一つの条件を出して、それをはたしたら娘を与えようといった。それは島を荒らしていた野獣どもを退治することだったが、狩猟の名人オリオンは、たちまちみごとに野獣どもを一掃した。しかし王は、なにかと口実をもうけては、あいかわらず結婚式をのばしのばしした。

しびれをきらしたオリオンは、ある日、酔いに乗じて、無理じいにメロペーを自分のものにした。オイノピオンは怒って、ディオニュソス神の助けをかりて彼を前後不覚に眠らせておき、その眼をつき刺して盲目にした上で、彼を浜辺に捨てさせた。

しかしオリオンは、神託によって、もし東に向って進んでいって太陽の光を眼に受けるなら、視力を取り戻せることを知った。そこで彼はある少年を肩にのせて道案内にして東に向ったところ、レムノス島まで来たとき太陽の光を目にうけて、ふたたび目があいた。

彼はすぐさま引き返してオイノピオンに復讐しようとしたが、王はヘパイストス神につくってもらった地下室にのがれたため、ついにオリオンは王を捕えることができなかったという。

のちに彼はクレタ島に渡り、その地でアルテミス女神に仕える猟人となったが、女神に対して情欲をもやしてこれを犯そうとしたため（あるいはオピスという女神のお気に入りの乙女を犯そうとしたため）ついにアルテミスの怒りにふれて、彼女のおくった巨大なさそりに刺されて死んだ。また、曙の女神エオス（アウロラともいう）が彼を恋してねんごろになったのを、アルテミス女神に妬まれたためだともいう。

そんなわけでオリオンは、天にのぼって星座になってからも、いつでもさそり――彼もオリオンをたおした手柄で星にされた――を恐れて、これを逃げ回っているわけだ。皆さんが冬から春へかけて空を仰ぐなら、オリオンを追って巨大なさそりがらんらんと赤く眼を輝かしてのぼってくる姿を見るであろう。

オリオンの方はまた、剣と棍棒をもち、皮帯をしめ、ライオンの皮をまとった姿で、プレアデス（スバル）の乙女たちをいまも追いかけ回している。

プレアデスと呼ばれるのは、あの大空をささえている巨人アトラスの娘たちといわれ、全部で七人である。その名はふつうに、エレクトラ、マイヤ、タイゲテー、アルキオネ、ケライノ、メロペー、ステロペーだとされている。

彼女らは母親といっしょにボイオチアで遊んでいる時にオリオンに見染められ、五年のあいだつけまわされた。しまいには白鳩になって逃げまわったが、ゼウスがそれを憐れんで、天上の星にしてやったのだといわれる。

この七人の中で、マイヤとエレクトラはゼウスに愛されて、マイヤはヘルメスを、エレクトラはトロイ人の祖先になったダルダノスを生んでいる。ほかの娘たちもそれぞれ神を愛人にした。ところがメロペーだけは、あの地獄に落されたシジフォスの妻になった。自分だけ人間の妻になったことを恥じて、そのためプレアデスの七つ星の中でも、彼女だけは光がひどくうすい。そのため、よっぽど眼のいい人でなくては見えないのだという。

# 花と木の神話

## †水ぎわのナルキッソス

ギリシャは岩山の多いやせた国で、花の咲きみだれた野原などは、あまりない。そのせいかギリシャ人は、とても野の花を愛して、花を主人公にした神話を、いくつか生みだしている。中でも有名なナルキッソス（英、ナーシサス〈水仙〉）の話から、まず書いてみよう。

ナルキッソスはたいへん美しい青年だった。彼の姿を見ると、どんな娘でも心を動かされずにはいなかった。ところがナルキッソスの方は、どんな美しい少女がいても、見むきもしない。森のニンフの中でもいちばん美しいエコーが、すっかり彼を好きになってしまって、あとを追いまわしたが、おなじことだった。

ところがエコーは、あんまりナルキッソスのことばかり考えて夢中になっていたため、主人の女神ヘラの機嫌をそこねてしまった。女神が浮気者の夫ゼウスの行方をたずねたとき、ちゃんとした返事もしないで、余計なおしゃべりばかりしたからだ。

女神はとうとう腹をたてていった。「余計なことをいうんじゃない。おまえは、ひとにいわれたこ

とに返事をすればいいのです。これからは、余計なおしゃべりができないように、相手の言葉の終りのもんくしか、おまえにはいえないようにしてやる。」

それからというもの、エコーは自由には口がきけなくなってしまった。女神のいったように、ただ相手からいわれたことばの最後の部分をくりかえすだけだった。そんなわけで、ナルキッソスの後をおいかけていっても、話しかけることができない。まして相手の心をひきつけることなど、できるはずがなかった。

それでもある日、またとないチャンスがきた。ナルキッソスが林の中で、

「だれか、そこにいます?」と呼んでいたのだ。

「います――いますよ!」と、エコーは木のかげにかくれて、夢中で返事をした。

するとナルキッソスはいった。

「だれだい? 出ておいで。」

エコーもよろこんで、「おいで!」といいながら、木のかげから走り出た。

ところがナルキッソスは、「なあんだ、お前か。お前につかまるくらいなら、ぼくは死んだほうがましだ。」とばかり、くるりと背中をむけてしまった。

エコーは悲しみとはずかしさで、「死んだほうがましだわ――。」と、小さな声でいったきり、さびしい洞穴に身をかくしてしまった。こうして穴の中にとじこもったきり悲しみにしずんでいたため、どんどんからだがやせほそって、とうとう声だけになってしまったといわれる。

ところで、ナルキッソスはどうしたか。ナルキッソスはひとを愛そうとはしないで、ただ相手の気持をめちゃめちゃにしてしまうだけだったから、とうとう復讐をつかさどるネメシスの神が腹をたてた。
「ひとを愛そうとしない者は、じぶん自身を愛するがいい。」
　こう叫んだ女神の呪いは、すぐにあらわれた。
　まもなく、水をのもうとして、泉のふちにかがみこんだナルキッソスは、水にうつった自分のかげを見て、たちまちその姿にひきつけられてしまったのだ。
「ああ、ひとを愛するということがどんなに苦しいものか、はじめてわかった。まるで胸の中が燃えるようだ。それなのに水にうつったあの美しい姿は、どうしてもつかまえることができない。そのくせ、ここを立ち去ることもできないのだ。死だけがぼくのこの苦しみを、しずめてくれるだろう。」
　そのままナルキッソスはそこにたおれて動かなかった。
　エコーはやせ細ったからだで洞穴から出てきて、ナルキッソスのそばまできたが、どうすることもできなかった。ただナルキッソスがさいごに、
「美しい人よ、さようなら。」といったとき、エコーも悲しい声で、
「さようなら。」とさいごの言葉をくりかえすことができただけだった。
　ナルキッソスは、とうとう死んだ。心のやさしいニンフたちは、ナルキッソスに見むきもされなかったことも忘れて、この美しい若者を葬ってやることにした。

ところが、ニンフたちが泉のそばにきてみると、ナルキッソスの屍はどこにも見えなかった。そして、さっきまでナルキッソスがたおれていた水ぎわには、見たこともない美しい花が咲いていた。そこでみんなはこの花を、ナルキッソスとよぶことにした。

## †ヒアキュントス（ヒアシンス）の花びら

ヒアキュントスは、ギリシャ南部のラケダイモンに生まれた美しい少年だった。ただ美しいばかりでなく、戦いやスポーツにもすぐれたりっぱな若者だったから、神々にもたいそう愛された。とくにアポロンと、西風の神ゼフロスは、この少年をひどくかわいがって、自分に仕えさせようとたがいに争った。

この争いでは、もちろんアポロンが勝った。なにしろアポロンはゼウスの子で神々の中でもいちばん権力のある神の一人だったばかりでなく、もっとも男らしい美貌の神だったから。こうしてヒアキュントスは、どこへいくにもアポロンのお供をすることになった。

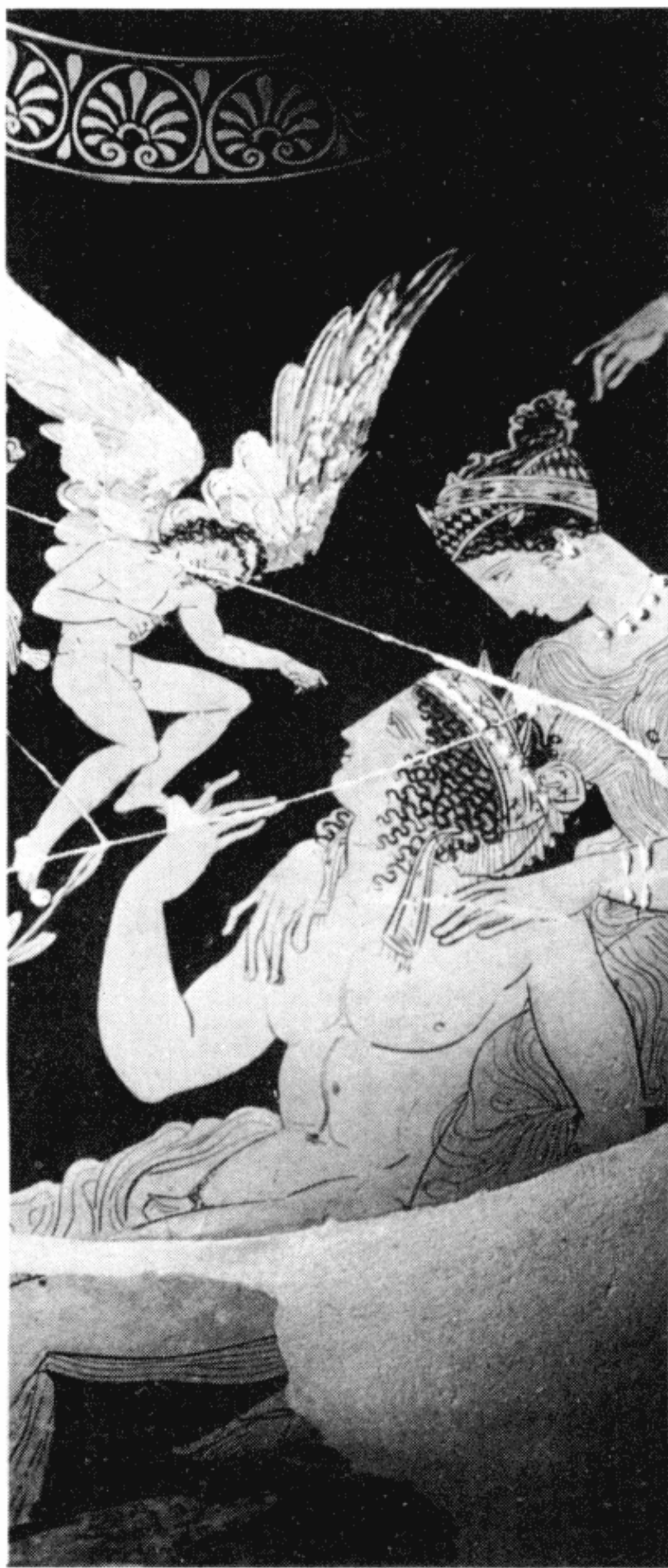
ある日ふたりは、いつものようにつれだってでかけて、円盤投げをして遊んだ。アポロンはもちろんすばらしい投げ手だったが、ヒアキュントスも負けずによくなげた。しまいにふたりは、競技場の西と東とにわかれて、どちらが遠くまで投げられるか競争することにした。

はじめにヒアキュントスが投げた。円盤は高く遠くとんで、アポロンの足もとちかくに落ちた。ア

ポロンはそれを拾って力まかせに投げ返した。円盤は高く高くとんでいって、雲の上までとどいた。悪いことに、その円盤を西風の神ゼフロスがみつけた。アポロンと少年にうらみをもっていたゼフロスは、「しめた！」とばかり、さっとつよい風をふきおくった。
円盤は風にながされて、あっと思うまもなくヒアキュントスの頭にぶつかった。頭はわれて、真赤な血がどくどくと流れ、少年はそのままそこにたおれてしまった。
アポロンはまっ青になってかけつけると、いそいでヒアキュントスを抱きあげて傷の手当をしようとしたが、もう手おくれだった。少年の首はまるで折れた花のように、がっくりとうなだれてしまっていた。
こんな美しい若者を、このまま死なせていいだろうか。わざとやったのではないにせよ、自分が殺してしまったとは！ アポロンは胸をかきむしられる思いで、ヒアキュントスをだきしめると、そこにひざまずいて叫んだ。
「ああ、ぼくはなんということをしたんだ！ 代れるものならばぼくが代りに死んでいきたい！」
アポロンの叫びがひびくと、なんと、ヒアキュントスの血に染ったあたりの草が青々としてきて、みるみるそこに一本のすばらしい花が咲きだしたではないか。
アポロンはその花びらに、なつかしい少年を記念するために、頭文字のYの字をきざみつけて、この花をヒアキュントス（ヒアシンス）とよんだ。（きざみつけたのは、AとYの字――ギリシャ語で、〈ああ悲しい〉という意味――だともいわれる。）

こうしてヒアキュントスの名は、永遠に人々の胸にのこることになったのだという。
もっとも、むかしのギリシャでいうヒアキュントスは、いま私たちのいうヒアシンスとはちがう種類の花だったようだ。たぶん、百合やアイリス（あやめ）に似た形をした、真紅の花だったろうといわれている。

## †春咲くアドニス

ギリシャの女たちは、秋がきて草木が枯れるころになると、アドニスの死を思っては悲しみ、春になって血のように赤いアネモネが咲きはじめると、アドニスが生きかえったといってお祝いをする。
アドニスはシリアの王様の子（キプロス王の子ともいわれる）で、たいへん美しい少年だった。美と愛の女神アフロディテは、この美しい子がすっかり気にいってしまった。そこでこっそり少年をぬすみだすと、地下にいるハデスの妻のペルセフォネにあずけて、だいじに育ててもらうことにした。
アドニスは、地下の御殿でいよいよ美しい若者にそだった。すると、ハデスの妻のペルセフォネもこの少年がすきになってしまい、アフロディテがいくら返してくれといっても返そうとしなかった。
アフロディテはとうとう地下の国までたずねていって、少年を返してもらおうとしたが、それでもペルセフォネは承知しない。ふたりの女神は、たがいにはげしく相手を憎むようになった。
とうとうゼウスが、ふたりの間にはいって、次のような条件で仲なおりをさせた——アドニスは、秋と冬とは地下の死の国でペルセフォネといっしょにくらし、春になったら地上に帰って、春と夏と

を愛と美の女神アフロディテとくらす、ということで。
こうしてアドニスは、地上にもどってきた。アフロディテの喜びようといったらなく、いつも少年をそばからはなさなかった。アドニスは狩りが何よりもすきだったから、よく野山や森を獲物をさがして歩いた。すると愛と美の女神も、白鳥のひく馬車からおりては、アドニスのあとについて森や茂みをぬけていくのだった。
ところがある日、女神がちょっと目をはなしているすきに、アドニスは一頭の大きないのししを追

アフロディテに抱かれるアドニス

いだして、猟犬といっしょに、どんどんその後を追いかけていった。そして、追いつめたところで、さっと投槍をなげつけた。
しかし、槍はいのししを傷つけただけで、たおすことはできなかった。手きずをおったいのししは、彼めがけて突進してきた。アドニスはいそいで身をかわそうとしたが、まにあわない。あっと思うまもなく、怒りくるう猛獣のするどい牙にかけられてしまった。
「ギャッ!」と叫んだまま、アドニスはそこにたおれた。
空をとんでいたアフロディテは、その声をきいていそいで駆けつけた。しかし、美しい若者は、雪のようなはだを真赤な血にそめて、もはやぐったりと動かなかった。あれほど美しく輝いていた目も、かすんでしまって、アフロディテの姿も見わけられないようす。死がもはや迫っていた。
女神は夢中でアドニスを抱きしめた。しかし、アドニスはそのまま息をひきとってしまった。アフロディテの悲しみといったらなかった。女神は愛人にはもう聞えないと知りながら話しかけるのだった。
「ああ、あなたは死んでいくのね。わたしの願いは夢のようにとびさってしまい、わたしの美もあなたとともに消えていくのでしょう。女神のわたしは死ぬことはできないから、あなたについていくわけにはいきません。さあ、もういちど別れのキッスをしましょう。」
しかし、もはや地下の暗い国へいってしまっていたアドニスには、その声もとどかなかった。
アドニスの血がこぼれた土の上には、やがて春になると、血のように真赤な花が、一面に咲きだし

た。それがアネモネ（ギリシャ語でアドニス）だったという。

## †月桂樹になったダフネ

テッサリヤのペネイオス川の神の娘（アルカジアのラドン川の神の娘、ともいわれる）ダフネは美しいほがらかな乙女だった。
ところがこの乙女は、野山をかけまわって狩りをするのが何よりもすきで、若者たちには目もくれなかった。
父親のペネイオスは、はやく娘を結婚させて孫の顔を見たいと願ったが、何度いってきかしてもダフネの気持を変えさせることはできなかった。
「わたしはアルテミスさまのような暮しがしたいの。」
ダフネはそうこたえては森の中へ逃げていってしまう。アルテミスはアポロンと兄妹の美しい女神で、狩りが大好きで弓矢をもって野山をかけめぐり、一生を処女で過していた。ダフネもこの女神のように野山や森をさまよっては、狩りをして暮すのが望みだった。そういう自由で気ままな生活がすきで、人の妻になることなどは考えてもみなかったのだ。
ある日もダフネは、両腕をむきだしにし、膝までしかない短い服をきて、髪をふりみだしながら、獣をおって林をかけぬけていた。通りかかったアポロンが、ふとそれを見つけた。男のような姿をしていたけれど、ダフネはすばらしく美しかった。

あの娘にきれいな服をきせ、髪をきちんとゆわせたら、どんなに美しいだろう。

そう思ったときには、もうアポロンはダフネを愛してしまっていた。彼はいそいでダフネを追いかけた。

それを見てダフネは、あわてて逃げだした。彼女はすばらしい足をもっていたから、風のように木々の間をぬけて走った。でも、いくら足が早くてもアポロンにかなうはずがない。まもなくアポロンは追いついて後から声をかけた。

「ねえ、美しい娘さん、逃げなくてもいいじゃないか。ぼくは乱暴な羊飼いとはちがうんだ。デルフォイのアポロンだけれど、きみがすっかりすきになってしまったんだよ。」

ダフネはアポロンの言葉をきいても、いよいよ足を早めるだけだった。足の早いアポロンには逃げてもだめだと知っていても、ダフネは最後まで頑張って逃げる覚悟をしていたのだ。

しかし、もうアポロンはすぐ後まで迫っていた。彼のあらあらしくはく息が、もはや首すじに感じられた。もうすぐダフネは、アポロンの力づよい胸に抱きしめられてしまうだろう。

そのとき、林がきれて、父親の川の姿がダフネの目にはいった。

「おとうさん、助けて！」

こう叫びながら、ダフネは川のほうへ走りおりた。とたんに、全身がしびれるような感じにおそわれると同時に、ダフネの足はそこの川岸で動かなくなってしまった。とみるまにダフネの足からは根がのび、からだは一本の木になって、二本の手からは青々と葉や枝が芽をふきだした。ダフネは一本

の月桂樹にかわっていたのである。

アポロンはびっくりしてこのありさまを見つめていたが、美しい娘が永久に失われてしまったのを嘆いて、やがてこういった。

「美しい娘よ、ぼくはきみをとうとう失ってしまった。でもきみはやっぱりぼくのものだよ。ぼくはこの木をぼくの木として、この枝で冠をつくり、ぼくのすきな音楽や物語のわざで勝利をえた者を飾ってやることにしよう。そうすれば、きみの名も永久に残るわけだ。」

すると、きらきらと輝く美しい月桂樹（ギリシャ語でダフネという）の枝と葉は、よろこんでそれに答えるかのように、しずかに頭をふってさらさらとそよぐのだった。

こうして月桂樹はアポロンの木となり、その後は音楽や詩や物語のわざにすぐれた芸術家たちの頭に、この木の枝をあんでつくった月桂冠をかぶせることになったのである。

# ペルセウスの冒険

## †メドゥサの首

ギリシャのアルゴスの近くに、ティリンスという古い美しい町がある。町はいまでも大石をつみあげた城壁でかこまれているが、この城壁はれいのキクロペという巨人たちが築いたものといわれている。

さて、ティリンスの王アクリシウスには、ダナエという美しい娘があるだけで、王子はひとりもなかった。王はどうかして跡とりの王子をえたいと思い、アポロンの神にうかがいをたてた。するとアポロンは、娘のダナエにひとりの王子ができるが、王はその孫息子のために殺されるであろうとつげたのであった。

「なんたることじゃ！」とばかり、アクリシウス王は娘ダナエを決して結婚させまいと、心にちかって、彼女を真鍮ではりめぐらした塔の中にとじこめてだれにも会わせぬようにした。

しかし、ダナエの美しさに心をうばわれたゼウスは、黄金の雨となって窓からダナエをおとずれた。やがてダナエはこの塔の中で、ひとりの子供を生み落した。これが後にさまざまな冒険をするペ

ダナエと黄金の雨

ルセウスである。

アクリシウス王は、これほど用心していたのに孫息子ができたときくと、ひどく怒るとともにおびえた。そしてとうとう大きな木箱をつくらせると、中にダナエと赤ん坊とをおしこめて、海に流した。

じぶんの娘や孫を殺すのは大罪だから、きっと神の呪いを受けるにちがいない。だが、わしはただふたりを海に送りだすだけじゃ。もし波のために箱が壊れて沈んだとしても、わしのせいではないから咎められはすまい。

王はこう考えたのである。

箱はどんどん沖に流されて、まもなく陸地からは見えなくなった。風がでて、波が高くなった。ダナエはこわくなって、しくしく泣きながら赤ん坊を抱きしめたが、こちらはすやすやと眠っていた。

「ああ、なんという運命におちたのでしょう。それなのにお前はちっとも怖がらずにすやすや眠っているの

ね。きっとお父さんのゼウスが守っていてくださるのを知っているのだわ。だいじょうぶよ、かわいい坊や、安心して眠っておいで。波がいくらゆれても、お前のゆりかごだと思ってね。わたしは、ふたりがぶじに陸につくように、ゼウスさまにお祈りするわ。」

こういってダナエは熱心にゼウスに祈った。

箱は一晩じゅう海の上をただよっていたが、朝になるとセリポスという島についた。島の王ポリデクテスの弟のデクチュスという漁師が、海で網をうっていてダナエ親子をのせた箱をみつけ、親子を救って家につれて帰った。

ペセルウスはこの漁師の家で大きくなって、漁もたくみなら、刀をとってもだれにも負けないりっぱな若者になった。

その間にポリデクテス王は、ダナエがすっかり気にいって妻にしようとした。しかしダナエは、ポリデクテスが心のねじけた王であるのを知って、どうしても妻になることを承知しなかった。しかも武勇にすぐれたペルセウスがいつも母親を守っているので、王はなかなかダナエに近づくことができなかった。

そこで王は、ペルセウスを遠ざける計略をめぐらした。王は大宴会をひらいて、島の若者をのこらず招待した。もちろんペルセウスもまねかれた。ところで、みなはそれぞれりっぱな贈物を持って王宮にやってきたが、貧しいペルセウスは何も持っていかなかった。若者たちはペルセウスをばかにして、さんざん笑いものにした。

とうとうペルセウスは、顔を真赤にして叫んだ。「よし、それならぼくは、君たちよりもすばらしい贈物を持ってきてみせるぞ！」
とたんに悪がしこいポリデクテス王がいった。
「そんなわけにはいくまいよ。お前がゴルゴンのメドゥサの首でもとってくれば別だがね。」
ペルセウスはそれをきいて、思わず叫んだ。
「では、メドゥサの首をとってきましょう！　とれなければ死ぬまでのことだ！」
ゴルゴンというのは恐ろしい姿をした三人の姉妹で、わけても末娘のメドゥサは髪の毛一本一本が蛇になっている怪物だった。
ペルセウスは王宮をとびだすと浜辺へおりていって、恐ろしいメドゥサの首をとるにはどうしたらいいかを考えていた。するとそこへ、神々しい姿をした二人の人が近づいてきた。きらきら輝くかぶとをかぶり、美しい盾を持った背の高い女神はアテナで、足に翼のあるサンダルをはいて、いかにもすばしっこそうな姿をし、目にいたずらっぽい笑いをたたえた神はヘルメスだった。
「くよくよするな、ペルセウス。ゼウスさまのいいつけで、ぼくらは君を助けにやってきたのだ。それ、世にもすばらしい武器をもってきてやったよ。これは、クロノスがウラノスをたおした時、そしてまたゼウスがティターンと戦った時につかった大鎌さ。メドゥサの首を切るには、これでなくては刃がたたないのだ。」
こうヘルメスがいうと、アテナもやさしい声でいった。

「わたしはこの盾をかしてあげますわ。メドゥサの顔を正面から見た者は、たちまちからだが石になってしまうのです。でも、この盾にうつった姿を見て戦えば、きっとうまくいきますよ。」

ヘルメスとアテナにはげまされて、ペルセウスは元気いっぱいに出発した。

まずはゴルゴンのいる場所をききに、ヘルメスの教えてくれた灰色の三人姉妹の住む北国のさびしい洞穴に向った。

灰色の姉妹は、ポルコスという巨人の娘だったが、生まれた時から白髪のおばあさんで、三人でただ一つの目と、ただ一まいの歯を共同でつかっているのである。

ペルセウスが洞穴に近づいたとき、灰色の姉妹は穴の前にすわって、そのただ一つの目を手から手に渡そうとしていた。ペルセウスはいきなりうしろからしのびよって、その目をとりあげていった。

「きみたちの目はぼくがもらったよ。ぼくの質問に答えてくれないなら、このまま目は返してやらない。きみたちはいつまでも闇の中にすわっているがいいさ。」

灰色の姉妹はおどろいて、「あなたのきくことには、なんでも正直に答えるから、どうぞその目は返してくれ。」と頼んだ。ただ一つの目をとりあげられてしまっては、三人とも何ひとつ見ることができないからである。

こうしてペルセウスは、姉妹からふしぎなニンフたちの住んでいる北風のうしろの国のことをききだして、そこへいく道もくわしくおしえてもらった。

ペルセウスは目を返してやって、また道をいそいだ。やがてニンフたちの住む国についたが、この

国に住む者はいつまでも年をとらないで、毎日たのしく遊びくらしているとのことだった。ペルセウスは彼女たちとしばらくここで楽しい日を送った。

しかし、いつまでものんびりしてはいられない。ある日とうとう、ペルセウスはニンフたちにいった。

「ぼくはゴルゴンのメドゥサの首をとって、ポリデクテス王のところへ持ち帰らなくてはいけないのです。どうかゴルゴンの住んでいる場所をおしえて、ぶじメドゥサの首がとれるように力をかしてください。」

ニンフたちはおどろいたが、ペルセウスからくわしく話をきくと、親切にゴルゴンのいるところを教えてくれたばかりか、メドゥサのおそろしい姉たちが追いかけてきても逃げられるように空をとぶ千里の靴をかしてくれた。メドゥサの首を入れる魔法のかごもかしてくれた。あと足りないのは、かぶると姿が見えなくなるハデスの帽子だけとのことだった。それもニンフたちは、さっそくハデスの妻のペルセフォネと仲のいいニンフを死の国へやって、その帽子までかりてきてくれた。

これでペルセウスにいりような品はそろった。彼は親切なニンフたちに別れをつげて、おしえられた道を進んでいった。

いよいよゴルゴンたちの住む国に近づくと、あたりは見るもすさまじい眺めだった。メドゥサのおそろしい顔を見たために石にかわった人間や動物が、そこいらにごろごろしている。

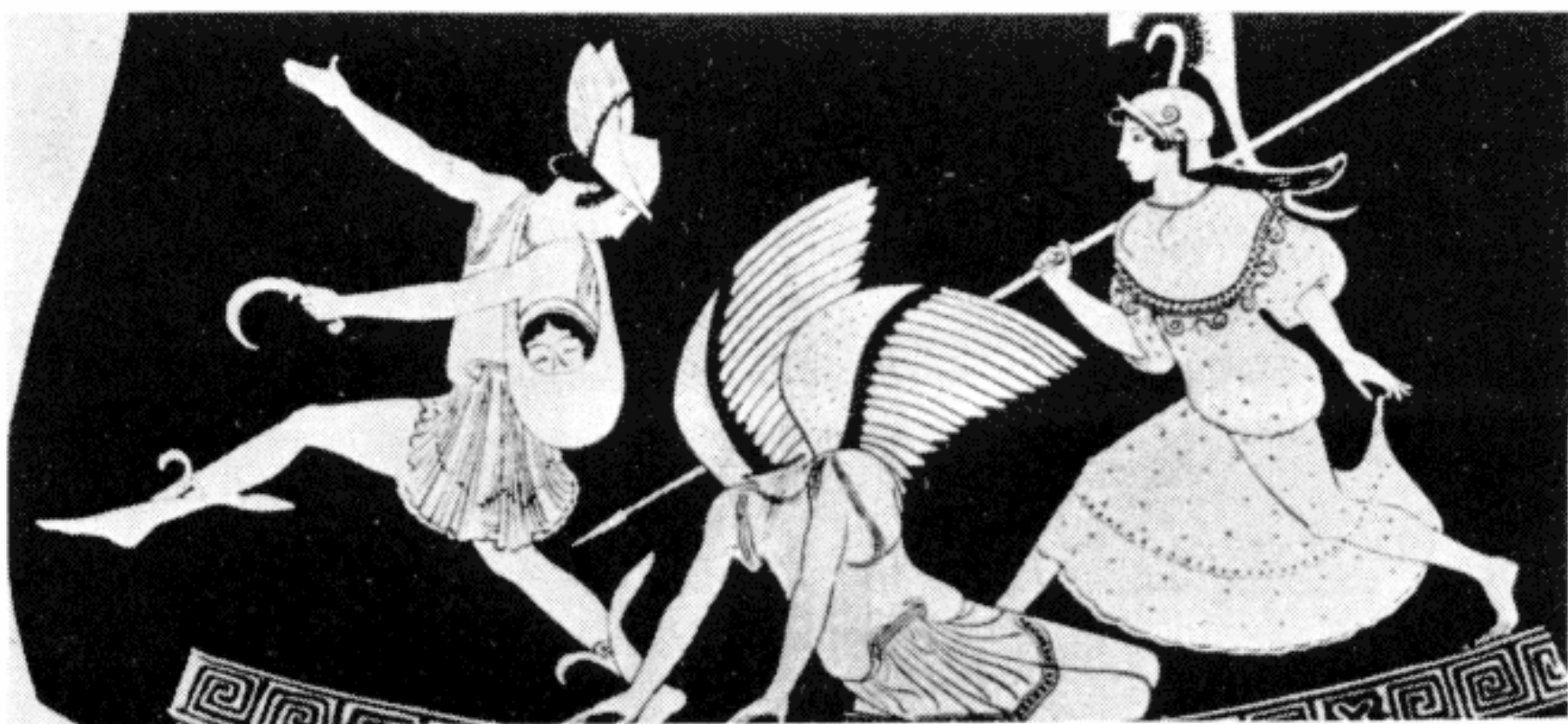
三人のおそろしいゴルゴンは、日なたでうとうと居眠りしていた。見ると、末の妹のメドゥサの頭

には、髪のかわりに無数の蛇がむらがっているし、ふたりの姉の頭は、龍のうろこでおおわれていた。メドゥサはまだ殺すことができるが、この姉たちの方は不死身なのだ。三人とも口からはいのししの牙そっくりの歯をむきだして、肩には大きな翼がはえている。

ペルセウスはハデスの帽子をかぶると、用心ぶかくゴルゴンたちに近づいた。アテナ女神の盾にいよいよメドゥサの顔がうつると、さすがのペルセウスも、その物すごさに思わずぞっとした。

しかし、なおも近づいて大鎌をふりあげると、さっとその首をうちおとした。そしてすばやく首を拾うと、ニンフにもらったかごにいれた。

ところが、メドゥサの頭の蛇がおこって、シューシューいっせいに音をたてたので、ふたりの姉が目をさましてしまった。見ると、妹の首がうちおとされて、運びさられていく。姉たちは、妹のかたきとばかり、ペルセウスを追いかけてきた。

不死身の姉たちにつかまったら、助かるみこみはない。ペル

メドゥサの首をとったペルセウスとアテナ女神

セウスはさっと空にまいあがって、すばやく逃げた。ふたりのゴルゴンは、怒りくるって追いかけてきたが、なにしろペルセウスは千里の靴をはいている。真暗な大海の上をこえてぐんぐん南へとんでいくペルセウスの姿を、ゴルゴンたちはとうとう見うしなってしまった。

## †岩の上のアンドロメダ姫

まもなくペルセウスはアフリカの上に出て、はてしもなくつづく砂漠をこえた。見渡すかぎり木も草もなく、一点の水たまりも見えない。ところが、ペルセウスの持っているかごから血がしたたりおちると、そこにはたちまち青々したオアシスができた。

やがて夜があけて朝になってみると、ペルセウスはエチオピアの浜辺の上をとんでいた。ふと見ると、海上につきでた岩の上に、美しい女の像のようなものが立っている。まいおりていってみると、それは像ではなくて、ひとりの娘が波のうちよせる岩の上に、くさりでしばりつけられているのであった。

「おお、かわいそうに。美しいむすめさん、いったいどうしたのです?」と、ペルセウスは声をかけてみた。

「このあわれなアンドロメダに同情してくださるのは、どなたですか。いったいあなたはどこにいらっしゃるのです?」

姫はあたりを見まわしながら叫んだ。ペルセウスがまだハデスの帽子をかぶっていたため、姿が見

えなかったのだ。ペルセウスはそれに気がつくと、いそいで帽子をぬいで波の上にまいおりた。そして、美しいアンドロメダ姫をなぐさめて、なぜこんな岩の上にくさりでつながれたのか、そのわけをたずねた。

「わたしは、このエチオピアの王女なのですが……。」と、姫が泣きながら話したことは、こういうことだった。母親のカシオペアが、海のニンフをばかにしたため、海から怪物が出てきて浜辺をひどく荒らしたので、父親のケペウス王は、海の怪物の怒りをしずめるにはどうしたらいいかと、神にうかがいをたてた。すると神のおつげは、娘のアンドロメダをいけにえにせよ、ということだった。神のおつげにそむくわけにはいかず、王はなみだをのんで娘を岩にしばりつけた。

ひとめ見たときからアンドロメダ姫が気にいってしまっていたペルセウスは、どうかして姫を助けたいと思った。しかし姫は、

「どうか、そんなことはお考えにならないで。わたしを救うことなんて、とてもできませんもの。」

といって、なおさらはげしく泣くばかりだった。

「人間にはとうていできないと思われることでも、ぼくはやってきたのですよ。」

こういってペルセウスは、すばやく身がまえた。海の面をざわざわとさわがせて、そのとき何物かが近づいてくるのに気がついたからだ。と見るまに、怪物がぬっと海の上に頭をつきだして、真紅の口をかっと開いてせまってきた。

アンドロメダ姫は気を失ってたおれ、崖の上から見まもっていた姫の両親は、地にふして神の助け

を祈った。急いでペルセウスは、かごからメドゥサの首をとりだして怪物の前につきつけた。たちまち怪物は動かなくなって、大きな割れめのある岩山になってしまった。

ペルセウスはメドゥサの首をまたかごにしまうと、持っていた鎌でくさりをたち切り、姫を両親のいる崖の上までつれていった。ふたりは夢かとばかりよろこんで姫をだきしめた。やがて城へ帰ると、ケペウス王はすぐにペルセウスを姫の花婿にきめた。

まもなくさかんな結婚式があげられて、みなが祝いの席についているとき、一人のたくましい大男が、あらあらしく一隊の家来をしたがえてはいってきてどなった。

「アンドロメダはおれのものだ。姫はおれにくれるといったではないか。よこさぬと、ここにいる者は皆殺しにし、町には火をかけて焼いてしまうぞ！」

それは王の弟のピネウスだった。しかしペルセウスがメドゥサの首をつきつけると、ピネウスも家来もろとも、すぐさま石になってしまった。

まもなくペルセウスは、妻のアンドロメダをつれてギリシャにむかい、ついにセリポスの島に帰りついた。ところが、母のダナエは王のために奴隷にされているし、親切なデクチュスは牢屋にいれられているという。

ペルセウスは妻を船にのこすと、ただひとりで王宮にでかけた。ポリデクテス王は、この前ペルセウスを笑いものにした連中とまたもや宴会をしていたが、ペルセウスがはいってきたのを見ると、あざ笑って叫んだ。

「おや、ほらふきのペルセウスが帰ってきたな。約束のみやげはどうした？」
ペルセウスは、しずかにこたえた。「お約束どおり、メドゥサの首をとってきました。」
「うそをつけ！　口先でごまかそうとしたって、だめだ。取ってきたのなら出して見せろ。」
ペルセウスは無言でかごからメドゥサの首をだして、みなの前につきつけた。そして、石になった連中を片っぱしから外にひきずりだして、山から投げおとしてしまった。
その晩ヘルメスがやってきて、ペルセウスから鎌と盾と靴とハデスの帽子と、メドゥサの首をいれたかごを受けとっていった。メドゥサの首はアテナ女神がもらって、その盾の真中にはめこんだ。
王宮ではポリデクテス王が死んだため、デクチュスが王さまになってダナエを妃にした。
やがてペルセウスは妻をつれて、生まれ故郷のアルゴスにむかった。すると、途中のラリッサというところで、そこの王が大競技会をもよおしていた。競技が大好きなペルセウスは、仲間にくわわることにして、まず円盤投げをした。
ところがペルセウスのなげた円盤は高く遠くとんでいって、競技を見物していた一人の老人にぶつかった。頭をうちわられた老人はその場で即死したが、この老人こそ、ペルセウスが帰ってくるときいてティリンスの町を逃げだしてきたアクリシウス王だった。
アクリシウス王が孫に殺されるだろう、といったアポロンの予言は、まさしく実現したのである。
ペルセウスは、死んだ老人が自分の祖父だと知って嘆き悲しんだが、どうにもならなかった。彼はやがてアンドロメダをつれてアルゴスにいき、祖父のあとをついで国王の位についた。

ペルセウスについては、まだいろいろの話があるが、かれが死ぬとゼウスは、妻のアンドロメダとならべて、天上の星にしてやった。秋の夜空に光りかがやくペルセウスとアンドロメダの星座がそれだという。

# テセウス、ヒッポリタス、ディダラスの話

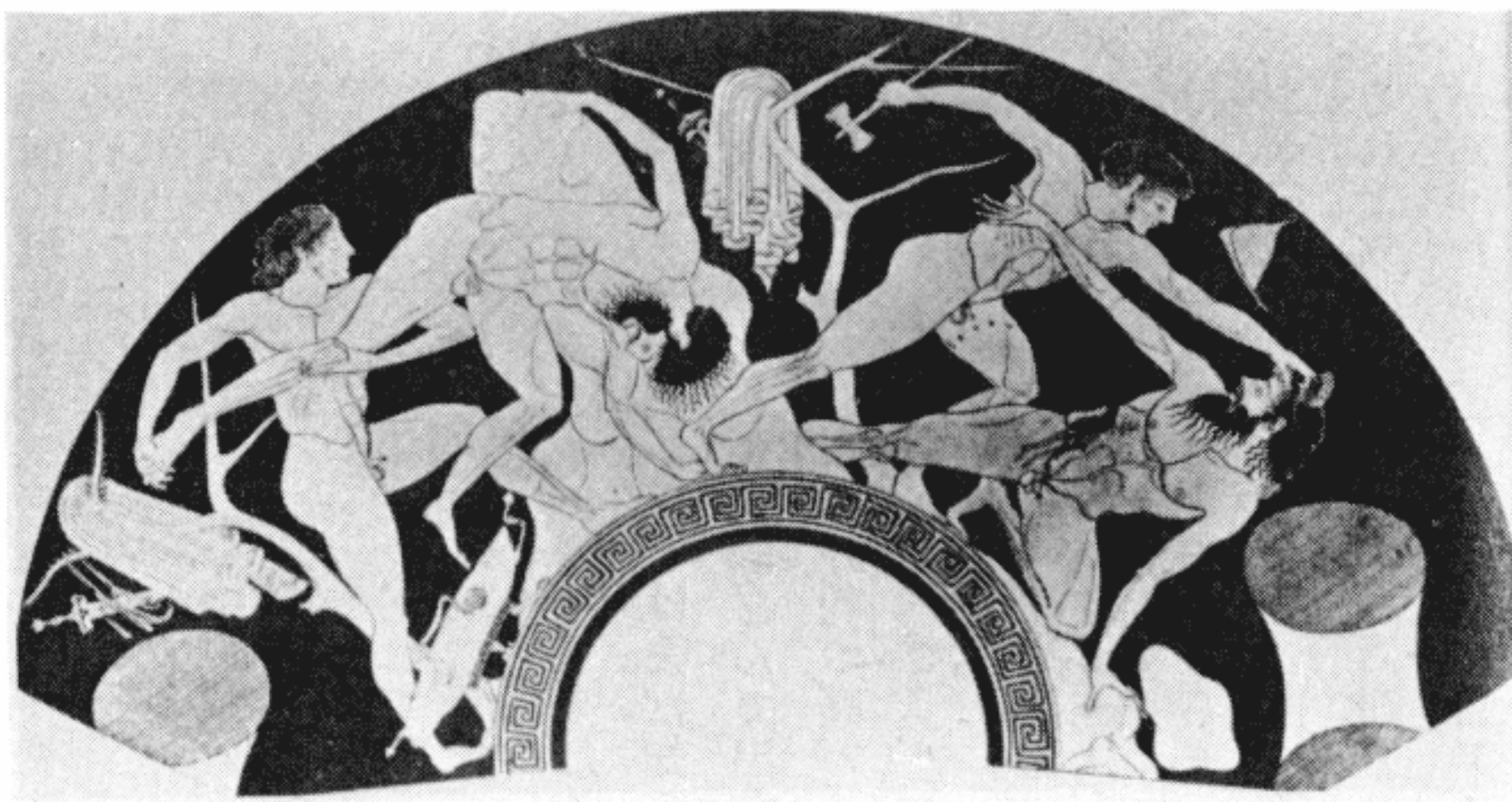
## †テセウスの生い立ちとクレタ島での冒険

テセウスはアテナイ市のお気に入りの英雄だ。

彼はアテナイ王アイギウスが、南ギリシャのトロイゼンをたずねた時に、そこの王の娘アイトラーとちぎって生ませた子である。しかし彼は、テセウスの生まれるのを待っているわけにいかなかったので、ある日穴の中に自分の剣と一足のサンダルを隠すと、その上に大岩をころがしておいて、愛人にいった。

「生まれた子供がもし男の子で、たくましく成長して、あそこにわしが隠した品物をうまく取り出せたなら、アテナイによこすがよい。わしは喜んでわが子として認めよう。」

生まれた子ははたして男で、たくましく成長した。母親は喜んで息子が十六歳になると、その岩のところへつれていって、父のことを話した。息子はやすやすと大岩をころがして、父親の遺品を取り出した。

「ではアテナイのアイギウス王を訪ねて、親子の名のりをしなさい。」

テセウスとスキロン，プロクルステス

こういって母親は船の用意までしてやったが、元気な若者は安全な船旅をすることを拒んで、陸路をとってアテナイに向った。この頃、道中のいたるところに剽悍な盗賊が出没して、旅人を苦しめることを聞いていた彼は、あえて危険をおかしてこの盗賊どもにぶつかってみたいと考えたのだ。彼の従兄弟にあたるヘラクレスが、その頃はもういくつも冒険をして並びない英雄としてもてはやされていたので、テセウスも一日も早く彼におとらぬ英雄として自分の名をあげたかったらしい。

道中は長く、また危険にみちていた。陸路をとった彼は、はたして幾人もの盗賊に出あった。しかしテセウスは、片っぱしから彼らを片づけていった。エピダウロスではシニスという強力な山賊に出あった。彼は二本の松の木を曲げておいて通行人を縛りつけ、それから手をはなすと、はね起きた松の木のいきおいで、旅人は真二つに引き裂かれるのだった。テセウスは逆に相手を松の木に縛りつけて、引き裂いて罰した。コリント地峡の近くには、旅人に自分の足を洗わせてお

いて海に蹴落すスキロンというくせ者がいたが、こいつはテセウスによって逆に海に蹴落された。エレウシスにはプロクルステスという危険な宿屋の亭主がいた。彼は旅人を鉄のベッドに寝せては、もし旅人がベッドより少しでも長いと、怒ってベッドからはみ出した部分を切ってしまい、もし長さが足りないとぐっと背たけを引っぱってのばして、殺してしまうのだった。「プロクルステスのベッド」で名を売ったこの男も、英雄テセウスに出あっては、自分が同じ運命にあって命を落すしかなかった。

こうしてアテナイにやって来たころのテセウスは、もはや評判の高い英雄になっていた。アイギウス王は、それが我が子とはまだ知らなかったが、道路の危険を除いてくれたこの若い英雄を宮中の宴会に招いた。テセウスは喜んで出かけていったが、ここで危く毒を飲まされるところだった。それというのは、魔女として評判の高いメディア——彼女のことは後の「アルゴー船の遠征」にくわしく出てくる——が当時王宮にいて、アイギウス王を虜にしていたが、彼女はひそかにテセウスが王の息子だと知って、邪魔者が来たとばかり、これを毒殺してしまおうとはかったのだ。しかし王は、テセウスのおびていた刀でそれが自分の息子だと知り、毒杯をたたき落して危く事なきを得た。魔女メディアはたくみに逃れて行方をくらました。

こうして一難は去ったが、当時アテナイには重たい運命がのしかかっていた。

それより少し前、地中海に覇をとなえていたクレタ島のミノス大王の息子がアテナイ市を訪れたことがあったが、王子は不幸にもアイギウス王の頼みでそのころ地方を荒らしていた猛牛を退治に出か

け、逆に牛に突かれて命を落してしまった。ミノス王は怒ってアテナイに攻めよせて、これを占領し、皆殺しにされるのが厭なら、九年ごとに七人の若者と七人の乙女を貢物として自分に献上しろと命じた。アイギウス王は、この命令に従うしかなかった。こうして九年ごとに十四人の若いアテナイ人がクレタ島に送られた。彼らの運命は恐るべきものだった。有名な迷宮ラビリントスに送りこまれて、半分は牛で半分は人間の怪物ミノタウロスの餌食になってしまうのであった。

　このミノタウロスは、ミノス王の妃がポセイドン神の贈物の聖牛と通じて生み落した怪物だ。大神ゼウスの血をひいているミノス王は、王としての自分の地位をいよいよ光栄あるものにするべく、何か神々が自分を守っていられる証拠のものを授けてくださいと、海神ポセイドンに祈った。するとポセイドンは、一頭の巨大な美しい牡牛を送りとどけて、これを殺して自分にささげることを命じた。しかしミノス王は、その命令を無視して、牡牛を殺さずに飼っておいた。ポセイドンは怒って、妃ペシパエにこの牡牛と通じさせた。こうして上半身は人間だが、下半身は牡牛という怪物ミノタウロスが生まれたのだという。

　ミノス王は、この怪物を殺すことはしないで、名高い建築家ディダラス（ギリシャ風にいえばダイダロス）に迷宮（ラビリントス）をつくらせて、その中にとじこめておいた。このラビリントスに一度はいった者は、はてしなくうねり曲った路から路をたどるだけで、二度と出てくることはできず、みんなミノタウロスの餌食になってしまうのだった。

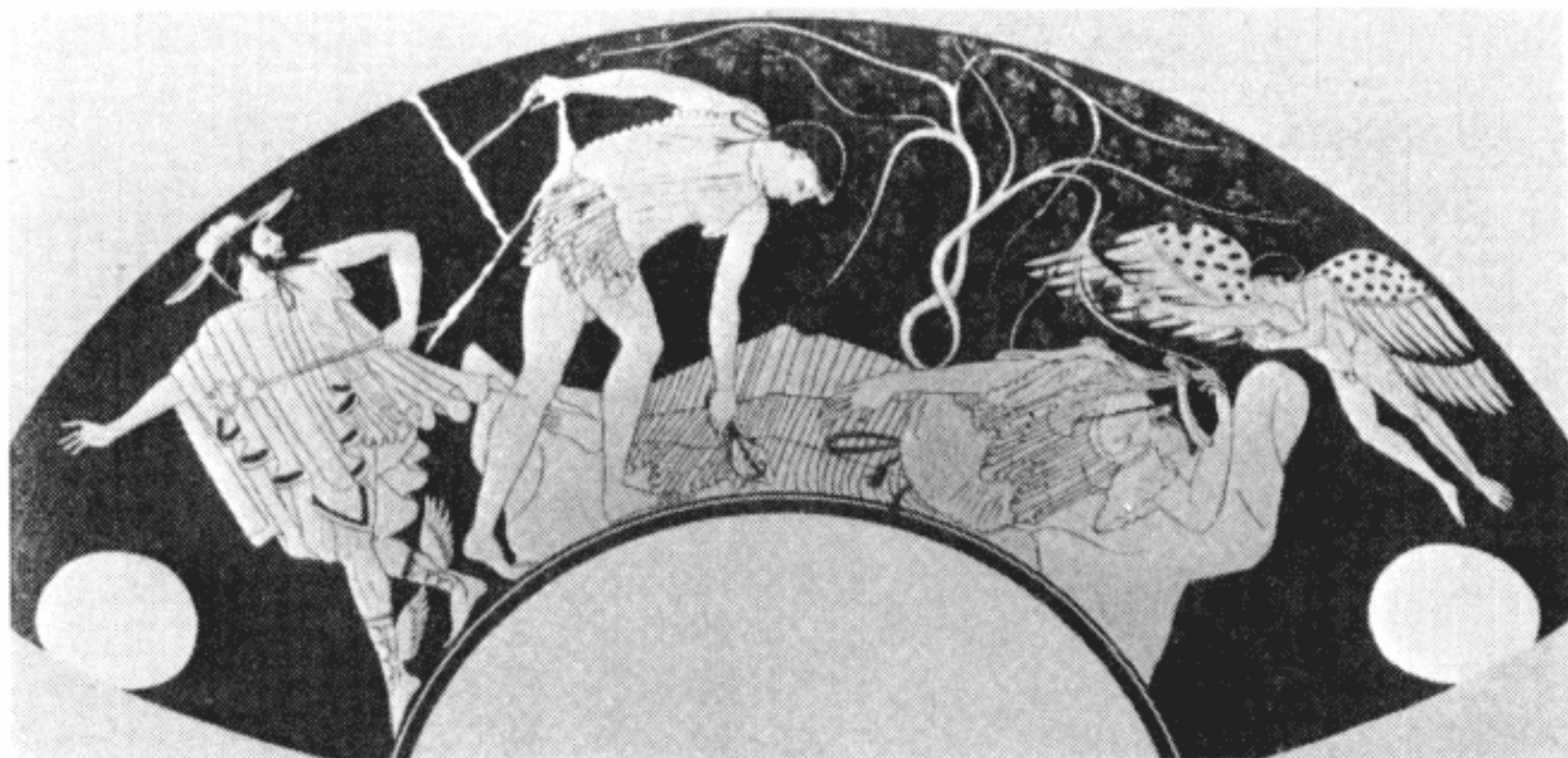
　テセウスがアテナイにやって来てまもなく、ちょうど何度目かの、この貢物の若者たちが送り出さ

れる日が来た。義侠心にとんだ若い英雄は、みずから志願してその犠牲の仲間に加わった。父親のアイギウス王は悲しんで思いとまらせようとしたが、期するところあったテセウスは決心をひるがえさなかった。彼は父王に約束した——

「わたしはきっとミノタウロスを退治して、アテナイの災いを除いてみせます。それが成功した時は、船には白い帆をあげて帰ってきますから待っていてください。」と。というのは、この貢の船はアテナイ市民の悲しみをあらわして、黒い帆をかかげてクレタ島に向うのだったから。

そこでアイギウス王は、そろそろ船が帰ってくる予定の日が近づくと、毎日パルテノンの丘に登っては、息子たちののって出た船が白い帆をかかげて帰ってくるのを待ちうけて、青い海の上へと目をこらすのであった。

さて、テセウスをふくめた十四人の犠牲者は、クレタ島につくと、市民たちの人垣をつくっている

ミノタウロスを殺すテセウス

テセウスとアリアドネの別れ——左端はヘルメス

中を、ラビリントスへ送りこまれた。ところが、見物人の中にまじっていたミノス王の娘アリアドネが、雄々しく美しい青年テセウスの姿を見て、同情の思いにかられ、それがたちまち熱い恋心になった。

彼女は何とかしてこの若者を助けたく思い、あの建築家のディダラスから迷宮をぬけだす手だてをききだすと、ひそかにテセウスをよんで、

「もしあなたがわたしをアテナイにつれていってわたしと結婚してくださるなら、あの迷宮からぬけ出す道を教えてあげますわ。」

といった。テセウスにはもちろん異存はなかった。そこでアリアドネは一つの糸玉を渡して、これを迷宮の門の内側に結びつけておき、進むにしたがって糸玉をほぐして行くように教えた。こうしておけば、どこまで進んでも、糸をたぐって帰ってくることができるわけだから。

テセウスは勇気百倍してぐんぐんと迷宮の中へ進んでいった。皆の者は後に続いた。やがて巨大な怪物ミノタウロスの

待ち伏せているところに来たが、幸い怪物はうとうととまどろんでいた。テセウスは躍りかかって彼をしめつけ、武器は何も持っていなかったが、拳でさんざんなぐりつけてついに怪物の息の根をとめた。さすがのミノタウロスも、巨大な樫の木がたおれるように、地響きたててどうとたおれた。

彼らは怪物の死体を断崖から投げ落すと、アリアドネのくれた糸をたどって、ぶじ迷宮を出た。こうして急いでアリアドネをつれて船にのると、アテナイを目ざした。

ところが、途中のナクソスの島まで来た時、テセウスとアリアドネは別れてしまうことになった。あるいい伝えでは、アリアドネが眠っている間にテセウスが彼女を島に置き去りにしたということになっているが、他の話では船酔いで苦しんでいたアリアドネを島におろして休ませている間に、はげしい嵐がやって来て、テセウスたちののった船が遠く吹き流されてしまい、心ならずも彼女と別れ別れになったことになっている。（島に残されたアリアドネは、やがてディオニュソスに救われて、この神と結婚することになる。）

いずれにせよアテナイに近づいた時の船には、アリアドネは乗っていなかった。そればかりか、彼女を失った悲しみのためか、それともミノタウロスを殺してうまく迷宮を脱した喜びで夢中になっていたためか、彼は父王と約束した白い帆をかかげることを忘れていた。パルテノンの丘の上で息子の帰りを待ちわびていたアイギウス王は、船が帰ってきたのを見て目をこらしてみたが、そこには黒い帆しかかかっていなかった。王は絶望のあまり断崖から海に身を躍らして死んだ。それ以後この海は、王の名にちなんでアイギウスの海（エーゲ海）と呼ばれることになったのだという。

父のあとをついでアテナイ王になったテセウスは、その冒険ずきと武勇でいよいよ名をあげる一方で、最も賢明な、また慈悲ぶかい王として、非常な名君だったようだ。彼はみずから王の地位を辞退してアテナイに民主政治をしいたといわれる。こうしてアテナイは、彼の許でいよいよ繁栄して、市民たちは世にもまれな自由と幸福をたのしんだ。

彼の武勲と冒険の物語はいろいろあって、いちいち書いてはいられないほどだ。後に書く「アルゴー船の遠征」にも加わっているし、メレアグロスたちの「カリュドンのいのしし狩り」にも参加したという。アルゴスの七将がテーバイを攻めた有名な戦いでは、七将を助けてテーバイを征服したたし、勇猛な女戦士のアマゾン軍と戦ったり、半人半馬のケンタウロス族と戦ったこともある。こうした戦いや冒険の際にも目だったのは、テセウスの正義を愛する性格と、愛情の深さだ。ヘラクレスが発狂して息子たちを殺した時には、友人たちもすべて彼を見捨てたのに、テセウス一人はこの従兄弟をかばった。自分の運命を呪って、われとわが眼をえぐり出してさすらいの旅に出たオイディプスが、最後の憩いを見つけたのも、彼の許でだった。その話には、後でまたふれるところがあるだろう。

## †ヒッポリタスの悲しい運命

さてテセウスはアマゾン軍と戦った時、その一人を捕虜にしてきて、妻にした。アマゾン軍は復讐のためにアテナイに攻め寄せてきたが、テセウスはその隊長をたおしてみごとに撃退した。アマゾンというのは北方のコーカサスあるいはスキチアのあたりにあると考えられた国で、そこは女ばかりの

国であり、男は生まれても殺されるか不具にされたものだという。そして女たちは、弓をひくじゃまになるというので右の乳房を切り取ってしまい、みんな勇猛な戦士として育てられた。アマゾンというのは〈乳なし〉の意味だという。

このアマゾンの妻から生まれたのがヒッポリタスである。ヒッポリタスは南のトロイゼンで育てられていたが、成長するとすばらしい美青年になり、しかも競技や狩猟におどろくべき腕前を見せた。そこで彼がアテナイに戻ってくると、父王テセウスとの間にはたちまち深い愛と友情が結ばれた。

ところがヒッポリタスは、男嫌いのアマゾンの血をひいていたせいか、すべて安易なふやけた生活をきらい、女などには目もくれなかった。美と愛の女神アフロディテを軽蔑し、純潔の処女神アルテミスだけを崇拝した。そのことがアフロディテの怒りを買って、ここに恐ろしい事態がもちあがることになる。

その頃テセウス王は、あのアリアドネの妹のフェードラを妻にしていた。彼女は美貌で誇り高い女性だった。ところがヒッポリタスは、この美貌の義母がいくらやさしくしてやっても、少しも彼女の愛情に報いない。無視されればされるほど、彼女の愛情は燃えさかって、ついに押えがたい恋になってしまった。義理の息子に対するこの邪悪な恋をさすがに恥じて、彼女は自ら命を断とうとした。

フェードラには一人の年とった乳母があったが、この乳母がそれを見かねて、テセウスの留守に、ヒッポリタスをくどいた。

「お妃はあなたを恋するあまりに死にそうになっていらっしゃいます。彼女を助けると思ってその愛

のこの罪深い邪恋は、彼をぞっとさせずにはいなかった。彼は中庭へとび出していったが、乳母はなおもくどきながら追いかけてくる。ヒッポリタスは叫んだ。

に報いてあげなさいまし。」

　しかし、ヒッポリタスにとってはどんな女の愛情もいとわしいものだった。まして義理の母親のこの罪深い邪恋は、彼をぞっとさせずにはいなかった。彼は中庭へとび出していったが、乳母はなおもくどきながら追いかけてくる。ヒッポリタスは叫んだ。

「悪魔め、お前はおれに父上を裏切らせようというのか。その言葉をきいただけで、おれはもう汚された気がする。おお女よ、きさまたちはすべて卑劣な悪党だ！　おれは父上のいられる時でなくては、もはや決してこの館には足をふみ入れまい。」

　ヒッポリタスは気がつかなかったが、中庭にはフェードラが坐っていた。彼女は息子のこの言葉をきくと、顔色をかえた。そしてすがりつく乳母をおしのけると、

「わたしは自分の手で事件の片をつけます。」

といって、自分の部屋にはいって戸をとざした。心配した侍女たちが、しばらくして行ってみると妃は、夫にあてた一通の遺書を手にもはや自殺していた。

　女たちが悲嘆しているところへ、テセウスが帰ってきた。彼は最愛の妻が自ら命を断ったときいて、おどろいて遺書をひらいて読んだが、それを読み終るとなお顔を蒼白にして叫んだ。

「息子のヒッポリタスが、わしの妻を暴力をもって犯したというのだ。おお、ポセイドンよ、わしの呪いを聞いて、あいつを罰してくれ。」

　そこへヒッポリタスが駆けつけて、ゼウスに誓って自分に罪のないことを主張したが、父は聞かな

かった。

「彼女は死をもって真実を語ったのだ。出てうせろ！　お前はこの国から追放じゃ。」

ヒッポリタスは悄然として王宮を出ていった。彼が海岸づたいに馬車を走らせていったとき、突然海中からすさまじい怪物が躍り出た。馬はおどろいて棒立ちになり、喪心して背にまたがっていたヒッポリタスは、たちまち振り落されて瀕死の重傷を負った。

一方、テセウス王の許には、アルテミス女神があらわれて、ことの真実を告げた。そこへ瀕死の息子がかつぎこまれてきた。

ヒッポリタスは息たえだえに叫んだ。

「アルテミスよ、わたしはいま死んで行きますが、わたしに罪はなかったのですよ。それからお父さん、こうなったのもあなたの罪ではありません。だからわたしは、あなたをうらみはしません。」

テセウスは絶望の中に、

「ああ、お前の代りにわしが死んで行けるものなら！」

と呻くようにいって、息子のもはや冷たくなったからだを、いつまでも抱きしめるのだった。

こんなふうで、テセウスの晩年はひどく不幸なものだったようだ。最後にはアテナイからも追放されて、友のリコメデス王をたよったが、ここでついに殺されたという。

しかしアテナイ市は、まもなく彼の遺骸を迎え取って壮麗な神殿をたて、彼を市の守り神として讃えた。この神殿は、一生を通じて正義を愛し、弱き者の守護者であったテセウスを祭った社（やしろ）にふさわ

しく、長く奴隷やあらゆる貧しい者、虐げられた者にとっての聖所となった。

## †ディダラスとイカルスの話

さて、テセウスがミノタウロスを殺して迷宮をのがれ出たことを知ると、ミノス王は怒って、これはきっとディダラス（ダイダロス）の援助を受けたにちがいないと考えた。彼の入れ知恵がなくては、たとえミノタウロスを殺したところで、この迷宮から出られるはずはなかったからだ。

そこでミノス王は、ディダラスとその子イカルスを、迷宮にとじこめた。このラビリントスは自分でそれを作った名工ディダラスにも、あの糸玉のようなものがなくては、とうてい出てくることができぬほど錯綜した迷路にみちていたと見える。出入口はただひとつであり、三方はけわしい断崖をもって海に臨んでいたらしい。

しかし、名工ディダラスは、さすがに途方にくれはしなかった。陸も海も遮断されていたが、空があいていた。彼は息子のイカルスとはかつて、ひそかに二対のつばさを作りあげた。これを鳥の羽のように腕にはりつけて、空をとんで島を脱出しようというのであった。

ついにつばさができ上った。名工の苦心の作だけに、さすがにすばらしいできで、それをにかわで左右の腕にはりつけると、本物のつばさと変りはなかった。こっそりと試験をしてみたが、結果も上乗であった。親子は喜びいさんで、いよいよ高く飛んで島を脱出することにしたが、その前にディダラスは息子に注意した。

「あまり高く飛ぶと、太陽の熱にやかれてにかわがとけるぞ。そしたらつばさが落ちて、おれたちは海に落ちて死ななくてはならない。くれぐれも気をつけるんだよ。」

しかし、昔も今も、父親のいましめは、とかく若い者には無視されるものだ。まして青々と美しい海の上を、高く高く飛んでゆく喜びは、若いイカルスを夢中にさせずにおかなかった。なにしろ人類が何千年となく抱いてきた夢が、いま実現されたわけだった。彼は高く高く、雲の上まで、太陽の方まで昇っていった。

「おーい、そんなに高く昇っては危険だぞ。もっと低くとぶんだ、もっと低く――。」

父親は叫んだが、空高く飛ぶ喜びに酔いしれている息子の耳には、とどかなかった。とたんに太陽の熱でイカルスのつばさをくっつけていたにかわがとけたから、たまらない。あっと思うまにつばさははなれ、イカルスはまっしぐらに天から落ちて、海中ふかく没し去った。

悲嘆したディダラスは息子の落ちたあたりの海上をひとめぐりふためぐりしてみたが、息子をのみこんだ海はふたたびひっそりと口をとじて、青々と静まりかえっているばかり。ディダラスは涙をのんでその場を後にするしかなかった。彼の腕ももはや疲れきっていた。いつまでも息子の屍を捜して、ぐずついているわけにはいかなかった。

どうやら彼はシシリイ島までたどりつくことができた。鋸やろくろの発明者といわれ、ミノス王のためには世にも名高い迷宮をつくった名工ディダラスの名前はあまねく世に聞えていたから、島の王コカロスは、彼を手あつく迎えて保護した。

しかしミノス王は、彼が島を逃れたと知っていよいよ激怒し、地のはてまでも捜して彼を捕えようとした。そのために王は、一つのうまいたくらみを考えだした。——彼はすばらしく見事に巻いた一つの巻貝を持ってきて、この貝の一端から他端へうまく糸を通す者があったら、莫大な褒美をやろうといって、使者を出してその旨をすべての国々に知らしたのである。というのは、こんな貝に糸を通せる者はディダラスのほかにあるはずがないから、もしそれができた者があったなら、必ずそこにはあの名工がいるにちがいないと考えたわけだ。

はたしてこの使者がめぐりめぐってシシリイ島に来たとき、王の相談をうけたディダラスは、みごとに巻貝に糸を通してみせた。彼は貝の先端に小さな穴をあけ、脚に糸をしばりつけた一匹のアリをその中におしこんだ。アリはぐるぐる巻貝の渦巻きを回って、みごとにもう一方の穴から出てきた。

こうしてシシリイ王は莫大な褒美を手に入れることになったが、まもなくミノス王からディダラスを引き渡すように命じられて驚愕した。当時クレタ島のミノス大王の勢威は並びなかったので、その命令にそむくわけにはいかなかった。しかしディダラスの才知にほれこんでいたコカロス王は、ついに卑劣な手だてを用いた。彼はディダラスを引き渡す約束をして、ミノス王を自分の王宮に招いて歓待した上で、その人浴中に自分の娘たちに殺させた（あるいは煮湯をあびせかけて殺した）のであった。

ディダラスが最後にどうなったかは知られていない。ディダラスとは〈巧みな工人〉というほどの意味である。

# ギリシャ第一の英雄ヘラクレス

## †生い立ち

ペルセウスの子のエレクトリオン王には、アルクメネーというひとりの娘があった。エレクトリオンは娘を甥のアンフィトリオンにやる約束をしていたが、息子たちが家畜を盗みにきた強盗団と戦って殺されると、王はアンフィトリオンにいった——家畜をとりもどして王子たちの仇をうってくれなければ、娘とは結婚させないと。

アンフィトリオンは大金をだして、盗まれた牛を買い戻しはじめた。エレクトリオンはそれを知ると、腹をたてて叫んだ。

「ぬすまれた家畜をとり戻すのに金をはらうやつがあるか、ばかもの！　お前はなんというまぬけだ！」

頭からこう罵られて、アンフィトリオンもおこり、家畜を追ってきた棒を力いっぱい投げすてた。ところが、それが運わるく一頭の牛の角にあたってはね返ったひょうしに、エレクトリオン王にぶつかって王は死んでしまった。そのために、アンフィトリオンはアルゴスをおいだされて、テーバイに

逃げた。

「あなたがわたしの父を殺したのは、あなたの罪ではありませんから、わたしはやっぱりあなたと結婚します。でも、あなたはまず、わたしの兄弟を殺した泥棒どもを罰してくださらなくてはいけません。」

こうアルクメネーはいって、アンフィトリオンのあとについてテーバイにいった。

二人がテーバイにきたとき、この町には困ったことが起きていた。狼のようなすさまじい狐があらわれて、子供をさらっていくのだが、足が早くてだれにもつかまえられなかったのだ。

アンフィトリオンは女神アルテミスの助けで、この狐を退治した。テーバイのクレオン王はひどく喜び、その援助をうけてアンフィトリオンは泥棒団をうちにでかけた。

アルクメネーは、アンフィトリオンが帰ってきたら結婚するつもりで、テーバイで待っていた。ところがアンフィトリオンのるすの間に、ゼウスがアルクメネーをみつけた。アルクメネーは美の女神アフロディテにも似たすばらしい美人で、しかもすぐれた賢い女だった。ゼウスはすっかりアルクメネーが気にいって、彼女に近づく方法を考えめぐらした。

そのころアンフィトリオンは、もう泥棒団をうち滅ぼしてテーバイに帰りかけていた。そこでゼウスはいそいでオリンポスの山をおりると、アンフィトリオンの姿に身をかえてテーバイにきた。アルクメネーはにせもののアンフィトリオンとは知らずに喜んで彼をむかえ、さっそくその晩、結婚式があげられた。

その夜は、この世が始まっていらいの長い夜だった。というのは、ゼウスの命令でヘリオスが太陽の馬車をいつまでもださず、またヘルメスがセレーネに月の船をゆっくり進ませるように頼んだからだ。眠りの神もゼウスを助けて人々にたのしい夢を送ったので、だれひとりこの夜が三夜ぶんの長さをもっていることに、気がつかなかった。そのためアンフィトリオンは、テーバイのすぐそばまできていたのに、その夜がばら色にあけてくるまで、テーバイに帰ることができなかったのである。

アルクメネーは朝になって本物のアンフィトリオンが帰ってきたのにおどろき、自分がゼウスにだまされたことを知った。しかも、この一夜で彼女は身ごもっていたのだ。

やがて、アルクメネーがゼウスの子供ヘラクレスを生む時がちかづくと、うれしくてたまらぬゼウスはオリンポスの王座にすわって神々とネクタルをのみながら、思わずこんなことを呟いた。

「今日、ペルセウスの子孫にひとりの子供が生まれるが、この子はやがてアルゴスの民の主人になるだろうよ。」

嫉みぶかい妻のヘラがこれをきいて、口をはさんだ。「アルゴスはわたしが守っている国です。あなたの思いどおりにはさせませんよ。」

彼女はすぐに地上におりていって、魔法の力でヘラクレスが生まれるのを一日のばし、かわりにゼウスのべつの子エウリステウスを早く生まれさせて、この子の運命とヘラクレスの運命とをすりかえてしまったのだった。そのために後にエウリステウスがアルゴスの王となり、ヘラクレスはその奴隷ということになる。

さて、女神ヘラの魔法で一日おくれて生まれたヘラクレスは、すばらしい力と勇気があった。双子として一緒に生まれたアンフィトリオンの子のイピクレスの方は弱虫だったが、こちらは生まれてから何カ月もたたないうちに、もう英雄らしいところをみせてきた。

夏のある夜、アルクメネーはヘラクレスとイピクレスにお湯をつかわせ、乳をやったあと、青銅の盾をゆりかごにして寝かしておいた。

ところが真夜中のころ、ヘラクレスを殺してしまうためにヘラのよこした二匹の大蛇が、シューシュー毒気をはきながら、青光をはなって忍びよってきた。

蛇が子供たちのところへ近づいたとき、オリンポスにいたゼウスは見かねて赤ん坊の目をさまさせた。イピクレスは蛇が大きな口をあけて近づいてくると、こわがって泣き叫んで床にころげだした。ところがヘラクレスの方は盾の上に坐ってにこにこしながら、両手で一匹ずつの蛇の首をつかんでしめつけた。蛇はあばれてヘラクレスにまきついたが、ヘラクレスはすこしも恐れず、ぎゅうぎゅうしめつけて殺してしまった。

イピクレスの泣声をきいてアルクメネーが駆けつけ、つづいてアンフィトリオンが剣をつかんで駆けつけた時には、もうヘラクレスは両手に一匹ずつ死んだ蛇をつかんで、キャッキャッと喜びながらふりまわしていた。イピクレスの方はおそろしさに声も出なくなって、目を大きくひらいたまま床の上にころがっているのに。

朝になるとアルクメネーは、どうもヘラクレスにはふしぎな点があると思い、テーバイ第一の賢者

といわれた巫女のティレシアスのところへいって、蛇の事件を話した。すると、年とった巫女はおごそかに答えた。

「ペルセウスの孫娘よ、よろこびなさい。あなたの息子はギリシャ第一の勇士になる運命にあるのです。息子さんは怪物どもを退治して、末ながく詩や物語でたたえられるでしょう。そりゃいろいろと苦労もし、神々の女王ヘラの憎しみもうけます。じつはその蛇をさしむけてよこしたのもあの女神なのです。それでも最後には、神々を助けて息子さんは、永遠にオリンポスにすわるのです。いってきますが、プロメテウスが予言したゼウスと人間の女との間に生まれる英雄というのは、あなたのその息子さんなのですよ。」

このことがあってから、ヘラクレスはいよいよ元気に成長した。彼は歌や竪琴や読み書きなどのわざをまなんだ。父親のアンフィトリオンは、戦車を走らせるわざ、槍や刀のつかいかた、相撲や拳闘なども教えた。やがて、まだ少年なのに、ヘラクレスにかなう者はいなくなった。

ヘラクレスが神の子であることは、ひとめ見ただけでわかった。ほかのどんな人間よりも背が高く、肩はばはひろく堂々としていて、目の輝きは火をふくようだったからだ。

しかし、彼は気性のあらい少年だった。ある日、竪琴の師匠のリヌスが、ヘラクレスが竪琴のひきかたをまちがえたと、怒って打った。すると少年は手にしていた竪琴で打ち返したが、その打ちかたがあまり強かったのでリヌスは死んでしまった。

父親のアンフィトリオン王は、二度とこんな不幸がおこらぬように、ヘラクレスをテーバイから遠

ざけて、キタイロンの山で家畜の番をさせた。彼はさびしい山で家畜の番をしながら成人して、いよいよ力とわざをきたえた。

## †キタイロンのライオン狩り

ある日、ヘラクレスが、山腹で家畜の番をしていると、ふたりの美しい乙女が近づいてきた。ひとりは粗末な白い着物をきたおとなしい娘だったが、もうひとりははでな服をきて、宝石をいくつもつけ、顔には化粧もしていた。

はでな服をきた女は元気よく近づいてくると、友だちの先をこしてヘラクレスにいった。「ヘラクレスさん、あなたはもう自分でどういう生活をおくるか、それをきめる年頃になったのです。さあ、わたしをお友だちにしなさいな。そうしたらわたし、きっとあなたをいちばんたやすい、そして楽しい道に案内してあげます。いろいろ楽しい思いをして、苦労や難儀はしないですみます。あなたは他人のことなど少しも考えないで、一生自分の楽しみだけ追っていけばいいのです。」

「あなたの名まえをきかしてくださいませんか。」と、ヘラクレスがきくと、娘はやさしい声でいった。

「わたしを愛してくれる人たちは、わたしのことを〈幸福〉とよびます。わたしをすかない人たちは、べつの名まえでよびますけれど。」

その間に、もうひとりの娘が近づいてきていった。「ヘラクレスさま、わたしもひとつの道をあな

たにすすめます。あなたはメドゥサを退治したペルセウスの子孫ですもの、りっぱな仕事をして後の世まで名をのこすべきです。でも、りっぱな仕事は努力と労苦なしではしとげられませんよ。あなたは人々のためにに役だつことを考えて、あなたの力とわざとを正しく用いなければいけません。わたしの友だちのいうことをきいてはだめよ。あの人は〈悪〉とか〈おろか〉とかよばれる人です。努力と労苦なしでは、ほんとうの喜びも幸福もありませんよ。」

するとさっきの娘が、せきこんでいった。「この人のいうことをきいてはだめ。その人は〈徳〉とよばれているけれどさ。幸福に行きつくには、わたしの道のほうがずっとらくで、近いのです。あの人の道はつらくて長くて、しかも幸福に行きつけるかどうか、それがあやしいのよ。」

しかし、〈徳〉はしずかにいった。「ではヘラクレスさん、わたしたち二人のどちらに従うか、おきめなさいな。あの人の道はたいらでやさしくて、みんなが求めるのだけれど、つまらない喜びしかあたえません。わたしの道は苦しくてつらいけれど、ゼウスがあなたにのぞんでいるのは、きっとわたしの道ですわ。」

ヘラクレスは叫んだ。「ぼくはあなたの道をえらびます！　どんなに苦しいことがあろうと、ぼくはもう途中で引き返しはしないぞ！」

「よくおえらびになりました。では手はじめに、あちらをごらんなさい。」

いわれてヘラクレスが谷間のむこうを見ると、一頭の大きなライオンが山を走りおりて、ヘラクレスの牛たちに近づいてくるではないか。牛たちは四方八方に逃げまどっている。

「おのれ！」と叫んで、ヘラクレスは谷をかけおりていった。
しかし、ヘラクレスが牛たちのところへついた時には、もうライオンはすがたを消して、やられた一頭の牝牛がたおれているだけだった。
「よし、あいつをたおすかおれが死ぬかだ！」
こう叫んでヘラクレスは、ふたりの娘のほうをふり返ってみた。しかし娘たちはもう影も形も見えなかった。
ヘラクレスは弟のイピクレスに家畜の番をたのんで、牝牛をたおしたライオンを捜しにでかけた。ライオンはなかなかみつからなかったが、キタイロンの山の中を一日一晩さまよったあと、五十人の美しい娘をもっているテステオス王の住む谷間に出た。ヘラクレスはその王宮で五十人の美しい姫たちと一日一日楽しくおくり、とうとう五十日をすごしてしまった。
それでもついに彼は、ライオンの住む洞穴をつきとめると、オリーブの木でつくったふとい棍棒を握りしめて、その穴にはいっていった。
ライオンは物すごいうなり声をあげておどりかかってきた。ヘラクレスは相手の姿がよく見えるように、穴の入口まで退いてくると、そこに立ちふさがって、ライオンがとびかかってきた時、いきなり棍棒で頭をなぐりつけた。ヘラクレスのおそろしい力に、さすがの巨獣も思わずよろめいた。そこをもう一度なぐりつけると、ライオンはどさりとたおれて死んでしまった。ヘラクレスはその皮をはいでよくなめして、自分の着物がわりにした。それを肩から腰にかけてまきつけて、頭はかぶとのか

わりにした。彼はいつでもこの服装で歩きまわった。ギリシャの壺や花瓶にも、いつでもこの姿で描かれている。

ヘラクレスは身じたくができると、テーバイに向って旅だった。そのころテーバイは、エリギヌスという王に攻められて敗れ、武器はすべて没収され、王にはたくさんの貢物をしていた。ちょうど途中で、ヘラクレスはその貢物をとりにきたエリギヌス王の使者たちに出あったので、彼は使者たちをののしって追い返した。

エリギヌス王はそれをきくと、テーバイに軍隊をさしむけてヘラクレスを引き渡すことを要求した。

テーバイの王クレオンは、その命令に屈服しようとしたが、ヘラクレスは若者を集めてアテナの神殿にささげてあった武器をとらせて、エリギヌス王の軍隊を追いはらった。エリギヌス王は大軍をひきいてふたたび攻めてきたが、ヘラクレスはこれをもうち破って王をたおし、さらに進軍して敵の都も占領してしまった。

クレオン王は大喜びで、ヘラクレスと自分の娘のメガラを結婚させて盛大な祝宴をひらいた。ヘラクレスは新しくむかえた妻と、テーバイで幸福にくらした。やがて子供も三人生まれた。こうしてヘラクレスは平和にくらしていたが、これは彼に偉大な事業をさせたいと願っていたゼウスにとっては、物足りないことだったばかりか、女神のヘラにとっても気にいらなかった。というのは、ヘラは夫のゼウスとは反対に、ヘラクレスを自分の保護しているアルゴスのエウリステウス王の家来に

したいと願っていたから。

こうしたゼウスとヘラとの争いから、ヘラクレスは苦しい運命を背おい、ふたたびテーバイを去ってさすらいの旅に出ることになる。

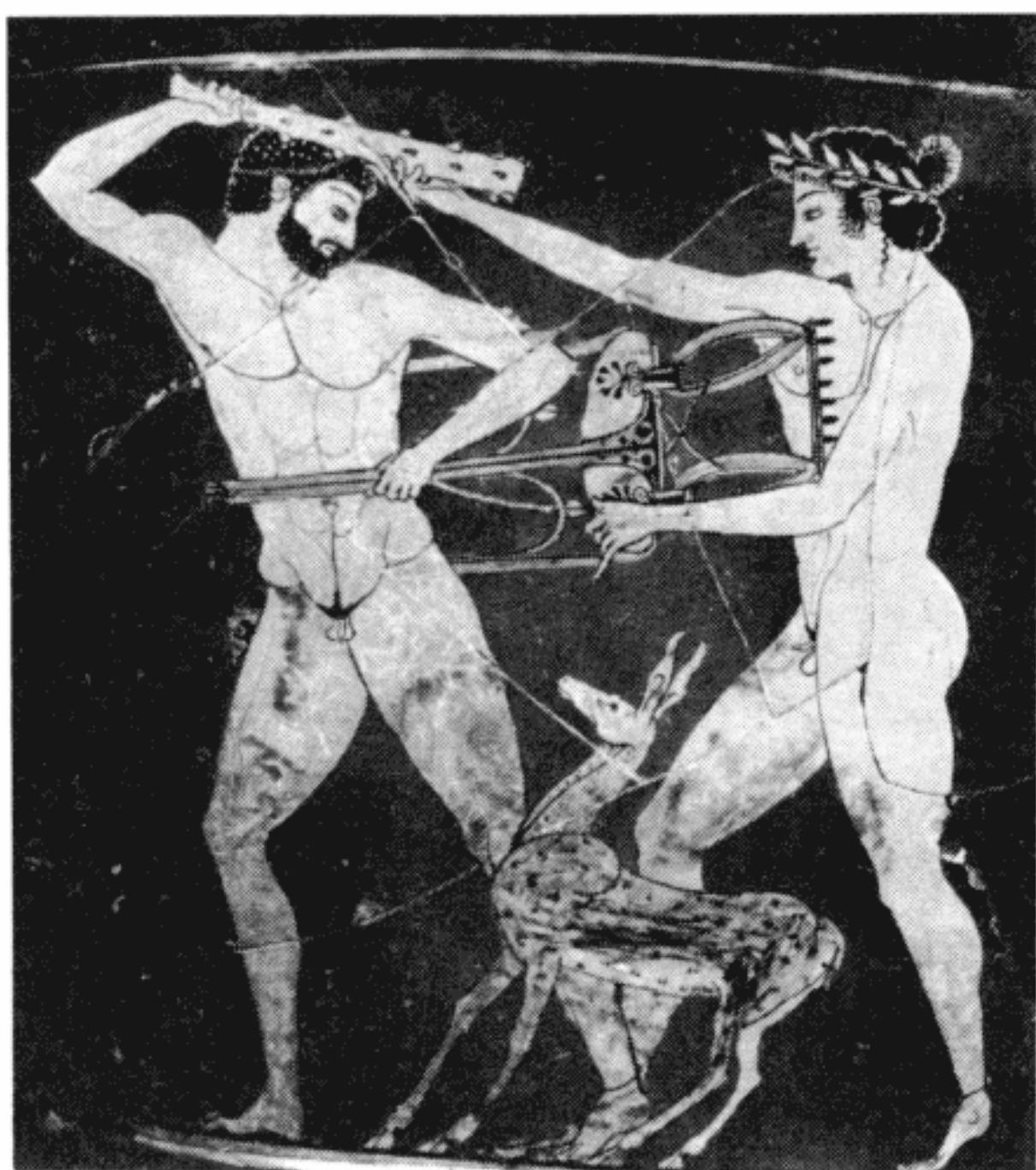
ある日のこと、テーバイの町の近くの野原で、ヘラクレスとイピクレスの子供たちは、ほかの子供と一緒に戦争ごっこをして遊んでいた。ヘラクレスは丘の上にすわってそれを眺めていた。

急にくらい影が太陽をかすめたかと思うと、遠くからぶきみなうなり声が近づいてきて、ヘラクレスの頭の上でとまった。とたんにヘラクレスはふらふらとよろめいて、口から泡をふき、目をぼんやり見ひらいて叫んだ。

「敵が攻めよせてきたぞ！　アルゴスのエウリステウスがやってきて、われわれをつかまえて奴隷にしようというのだ。断じてそんなことをさせるものか！　おれはひとりでもテーバイを守って、愛する子供たちが奴隷になるのを防ぐぞ！」

ヘラクレスは気がちがってしまったのだ。彼は弓に矢をつがえると、自分の長男をめがけてひょうと射た。矢は長男をつらぬいた。子供たちはおどろいて逃げだしたが、ヘラクレスはつぎつぎに矢をはなって、自分の三人の息子とイピクレスのふたりの息子を、ぜんぶ射殺してしまった。

このまま放っておいたら、どんなことになったかしれない。しかし、女神アテナが急いでやってきて、ヘラクレスの頭に大きな石をなげつけたので、ヘラクレスは気を失って地にたおれた。

やがて正気をとりもどすと、ヘラクレスは自分が何をしたかを知った。絶望と悲しみにしずんで、

デルフォイの聖鼎をとりあうヘラクレスとアポロン

彼は暗い一室にとじこもったきり、物もいわず、だれにも会おうとしなかった。とうとうある人のすすめで、彼はデルフォイの神殿へいって罪滅ぼしをするにはどうしたらよいか、アポロンの神にうかがいをたてることになった。こうしてヘラクレスは、あのライオンの皮を身にまとい、棍棒をもって、テーバイをたち去った。三人の息子を失った上に、妻メガラも悲しみで胸がはりさけて死んでしまったので、ヘラクレスはもはやテーバイにはもどらない決心だった。

デルフォイの神殿の下の真暗い岩の裂けめから、アポロンの声がきこえた。

「ヘラクレスよ、お前の名を永遠につたえる仕事にかかる時がきたのだ。さあ、アルゴスをおさめているエウリステウスのところへいって、王がお前にいいつける十二の難題をおとなしくはたすのだ。そうすれば、最後にはゼウスがお前をオリンポスにひきあげて、神々の仲間にいれてくださるぞ。」

アポロンのおつげをきいたヘラクレスは、さっそくアルゴスにむかった。アルゴスの王エウリステ

ウスは臆病者だったが、キクロペたちのたてたティリンスのすばらしい城に住んで、いばりくさっていた。

ヘラクレスがやってきて、アポロンのおつげのことを話すと、エウリステウスはヘラクレスを奴隷にして次から次へとむずかしい課題をだして、彼にやらせた。こうして彼のなしとげたのが、世にも名高いヘラクレスの十二の難題である。

## †ヘスペリデスの黄金のりんご――ヘラクレスの十二の難題――

それをひとつひとつ書いていると、とても長くなるから、ここでは名前をあげるだけにして最後の二つだけを書くことにしよう。その難題というのは、つぎの十二の仕事だった。

一、ネメアのライオン退治。
二、レルネのヒドラ（頭が九つある――または百ともいう水蛇）退治。
三、ケリュネイアの魔の鹿狩り。
四、エリュマントス山のいのししをいけどりにしたこと。
五、アウゲイアス王の厄介な牛小屋のそうじ。
六、スチュンパリデスの森の鳥を退治したこと。
七、クレタ島の牡牛をとらえる。
八、ディオメデスの人食い馬を退治する。

九、アマゾンの女王ヒッポリテスを殺し、その力帯をうばった。
十、エリュティアに住むゲリュオンという怪物を殺し、その牛をとってきたこと。
十一、ヘスペリデスの園の金のりんごをとってきたこと。
十二、死者の国の番犬ケルベロスをつかまえてきたこと。
みんなとんでもない難題だった。
ヘラクレスは八年あまりかかって十の難題をやりとげたが、まだふたつ残っていた。十一番めにエウリステウス王から命じられたのは、ヘスペリデスの園からの金のりんごを三つとってくることだった。
ヘラクレスは疲れきっていたが、元気をふるい起してこの十一番めの仕事にかかった。ところがさて、いったいヘスペリデスの園がどこにあるのか、それさえわからない。そこでヘラクレスは、まずイリュリアにいって、そこのニンフにたずねてみた。するとニンフたちは、ゼウスの命令にそむいてコーカサスの山につながれているプロメテウスのところへいったら、きっと教えてくれるだろうということ。
コーカサスへいく道は長く、しかもひどく苦しいものだった。しかし、ヘラクレスはついに世界の東のはずれにあるその山までたどりついて、けわしい岩や氷河をこえ、青銅のくさりでしばられている巨人プロメテウスのそばに近づいた。
「おまえはだれだ?」と、プロメテウスはゆっくりときいた。長いあいだ、ゼウスの大鷲に肝臓をつ

つかれて苦しみにのたうってきたため、さすがの巨人プロメテウスもすっかり弱っていた。
ヘラクレスは心から同情してプロメテウスのくさりをといてやって自分の名を名のった。
プロメテウスはにっこりとうなずいていった。
「わしの予言した英雄というのは、君のことだったのだな。君はきっとオリンポスに攻めよせる巨人どもをたおして神々を救うことになるだろう。しかし、君がわしを自由にしてくれにやってくるとは思わなかったよ。予言者でも自分の運命を知ることはできんのだな。」

ヘラクレスとアンタイオス

ヘラクレスは自分がやらなければならない仕事のことを話して、ヘスペリデスの金のりんごのありかをたずねた。
「あれはゼウスがヘラと結婚したときに、ガイアがお祝いにヘラにやった木なんだ。その木は世界の西のはずれのわしの兄弟のアトラスが肩で天をささえている山のむこうの魔法の園にある。その園は高い壁でと

りまかれていて、アトラスの娘のヘスペリデスたちが住んでいる。とても人間にはいけるところじゃない。おまけにその木は、龍のラドンが守っているのだ。」

しかしプロメテウスは、その金のりんごを手に入れる方法もくわしく教えてくれた。

ヘラクレスはいさんで出発したが、途中でまた幾度もあぶない目にあわなくてはならなかった。ここでは、その一つだけを話しておこう。

彼は西へ西へと進んで、リビアの砂漠にやってきた。そこには、海神ポセイドンとガイアの子のアンタイオスという巨人が住んでいて、通る者に片っぱしから相撲を申しこみ、相手をなげ殺しては、その頭をポセイドンの神殿にささげていた。彼は大きな洞穴に住んで、大地の上にころがって眠り、ライオンの子をつかまえては生のまま食うという怪物だった。

ヘラクレスが砂漠を通りかかると、さっそくアンタイオスがおどり出てきて相撲を申しこんだ。ヘラクレスは承知すると、身につけていたライオンの皮をぬぎすてて、全身に油をぬりこんだ。ガイアの子アンタイオスの方は、油ではなくて、頭から足の先まで土をぬった。

こうして二人は組みあってはげしくもみあった。戦いは長くつづいたが、やはり神の子ヘラクレスの力がまさっていた。彼は、へとへとになったアンタイオスを地にたたきつけた。

ところが、大地にふれたとたん、ガイアの息子のアンタイオスはたちまち元気をとりもどし、最初とかわらない力でふたたびヘラクレスにとびかかってくる。これにはヘラクレスもおどろいたが、もう一度相手をなげとばした。しかし、やっぱりアンタイオスは、以前にかわらぬ元気ではねおきてく

る。

ヘラクレスはあきれていたが、そのうちはっと気がついた。――そうだ、こいつはガイアの息子なんだ。大地にふれるたびに力をとり戻すわけが、これでわかったぞ。さあ、こい！　こんどこそやっつけてやる！

ふたりはまた取り組んだが、やがてヘラクレスは全身の力をふりしぼって相手を自分の頭の上にのせると、いくらあばれても地におろしてやろうとしなかった。

アンタイオスはみるみる弱ってきた。ヘラクレスは、相手の足が地にふれないように気をつけながら、ぐいぐい両手で首をしめつけてついに殺してしまった。

それからまた旅をつづけて、とうとうプロメテウスが教えてくれた大きな山の下についた。山の頂上には巨人のアトラスが、ゼウスの命令で、落ちてこないようにと天をさしあげていた。

ヘラクレスがアトラスのところへ行ってプロメテウスに教わってここへきたことを話し、ぼくはヘラクレスというもので、ティリンスのエウリステウスに命じられて金のりんごをとりにきたのだというと、アトラスはいった。

「お前が名高い勇士ヘラクレスか。わしはおばのテミスからお前がくることをとっくにきいて知っていた。しかし、人間のお前にはとてもヘスペリデスの園にはいることはできまい。だが、わしを助けてふたつのことをやってくれるなら、わしが代りにとってきてやろう。そのふたつというのはわしがりんごをとりにいっている間、わしの代りに天をささえていることと、その前に龍のラドンを殺して

くれることだ。あいつが生きてる間は、わしだってあのりんごに手はだせんからな。」

ヘラクレスが山の向うをのぞいてみると、ずっと下の海の近くに天国のように美しいヘスペリデスの園が見えた。涼しげに木がしげって銀色の葉を光らせている。その真中に金のりんごが鈴なりになった一本の大木が立っていて、そのまわりを三人の美しいニンフが、歌をうたいながら踊りまわっている。ところがその木の幹には、ヘラクレスもまだ見たこともない巨大な龍のラドンが、金と青に鱗を光らせてまきついていた。

ヘラクレスは弓に矢をつがえると、ねらいをさだめて切ってはなした。矢はみごとにラドンの喉をつらぬいた。ラドンはずるずると木の幹をすべり落ちて、息たえだえに近くの草むらにもぐりこんだ。――といっても、のちにアルゴー船の仲間がこの園を訪れた時にも、まだ尻尾だけはぴくぴくと動いていたという。

ラドンがいなくなったのを見ると、アトラスは重たい天をヘラクレスの肩にうつして、ほっと息をつき、それからヘスペリデスの園へ下りていった。

両肩に天をささえて待っている時間の長さといったらなかった。さすがのヘラクレスも、幾度も大きな吐息をついた。まもなく日がくれてしまったが、それでもアトラスは帰ってこない。ヘラクレスはとうとう一晩じゅう山の上に立って天をささえていたので、すっかりへたばってしまった。だから、朝になって三つの金のりんごを手にして山を登ってくるアトラスの姿を見たときは、思わずよろこびの叫びをあげて天を彼にもどそうとした。

ところがアトラスは、すこし離れたところで立ちどまっていうのだった。

「りんごはこのとおりとってきた。だが、こいつは自分でエウリステウス王のところへ持っていくつもりだよ。なにしろ、これをとるには大変な危険をおかしたのだから、すこし楽しい思いをしなくちゃね。その重い荷物を肩からおろして自由に大地の上を歩けるのは、まったくうれしいことだよ。」

ヘラクレスは困ってしまったが、知恵をしぼっていった。

「あなたがひと休みしたいというのは、もっともです。こいつはまったく重たい荷物ですからねえ。でも、あなたが帰ってくるまでは、ぼくはこうやって待っていますから、思うぞんぶん楽しんでいらっしゃい。――ところで、昨日あなたがこれをぼくの肩にのせてくれた時は、ほんのちょっとの間と思って、よく気をつけませんでした。でも、今度はしばらくかついでいなくてはならないのだから、どうやったら一番らくにかつげるか教えていただきたいのです。なにしろあなたは、すばらしいかつぎ手ですからね。」

「それもそうだな。じゃあ教えてやろう。こいつはこういうふうにかつぐのさ。」

少しおめでたいアトラスは金のりんごをわきにおいてヘラクレスから天をうけとると、かつぎかたの説明をはじめた。

ヘラクレスは注意ぶかくそれを見ていたが、

「まったくあなたは上手なものだ。うん、やっぱり天はあなたにまかして、金のりんごは、ぼくがエウリステウスのところへ持っていきましょう。めいめい自分にふさわしい仕事をするのが一番ですか

らね。」というなり、さっさと山をおりていった。
アトラスは自由になれる唯一の機会を、こうして失ってしまったのである。
ヘラクレスは海辺に出ると、船にのってギリシャに向った。途中にもさまざまの困難があったがぶじティリンスに帰りついて、金のりんごをエウリステウス王にさしだすことができた。こうして十一番めの難題もりっぱにはたしたのだった。

## †ヘラクレスの地獄訪問

臆病者のエウリステウス王は、金のりんごを手にいれるとかえって怖くなってきた。ゼウスの妻のヘラが大切にしているりんごをとってきたので、女神から仕返しを受けはしないかと恐れたのだ。
そこで王は、りんごをヘラクレスに返すと今度こそ彼をないものにしてしまおうと考え、
「さあ、それではもう一つだけ、最後の仕事をしてもらわなくちゃならん。」といって、いじわるく笑った。その最後の仕事というのは、地下のハデスへいって、頭が三つある地獄の犬ケルベロスをつれてくることだった。
さすがの勇士ヘラクレスも、これをきくと顔色をかえた。死の国へいってケルベロスをつれてくるなんてことが、人間にできるだろうか？
ヘラクレスはうなだれて、金のりんごを手に持ったまま、しおしおとティリンスをあとにした。しかしゼウスは、ヘラクレスの疲れきった姿を見て、アテナ女神とヘルメスに、ヘラクレスを助けるよ

うにいいつけたのであった。ヘラクレスはアテナ女神にりんごを渡すと（女神は後にそれをヘスペリデスに返した）二人の神につれられて、スパルタの近くのタエナロンの洞穴にいった。ここが地下の国へ通じる穴とされていたのである。

その真暗な穴をどんどん下っていくと、とうとう地下の国をかこむ黒いスティクスの川の岸にでた。アテナはこの川岸で待っていることになり、ヘラクレスは死者の魂をハデスのもとへ案内するヘルメスにつれられていった。

川岸には渡し守カロンが、舟にのって待っていた。彼は死人の魂だけを舟にのせて対岸にわたすのである。ヘラクレスは生きた人間だったから、爺さんは彼を舟にのせることをことわった。しかし、ヘラクレスに睨みつけられては、爺さんもちぢみあがって承知するしかなかった。向う岸は、ほの暗い死者の国で、亡霊どもがうろつきまわっていた。

ヘラクレスが最初に出あったのは、あのゴルゴンのメドゥサだった。ヘラクレスはそのすさまじい顔を見て、いそいで弓に矢をつがえたが、ヘルメスが笑って注意した。

「あの女はもうペルセウスに殺されたんじゃないか。いまはただの幽霊で、こわくなんかないのだよ。」

ヘラクレスはほかにもいろいろと気味わるい姿に出あったが、やがて炎の川をわたってタルタロスにはいった。ここは神々と争った巨人たちや、悪い人間が罰として投げこまれている地獄なのだ。

ゼウスとの約束をやぶったイクシオン王は炎の車につながれていたし、タンタロスは首まで水につ

かっていながら、喉がかわいて水をのもうとすると、そのたびにすっと水がひいてしまうのであった。シジフォスは泥棒や人殺しをした罪で、山の頂上まで石をころがしあげる役目をいいつかっていたが、やっとのことで頂上まで石をおしあげたと思うと、そのたびに石は山をころがり落ちてしまうのだった。それからまた、夫を殺したダナウス王の娘たちは、底に大穴のあいた桶に水をくまされていた。ヘラクレスはそんな人たちを見てかわいそうに思ったが、どうすることもできなかった。

とうとう彼は、ハデスとペルセフォネが住んでいる御殿の前に出た。彼はふたりの玉座の前にいって自分の仕事のことを話して、どうかあのケルベロスをかしていただきたいと頼んだ。

すると、ハデスはこたえた。「武器をつかわないであいつを負かしたら、つれていってもよい。」

ヘラクレスがスティクスの川岸まで引き返すと、さっそくケルベロスがとびかかってきた。このおそろしい犬は、死の国から死人が逃げださないように、この川岸で番をしているのである。ライオンのたてがみのような毛をふさふさとはやした頭が三つある怪物で、しかもその毛の一本一本は蛇、尾は大きな龍になっている。

ヘラクレスはれいのライオンの皮をまとうと、この怪物におどりかかって、ぎゅうぎゅうしめつけた。ケルベロスは怒ってかみついたが、ライオンの皮がかたくて歯がたたない。しかもヘラクレスはおそろしい力でしめつける。しっぽの龍がやっとヘラクレスに食いついたが、それでもヘラクレスは手をはなさない。とうとうケルベロスも降参してしまった。

それからヘラクレスはヘルメスとアテナに助けられて暗いスティクス川をわたり、ぶじに地上にも

どった。

そしてケルベロスをつれてティリンスの王宮にもどると、エウリステウス王に向って叫んだ。

「さあ、さいごの仕事をしとげましたぞ！　それ、これがケルベロスだ！」

こういってケルベロスを下におくと、犬は三つの口を大きくあけ、一本一本の毛の蛇をシューシューいわせながらエウリステウスにとびかかろうとした。王は悲鳴をあげて青銅のかめの中にかくれた。

ヘラクレスとケルベロス——左端はエウリステウス

こうしてヘラクレスは十二の難題をみごとにはたして奴隷の身から解放されたばかりか、ギリシャ第一の英雄として名をあげたのであった。

その後もいろいろと冒険をして、いよいよ天下に名をとどろかしたが、彼の最後については、この神話の終りの章でふれることにしたい。

# アルゴー船の遠征

## †金羊毛を求めて

イアソンはギリシャのイオルコスという都の王さまの子で、やがて王位をつぐはずの人だった。ところが叔父のペリアスのために、小さいとき山に捨てられてしまった。イアソンの父の国王は年をとっていたので、ペリアスは幼い王子をないものにして王位を奪おうと考えたのだ。

しかし山にすてられたイアソンは、からだが馬で胸から上だけが人間というケンタウロス族のケイロンに拾われて、山の洞穴で大切に育てられ、かしこいケイロンから王子にふさわしい教育をうけて逞しく成長していった。

その間にペリアスは望みどおりイオルコスの王になったが、彼には気がかりなことがひとつあった。というのは、お前は片足だけサンダルをはいた男のために命をおとすだろう、という神のおつげがあったからである。

やがてりっぱな若者となったイアソンは、山をくだってイオルコスへ旅だった。なつかしい父親にあい、また腹ぐろい叔父のペリアスともよく話しあって、なんとか自分の運命をきりひらこうと考え

たのだ。
　こうしてイアソンがアナウロス川の岸までくると、川岸にすわっていたひとりの老婆が、イアソンを見るなりこういって頼んだ。
「あんた、わたしをおぶって川を渡してくれないか？　あんたは若くて丈夫なのに、わたしはこのとおり年よりで、とてもこの川がわたれそうもないからね。」
　心のやさしいイアソンは、さっそく婆さんを肩にのせて川をわたりにかかった。ところが水はふかいし流れは急で、やっと向う岸までたどりつきはしたが、もうへとへとになってサンダルも片方なくしていた。
　ところが、その老婆を地におろしたとき、イアソンはびっくりして思わずそこに膝をついてしまった。目の前に立っているのは、光りかがやく女神だったではないか。
「イアソンよ、おどろくことはない。わたしは天の女王のヘラです。お前がりっぱな人であることが、よくわかりました。さあ、いまのままの気持でぐんぐん進んでいくのです。お前はきっと、ギリシャでも最も名高い英雄のひとりになれます。」
　そういったまま女神は消えてしまった。
　イアソンは勇気百倍してどんどん進んでいき、その日の夕がたイオルコスについた。ペリアスは広間でさかんな宴会をひらいていたが、片足だけサンダルをはいたイアソンの姿を見ると、さっと顔色をかえた。イアソンがぶじに生きて帰ってきたということよりも、あの神のおつげを思いだしたから

である。

でもペリアスはすぐに、にこにこして、さもうれしそうにイアソンを迎えていった。

「イアソン、よく帰ってきた。ちょうどわしは、お前のような相談役が一人ほしいと思っていたところだ。さっそくお前の知恵をためすためにきいてみるが、もしお前が家来のひとりに殺されるという神のおつげをきいたとしたら、お前ならその家来をどうするかな？」

「わたしならば、その男にコルキスの金羊毛をとりにやりますね。」と、イアソンは答えた。

コルキスの金羊毛というのは、黒海の東にあるコルキスの国で、国の宝として大切にしている金色の毛をした羊の皮である。この皮がどうしてそれほど有名な宝になったかを説明していくと、話がこみいっていたずらに長くなる心配があるのでごく簡単に書いておく。

アタマスという王が、二人の子供のある妻を捨ててイーノーという姫を新しく妻に迎えた。イーノーは継子の王子プリクソスとその妹ヘレを邪魔にして、魔法を使って国に飢饉をもたらした上で、王子プリクソスを犠牲にささげなくては飢饉はやまぬという神託があったと王を欺いた。こうして王子が祭壇にみちびかれて、いましも犠牲にささげられようとした時、突然金色の毛をした一頭の羊があらわれ、プリクソスと妹ヘレをさらって空をとんで東へ逃れた。この羊は二人を可哀そうに思ったヘルメスが送ったものだった。ヘレは途中で海峡を越える時、ふとしたはずみで海に落ちて死に、そこでそこはヘレスポント（ヘレの海、いまのダーダネルス海峡）と呼ばれるようになる。プリクソスはコルキスの国につき、アイエーテスの娘と結婚して幸福な生涯を送るが、ゼウスへの感謝を示すため

アルゴー船の乗組員

にその金毛の羊を犠牲にささげた。こうして羊は殺されたが、その毛皮は何かふしぎな魔力でもあったのか大変な宝として世界に鳴りひびいていた。しかし、それは恐ろしく巨大な龍が眠らずに見張りをして守っているので、それを取りに行くなどはみずから死にに行くのと変らぬように思われていたのだ。

王は金羊毛ときいてさも満足げにいった。

「すばらしい意見じゃ！　ところで、じつはお前がその男なのだ。お前はこの難題をはたさねばならぬぞ！」

イアソンはしずかに答えた。「よろしい。そのかわり、帰ってきたら神のおつげの通りにしますぞ。」

「金羊毛を持ってきたら、わしは喜んでお前に王位をゆずるわい。」と、ペリアスはいった。

イアソンはすぐれた船大工のアルゴスの助けをかりて、五十人のりの大船をつくり、船大工の名にちなんで〈アルゴー船〉と名をつけた。アテナ女神はドドナの森の神聖な樫の枝をとって、船の舳（へさき）にさしてくれ

た。この枝には、未来を予言したり、いざという時の知恵をかしてくれる霊力があったといわれる。
つぎにイアソンは、全ギリシャ中の若い王や王子に使いをおくって、一緒に金羊毛をとりにいかないかと誘った。すると、すぐれた勇士が五十人ほどもイオルコスに集まってきた。
第一にやってきたのが、ギリシャ第一の英雄として名だかいヘラクレス、つぎにはアテナイからテセウスが、スパルタからはカストルとポリュデウケスの兄弟が、かけつけてきた。それから北風ボレアスの子のゼーテスとカライスという肩に翼のはえた兄弟とか、竪琴をひくと木や草までがうっとりとききほれたという音楽の名人オルフェウス、トロイ戦争の名高い勇士オディッセウスの父親のラエルテス、アルテミス女神のおともの女猟師アタランタ、ふしぎな生い立ちをもつメレアグロスなど、いずれも音にきこえた勇士ばかりだった。
勇士たちはイオルコスに集まると、盾を船べりにかけ並べていよいよ海にのりだした。かじは船乗りのテピュスがとった。船はレムノス島にたちよって、それから北に転じ、やがてキュジコス王の島について、王から歓迎をうけた。
ところが、ある日また船をだすと、こんどはひどい嵐におそわれて、真暗やみの中にながされて見知らぬ浜辺にふきよせられた。するとそこの住民たちは、海賊船がきたものとかんちがいして攻撃してきた。はげしい戦いがおこり、イアソンたちはやっとのことで勝利をおさめたが、夜があけてみると、そこは一行をあんなに歓迎してくれたキュジコス王の島で、しかもイアソンは戦いの間に王を打ち殺してしまったことがわかった。船は嵐にふき流されて、気がつかぬうちにまた島におし戻されて

いたのだ。
　こんなふうで、この航海の間には、いろいろとふしぎな事件が起る。一行が王の不幸な死を悲しみながらさらに船を進めてトロイの近くのミュシアというところまでくると、ヘラクレスのお伴をしてきたヒュラスという美少年が、そこの泉に水をのみにいって泉のニンフに水の中へひっぱりこまれてしまった。
　ヘラクレスが少年のゆくえを捜して、夜じゅう森の中をさまよっているあいだに、大風にあおられて船が港を出てしまったため、彼はアルゴー船の仲間とはぐれてしまった。それでも彼は、陸を歩いてコルキスまでたどりつき、またイアソンたちといっしょになったといわれる。
　船はさらに進んで、ヘレスポントの西岸のトラキヤについた。ここの王ピネウスは盲目だったが賢者として知られていたので、一行は王のところへいって、コルキスへいくにはどうしたらいいか、また、途中の危険をどうして避けたらいいか、いろいろ教えを乞うた。
「もし君らがハーピイの害をのぞいてくれるなら、わしも君たちを助けよう。」と王はいった。
　ハーピイというのは顔はきれいな女の形をしているが、恐ろしい爪をもったすさまじい二羽の鳥だった。この鳥たちは、王が食卓についていざ食事にかかろうとするたびに現われて、御馳走の一番いいところをさらってしまい、残りもみな食べられないようにしてしまうのだった。
　これをきくと、翼をもった北風の子のゼーテスとカライスが空にまいあがって、剣をぬいてハーピイをおいかけた。二人はそれきり帰ってこなかったが、ハーピイも二度とピネウス王の食卓にはあら

われなかった。王はよろこんでコルキスへいく道を教え、途中にある「ぶつかり岩」というきけんな岩の間を通りぬける方法までおしえてくれた。それは黒海の入口にある青黒い二つの岩山で、船がその間を通りぬけようとすると、たちまち岩があわさって、船を砕いてしまうのだという。

一行が王に別れをつげてさらに北にむかって進むと、まもなく黒海の入口にさしかかった。見ると、ピネウス王のいったとおり、両側にすさまじい岩山がせまっていて、とても間を通りぬけられそうもない。

イアソンはピネウス王におそわった通り、一羽の鳩を前にとばして、その後について船を進めた。鳩はしずかに岩に近づいていったが、すぐ近くまでいくと、さっと身を躍らせて岩の間をすりぬけた。とたんに、岩はすさまじい勢いで迫ってきて、鳩はもう少しで尾の先をはさまれそうになったが、それでもみごとに通りぬけた。岩ははげしくぶつかった勢いで両側にはねかえった。すぐさま、テピュスが離れた岩のすきまに船をのり入れ、乗組員は力のかぎりに漕いだ。岩はもう一度はげしくぶつかりあったが、船尾の舵の飾りがもぎとられただけで、船はみごとに狭い海峡を通りぬけることができた。

アルゴー船は黒海にはいると、その南岸にそって進み、とうとう東はずれのファシス川まできた。この川は、人間に火をあたえたプロメテウスがゼウスの罰をうけて流した血のために、いまでもコーカサスの山から赤い色をして流れ下っているのだという。

## †魔女メディア

船はこのファシス川をさかのぼって、いよいよコルキスの町についた。王はアイエーテスという勇士で、娘のメディアは魔法にたけていた。
イアソンが旅の目的を話すと、王はいった。「そりゃ金羊毛は君らにやってもよいが、こっちにも条件がある。わしはヘパイストスから二頭の牛をもらったのだが、こいつは蹄が青銅で、鼻からは火をふいているのだ。これをくびきにつないでもらいたい。それができたら、わしがアテナ女神からもらった龍の牙を畑にまいてくれ。」
王は国の宝である金羊毛をとられては大変と、とてもできそうにない条件をだしてイアソンたちを追い返そうとしたのである。
さすがのイアソンもこまってしまった。ギリシャ第一の英雄ヘラクレスさえも、この難題だけは引き受けてくれなかったのだから。と、その晩イアソンが考えこんでいるところへ、メディア姫がこっそり訪ねてきていった。
「わたしを一緒にギリシャへつれて帰って、あなたの妻にしてくださるなら、この難題をはたして金羊毛を手に入れる方法をおしえてあげます。」
イアソンが結婚の約束をすると、メディアは火にも焼けず刀で切られても傷つかない魔法の薬をくれた。そして、龍の牙を畑にまいたら兵隊が出てくるから、あなたの冑をなげるようにと教えてくれ

イアソンと金羊毛をまもる悪龍——右側はアテナ

た。

やがて朝になると、もらった薬をからだに塗ったイアソンは、おどろき呆れているアイエーテス王をしりめに、火をふく二頭の猛牛をやすやすとくびきにつなぎ、それからその牛をつかって畑をたがやして、龍の牙をまいた。牙はたちまち芽をふいたが、はえてきたのは、武器を手にした兵士たちだった。しかもその兵士たちは、武器をきらめかしてイアソンにおそいかかってくるのである。

イアソンは、メディアから教わっていた通り、すばやく龍の牙をいれていた冑を、みなの真中になげた。と、たちまち兵士たちはそれを奪いあって同士うちをはじめ、まもなくみんな共倒れになって死んでしまった。

「金羊毛はあすやるよ。」

腹ぐろい王はこういったが、その前にアルゴー船を焼きはらい、イアソンたちを皆殺しにしてしまう計略だった。

しかしメディアはそれを知ると、その夜のうちにイアソンとオルフェウスとを、金羊毛をかけた木のところへ案内した。
そこは巨木が立ちならんだ、うす暗いふしぎな場所だった。月の光の中をぬけて、魔法使いのメディアは二人を案内して行く。やがて花園の真中にくると、一本の木の枝に金羊毛がかかってきらきらと輝いていたが、その木の幹には見たこともないほど巨大な龍がからみついていた。
「はやく竪琴をひいて歌ってください。」と、メディアはオルフェウスにささやくとともに、自分でも何かの呪文をとなえだした。
オルフェウスは竪琴をしずかにひきながら、低い声で眠りの歌をうたった。

眠りよ、わたしの目においで、
わたしがよぶままに――。
眠りよ、つかれた心にやっておいで、
わたしがよぶままに――。
苦労と悲しみのならし手、あらゆるもののいやし手、眠りよ、
わたしのよぶままにおいで――。

オルフェウスが歌うにつれて、花園までが眠ったように見え、風はやみ、花々は頭をたれ、木の葉

一枚そよがなかった。あのおそろしい龍までが、木の幹からずるずるとずり落ちて、うっとりと眠っている赤いひなげしの上に頭をのせて眠りこんでしまったのである。
眠らなかったのはイアソンだけだった。それはメディアの魔法のおかげだった。彼は龍が眠ったのを見ると、きらきら光っている羊の毛皮を木に近づいて眺めた。
そのときメディアが、魔法の水を龍にふりかけながらイアソンにささやいた。「はやくこの龍の背中をふんで木にのぼりなさい。わたしのおまじないも長くはもたないのよ！」
イアソンはいそいで龍の背中にのって木にのぼり、金色の羊の皮をとった。いそいでオルフェウスをゆりおこして、三人は花園を出た。そのあいだ、メディアは魔女ヘカテの助けをかりて月を曇らせたので、コルキスの町はまるで真黒いマントでつつまれたように、真暗になった。それでもイアソンたちは、金色に光る毛皮のおかげで道に迷うことはなかった。
ギリシャの勇士たちはいそいで川岸にいって、アルゴー船にのりこんだ。メディアは、幼い弟王子アプシュルトスを一緒につれてきた。みんなはありったけの力で海にこぎだした。
しかし、まもなくメディアの魔法がきれて、龍は目をさました。見ると、金羊毛がない。龍がすさまじい声をあげて唸ったりほえたりしたので、コルキスの人々はみんな目をさました。女たちは怖れおののいて、子供をだきしめた。
アイエーテス王は、すぐに金羊毛が盗まれたことを知って、快速船でアルゴー船を追いかけさせた。

「はやく、はやく、もっと早くこいで！」と、メディアは龍のうなり声をきくと叫んだ。「わたしのお父さんの船は、とても早いのよ。つかまったら、ひどいめにあいますわ。」

みんなはファシス川を全速力でこぎくだると、あけがたには黒海に出て、それから西へ西へと進んだ。

ところが、昼にならないうちに、アイエーテス王の船が後から追いかけてくるのが見えてきた。オルフェウスがいくらこぎ手をはげまして竪琴をひいても、ききめがない。アイエーテス王の船のほうがずっと早く、ぐんぐん近づいてくる。

それを見たメディアは、恐ろしいことを始めた。アルゴー船の隊員たちは驚きあきれてそれを見つめるばかりで、どうすることもできなかった。

メディアは何をしたのか？　彼女はつれてきた幼い弟アプシュルトスをつかまえると、父親アイエーテスの目の前で、鋭い刀で胸をつらぬき、それから体をいくつにも切り刻んで、海になげこんだのである。

王は舳に立って息子が殺されて海に投げこまれるのを涙をためた目でじっと見ていたが、船をとめさせると、王子のなきがらを拾いあつめにかかった。その間にアルゴー船はどんどん進んで、まもなく水平線の向うに姿を消してしまった。アイエーテス王は二度とアルゴー船をみつけることはできなかった。

それにしてもイアソンは悲しみと恐ろしさで顔をあげることができなかった。メディアのやったこ

とは、あまりにもむごたらしい許しがたいことだった。それなのに彼は、この魔女と結婚しなくてはならないのだ。自分の将来を考えると、イアソンは戦慄せずにはいられなかった。

## †漂泊の船旅

アルゴー船は黒海を北西に進むうち、すさまじい嵐におそわれて、漆黒の闇の中を行方もしらず吹き流された。はげしい風と波にもまれて、船は幾度も沈みそうになった。やがていくつかの島と高い断崖の間をぬけ、大きな川の河口らしいところに出ると、船首につけてあったドドナの枝が口をひらいた。

「メディアが大罪をおかしたので、ゼウスがおこって、嵐をおこし、お前たちを苦しめているのだ。お前たちはアイアイエーの島にいってキルケに清めてもらってからでなくては、生まれ故郷へは帰りつけまい。そこへいくまでの道は長くて、しかも恐ろしいのだ。」

乗組員たちは、それをきいて青ざめた。たちまち風が吹きおこり、船はどんどん流されて、方角もわからなくなった。それからの彼らの進路はよく辿れない。とにかく彼らは北へ北へと川をさかのぼり、やがて川が浅くなって船が進められなくなると、陸にあがって船をかついでさらに進んだ。

まったく恐ろしい旅だった。いったい自分らがどこへ向って進んでいるのか、誰にもわからなかった。ただめくら滅法に進むうち、北西に向ってながれる別の大河に出たので、また船をうかべて下っていくと、やがてまた海に出たが、あたりは一面に濃霧が立ちこめていた。そのため太陽も影がうす

く、ひどい寒さで、船の帆柱や綱にはつららがさがった。

上陸してみると、大きな白熊がうろつき、住民たちも毛皮をまとった野蛮人だった。それがあらあらしい声でわけのわからない歌をうたっては、口から泡をふいて斧をふりあげて攻めよせてくるのだった。隊員たちは寒さにふるえながら、夜中でも太陽の沈まないこの国を急いで立ちさった。

それから、彼らは北海に出て、北風のうしろの国（これがいまのイギリスの島だといわれる）のそばを通って大西洋に出た。そのあたりには、すこし前までアトランティスとよばれた大陸があったが、いまは海の中に沈んでしまったということだった。

今度はどんどん南へ向った。気候は日ましにあたたかくなった。こうしてなおも進んで行くうち、ある日ヘラクレスが叫んだ。

「おお、とうとう知っている国に戻ってきたぞ！　向うに見える二本の柱は、おれが地中海の入口の目じるしに立てておいたものだし、その南に見えるのは、巨人のアトラスが天をささえている山なのだ。世界に名高いヘスペリデスの園は、あの下にあるんだよ！」

こういってヘラクレスは、そこへ金のりんごをとりにいった時のことを、みなに話した。みなはそれをきいてヘラクレスの勇気と知恵におどろいたが、やがてヘラクレスにつれられてその園にいってみると、なおさらおどろいてしまった。ヘラクレスが毒矢でラドンをたおしたのは、十五年ほど前のことなのに、龍はまだ尾をぴくぴくさせていたからだ。

長い苦しい旅で疲れきっていたアルゴー船の隊員も、この楽園でしばらく休んでいるうちに、すっ

かり元気をとりもどした。祭壇をきずいてぶじに故郷に帰れたことを神々に感謝すると、かれらはまた船にのって地中海を東へ向った。

まもなくコルシカとサルジニアの島をすぎ、メディアのおばの魔女キルケが住むアイアイエーの小島に近づいた。

もしアルゴー隊員だけできたのなら、さっそくキルケは魔法をかけたろうが、メディアの姿が見えたので、キルケはよろこんで出迎えた。そしてメディアから、彼女のおかした罪のことや、神聖なドドナの枝が語ったゼウスの命令のことをきくと、キルケはみんなを清めて、機嫌よく送りだしてくれたのだった。

それでもかれらの冒険は、まだ終らなかった。アイアイエーの近くのカプリ島には、シレーンという鳥のすがたをした魔女が住んでいて、そこを通りかかる船乗りたちをさそうのだった。シレーンたちはとてもいい声で歌うので、それをきいた者は何もかも忘れて海にとびこんで、この島へ泳いでいく。するとシレーンたちは鋭い爪で彼らをつかまえて、滅茶滅茶にひき裂いてしまうのだという。一方、もし誰かが彼女らの歌に迷わされないで、ぶじにそこを通りぬけたら、シレーンたちは恥じて死んでしまうのだ。

船が島に近づくにつれて、あやしいシレーンの歌がきこえてきた。みんな夢中で船をこいで島へいこうとする。しかしメディアは、一歩でも島に足をかけた者がどんな運命におちいるか、よく知っていたので、必死でオルフェウスに頼んだ。

「オルフェウスよ、はやく竪琴をひいて、わたしたちを救ってください。アポロンの息子といわれるあなたなら、きっとあの魔女たちよりも美しい歌がうたえるはずです！」

オルフェウスが心をこめて竪琴をひいて歌うと、船人たちはシレーンの声も忘れて、うっとりと耳をかたむけた。こうして船は魔女の誘いを逃れて、南へ向うことができた。それでもブーテスという男だけは、とうとう海におどりこんでシレーンの島めがけて泳いでいった。

シレーンたちは、男たちが歌に耳をかさずに遠ざかってしまったのを見ると、恥と怒りとで、みんな断崖から身をなげて死んだ。しかし、その時その場にいなかったふたりの魔女だけは、その後も生き残って船乗りたちを誘惑していた。トロイ戦争のあと、帰国の旅にのぼったオディッセウスが出あったのは、そのシレーンたちにちがいない。

## †イアソンのさいご

それからもまださまざまの事件が起ったが、どうやらイアソンたちはぶじイオルコスに帰りつくことができた。何年かかったかはっきりしないが、とにかく大変な旅だった。もはや年老いた父は死んでいたが、叔父のペリアスは元気で相変らず王の位についていた。でもイアソンは自分がかわって王になろうとは思わず、アルゴー船の仲間のメレアグロスと一緒に、カリュドンのいのしし退治にでかけていった。

ところが、妻のメディアはどうしても女王になりたくて、夫のるすのあいだにペリアス王の娘たち

ペリアス王とその娘たちに，羊を大鍋で煮て若返らせてみせるメディア

にいった。「あなたがたはわたしの魔法の力を知っていますね。あなたたちのお父さまを、わたしの力で、もう一度若返らせてあげましょう。」

最初のうち娘たちはメディアのいうことを信用しなかった。するとメディアは、大鍋に魔法の飲物をつくると、歩くのもやっとのおいぼれ羊（ある本では死んだ羊となっているので、あるいはイアソンたちがとってきた金羊毛かもしれない）をつかまえて、これを殺して切りきざんで、鍋の中になげこんだ。と、たちまち羊は元気いっぱいの若い羊になって、鍋からとびだしてきたではないか。

娘たちは、もう疑わなかった。そこで年とった父親をつかまえて、殺して大鍋になげいれた。しかしペリアス王はついに生き返らなかった。メディアがかんじんの呪文を教えなかった

からだ。
イオルコスの人々はこれを知ると、メディアとイアソンとを追放にした。仕方なく、ふたりはコリントにきたが、そのときイアソンにもう一度王になる機会がおとずれた。というのは、ここの王から、魔女メディアと別れてわしのひとり娘のグラウケーと結婚し、この国をおさめてくれないかと、頼まれたからだ。
メディアをにくんでいたイアソンは、それを承知した。メディアもイアソンと別れることを承諾したように見えた。ところが、いよいよイアソンがグラウケーと婚礼をあげるとき、メディアは花嫁にすばらしい花嫁衣裳をおくったが、それを着たとたんに衣裳は燃えだして、グラウケーは娘を助けようとした父王もろとも、焼け死んでしまった。しかもメディアは、イアソンとの間にできたふたりの子を殺して、自分は龍のひく戦車にのって逃げ去ってしまった。このメディアは一般に明るく人間的なギリシャ神話の中では、めずらしくぶきみな魔女の姿に描かれている。
イアソンはまたもやこの町をおわれて国々をさまよったが、どこに行っても落ち着く場所がえられず、最後にはあのアルゴー船が岸にひきあげられているイオルコスの浜辺にもどってきた。
「お前だけがぼくの友だちだ。」
イアソンは悲しげにいって船のそばに腰をおろして、うとうととまどろんだ。そのとき、古くなって腐っていた船の舳が、とつぜん落ちてきて彼の頭を打ち、こうしてイアソンはその生涯をとじたのであった。

# メレアグロスとアタランタの話

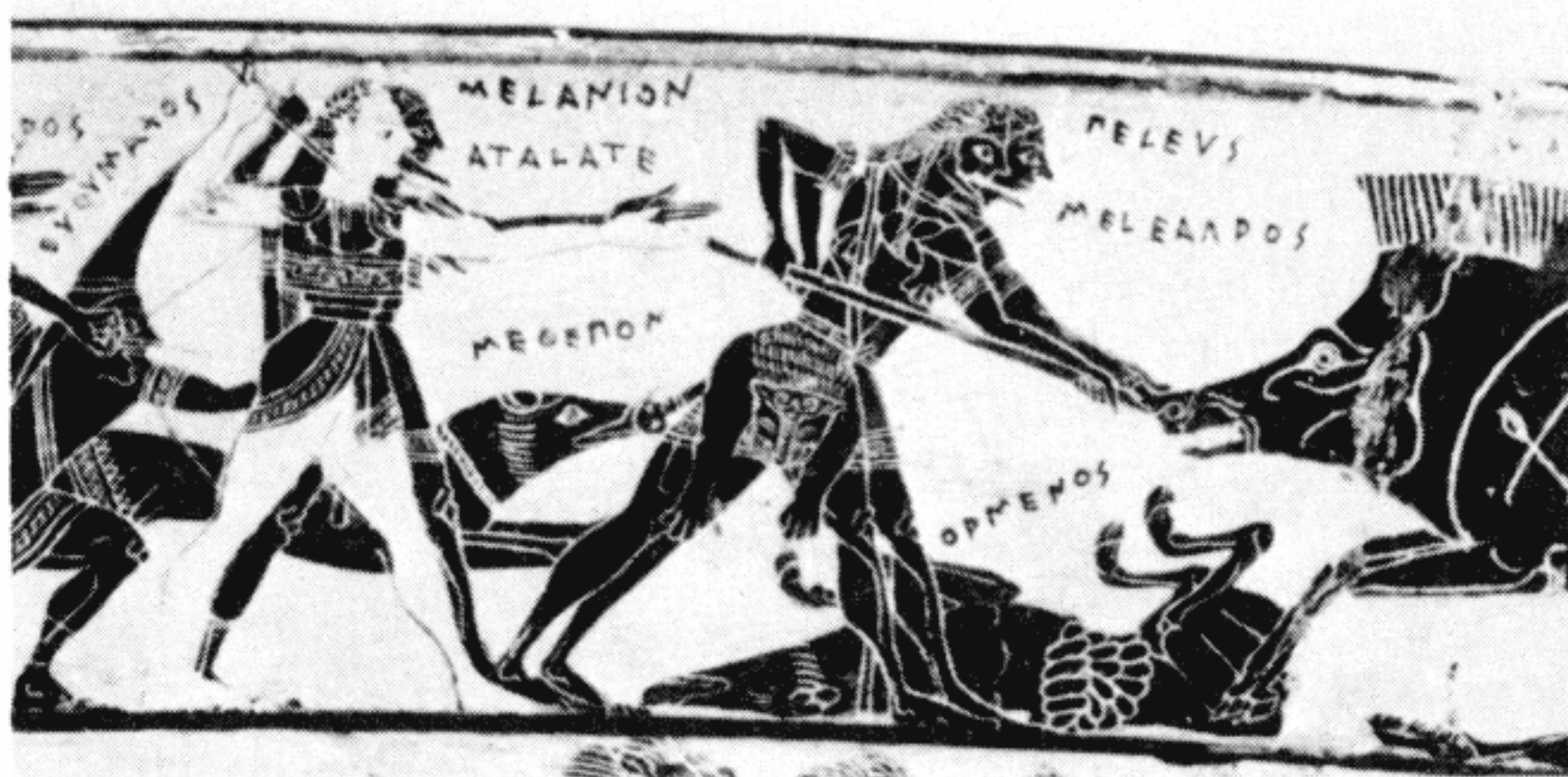
## †カリュドンのいのしし狩り

アルゴー船の隊員の一人だったメレアグロスは、ふしぎな運命にあやつられた人だった。彼はカリュドンの王妃アルタイアの子だったが、生まれて一週間たつと、まだ寝床についていた妃のところへ、三人のモイラがあらわれた。モイラというのはゼウスとテミスの娘で、人間の運命をさだめる役目をもっている女たちだ。妃の部屋では、いろりの火がちろちろと燃えているだけだった。

妃がふと目をあげてみると、三人のモイラが、しきりに新しく生まれた息子の運命の糸をつむいでいた。ひとりがせっせと生命の糸をつむぎ、もうひとりがその長さをはかっている。ところが三番めのモイラが、鋏を手にして姉のモイラたちにいった。

「そんなにせっせとつむいだりはかったりしてもむだです。そこのいろりで燃えている薪が灰になると同時に、わたしはこの鋏で糸を切ってしまいますからね。そしたらこの子は死んでしまうのよ。」

アルタイアはこれをきくと、急いで寝床からとび起きて、燃えている薪をいろりからぬきだした。そして火をふき消すと、彼女でなくてはあけることのできないたんすの奥にしまいこんで、モイラた

ちに向っていった。
「さあ、息子を殺すなら殺してごらん。あの燃えさしをしまっておくかぎり、息子はいつまでだって死にませんからね。」
三人のモイラは、うすきみわるく笑って姿を消し、燃えさしは妃のたんすの中に残った。
やがてメレアグロスはりっぱに成人して、イアソンと一緒にアルゴー船にのりこんで金羊毛をとりにいった。
ところが、旅から帰ってみると、故郷のカリュドンはおそろしいいのししに荒らされていた。いのししはすさまじい牙をもっていて、作物をふみあらし、手むかいする人間を片っぱしから殺してしまう。とてもひとりでは退治できそうもない。
そこでメレアグロスは、アルゴー船の仲間をよびあつめた。ヘラクレス、テセウス、イアソンをはじめ、多くの仲間が心よくきてくれたというが、なかでメレアグロスがわざわざ使いをやって待ちこがれていたのは、女猟師のアタランタだった。アルゴー船で旅をしていた間に、彼はすっかりアタランタが好きになってしまって、なんとかして妻にしたいと願っていたのだ。
アタランタがカリュドンにやってくると、もちろんメレアグロスは大歓迎した。叔父たちは反対していった。「わしらを女と一緒に狩りに行かせようというのか。あんな女は男の仲間に加わって狩りの腕前を見せようなどとしないで、機でも織っていればいいのだ。」
それでもメレアグロスは、アタランタを狩りの仲間にいれた。彼女はメレアグロスとならんで進ん

いのししを退治するメレアグロスとペレウス（先頭），うしろにアタランタ

だが、美しい髪を肩にたらし、皮ズボンをはいて長い弓を手にした姿は、まるで少年のように凛々しく見えた。

「あなたを妻にすることができた者は、どんなに仕合せだろうなあ！」といって、メレアグロスはためいきをついた。

しかしアタランタはいった。

「わたし、人の妻になんかなりたいとは少しも思いません。さあ、そんなことは考えないで、あのおそろしいいのししのことだけ考えましょうよ。」

しばらくいくと、やなぎや羊歯のしげった谷間から、木々をふみたおし犬たちを右に左に蹴ちらしながら、いのししがとびだしてきた。

それを見てエキオンという勇士がさっと槍をなげたが、あまりあせったため、狙いがはずれて槍は楓の木につきささった。つづいてイアソンが投げたが、やっぱり狙いがはずれて、槍はいのししの背中をとびこえてしまった。怒りくるったいのししは、目から火をふいて近くにいたネストルにむかって突進してきた。彼はいそいで木によじのぼって危く逃れ

た。それを見てテラモンが槍をかまえて突進したが、木の根につまずいて倒れ、いまにもいのししの牙にかかりそうになった。

そのときアタランタが落ち着いて弓をひきしぼり、みごとにいのししの耳のわきをつらぬいた。すかさずメレアグロスが槍をなげていのししを倒し、第二の槍でとどめをさした。

猟人たちの歓呼の中に、メレアグロスはいのししの皮をはぐと、アタランタに頭と皮とをさしだしていった。「勇ましい乙女よ、どうかこの戦利品をうけとってください。あなたが最初に傷をおわしたのですから、この名誉はほかの誰よりもあなたが受けるべきです。」

みなはアタランタの誉れをたたえたが、メレアグロスの叔父のペキシッポスは、怒りをおさえることができないで叫んだ。

「メレアグロスがいらぬのなら、いのししの皮は当然最長老たるわしのものじゃ。恥しらずの女め、お前はその美貌でメレアグロスを迷わせたらしいが、われわれは決して迷わされはしないぞ!」

こういってペキシッポスは弟のトクセウスとふたりでアタランタをつかまえると、いのししの皮を奪いとろうとした。これを見たメレアグロスは、かっとなって刀をぬくと、ただの一突きでペキシッポスの心臓をつらぬき、かえす刀でトクセウスもさして殺してしまった。

こうしてカリュドンのいのしし狩りは悲しい結果に終った。ふたりの屍をかついで一行が町にもどると、妃アルタイアはひどく悲嘆した。そして、自分のふたりの兄弟を殺したのがメレアグロスだと知ると、その悲しみははげしい怒りにかわった。

妃は、メレアグロスが生まれた時にいろりから燃えさしをとってたんすにしまっておいたことを思いだすと、いそいで自分の部屋にいってたんすをあけ、その燃えさしを火の中へなげこんだ。まきはすぐに燃えだして、まもなく灰になってしまった。
メレアグロスはそのとき、広間で友だちと酒もりをして、アタランタのために乾杯していた。ところが、突然彼は杯を手から落して、あっと叫び声をあげて床にたおれてもがき苦しみ、
「おお、からだの中が燃えるようだ。いっそ、あのいのししに殺されたほうがましだった！」と叫んだまま、息をひきとった。
カリュドンの都は悲しみにとざされた。王妃アルタイアもやがてわれにかえると、自分のしたことの恐ろしさに、首をくくって死んでいったのである。

## †アタランタの結婚

さて、アタランタはどうなったか。
カリュドンからあまり遠くないアルカジアのイアソス王の娘だった彼女は、アルカジアの父王の許へ帰っていった。
父親のイアソスはしきりに結婚をすすめたが、アタランタはどうしても承知しない。
「だが、アタランタ、わしには跡をつがせる息子がないのだ。どうか、お前の好きな相手を夫にえらんで、ふたりでこの国をおさめてくれ。」と、イアソス王は繰り返してくどいた。

こうまでいわれてみると、アタランタもむげに断るわけにはいかなくなった。

「では、お父さまのいいつけに従います。でも、それにはひとつの条件がありますの。わたしを妻にしようという王子は、わたしと走りくらべをしなくてはなりません。わたしより足の早いかたがあったら、わたしはその人の妻になりますが、もしわたしに負けたら、その人は命を失わなくてはなりませんよ。」

こう娘にいわれて、イアソス王はギリシャ中に使いをだして知らせた——娘のアタランタと走りっこをして負かした者には、娘とアルカジア王の位をあたえる。しかし、もし競走に負けたら首をはねる。われと思わん者は出てきて娘と競走するがよいと。

足に自信のある王子はいくらもいたらしい。このすばらしい冒険をやって幸運をつかもうと、彼らは次々にやってきた。しかし、一人残らず競走に負けて、みな首をはねられてしまった。こうなると、もう名のりでてくる者はなくなった。アタランタはほっと安心した。

ところが、彼女の従兄のメラニオンがアタランタを好きになってしまい、どうかして妻にしたいと考えた。といって競走をしたら負けるにきまっているので、彼は美と愛の女神アフロディテの助けを求めることにした。

アタランタが愛と結婚をばかにしているのに腹をたてていたアフロディテは、メラニオンを助けてやることをした。女神はヘラクレスがヘスペリデスの園からとってきた三つの金のりんごをアテナから借りてきて、メラニオンに渡した。喜んだメラニオンは、さっそくアルカジアへでかけてアタラン

タに競走を申しこんだ。
コースがきめられて、二人は走りだした。自信のあるアタランタはまずメラニオンにさきに進ませておいて、後で小気味よくおい抜いてやるつもりだった。
メラニオンはアタランタが迫ってくるのを見ると、金のりんごを一つ、彼女の前にころがした。アタランタはそのりんごを見ると、どうしてもほしくなって拾わずにはいられなかった。なに、すこしくらい遅れても、まだらくらく追いつける、と思ったのだ。
たしかにアタランタは、またもやすばらしい早さでぐんぐん追いついてきた。メラニオンは第二のりんごを投げた。アタランタはまたも立ちどまってそれを拾ったが、すぐまたぐんぐん追いついてくる。もう一息で追いつきそうになった時、最後のりんごが投げられた。「まだ追いつける」と思ったアタランタは、それをも急いで拾って、風のように走った。しかしメラニオンは、一瞬早くゴールに滑りこんでいた。
こうしてアタランタはメラニオンの妻になった。だが、こんないきさつで結婚したにしては、その後の二人はアルカジアの王と妃として幸福に暮したらしい。

# 愛の神話三つ

## †オルフェウスとユウリデケ

ギリシャのテッサリヤ地方の美しい谷間に、オルフェウスという男が住んでいた。彼はアポロン神とムーサイのひとりカリオペの間に生まれたといわれる。オルフェウスは毎日、金の竪琴をひいては、だれもまだ聞いたことのないようなすばらしい歌をうたっていた。

彼がうたうたびに、鳥や獣がその歌をききにくるし、木々は頭をたれてしずかに耳をすました。空の雲さえもその歌をきくと、いっそう美しく輝きながら、ゆっくりとただよい、足もとをながれる小川は、やさしい音をたてて、彼の歌に合せてさらさらとながれるのだった。

ならびない音楽の名人として、彼はあらゆる人々にしたわれたが、ことに、れいのアルゴー船の遠征に加わって、不滅の手柄をたててからは、彼の名は全ギリシャに高かった。

さて、そのオルフェウスにはユウリデケという妻があって、ふたりは心から愛しあっていた。山々が雪におおわれている冬のあいだも、日の光がすべてのものを美しく輝かす夏のあいだも、彼は日ごとにユウリデケのために竪琴をかなでて歌をうたった。

するとユウリデケは、オルフェウスとならんで草の上にすわって、うっとりとその歌にききほれるのだった。

ところがある日、ユウリデケは川岸を散歩しているうちに、草の中にいた毒蛇をふみつけてしまった。蛇はおこってユウリデケにかみつき、彼女はたちまちその毒でたおれた。

そしてまもなく「心から愛しているあなたに別れるのは、本当につらいわ。」といいながら、やわらかい草に顔をうずめて目をとじて、そのまま息がたえてしまった。

愛するユウリデケを失ったオルフェウスの悲しみは、かぎりなかった。彼は嘆きと悲しみのあまり、もう二度と金の竪琴をひくまい、二度と口をひらいて歌うこともすまいと決心した。

オルフェウスはくる日もくる日も、ユウリデケがじぶんの歌にききほれたあの川岸の草の上にぼんやりとすわりこんで、ため息をついては涙を流すのだった。野の獣や鳥たちは、どうしてオルフェウスがもう美しい歌をうたわないのかと、それをあやしんだ。

とうとうある日、悲しみにたえかねたオルフェウスは、ユウリデケをとり戻そうと心にきめた。もうこれ以上なにもしないで、こんなところに坐りこんでいるわけにはいかない。ユウリデケを捜しにいこう。あの人がいなくてはぼくは生きていけない。そうだ、死者たちがゆく国へいって、王様にたのんであの人をかえしてもらおう。

こう決心したオルフェウスは、竪琴を手にとると、太陽がしずむ方角へ、ユウリデケを捜しに出かけた。どこまでもどこまでも進んでいくと、黒い大きな門の前に出た。門にはふとい鉄のかんぬきが

おりていて、誰にもあけられないようになっている。
そこは太陽の光もとどかず、雲と霧がたちこめていて、なんともいえずぶきみなところだった。門の前には頭が三つある化物のように大きい一匹の犬が番をしていた。一面の闇の中で、その犬の六つの目だけが火のようにひかっていた。
オルフェウスが近づくのを見ると、犬はその三つの頭をもたげ、三つの口をかっと開いて歯をむきだし、すさまじい声でほえて、いまにもとびかかろうとする。
オルフェウスは金の竪琴を肩からおろして、しずかにひきはじめた。すると犬は、竪琴の音につれてだんだんおとなしくなって、しまいには彼の足もとでうっとりと眠ってしまった。その上、オルフェウスが歌をうたいはじめると、その歌声につれて門もひとりでに大きくひらいたではないか。
オルフェウスは喜びいさんでその道をどこまでも進んでいった。まもなくついに死の国のハデス王の御殿にきた。
御殿の前には番兵が立っていて彼を追いかえそうとしたが、この番兵もオルフェウスが竪琴をひくと、うっとりして役目を忘れてしまった。そのままオルフェウスが大広間にはいっていくと、ハデス王がすさまじい声で叫んだ。「きさまは何者じゃ。また、なんの用があってここへきた！　ここへは死んでからでなくてはこられないことを知らないのか。二度と外へ出られぬようにくさりでつないで、土牢にぶちこんでくれるぞ！」
オルフェウスはだまって金の竪琴をとると、えもいえぬ音色をかきたてながら、美しい声をふるわ

せてしずかに歌いだした。その歌がすすむにつれて、王の怒りはだんだんおさまっていった。

やがて、いかにもうれしそうな顔になると、ハデス王はいった。

「お前は美しい音楽ですっかりわしを喜ばせてくれた。こんないい気持になったのは生まれてはじめてじゃ。では、どういう願いがあってここへきたか、いってごらん。どんな願いでもひとつだけはかなえてやろう。なにか願いがなくては、死なないさきにこんなさびしい国へくる者はないからな。」

「では申しあげますが、王よ、どうかわたしのユウリデケをかえしてください。もう一度わたしと一緒に明るい地上でくらさせてください。」とオルフェウスはたのんだ。

この要求をきいて、王はしばらく苦い顔をして考えこんでいたが、最後にうなずいて、

「お前はあんなすばらしい歌をうたってくれたのだから、そのむりな願いもききとどけてやろう。安心して地上へもどってゆくがよい。ユウリデケはお前のあとからついてゆくぞ。」

といったが、さらに念をおすようにつけ加えた。

「ただ、ことわっておくが、あの女が地上につくまでは、お前は決して後をふり返ってはならぬぞ。もし、ふり返ろうものなら、あの女はまたこの死の国へひきもどされて、もうお前がどんなに美しい歌をうたおうと、わしにもどうすることもできんのだからな。」

オルフェウスは喜びで足が地につかないほどだった。ひとめユウリデケを見たいと思ったが、王にこういわれたのでは、地上に出るまでは決して後をふり返らないことを約束するほかなかった。

こうしてオルフェウスはハデス王の御殿を出た。あの暗い門をぬけるときも、犬はもはやほえなか

オルフェウスの死

った。王がゆるしたのでなくては、この門をはいった者が出てくるはずはなかったからである。

オルフェウスは、何度もふりかえってユウリデケを見たいと思ったが、必死でがまんして、どんどん道を進んだ。ようやく生きた人間の国に近づいて、一筋の光がさしてきた。ちょうど太陽が海からのぼるところで、空はみるみる明るくなってきた。ここまで来れば、もう大丈夫。オルフェウスはもう辛抱しきれなくなって、後をふりむいた。

しかし悲しいことに、ユウリデケはまだ十分に人間の国まできていなかったのだ。彼の目には、なんだか青白い人の顔のようなものが見え、やさしい妻の声のようなものがきこえただけで、すべては霧のように消えさってしまった。

「ああ、オルフェウス、あなたはなぜふり返ったの。どんなにわたしはあなたを愛し、あなたとまた一緒にくらせることを喜んでいたでしょう。でもわたしはもう引き

返さなくてはなりません。あなたは王さまとの約束をやぶったのですもの……。」
妻の声がこういったようにきこえた。
オルフェウスはへたへたとその場にすわりこんだまま、もう一歩もあるくことができなかった。彼は夜も昼も、その場を動かなかった。頬は青ざめ、からだは日ましにやせおとろえて、もう死が近いことを彼は知った。
それでもオルフェウスは少しも悲しまなかった。美しい花が咲き、青々と草木がしげり、日の光をあびて小川がきらきら輝きながれるこの地上を、オルフェウスは心から愛していた。しかし、ユウリデケがいなくては、生きている気がしなかったのだ。こうしてオルフェウスは、地に頭をつけて眠りについた。そしてそのまま死んでいった。
やがてオルフェウスは、太陽のしずむ遠い遠い国でユウリデケと出あって、それからは二度と別れることなく暮したという。

## †ピグマリオンと大理石の像

ピグマリオンは地中海の東よりにあるキプロス島の若い王だった。彼はなによりも彫刻がすきだった。
「おれには、彫刻さえあればいい。ほかのものはなにもいらないのだ。」
こういうのがピグマリオンの口ぐせだった。そんなわけで、彼は妻ももたず、世間の女には目もく

れずに彫刻のわざにはげんで、その道の名人とたたえられるようになった。
ところが、そのピグマリオンがきざんだのは、ふしぎなことにいつもきまって女の像であった。彼は女ぎらいだといっていたけれど、やっぱり女の姿を心の中から追いだすことはできなかったのだ。それどころか、それこそ完全な美をそなえた女の姿を彫刻できざみだしてみたいというのが、彼の大きな野望だった。それというのも、世間の女たちにはあまりに欠点が多かったから。
ピグマリオンはすばらしい大理石を手に入れると、今度こそ自分の思いどおりの女の像をきざんでみようと、全心全力をうちこんで仕事にかかった。仕事は長くかかったが、ついにすばらしい女の像ができあがった。この世に生まれたどんな美女でも、またどんな彫刻の名人がきざんだ大理石の像でも、いま彼がつくった女の像の美しさには、かなうまいと思われた。それほどその像はすばらしかったのである。
それでもピグマリオンは、まだ満足しなかった。彼は毎日その像に手を加えて、みがきにみがきあげた。やがて像はもはや一点の手をくわえる余地もないほど美しいものになった。
像はまるで、冷たい石できざんだものとはみえずに、あたたかい血のかよっている生きた女にそっくりだった。もちろん少しも動きはしなかったが、それは世にも美しい女がじっと立ちつくしているようにみえたのである。この像こそ、この若い王のつくった第一の傑作であった。
ところが、ここにふしぎなことが起った。ピグマリオンは自分のつくったこの美女の像にほれこんでしまったのだ。

これは、生きた人間の女をばかにした、この誇りたかい王のうけなければならぬ罰だったろうか。とにかくピグマリオンは、夜も昼もこの像のことを思いつづけて心のやすまる時がなかった。しかし、いくらピグマリオンが思いこがれても、相手は、生きた人間ではなく、冷たいただの石である。彼がどんなにその美しい唇に接吻しても、心を動かす気色は見られなかった。それでもピグマリオンは、まるで子供が人形でもあやすように、せっせと美しい着物をきせてみたり、お化粧をしてやったりした。こんなふうにすれば、相手もきっと喜んでくれるものと思ったのだろう。いろいろな贈物を買ってきてやったり、きれいな野の花をつんできてやったりもした。そして夜になると、ちょうど子供が人形をだいて寝床へつれていくみたいに、自分の寝床へだいていって愛撫するのであった。

しかし、ピグマリオンも、そんな遊びでいつまでも満足していることはできなかった。相手はどんなにやさしくしてやっても、命のないただの石ころである。ついにはピグマリオンもすっかり絶望して、そんな遊びもやめて悲しみにしずんでいくのだった。

ところで、そんなピグマリオンの様子は、美と愛の女神アフロディテ（ヴィナス）に気づかれずにはいなかった。なにしろキプロスの島は、この女神が海のあわから生まれたときに最初に上陸した島だ。いくつもアフロディテを祭ったお宮があって、角を金にぬった真白い牝牛が奉納され、祭壇にはいつでもいい匂いのする香がたかれていた。そして若い男女は、自分たちの愛のしあわせを願って、ひっきりなしにアフロディテの神殿をおとずれるのであった。ピグマリオンもそのひとりだった。彼

は神殿にやってきて祈りをささげた。
「愛の女神よ、どうぞわたしに、わたしのつくったあの像とそっくりの乙女を与えてください。」
しかし女神には、ピグマリオンのほんとうの気持がわかっていた。——あの若い男は、ほんとうは自分でつくったあの像だけがすきなので、この世の女では、どんなに似ていても、愛することはできないのだということを。
ピグマリオンの愛はまったく妙なものだった。愛のことなら、一から十まで知っているつもりのアフロディテも、ついぞピグマリオンのような男に出あったことはなかった。こんな愛の願いをきいたのも始めてだった。
それにしても女神は、ピグマリオンの苦しみを救ってやろうと思い、願いを聞きとどけた証拠に、祭壇のろうそくの火を三度高く燃えあがらせて見せた。それを見てピグマリオンは、大喜びで王宮に帰っていった。
王宮にはピグマリオンが心をうちこんでつくったあの像が、台座の上に立っている。気のせいか今日の像は、いつにもまして、やさしく、また美しく見えた。ピグマリオンは思わず走りよってだきしめた。
とたんに彼はぎょっとしてとびしさった。つめたい大理石の像がなにかほのあたたかく感じられたのだ。気の迷いだろうか、それとも本当にこの像に血がかよってきたのだろうか。……ピグマリオンはあやしみながらも思いきってもう一度像をだきしめて、唇にキッスした。すると大理石の唇がだん

だんあたたかくなってきたばかりか、固い大理石の肌がみるみるやわらかくなってきたではないか。手首をにぎってみると、ときどきと脈がうっている。

「ああアフロディテさま、ありがとうぞんじます！」

ピグマリオンはこういって床にひれふした。

女神はふたりを祝福して、まもなく彼らを結婚させてやった。ピグマリオンは妻をガラテアと名づけて、この上なく愛した。やがてふたりの間にはパフォスという子も生まれて、ふたりはいよいよ幸福な日を送ることができた。

いまキプロスの島のあるパフォスの町は、このパフォスが美と愛の女神アフロディテにささげてつくった町だといわれている。

## †アモールとプシケの物語

これは紀元二世紀のローマの詩人アプレイウスが書いている話だから、純粋な神話とはいえない。なにか神話、あるいは民間の伝統にもとづいているのかもしれぬが、大方は彼自身の制作とみるべきだろう。それにしても大変美しい物語で、しかもヨーロッパに多い「いなくなった夫あるいは愛人を捜して遍歴する女」のメルヘン（昔話）の原型ともいうべき話で、一般にそのような話を「アモールとプシケ」型と呼んでいるほど、広く親しまれている。そこでこれを採ってみた。ローマ時代の話だから、神様の名はローマ風になっている。

あるところに、三人の姫をもった王様がいた。姫は三人とも美しかったが、中にも末の娘のプシケ（英語読みならサイキで、〈心〉の意味）はずばぬけて美しく、まるで神のように見えた。その美貌の評判は国々に広まって、いたるところから人々は姫を眺めるためにやって来ては、この世の人とも思われないその美に驚嘆するのだった。そしてみんなは彼女の美しさは美の女神ヴィナスをさえしのぐとして、争ってプシケをたたえた。そんなわけで、ヴィナスの神殿はすっかりおろそかにされて、訪れる者もなくなった。

美の女神が、こんな侮辱にたえられるわけがない。そこで女神は、こんな場合にいつも助けを求める息子のアモールを呼んで、いいつけた――「いつものお前の弓で射て、あのいまいましい女を、この世で一番いやらしい醜い男に恋させておくれ。」

アモールはキューピッドともいうが、羽根のはえた美しい若者で、弓で射ることがうまい。そして彼の矢にあたったものは、神様だろうと人間だろうと、のがれようもなく恋のとりこになってしまうのである。

母親の命令をうけたアモールは、さっそく悪い女をこらしめに出かけたが、プシケを一目みたとたん、とんだことになってしまった。彼はどうやらプシケの美しさにおどろいて、自分の矢で自分の胸を傷つけてしまったらしい。そして、そんな自分を恥じて、母親には何もいわずに身を隠してしまった。

さてヴィナスは、息子にいいつけておいたから、たちまちプシケは卑しい男と恋をして破滅してし

まうものと期待していたのに、ちっともその様子がない。彼女は誰をも好きにならず、ふしぎなことには、男たちも誰ひとり彼女に思いをよせる者がない。みんなは彼女の美しさに驚嘆し、讃美するだけで、結婚しようなどとは思いもしなかったのだ。それは愛の神アモールが、自分で彼女に思いをよせて、自分のものにしようと願っていたからだった。

二人の姉は、プシケよりもずっとみにくかったのに、それぞれ幸福な結婚をして王様の妃になった。それなのに、一番美しいプシケがいつまでも一人ぼっちでいて、誰も結婚を申しこむ者がない。こうなると両親は、ひどく心配した。とうとう父親は、はるばるとアポロン神の神殿に旅をして、どうか末娘によい夫がえられますようにと、神託をうかがった。

神託はあったが、恐ろしいものだった。それは、アモールがすでにアポロンに自分の恋を話して、助けを求めていたからだった。アポロンは王に告げた――「娘のプシケは、喪服をまとわせて、岩山の頂上にひとり置くのじゃ。そうすれば、彼女の定められた夫である翼のあるすさまじい蛇が来て、つれて行くだろう。」

恐ろしい運命だったが、アポロンの神託とあっては、従わないわけにはいかない。両親たちは泣く泣くプシケを岩山の上につれて行った。しかし、プシケは勇気のある娘だった。彼女はきっぱりといった。

「いまさら泣いても仕方がないではありませんか。わたしの美しさが、神々の嫉みを受けたのですわ。さあ、お帰りください。わたしは喜んでわたしの運命を待ち受けましょう。」

両親は愛する娘をひとり山上に残して、嘆きながら城に帰ると、来る日も来る日も一歩も外に出ず、終日涙の中で過していた。

さて、山上に残されたプシケの周囲には、早くも闇がひしひしと迫った。気丈な姫も、さすがに震えて、涙が頰をつたわった。ところが、とたんに気持よい西風が吹いてきたと思うまに、彼女の身体は軽やかに空に運ばれて、気がついた時には、香ばしい花の匂いにみちた草原の上にそっとおろされているのだった。深い平和がそこには立ちこめていた。あらゆる不安も恐れも消えて、彼女は安らかな眠りに落ちた。

やがて目がさめた時には、もはや明るい朝になっていた。傍らには清らかな川が流れていて、その岸に美しい城が立っている。黄金の柱、銀の壁、宝石をちりばめた床――まるで神の住む宮殿だった。しかし、誰も住んでいないらしい。それでも、あまりの神々しい美しさに、彼女が入って行くのをためらっていると、どこからか声が聞えてきた――「これがあなたのお住居なのです。怖がらずにお入りになって、休息してください。入浴がおすみになったら、お食事の用意をいたします。私たちはあなたの召使いなのです。どんなことでもお命じになってください。」

風呂場は豪奢だったし、食事はたべたこともないほど、すばらしいものだった。その間には楽しい音楽が奏せられ、竪琴に合わせた合唱も聞えた。しかし、誰の姿も見えないのだ。それでもプシケは、すっかり心がうちとけて、心配も恐怖も忘れてしまった。

やがて夜になって、彼女が寝床にはいると、やさしく耳許でささやく声がして、誰かが彼女の隣り

に身を横たえた。姿を見ることはできなかったけれど、それが決して蛇でも怪物でもなく、彼女の待ちこがれていた夫であることを感じた。こうしてふしぎな結婚生活がはじまった。夫は昼間はどこかに姿を消してしまうが、夜になると彼女の隣りに身を横たえてやさしくプシケを愛撫した。夫の姿を見ることができないので、彼女の幸福は完全とはいえなかったが、それでも彼女に不足はなかった。

こうして、かなり長いこと過ぎたが、ある晩、姿の見えない夫は、思いに沈んでいった。「近いうちに、お前の二人の姉さんが、お前が姿を消したあの岩山に、お前を捜しに来るんだ。でも、お前は決して姿を見せてはいけない。でないと、僕の上にもお前の上にも、おそろしい不幸を招くからね。」

プシケは決して姉たちにあわないことを誓ったが、あくる日は一日、姉たちをなつかしんで泣きくらした。夜になって夫が帰ってきた時も、まだ泣いていて、その愛撫にも答えられなかった。とうとう夫は、負けていった。

「そんなに逢いたいのなら、好きなようにおし。僕たち二人に不幸を招くことだけれどね。ただ、姉さんたちに何といわれても、僕の姿を見たいなんて気を起しちゃいけないよ。そんなことになったら、二人は永遠に別れなくちゃならないのだからね。」

「あなたに別れるくらいなら、わたし死んだ方がましですもの、きっとあなたのいましめは守りますわ。でも、どうか姉たちに逢わせてね。」

愛する妻にこういわれては夫は悲しみながらも、その願いをきいてやるしかなかった。

あくる日になると、姉たちは西風に運ばれてやって来た。久しぶりであった姉妹の喜びは、どんな

だったろう。三人はなにもいえずに、涙を流して抱擁しあった。姉たちは、怪物におそらく食べられてしまったものと思っていた妹が、大層幸福そうに暮しているのを見て、心から喜んだ。

それにしても、お城の豪奢さ、食べもののすばらしさなどを見るにつれて、姉たちははげしい妬みごころに捕えられ、いったい妹の夫はどんな男だろうと怪しんだ。そこで、根ほり葉ほり問いただしたが、夫の姿を見たことがないプシケには、何も答えられなかった。それに、夫からはきびしく戒められていた。そこで、プシケは、夫は若い人だけれど、いまは狩りに行っていて留守だというだけにとどめた。そして姉たちにはどっさり黄金や宝石の贈物を持たして、帰してやった。

姉たちには、それまで満足していた自分たちの生活が、妹のそれにくらべると、取るに足らないものにみえてきた。はげしい嫉妬にかられて、二人はどうかして妹を破滅させてやりたいとたくらんだ。

その晩、プシケの夫は帰ってくると、もう一度妻をいましめて、二度と姉さんたちに逢わぬようにしてくれといった。しかしプシケは、きかなかった。

「わたしはあなたのために、あらゆるものを見すてました。それでもまだ足りないで、あのなつかしい姉さんたちに逢うことまで、あきらめなくてはならないの？　それではあんまりです。」

こう泣いてくどかれて、夫はまたしても負けてしまった。まもなく二人の姉は、また訪ねてきた、腹黒いたくらみを胸にひめて。

この前の訪問の時の妹との問答から、姉たちはすでに察していた――きっと妹は、まだ夫の姿を見

たことがないのにちがいないと。そこで、彼女たちはいってみた。
「隠したってだめ。あなたの夫は、きっと人間ではなくて、アポロンのお告げにあったような恐ろしい蛇なのよ。いまはやさしくしていても、いつか正体をあらわして、あなたを食べてしまうんだわ。」
プシケの胸には深い疑惑と恐怖が動いた。いったい夫は、どうして自分に姿を見せないのか。なにか恐ろしい理由があるのに違いない。べつに物すごい姿をしているのでないとしたら、愛する妻に姿を見せないのは、ひどいことだ。彼女はみじめな気持になって、すすり泣きながら姉たちにうちあけた——「じつはわたし、真暗な闇の中でしか、夫に逢ったことがないの。夫があんなに光を恐れるのには、きっとなにか悪いことがあるんだわ。いったい、どうしたらいいでしょう？」
姉たちは、すべてが思い通りにいったのにほくそえんで、あらかじめ用意しておいた忠告を与えた。
「今夜は、寝床のそばに鋭いナイフとランプを隠しておいてね、夫が眠ってしまったら、ランプをともして正体を見とどけるのです。そして相手が恐ろしい姿をしていたら、ひと思いにさし殺してしまうのよ。」
そういって姉たちは帰っていった。プシケの心は千々にみだれた。彼女は夫を深く愛していたのだから。あの人が恐ろしい蛇のわけがない。それにしても、たしかな証拠をつかまなくてはならない。
一日さんざん迷ったあげく、とうとう彼女は心をきめた。
やがて夫がぐっすりと眠ったとき、彼女はそっと寝床をぬけ出すと、ふるえる手でランプをともし

てみた。それから抜身のナイフを片手に、抜足さし足で寝床に近づいて、ランプを高くかかげて夫を眺めた。おお、そこに横たわっていたのは、みにくい怪物どころか、彼女がかつて見たこともないほど美しい若者だった。彼女はうっとりとその姿に見とれた。同時に、姉たちにおだてられて夫を裏切った悔恨が、はげしく胸をかんだ。彼女は夫の足許にたおれふして、われとわが胸にナイフを突きたてたいと思った。そのとき、ふるえる手でささえていたランプから、熱い油がポトリと夫のむきだされた肩に落ちた。とたんに夫は目をさまして、ランプを手に自分をのぞきこんでいる妻をみとめると、無言ではね起きて、真暗な戸外に走り出ていった。

プシケは夢中で後を追いかけた。すると、姿は見えなかったが、なつかしい夫の声が聞えた。夫は自分が愛の神アモールであることを告げて、悲しそうに別れの言葉をのべていった。「愛は信頼のないところでは生きていられないのだ。」と。それきり彼の姿は消えて、声も聞えなくなった。

愛の神を夫にしながら、自分の軽はずみと不信から、夫を失ってしまったことを知った時のプシケの悲しみは、どんなだったろう。もう永遠に夫を取り戻すことはできないのだろうか。それでもプシケは、けなげに決心した。「わたしの残りの一生は、あの人を捜すためにささげましょう。もし夫に、わたしに対する愛情が少しも残っていないとしても、少なくともわたしは、どんなにわたしがあの人を愛しているか、それをあの人に見せてあげることはできる。」

こうしてプシケは、いなくなった夫を捜して、さすらいの旅に出る。一方アモールは、母のヴィナスの許に帰って、胸にうけた痛手を慰めてもらおうとした。しかし、ヴィナスは、息子が愛したのが

憎いプシケだと知ると、いよいよ嫉妬をもやして、あの女をこらしめてやらずにおくものかと考えた。だからプシケが、苦しいさすらいの中で、いくら神々の助けを願って心からの祈りをささげても、神々はヴィナスの怒りを買うことをはばかって、誰ひとり助けの手をさしのべなかった。

とうとうプシケは、天にも地にも誰も助けてくれる者がないと知って、絶望の中に、ある決心をした。真直ぐに女神ヴィナスのところへいって、身を投げだして彼女の宥しを求め、彼女の召使いになって女神の怒りをなだめようと考えたのだ。それに、なつかしい夫の消息が、夫の母親のところに行けばわかるかもしれなかった。

プシケがヴィナスのところに行くと、女神は意地わるく笑っていった――お前はほんとうにばかな娘だ。せっかくすばらしい夫を手に入れたのに、お前の愚かな不信で夫を死ぬほど傷つけて、もうお前にはかかわりたくないとばかりに逃げださせてしまった。それでもまだ、いとしい人を捜そうというのか。それには、苦しい試煉と奉仕にたえなくてはなるまいよ。こういって女神は、たっぷりと小麦とけしとあわの粒を取って、それをかきまぜておいて、いいつけた。

「さあ、まず手はじめに、これを夜までにきれいにえりわけておくんだよ。」

プシケは命じられた仕事にかかったが、まぜこぜになった細かい粒の山をより分けることなんか、とても人間わざでできるわけがなかった。それでも、涙ながらにせっせと働いていると、アリが彼女の心根をあわれんで、助けにきてくれた。何万ものアリのおかげで、穀粒の山は夜にならぬうちにすっかりきれいにえり分けられた。

ヴィナスはそれを見て怒って、「お前のつとめは、そんなことではまだすまないよ。」というと、パン屑を投げ与えて、プシケを土の上に寝させた。ひどい食物をやり、うんと身体を苦しめてやったら、いまいましいプシケの美しさも、たちまち色あせるだろうと思ったのだ。

あくる朝になると、女神は新しい仕事をいいつけた。向うの川岸へ行って、そこにいる金の毛をもった羊の毛をとって来いというのである。ところがこの羊たちは狂暴で、手におえないのだ。プシケは川岸まで行ったが、もう水に身を投げて死んでしまいたかった。しかし、そのときあしがささやいて教えてくれた――夕方まで待っていれば、羊たちが眠りに来て茂みを通りぬける。その時、いばらに毛がたくさんひっかかって残るから、それを集めて持って行きなさいと。こうして二度目の難題も、うまく切りぬけることができた。

三度目に命じられた仕事は、なおさら困難で危険なものだった。嶮しい岩山から流れ落ちるスティクスの川の水をくんでくること。それは鷲がやってくれた。

最後にヴィナスは、一つの箱をプシケに渡して、これに地獄の女王プロセルピナ（ペルセフォネ）の美を分けてもらって来いと命じた。さすがの美の女神も、息子の看病でやつれたことを気にかけていたのだ。プシケは今度は塔に助けられた。地下の洞窟をぬけ、死の川をカロンの渡し舟で渡って、頭の三つある猛犬ケルベロスもお菓子をやって手なずけ、立派に地獄の女王の美を箱に入れてもらってきた。ところが、彼女はこの中身がどうしても知りたかった。少しばかり、使ってもみたかった。長い間の苦労でやつれていたし、いつ恋しい夫に逢うかもしれなかったから。その好奇心と虚栄心

が、彼女をまたもや非常な危険におとしいれる。とうとう誘惑にまけて箱をひらいてみた時、中は空っぽだったが、あやしい煙のようなものが立ちのぼって、たちまち彼女はそこに打ちたおれて深い深い眠りに落ちてしまったのだ。

ところで、その間にアモールの傷は、すっかり癒えていた。彼は母親にとじこめられていた部屋の窓からとび出して、恋しい娘を捜しに出かけた。プシケは城門の近くにたおれていた。彼は眠りをまた箱にとじこめ、妻の好奇心と虚栄を少し叱っておいて、箱を母親のところへ持って行かした。それから真直ぐにオリンポスへ飛んでいって、大神ジュピター（ゼウス）に正式にプシケと結婚させてくれるように訴えた。

「お前はこれまでも、さんざんわしを困らせた。お前の矢のおかげで、わしは女たちを愛さずにはいられなくなって、牡牛や白鳥なんかにまで身に変えて彼女たちに近づかなくてはならなかった。おかげで、大いに威厳を損じたぞ。だが愛の神の願いは、きかんわけにはいかんわい。」

こういって大神は、ヴィナスもふくめて神々を呼び集めると、アモールとプシケを正式に結婚させることを告げた。こうしてプシケはオリンポスに迎えられ、アンブロシアを味わって不死の生命を受けることになった。ヴィナスも、もうべつに反対しなかった。なにしろ息子の花嫁は神々の仲間入りをしたのだし、そうなればもはや地上の人間たちが彼女を礼拝するのを、そう邪魔するわけもなかったから。こうしてアモールとプシケ（「愛」と「こころ」）は、つらい試煉をへたのちに、ふたたびめぐりあって、二度と破れることのない本当の幸福を見出したのであった。

# ギガントマキアーとヘラクレスの最後

## †神々と巨人たちの戦い

どうやらわれわれのギリシャ神話物語も、終りに近づいた。最後に、ゼウスたちオリンポスの神々と、ギガンテスとよばれる巨人たちとの戦い――それをギガントマキアーという――について書いて、しめくくりとしよう。

はじめに書いたように、ゼウスたちオリンポスの神々は父親のクロノスをはじめ巨神をたおして、この世界の支配者になったのだが、死に臨んだ父親が呪っていったように、オリンポスの神々の地位もそう安泰なものではなかった。

まず大地の女神ガイアが、わが子のクロノスたちが滅ぼされてしまったのを憤って、ゼウスたちに復讐するべく、ティポーンという怪物を生んだ。ティポーンは頭が百あって、ライオンのようにすさまじく咆え、目からは火をふきだすおそろしい大蛇だった。このティポーンが攻めよせてきた時には、大地も震えおののき、さすがの神々も顔色をかえてエジプトまで逃げていったといわれる。しかしゼウスは電光をなげつけて戦って、ついにこれをうち負かすことができた。

ティポーンと戦うゼウス

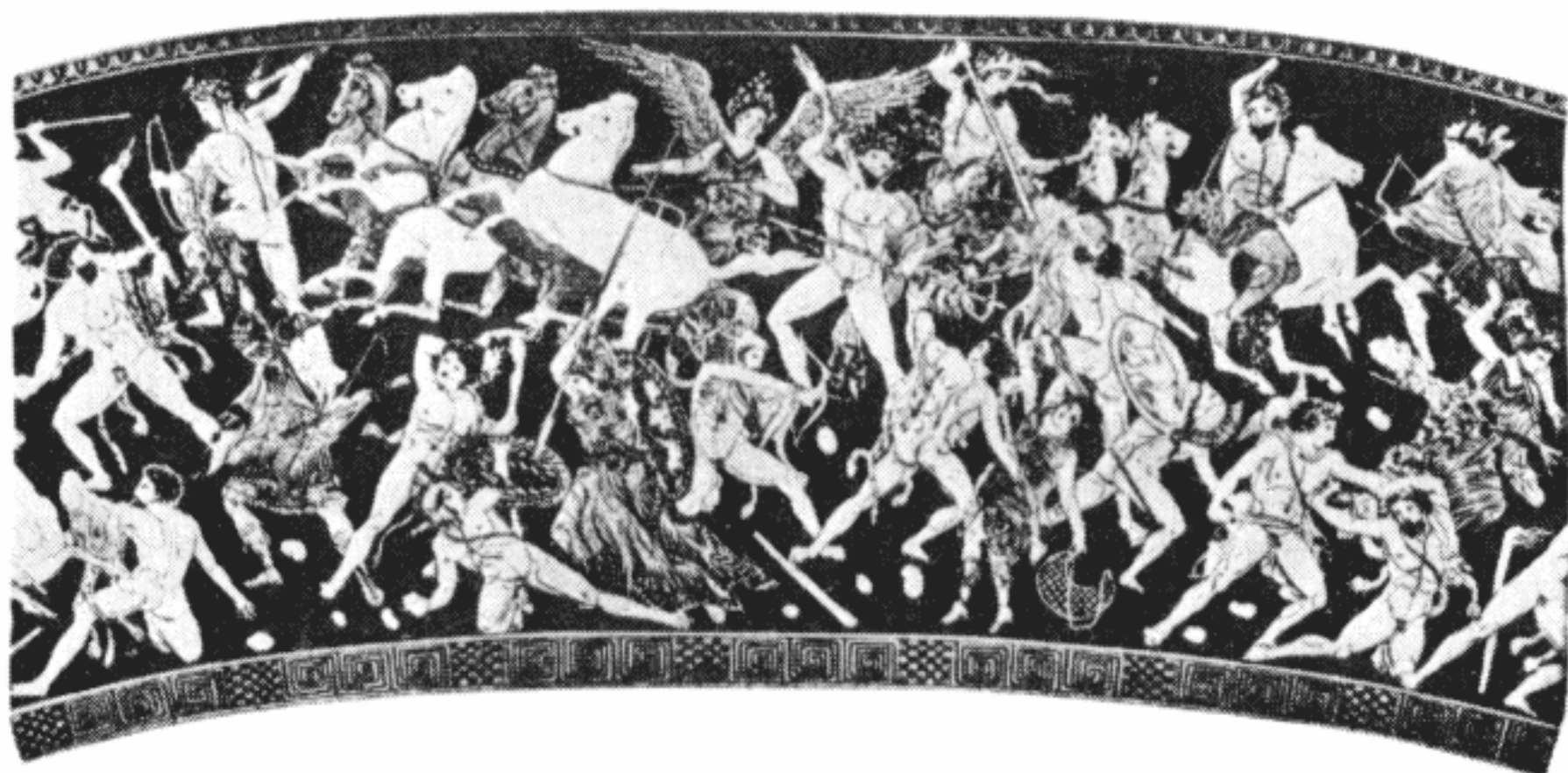
全身に痛手をうけたティポーンは、それでも海をわたって逃げようとしたが、ゼウスは大きな山をなげつけて、その山で押し潰してしまった。これが、いまシシリイにあるエトナの山で、そのためにこの山はいまでも火をふいているのだという。

こうしてティポーンが退治されると、しばらくオリンポスには平和が続いたが、今度はギガンテス（単数はギガース）という巨人たちがせめよせてきた。ギガンテス（英語でいえばジャイアント）というのは、ウラノスがクロノスに根を切られたときに流れでた血が大地ガイアの上にしたたり落ちて、そこに生まれでた巨人たちだった。ガイアはこの子供たちを、ひそかに北ギリシャの洞窟の中にかくして育てていたのだ。

いつかは巨人たちがオリンポスに攻めよせて、神々が危地におちいるとプロメテウスが予言してい

たのは、このことだったらしい。

さて、ある時ゼウスは妻のヘラと大喧嘩をして、腹だちまぎれにわが子ヘパイストスを下界に投げおとした。いったいヘパイストスは、一応ゼウスの子ということになっているが、別にヘラ一人の子供という伝承もあるくらいで、この時の喧嘩も、そんなことから起ったのかもしれない。とにかくヘパイストスは鍛冶の神で、武器をきたえる役目をしている、神々の中でも指おりの勇士だったが、このためにびっこになったといわれる。そしてオリンポスの神々にとっては、彼が不具者になったことは、大きな痛手だったにちがいない。

こうした神々の仲たがいを見たギガンテスたちは、時こそ来れとばかり、さっそくフレグラ山地までおしよせて、オリンポスの山へ、猛烈な攻撃をくわえてきた。大地ガイアも大きな口をあけて火をふいて、さかんに巨岩をなげつけた。おかげで山は裂け、大地は震えおののき、みるみるオリンポスがたは苦戦におちいった。

神々と巨人との戦い――中央に雷電をふりあげるゼウスがみえる

ギガンテスの大将のアルキオネウスは勢いすさまじく叫んだ。

「さあ時がきたぞ！　神々どもをオリンポスからひきずり下して、われわれの仲間がなげこまれたように、タルタロスへ投げこんでしまえ。さあ美人のアフロディテやアルテミスを生捕りにして妻にしようじゃないか。おれはゼウスの妻のヘラをつかまえてやる！」

その時ゼウスは思いだした――あのプロメテウスが、神々は人間の助けがなくては巨人たちを負かすことができないと予言していたことを。

そこでゼウスは、さっそくアテナを使いにやって、ヘラクレスをよびよせた。なにしろ彼はあらゆる苦難にたえてすばらしい十二の難題をはたした、ギリシャ第一の英雄だったから。

ヘラクレスは戦場にかけつけると、まず第一にギガンテスの大将アルキオネウスを、毒矢で射てたおした。ところが、地にたおれると同時にアルキオネウスはまた生きかえって、前にもまさる勢いでうちかかってくる。フレグラの主のアルキオネウスは、いくど殺されてもフレグラの土にからだがふれると同時に生きかえる力をもっていたのだ。

それを見た女神アテナがいい忠告を与えてくれた。――あの巨人は早くフレグラの土地から外へひっぱっていくこと、ここにいるかぎりあの男は死なないのだから、と。

そこでヘラクレスは、アルキオネウスを肩にかついで国境をこえ、そこにアルキオネウスを投げだすと、れいの棍棒でさんざんになぐりつけて往生させた。

大将をうしなったギガンテスたちは、総くずれになってきたが、エピアルテスとオトウスの二人

は、なおも暴れくるって、ペリオン山の上にオッサ山をつみあげ、オリンポスの頂上めがけてよじ登ってきた。そしてまず戦いの神アレスをつかまえて真鍮の壺にとじこめてしまい、エピアルテスはヘラを、オトウスはアフロディテをつかまえて連れていこうとした。

ふたりの女神は悲鳴をあげて助けを求めたが、この巨人はおなじ巨人の手でなければ殺すことができないので、神々もヘラクレスもどうすることもできなかった。

しかしゼウスは、巨人は力こそ強いが少し頭が足りないことを知っていた。そこで、

「おまえたち二人のうち勝ったほうにアルテミスをやるぞ！」と叫んだ。

ふたりの巨人は、若くて美しいアルテミスを手に入れようと、猛烈な同士討ちをはじめた。その時アルテミスは、一羽の白鳩に身をかえると、二人の真中にさっと飛びこんだ。エピアルテスとオトウスは、めいめいその鳩をしとめようと、槍をなげつけた。しかし鳩はすばやく身をかわしたので、槍はたがいに相手の巨人の胸をぐさりとつらぬいてしまった。

こうして、ふたりの巨人は、あっけない最後をとげた。これを見たギガンテスたちは、くもの子をちらすように逃げはじめる。ヘラクレスは神々と力をあわせて、追いかけ追いすがり、残らずギガンテスたちを滅ぼしてしまった。

最後に残ったのはエンケラデスという巨人だったが、これも海を越えてイタリアへ逃げるところを、女神アテナに追いつかれて、山の下におさえつけられた。それでも彼はまだ生きていて、いまでも盛んに山の下から火をふきあげている。これが有名なベスビオス火山だとされている。

## †ヘラクレスの昇天

戦いは終った。ギガンテスたちは滅びて、神々は危いところを救われた。
大神ゼウスは、この戦いでたてたヘラクレスの大功をほめたたえて、彼を天上に迎えてオリンポスの仲間に入れてやろうとした。しかし、人間の血をうけているヘラクレスを天上に迎えることには、ほかの多くの神々が反対だった。
ヘラクレスはゼウスに別れをつげると、アルゴー船で一緒に旅をした仲間のネストルやティンダレオスを訪ねて、しばらく体をやすめてから、妻のデアネラが待っているトラキヤへ向った。デアネラは、メガラの死後に結婚した二度目の妻だった。
やがてトラキヤが近くなると、ヘラクレスはそこの浜辺に祭壇をきずいて、ぶじ故郷に帰れたお礼にゼウスの祭りをすることにした。ところがそんな場合にきる晴着を持ってきていなかったので、使いを家にやって取り寄せることにした。
ところが妻のデアネラは、疑いぶかい女だった。使いの者がきて、夫のヘラクレスが晴着を求めていることや、イオレーという美女をつれてきていることを聞くと、きっと夫は自分をすててこの娘と結婚するつもりなのだと、思いこんでしまった。じつはこの娘は、ヘラクレスが息子のヒュロスの妻にしようと考えてつれてきたのだったが。
思いちがいをしたデアネラは、夫の愛をとりもどすために、ケンタウロス族（上半身は人間で、下

ネソスを殺してデアネラを救うヘラクレス

半身は馬のすがたをした怪物）のネソスからもらった薬を使ってみることにした。

ネソスはエウエノス川を守っている怪物だったが、ある時ヘラクレスが妻子をつれてこの川を渡ろうとしたとき、デアネラを奪いとろうとしたため、ヘラクレスに弓で射殺されたのだった。ところが、その時ネソスはデアネラにこういった。

「お前の夫は、いまにお前にあきて、よその女に愛を移してしまうだろう。そんな時に夫の愛をひきとめたいと思ったら、このわたしの傷から流れでた血をまぜたある飲みものを飲ませてごらん。そうしたら夫は、きっとまたお前の許へかえってくるだろうよ。」

その言葉を信じたデアネラは、彼に教わった通りの薬を、ひそかにネソスの血にまぜあわせて作って、壺の中にしまっておいたのだ。

デアネラがいま思いだしたのは、この薬のこと

だった。彼女は壺のふたをあけると、ヘラクレスのところへ持たせてやる晴着をその汁にひたした。そしてこの晴着をきたら、きっとまた夫は自分を愛してくれるようになるはずと考えて、ひそかにほくそ笑みながら晴着を壺からひきだすと、使者にもたせてやった。そのとき、小さい布きれが壺の中に残ったので、それは庭に投げすてた。
　それからデアネラは窓べにすわって、また機をおりはじめたが、しばらくしてふと庭を見ると思わず「あっ！」と叫び声をあげた。さっき庭にすてておいた布きれが、日の光をあびて蛇のようにくねり、まるでぶどう酒のような赤黒いあわをふいて煮えたっているではないか。
　デアネラはいそいで息子のヒュロスをよんで、父親の様子を見にやった。しかし、ヒュロスがヘラクレスのところへ駆けつけた時は、もう手遅れだった。
　ヘラクレスがその晴着をきたとたんに、ネソスの血にまじっていた毒がたちまち全身にひろがって、火のように彼を焼きこがした。ヘラクレスは必死で晴着をひきはがそうとしたが、布は肉にはりついたままどうしても離れない。川にとびこんでみたが、毒はいよいよ勢いをまして、川じゅうを炎にして燃えさかった。
　ヘラクレスはまた川からとびだすと、今度は夢中で山の方へ走った。しかし、テッサリヤとアイトリアの境のオイタ山のところまできたとき、ついに力つきてたおれてしまった。
　ヘラクレスは駆けつけてきた息子のヒュロスに、大きな薪の山を築かせると、匍うようにしてその上によじ登り、全身焼けこげて傷だらけになった体を、その上に横たえた。いつも着ていたお気にい

りのライオンの皮を下にしき、これもお気にいりの棍棒を枕にして。
それからヘラクレスは、息子にいいつけた。
「わしの命は、もう終った。だが父のゼウスは、きっとわしを天にひきあげて、神々の仲間にいれてくれるだろう。ああ、ヒュロス、早く薪に火をつけてくれ。」
しかしヒュロスは泣いてばかりいて、火をつける勇気がなかった。それをしてくれたのは、そこを通りかかったピロクテーテスという若者だった。ヘラクレスはお礼に自分の弓矢をこの若者に与えた。薪の山は、すさまじい炎をあげて燃えあがった。
炎がヘラクレスの全身をつつんだ時、だしぬけに雷が鳴って、一陣の雲が薪の山の上へおりてきたかと思うと、そこにはもうヘラクレスの屍はなかった。ゼウスが空高く運んでいって、オリンポスの神々の中にこのギリシャ第一の英雄を加えたのだという。
ところで、ヘラクレスの妻のデアネラは、夫の愛をつなぎとめようとしてやったことがかえって夫を無残に殺してしまったことを知ると、悲しみのあまり首をくくったのだった。

## パリスの審判とトロイ戦争の始末

エギナ島の王ペレウスは、アルゴー船の遠征にも加わった勇士だけに、その結婚式は、神々をはじめ、あらゆるギリシャの英雄を招いた盛大なものだった。ところが、争いの女神エリスは敬遠されて、招かれなかった。それに腹を立てた女神は、「最も美しい人におくる」と書いた金のりんごを、集まった客の真中に投げこんだ。その席には、自分こそ第一の美女と自任していた、ヘラ、アテナ、アフロディテの三人がいたから、たまらない。三人の間には、たちまち争いが起った。裁きにこまった大神ゼウスはいった――君たち三人の誰が一番美しいかは、トロイ王の息子パリスに、裁いてもらうがいい、と。

パリスはイダ山の上で、父親の家畜の番をしていた。女神たちはりんごをもってそこへ出かけていき、それぞれ若者の機嫌をとって、自分の味方にしようとした。ヘラは、もし自分を一番の美女だとしてくれたら、この上ない権力を握らせてやろうといい、アテナは名声を約束したが、アフロディテは世界一の美女を妻にしてやろうといった。ところでパリスは、美の女神アフロディテの言葉に動かされて、金のりんごを彼女に与えた。

この約束に従って、やがてパリスはスパルタのメネラオス王の王宮を訪ねた時、世界一の美女とい

パリスの審判——パリス，ヘルメス，アテナ，ヘラ，アフロディテ

われた妃のヘレナを、王の留守中に美の女神の援助でくどき落して、故郷のトロイにつれ帰った。帰国して妻の不実と友の裏切りを知ったメネラオス王は、復讐の軍を起した。メネラオスの兄弟のアルゴス王アガメンノンを総大将に、かねてからのヘレナの父親ティンダレオスとの約束によって、全ギリシャの英雄——ペレウスの息子の無敵の勇士アキレウスや、ずる賢い知恵者のオディッセウスや、アイアス、ネストルその他——が、こぞって参加した。これが有名なトロイ戦争の起りであった。

ところで総大将アガメンノンは、ギリシャ軍の船がアウリス港で勢揃いしている間に、狩りに出て、アルテミス女神のお気に入りの牡鹿を殺したことから、女神の怒りを受けて風がやみ、船が出せなくなった。神託はアガメンノンの娘イフィゲニアを犠牲にすべきことを命じた。こうして、いよいよイフィゲニアが祭壇に導かれた時、女神は身代りの鹿を送って娘をどことなく運び去った。艦船はようやく海を越えてトロイに行き、スカマンドロス川の河口に陣をはることができたが、こんなことでもギリシャ軍を待ちうけている運命の容易でないことが知られた。ギリシャ軍は

勇敢に戦ったが、トロイ方にもプリアモス王の長男ヘクトルをはじめ多くの勇士がいて、防戦これつとめたし、その背後にはアフロディテと、アルテミスの兄弟のアポロンがついていたからである。一方ギリシャ軍の背後には、パリスを憎むヘラとアテナがついていた。

ホメロス作といわれる『イリアス』は、この戦いがいよいよ最後に近づいた十年目の様相をギリシャ方第一の勇士アキレウスと、トロイ方第一の勇士ヘクトルの一騎討を中心に描いたもの。アキレウスは、自分の愛妾ブリセイスをアガメンノンに奪われた怒りから、戦場を退く。たちまちギリシャ軍は旗色が悪くなり、トロイ方はヘクトルの指揮の許にギリシャ軍の陣地まで押しよせて、それに火をつける。見かねたアキレウスの親友パトロクロスが、友の武器を借りて出撃し、敵を撃退するが、ついに彼もヘクトルの手にかかって死ぬ。親友の仇をうつべく、アキレウスはついに鍛冶の神ヘパイストスに新しく鍛えてもらった武器をとって、もう一度出陣、ヘクトルに一騎討をいどむ。彼は逃げるヘクトルを追って三度トロイの城壁を回

アキレウスとアイアス

木　馬

り、ついにはげしい決闘の末これをたおすと、その屍を戦車にひかせて街上を引き回し、敵の見せしめにする。夜に入って父王プリアモスが彼のテントに忍んできて、跪いて息子の屍を乞う。屍は野に捨てて野犬や鳥の食いちらすままにゆだねるつもりだった鉄のような英雄の心も、傷心の老王の言葉に動かされ、いずれは死すべき人間のはかない運命を思って、悲しみと同情にとける。やがてヘクトルの屍は、清らかな白衣に包まれて城内に送りとどけられる。

『イリアス』はそこで終っているが、戦いはまだ続き、ヘクトルの死にもかかわらず、ギリシャ軍にいっこうに運は向いてこない。アキレウス自身も、やがてアポロンの導くパリスの放った矢に命を落してしまう。パリスもついにたおれるが、状勢はあまり変化しない。しかし、ついにトロイの運命がつきる日がくる。これにはずる賢いオディッセウスが主役を演じる。

これらのアキレウスの死やトロイ落城の経過は、主にローマの詩人ウェルギリウス（ヴァージル）の『エネイス』に歌われている。

戦いが長びいて、味方の旗色が悪くなるばかりなのにいらだったオディッセウスは、一計を案じてディオメデスという友とともに変装して敵城にもぐりこみ、トロイ市の守り神であるアテナ女神の木像パラディオンを運び出してしまう。それから巨大な木馬をつくらせ、その腹の中に五十人の屈強の勇士を忍ばせておいて、陣地を焼きはらって船にのって海に出る。オディッセウスの親戚のシノンという男一人が岸に残っている。

トロイ方は突然敵が引き上げたのを見て、怪しみながらも喜んで、城門を開いて出てくる。残っていたシノンを捕えて聞くと、彼は語った——ギリシャ軍は神像パラディオンを盗んだことでアテナ女神のはげしい怒りを買ったため、女神の怒りをしずめるために神託をうかがったところ、こういう木馬を作って彼女に献じて、生きた人間を犠牲にささげることになり、自分がその犠牲にえらばれたのだが、危く身を隠してそれを免れたのだ。この木馬を破壊したら、アテナの怒りを招いて、ギリシャ軍は喜ぶだろうが、トロイのためにはなるまい。これを市内に運びこんだら、女神は大いに喜んで、トロイを祝福をしてくださるだろう、と。

トロイの人々は、少しも彼の言葉を疑わずに、さっそく木馬を市内に運びこもうとした。ただ、プリアモス王の娘カッサンドラと、アポロン神殿の司祭ラオコーンが反対して警告したが、カッサンドラの警告には、誰も耳をかさなかった。（彼女はアポロンの愛をうけて予言の力を授かったが、のち人間の愛にみかえてアポロンを裏切ったため、神は怒って彼女の予言には誰も耳を傾けぬようにした。戦いが終って、彼女は捕えられてアガメンノンにつれられて行き、悲劇的な死をとげる。）つい

で、神官ラオコーンが戒めの言葉を発したが、するとたちまち、二頭のすさまじい蛇が海から出てきて、彼とその二人の息子をぐるぐる巻きにして殺してしまった。これはおそらくトロイに敵意をもつポセイドンが送ってよこした蛇だったが、トロイ人たちの目には、ラオコーンの不信が神に罰されたものとうつった。こうして彼らは、いまは喜びいさんで木馬を城内に運びこんだ。

夜のあいだにいったん退いたギリシャの艦船は、シノンの合図でふたたび陸地に近づき、夜明けと共に新しく攻め寄せた。木馬からとび出した兵士たちは、さっと城門を開いて彼らを迎え入れた。すさまじい全滅戦がはじまった。まったくの無防備だったトロイ方は、ばたばたとたおれ、老王プリアモスは殺され、ヘクトルの幼い息子は城壁から投げおろされて死に、妻のアンドロマケは身を投じて死んだ。そしてメネラオスは、パリスに奪われたヘレナを取り戻してスパルタに帰り、こうしてさしものトロイ戦争も終る。

## オディッセウスのさすらい

詩神(ムーサイ)よ、語れ、トロイの聖なる都を奪った後、さまざまの地方をさまよいつつ、危機に際して即応の智をはたらかした人（主人公オディッセウスをさす）のことを。彼は多くの人々の都府を見、彼らの心の機微をも知りぬき、おのれの命も救い、部下をもぶじにつれ戻そうとして、海上で幾度か心を苦しめたのであった。（ホメロス『オデュッセイア』）

トロイは滅びたが、そのあとギリシャ軍が幸福に故郷に帰りついたかというと、そうではなかった。彼らは怖ろしい嵐にあって、総大将のアガメンノンは、率いていた艦船の大部分を失い、それでもようやく帰国したが、留守中にアイギストスと通じていた妃のクリタイムネストラの手にかかって無残な最後をとげた。スパルタのメネラオスは、エジプトまで吹き流された。こうしたギリシャ軍の不幸は、後の詩人アイスキュロスなどの見るところでは、トロイ落城に際してのギリシャ軍の理性をはずれた行為が、神々を怒らせた結果であった。トロイ落城の立役者であったオディッセウスがひどい苦難にあって、長いあいだ海上をさすらわなければならなかったのも、当然であったろう。ホメロスの『オデュッセイア』は、そういう彼が故郷イタカの島へ帰りつくまでの十年間のさすらいを歌っ

た作だ。

彼はまず嵐に吹き流されてトラキヤにつくが、そこには狂暴なキコーン人がいて、彼らとの戦いでオディッセウスは七十二人の部下を失う。そこをどうやら切りぬけてまた船を出すが、今度はリビアの蓮食い人の国に吹きつけられる。そこの蓮の実を食べると、人間は故郷を忘れてしまうのだが、様子を見にやった三人の使者はそれを味わって、帰ることを忘れてしまう。やっと部下を引き立ててその国を去ると、一つ眼の巨人ポリフェモスの国について、岩穴にとじこめられる。それでもオディッ

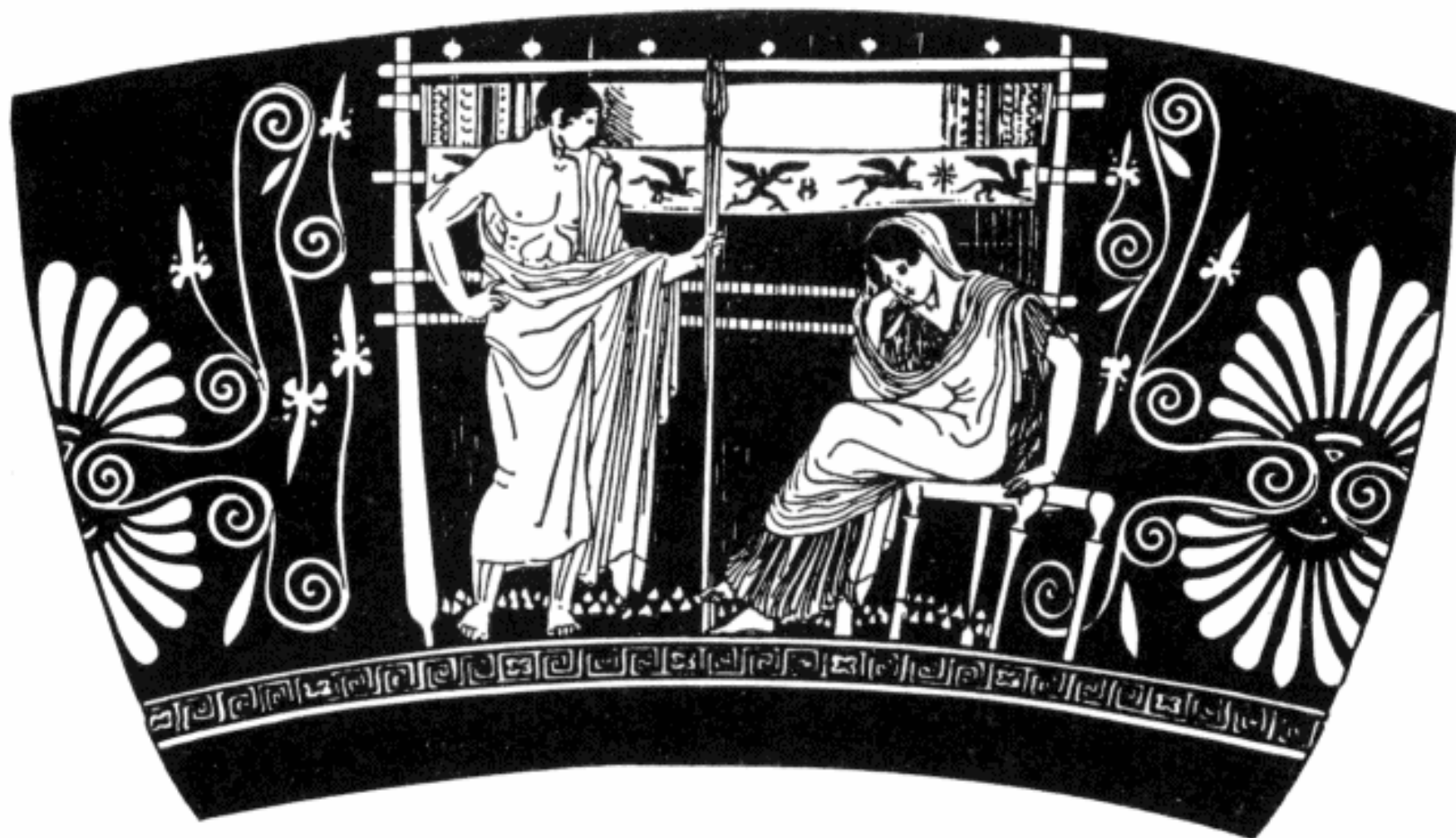
眼をつぶされるポリフェモス

セウスは、彼の眼をつぶして盲にした上で、彼の飼っていた羊の腹の下にしがみついて巨人の許をすりぬけて逃れたが、怒った巨人が父親のポセイドンに訴えたため、一行ははげしい嵐に襲われて、さんざんに海上を漂わされる。ようやく風の神エオロスの国に行き、乱暴な風どもを袋にとじこめてもらい、そこで船はどうやらイタカの島に近づく。ところが、部下が袋の中には宝が隠してあるものと思って袋の口を開いたことから、船はまた吹き流されて人食い人種の島につく。ここで十

オディッセウスとシレーン

二隻の船のうち、オディッセウスの乗っていた一隻を除いて、みな難破して命を失う。やがてオディッセウスたちは一つの島についたので、使者を出して様子を見させるが、島の主人の魔女キルケは彼らを豚に変えてしまう。しかしオディッセウスは、ヘルメスからもらった薬草のおかげで、魔法をのがれたばかりでなく、部下をまた人間に戻してもらい、美しい魔女の愛人になって丸一年を過す。

とうとうしびれを切らした部下たちにせきたてられて、オディッセウスはまた船出をする。キルケのすすめで、オケアノスの向うの死者の国を訪ね、死者の霊と語りあって、いろいろの英雄の運命や、自分の故郷の様子をきく。故郷では、父親のラエルテス、妻のペネロペ、息子のテレマコス、みな変りないという。予言者ティレシアスの霊は、もしオディッセウスがアポロンの牛に手をふれなければ、たとえポセイドンの敵意があっても、ぶじイタカに着けることを予言する。

こうして元気を取り戻した一行は、また旅を続ける。美しい歌声で船人を惑わすシレーンの島を通りすぎる時には、オディッセウスは部下の耳に蠟の栓をつめ、自分は船のマストに身を縛りつけて、難をのがれる。しかし、怪物カリブデスとスキラのいる難所では、部下の六人が呑みこまれてしまう。つぎには、アポロンの牛のいるトリナキエー島につくが、風がないため、一カ月も船出することができない。部下たちは空腹にせまられて、オディッセウスの厳禁にもかかわらず、彼が眠っている間に、牛を殺して食う。ために船はゼウスの電光にうたれて沈没し、オディッセウス一人を除いて死に、彼は美女カリプソーの島に漂着する。彼女は巨人アトラスの娘だが、オディッセウスにはげしく恋して、自分の許にいつまでも留まってくれるなら永遠の若さをやろうという。彼はこうして七年を彼女の許で幸福に暮すが、故郷へのあこがれは強くなるばかりで、日ごとに浜辺に出て故郷の方を望みながら、帰国を神に祈る。

ペネロペとテレマコス

ついに彼の祈りは聞き届けられ、ヘルメス神がやってきてカリプソーに彼を手放すことを命じる。彼は自分で船を作って海に出るが、まだ怒りをおさめないポセイドンのために船はくつがえり、パイアケス人の島に漂着する。浜辺に遊びにきていた王女ナウシカアがそれをみつけて、王宮につれて行き、彼はここで栄誉をもって遇され、やがて自分の冒険と漂泊を語って国へ送り返されることになる。

船は夜明け前にイタカ島につき、船員たちはまだ眠っているオディッセウスを陸に上げるが、船は怒ったポセイドンのために石に変えられ、眠っているオディッセウスにアテナ神が現われて彼の留守のうちに妻ペネロペがどんなに求婚者に悩まされているかを告げる。ペネロペは彼らの追求がことわりきれず、老王ラエルテスの屍衣が織り上ったら彼らの一人を夫に運ぶと約束するが、彼女は昼間織った布を夜ときほぐして、結婚を引きのばしているのだった。

目がさめたオディッセウスは、乞食に身をかえて豚飼いエウマイオスの小屋を訪ねる。

そこへ、父の行方を捜して旅に出ていた息子のテレマコスも帰ってきて、たがいに名のりあい、共どもにペネロペの求婚者どもを片づける相談をする。その間にペネロペの計略は求婚者の一人に見破られ、いよいよ夫選びの宴会を開かなければならなくなる。彼女は夫オディッセウスのひいた強弓を持ち出して、これをひけた者を夫に選ぶという。みなはそれを試みるが、誰にもひけない。

そこへ乞食姿のオディッセウスが現われて、やすやすとそれをひいて見せ、ついで求婚者たちを片っぱしから射殺する。こうしてオディッセウスは、ふたたびイタカの王として、忠実なペネロペと幸福な生涯を営むのであった。

# 説き残した主な人物たち

## †アスクレピウス

　医療の神で、アポロンがテッサリヤの美女コロニスとちぎって生んだ子ともいわれる。ところがコロニスは、神聖な愛人を裏切って人間の恋人をつくった。アポロンの召使いのからすがそれを知って、主人に告げた。怒りにくるった神は、それまで雪白の羽をもっていたからすを呪ったため、以後からすは羽が真黒になったのだという。もちろんコロニスは罰をうけて殺された。アポロン神、あるいはアルテミスの矢に射られて。
　しかしアポロンは、愛人の屍が薪の上にのせられて焼かれた時、あわれみにとらえられて、まだお腹の中にあった子だけは救いだして、ペリオン山の洞穴に住む半身半馬のケンタウロスのキロンに養育を託した。キロンは親切な賢い老人で、それまでにも多くの英雄を育てた（アキレウスもその一人）が、このアポロンの子アスクレピウスはなかでも気に入って、あらゆる知識を授けた。キロンはわけても薬草の知識にすぐれていたが、この弟子はまもなく養父をしのぐようになり、あらゆる病人や不具者を助けてやった。ある時などは、もはや死んでいる人間を生きかえらせてやった。（それは

テセウスの息子のヒッポリタスだったといわれる。)

ところが、死者を甦らすとなっては、人間の身分をこえた出すぎたわざだ。それでは地下のハデス王の仕事がなくなってしまう。そこでゼウスは、れいの雷を投げつけてアスクレピウスを殺してしまった。ここから、今度は愛息を殺されたアポロン神と、大神ゼウスの間に戦いが起るのだが、それはとにかくアスクレピウスは、死後いよいよ人々の尊崇を受けて、エピダウロスに建てられた彼の神殿には、彼の助けを求めて訪れる病人や不具者の巡礼がひきもきらなかった。彼らは神殿で祈って犠牲をささげ、眠りにつく。すると、夢にアスクレピウスが現われて、どうすれば病気や不具者が癒えるかを教えるのだった。蛇が彼の神聖な召使いであった。

### †イフィゲニア、オレステス、エレクトラ

いずれもトロイ戦争のギリシャ軍の総大将アガメンノンと、妃クリタイムネストラの子供。悲劇的運命をになったことで、すでにホメロスの作中に扱われているが、ことに悲劇作者たちに注目されて、アイスキュロスの『オレステス三部作』、エウリピデスの作などの中心人物になり、その後のヨーロッパ文学でもしばしば扱われている。

長女イフィゲニアが、トロイ戦争開始に先だって、アウリスの港で父親によって犠牲にささげられそうになったところを、危くアルテミス女神の情けで救われたことは、前に述べた。彼女はタウロス(クリミヤ半島)に運ばれて、そこでアルテミスの神殿の神官になっている。

トロイ戦争から帰って、アガメンノンが妃とその情人アイギストトスに殺された。(それはホメロスでは二人の邪恋の犠牲になったものとされているが、アイスキュロスは娘を犠牲にされた母親の怒りによる復讐のモメントを強調する。) エレクトラとオレステスはまだ幼かった。エレクトラは弟の生命も危険に瀕しているのを見て、彼を叔父のフォキス王ストロフィオスに託す。彼女は王宮で虐遇にたえながら、弟がやがて成人して、父の仇をうちに来てくれる日を待ちくらす。オレステスはその地で従兄弟のピラデスと一緒に育てられ、無二の親友となって、長ずるに及んで父の仇をうつべくアルゴスをめざす。

しかし、殺された父の仇を討つことは、当時の至上の義務である一方で、息子が自分の生みの母親を殺すことは、神ひとともに許さぬところの大罪であった。そこにオレステスの悲劇がある。彼はこの二つの選択の間に苦悩して、デルフォイに旅してアポロンの神託をうかがう。と、アポロンは厳かにつげる――

殺した二人を殺せ
死を死によって償い
流された古い血のために、新しい血を流すのじゃ

彼の決心はきまる。自分の身が滅びようと、父の仇を討って二人を殺すことにふみ切る。彼はピラ

オレステス，アイギストスを殺す

デスを伴ってアルゴスの宮廷にき、そこでエレクトラとも一緒になって、ついに父の仇アイギストスを殺し、ついで、「おお、息子よ、わたしの胸をごらん。お前のまだ歯のはえていなかったあどけない口が、この胸から乳をのんだのだよ。」と叫んで死を逃れようとする母親をも、ピラデスに励まされて刺し殺す。

しかし、母親殺しの大罪は彼を狂気させる。彼は復讐の女神エリニュスたちに追いかけられて、国から国へと安息なくさすらう。

彼がついにデルフォイに行ってふたたび神託をうかがうと、タウロスの国にあるアルテミスの神像を奪ってアッチカに持ってくるなら、罪から浄められるとのこと。そこでタウロスに出かけて行くが、国人に捕えられて危く人身御供として供えられるところを、神官をしていた姉イフィゲニアに見出され、アテナ女神の援助で神像も手に入れ、共々に脱出してアッチカに来る。

アテナイの集会所で彼の審判が行われ、審議員の半分は無罪を主張するが、半分は母殺しの大罪は許せぬとして死刑を要求する。そのとき、アテナ女神が無罪の白票を投じて、ここに彼は罪から解放

されて潔白の身となる、というのが大体の経過。

## †オイディプスとアンチゴーネ

テーバイの王家のオイディプスとアンチゴーネの悲劇は、アガメンノンの子たちのそれと並んで、最もギリシャの悲劇詩人たちをひきつけたものだ。ソフォクレスの『オイディプス王』は、おそらくギリシャ悲劇で最も深刻で美しいもの。彼はなお『アンチゴーネ』や、『コロノスのオイディプス』を書いたし、エウリピデスその他の作品も、しばしばこれに材をとっている。その後もヨーロッパ文学では、絶えず扱われてきた。最近はまたフロイトが、れいの精神分析学で、あらゆる男性には自分の母を慕って父親をないものにしたい欲望があるとして、それをオイディプス・コンプレックスと呼んだりして、オイディプスの名前はいよいよ高くなっている。

彼はテーバイ王ライオスの息子。王はあるとき、デルフォイのアポロン神から警告をうけた——お前は息子に殺される運命にあると。そこで妃イオカステが息子を生むと、その子の足をピンで刺しつらぬいておいて、山に（一説では海に）捨てた。しかし、子供は牧人に拾われて、コリントの宮廷にとどけられ、王ポリボスの子として育てられることになり、〈足が腫れている子〉という意味でオイディプスと呼ばれる。

やがて成人したオイディプスは、自分の生い立ちに疑念をもつようになる。デルフォイの神託をうかがったところ、お前は父を殺して自分の母を妻にするようになるといわれる。まだポリボス夫妻を

実の父母と思っていた彼は、二度とコリントに帰らぬ覚悟をして旅に出て、テーバイへ向う途中、ある険路で実父ライオスと出あう。王から高びしゃに道をよけろといわれ、実父とも知らずこれと争って、ついに殺してしまう。デルフォイの神託の半ばが実現したのだ。

テーバイの近くに来ると、そこには顔が女で身体がライオンの怪物スフィンクスがいて、旅人を待ち伏せては謎をかけ、その謎がとけぬと断崖から蹴落して殺している。怪物はオイディプスにも謎をかけるが、彼はたやすくといてしまう。謎は、「朝には

オイディプスとスフィンクス

四足で歩き、昼には二本足になり、夕は三本足になる生物は何か」というのだが、その答えは「人間」だった。赤ん坊の時ははって歩き、成人すると二本足で歩き、老年には杖をついて三本足になるからだ。謎を答えられたスフィンクスは、恥じて自ら断崖に身を投じて死ぬ。

ところでテーバイでは、ライオス王が死んだ後、摂政をしていた妃のイオカステの兄弟のクレオンが、怪物スフィンクスを退治した者には、先王の妃イオカステと王位とを与えると布告していた。こうしてオイディプスは故郷の町に迎えられ、母と婚して王位につく。デルフォイの神託は、かくして

完全に実現する。

その結婚から、ポリネイケスとエテオクレス、アンチゴーネとイスメネーの二男二女が生まれるが、父殺しと不倫の結婚は呪いを受けずにいない。まもなくテーバイは恐ろしいペストや飢饉に襲われる。ふたたび神託をうかがうと、ライオス王の殺害者を町から追放せよと告げられる。そこでオイディプス王は熱心に殺害者を捜すが、結局は自分自身が父親を殺して実の母と結婚したのだとわかり、妃イオカステは絶望して自らくびれて死に、オイディプスは自ら眼をえぐりだす。町を追われた盲目のオイディプスは、娘アンチゴーネに手をひかれて国々をさまようが、最後にテセウスに迎えられて、アッチカのコロノスの神聖な森で平和を見出し、雷鳴とどろく中に安らかに生涯をとじる。最も不幸な生涯を送り、辱しめられ卑しめられて、家もなく国々をさまよった老人は、最後に祝福をうける。彼の屍を埋める地は神々の恵みを受けるというアポロンのお告げを、故郷から娘イスメネーがもたらしたのであった。

さてアンチゴーネは、妹イスメネーと父を手厚く葬った後、故郷テーバイに向うが、テーバイではその間に兄弟が争っていて、追放されたポリネイケスは、アルゴス王アドラストスなど六人の主領を仲間にして、テーバイに攻めこむ。これがテーバイ対七将の戦いで、アイスキュロスやエウリピデスが扱っているところ。

結局戦いはテーバイ方の勝利に終り、ポリネイケスをはじめ七将はアドラストスを除いてたおれ、テーバイ王になっていたエテオクレスも死ぬ。摂政クレオンはポリネイケスの屍を葬ることを禁じ、

その命令にそむいた者は死罪にすると布告するが、アンチゴーネはそれを無視して兄の屍をひそかに葬り、刑場の露と消える。

## †ヘロとレアンダー

レアンダー（レアンドロス）は、ヘレスポント海峡にのぞむアビドス市の若者だった。ある祭りの晩に、彼は対岸のギリシャ側にあるセストスのアフロディテの女神官ヘロと知りあい、深く愛しあう仲となる。毎夜彼はセストスの灯台の光(あるいは愛人が塔の上で燃やすたいまつの光ともいわれる)をたよりに、海峡を泳ぎこえて、女のもとに通った。

ところが一夜、嵐のために火が消え、レアンダーは方角を見失って溺れ、屍はヘロの住む家の塔の下に打ち上げられる。それを見た女は、悲しみのあまり塔から身を投げて死ぬ。――もっとも、これはずっと後のヘレニズム時代の神話。

## †ミダス王

フリギアのミダス王については、二つの面白い話が伝えられている。

フリギアはばらで名高い国なので、ミダス王は当然すばらしいばら園をもっていた。

あるときこのばら園に、サチュロスの仲間のシレヌスが迷いこんだ。バッカスのお伴をして歩いているうちに、酔っぱらって道に迷ったのだ。太っちょのおかしな老人がばらの木蔭で酔っぱらってい

るのを見つけて、ミダス王の召使いたちが、ばらの花環を首にかけ、頭に花冠をかぶせて、王のところへつれて行った。王はその姿をおかしがって、大いに彼を歓待し、十日間王宮で過させた後に、バッカスのところへつれて行ってやった。バッカスはシレヌスが帰ってきたのを喜んで、ミダス王に何でも望みをかなえてやろうといった。欲ばりで何よりも黄金がすきなミダス王は、ここぞとばかり、せきこんでいった。

「手にさわるものが、なんでも黄金に変るようにしてください。」

バッカスは笑ってその願いを聞きとどけてくれたが、王は自分の願いがどれほどばかげた、しかも危険なものであるかを、さっそく次の食事の時に経験しなくてはならなかった。というのは、王が口に入れようとして手に取ると、食べものも飲みものも片っぱしから黄金に変ってしまうからだった。飢えと渇きに死ぬほど苦しめられて、王はたちまちバッカスのところへ急いで、先ほどの願いはどうか取消しにしてくださいと願うしかなかった。

バッカスはいった。パクトロス川の源で身を洗うがよい、と。ミダス王はいわれた通りにした。そんなわけでこの川の砂には黄金がまじっているのだという。

また、あるとき彼は、アポロンとパーンが音楽家としての腕くらべをした時に、その審判官に頼まれたが、彼には素朴なあし笛の方がアポロンの銀の竪琴の響きよりも気にいったので、パーンに勝ちを与えた。アポロンは怒って、

「なんてお前の耳はばかな耳だ。そんな耳はろばの耳になるがいい。」

と呪った。たちまち彼の耳は、ニョッキリと突き立った、毛むくじゃらの耳になった。
ミダス王はそれを恥じて、いつでも特別づくりの帽子をかぶってそれを隠していたが、理髪師にだけは隠すわけにはいかなかった。王は、決してその秘密を他人にもらしてはならぬと、床屋に厳命した。床屋は決して他言しないことを王に誓ったが、どうしても口に出したくてたまらない。秘密を抱いている重みに、おしつぶされそうだ。さりとて他人に話したら、命がない。
とうとう彼は、野原へ出ていって穴を掘り、その穴の中へ、
「王様の耳はろばの耳。」
と、そっといって重荷をおろし、また穴を埋めた。
ところが、春になると、そこにあしが生えた。そのあしは、風が吹くとささやいた——「王様の耳はろばの耳」と。ばかなミダス王は、床屋に口どめをしてそれで自分の秘密が守れるものと思ったのだが、秘密は風のひと吹きでさらけだされてしまったのである。

# 北欧神話

一段目＝戦場をとびまわるワルキューリとわし
二段目＝オーディンの八本脚の馬スレイプニール
三段目＝ワルハラへの葬列
四段目＝ヴァイキングの船

### †ゲフィオンの国引き

いまスウェーデンとよばれている国を、そのころギルフィという王がおさめていた。この王については、こんな話がいいつたえられている——。

一夜、王はひとりの旅の婦人と語りあって、とてもたのしい思いをした。そこで、後朝（きぬぎぬ）の贈物に、じぶんの領地のうちから四頭の牛が一日一夜で掘り起しただけの土地をやる約束をした。

ところが、このゲフィオンという婦人は、じつはアサの神々のひとりだった。彼女は遠い北の巨人の国へいって四頭の牡牛をつれてきたが、この牛というのは彼女が巨人とのあいだに生んだ自分の息子たちだった。彼女がその牛たちを一つの大きな鋤につなぐと、牛は勢いよくひっぱり、鋤は大地ふかく食いこんだ。こうして切りとった大地を、牛どもはぐいぐいと南の海までひっぱっていき、やがてそこの海峡の真中でとまった。

ゲフィオンはそこにその土をおろすと、しっかりとそれを踏みかためて一つの島をつくってシェーラン島と名づけた。一方、大地をえぐりとられた場所には、大きな湖ができた。いまスウェーデンで

いうメーラル湖だ。だから、メーラル湖の入江になっているところと、シェーラン島の出っぱっているところは、ぴったりと重なる。詩人のブラギはうたっている——

ゲフィオンは意気揚々と
黄金の土地をギルフィから奪って行く
牛は鼻いきあらく鋤をひき
遠くデンマークの岸をめざす
その四つの頭には
八つのひたいの星（目のこと）をかがやかして
牧場の島の前面に
遠くからのぶんどり品をはこぶとき

北欧の神話と伝説を書きしるした古い本としていちばん有名な『エッダ』(散文のエッダ）は、こんなふうに書きはじめられている。書いたのは、十二世紀から十三世紀はじめのアイスランドの詩人で、のちに島の大統領のような地位についたスノリ・ストルルソン（一一七九ー一二二四年）。北欧神話についてはその後いくらも本がでているが、それらはほとんどすべて、このスノリの本をもとにしている。だからここでも、できるだけこの本をもとにして書いていってみよう。

## †主神オーディンとミーミルの泉

さて、これらの神々はアサ神族とよばれて、アスガルド（アサ神の園）という美しい天上の都に住んでいると考えられた。そのアスガルドは、宇宙をつらぬいてそびえるイグドラシル（宇宙樹）という巨大なとねりこの木の上にあって、いくつもの大きい宮殿が雲にそびえ、宇宙の中心だとされた。

アスガルドの首領はオーディン（ドイツやイギリスではウォーダン、あるいはウォータン）とよばれる。〈万物の父〉〈戦いの父〉〈あら猟師〉〈片目の男〉その他いろいろの呼び名があって、神々と人間の世界を支配している。きらきら輝く金のかぶとをかぶり、青空色のマントを着て、真白いひげをはやし、片方の目はつぶれているが、もう一方の目は何物をも貫くほど鋭い光をはなっている。

アスガルドの彼の宮殿の玉座からは、全世界を見わたすことができる。オーディンはよくここに坐っては、そのけいけいたる片目で、山々や谷や海をこえて、遠くの世界のはてまで見わたす。人間の町々、村々、田畑で働いている人や動物、戦場で戦っている人々、なにひとつ彼の目をのがれるものはない。そして人間の住むミッドガルド（中の国）の向うには、黒々とぶきみに巨人の国ヨツンヘイムがひろがっている。そこは高い山々とあやしい谷々におおわれ、見るからにすさまじい姿をしていて、そこに住む霜の巨人や山の巨人は、いつでも神々や人間に害をくわえよう、これを滅ぼしてしまおうと、すきをうかがっている。だからこそオーディンは、いつでもアスガルドや人間の世界をまもるために、見はっていなくてはならない。

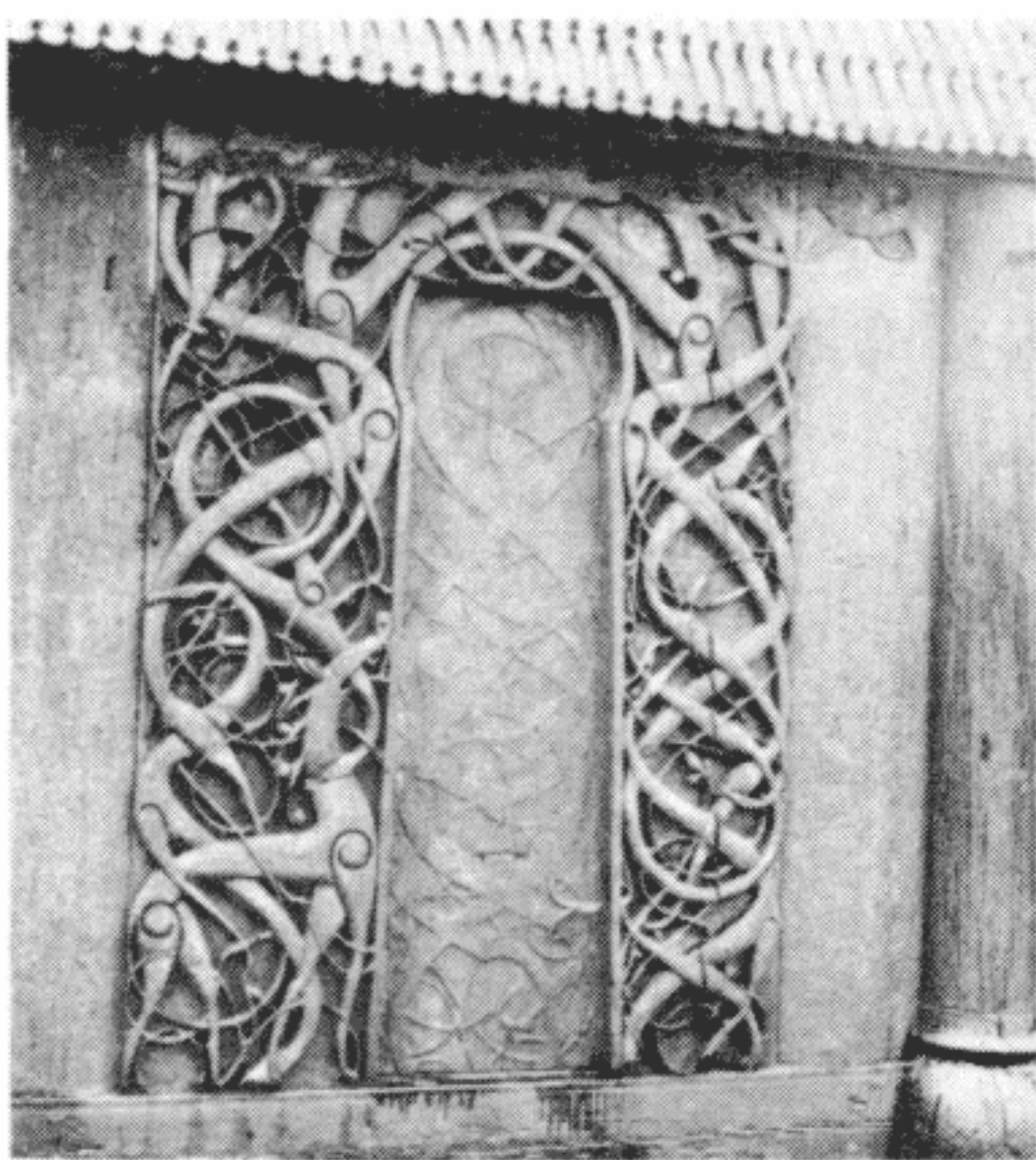
また山々の岩のわれめなどには、黒い小人の種族が住んでいる。彼らは鍛冶の術にたくみで、金銀や鉄や宝石で、さまざまの宝をつくる。

オーディンの両肩には、二羽の大がらすがとまり、その足もとには、二匹の狼がうずくまっている。大がらすはフギン（思想）とムニン（記憶）という名まえで、朝がくるとオーディンの肩からとびたって世界をとびまわり、夕方になるとまたオーディンのところへもどってくる。

オーディンは彼らから世間のできごとをきいて、いながらにして世界の様子を知り、知識をます。じぶんでもしばしば旅にでて、人間のあいだをめぐり歩き、弱い者を助けたり、傲慢な者をこらしめたりする。そんな時には片眼のことを知られぬように、よくつばの広い帽子をまぶかにかぶり、百姓めいた姿をして出かける。彼の愛用するのは八本の脚をもったスレイプニールという魔の馬だ。

オーディンは神々の首領だから、もちろん剛勇な戦士でもあるが、ことに知恵と魔法にすぐれている。彼が片目を失ったのも、じつはこの知恵を求めた結果であった。

さきにいったように、イグドラシルという巨大なとねりこの木が、神々の世界アスガルドをのせ、宇宙をつらぬいてそびえている。木には三本のふとい根があって、一本は神々の世界に、一本は巨人の国ヨツンヘイムに、もう一本は死人の国ニフルヘイム（〈霧の国〉という意味）にのびている。

この木の根もとに二つの泉がある。一つはウルドの泉といって、それをノルンという三人の姉妹が守っている。彼女らは神々と人間の運命をあずかっている女神で、生まれてくる人間の寿命や、幸不幸をさだめる。そして、日ごとにウルドの泉から水をくんでは、その水をイグドラシルの木にそそい

でいる。そうしないと、ニドホグという毒龍が木の根を日ごとにかじっているので、世界樹は枯れ、神々と人間の世界は滅びてしまわなくてはならないからだ。この泉には、二羽の純白な白鳥がおよいでいる。神々はいつもこの泉のそばで会合をひらく。

もう一つは、ミーミルの泉といって、巨人のミーミルがこれをまもっている。この泉の水には、知恵と知識がたくわえられているので、日ごとにこの水をのむミーミルは、世界の誰よりも知恵があった。

さて、ある日オーディンは、もっと知識をふやしたいと思い、この泉にミーミルを訪ねていった。

教会に刻まれたイグドラシル

「ミーミルよ、わしはもっと知識を富ませたいのだ。どうか、きみの泉の水を飲ましてくれ。」

「そんなにこの泉が飲みたいのか。だが、容易なことでは飲ましてやれないぞ。」

と、ミーミルはいった。

「どういうお礼をすれば飲ましてくれるかね。」

と、オーディンはきいた。

「おまえの片目をよこすなら、一口飲ましてやろう。それ以外のことではだめだ。」

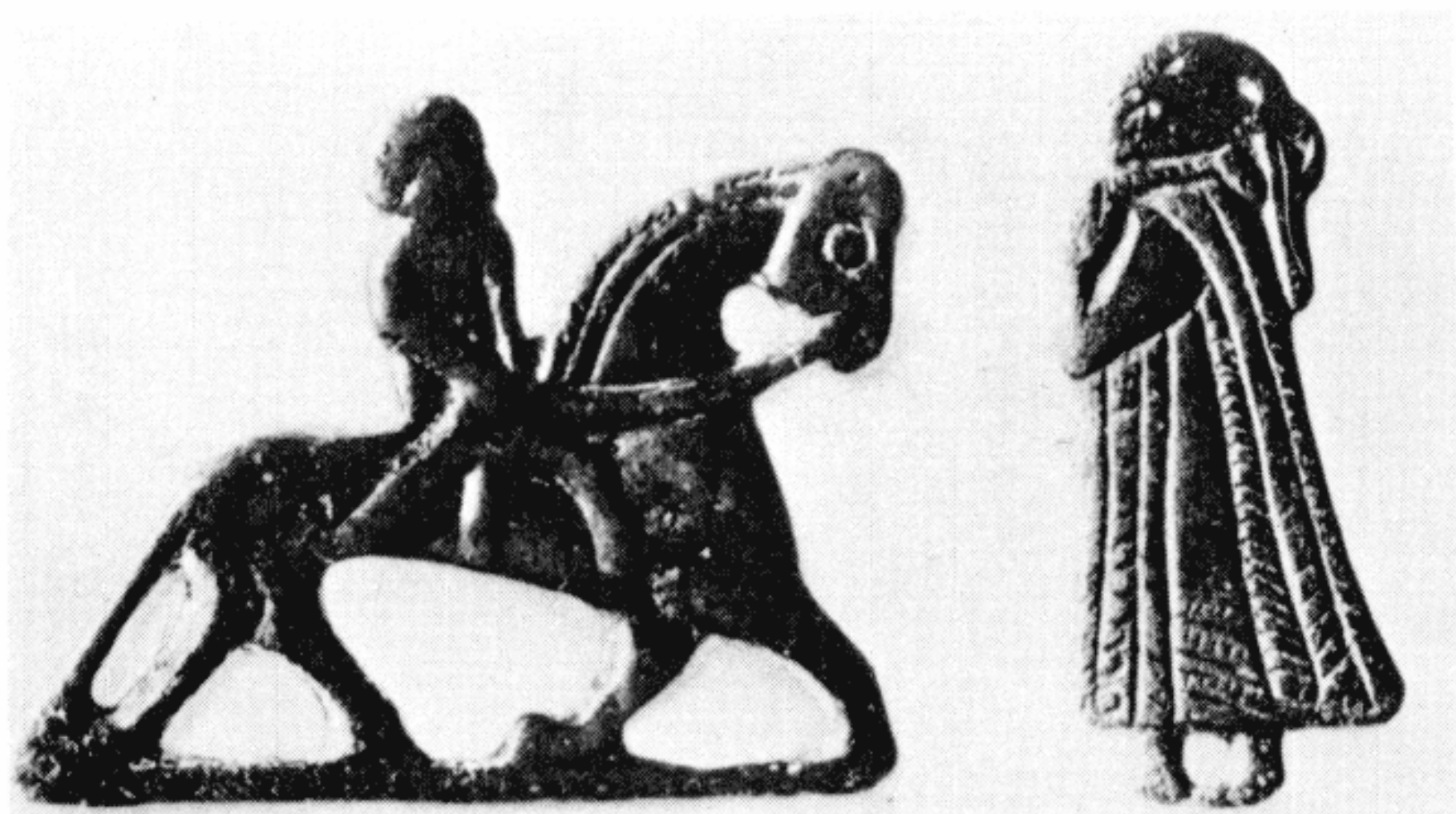
これにはさすがのオーディンも、「ううむ。」とうなってたじろいだ。しかし、賢くなりたい願いを、あきらめることはできなかった。彼はぐいと片目をえぐりだしてミーミルの泉に投げこみ、こうしてその水を一口飲ましてもらった。
こうして彼は片目になったが、彼の知恵はいよいよすばらしくなった。オーディンが片目だというのは、こんなわけからであった。彼はその片目でよく世界を見わたし、人間の心のおくまでのぞきこむのだった。

## †ほかの神々と戦いの乙女たち

アスガルドには多くの神々がいるが、その主なものは、オーディンのほかに十二、三人、すなわち、トール、バルドル、ニオルド、フレイ、チル、ブラギ、ヘイムダル、オズル、ヴイダル、ヴァリ、ウラー、ヘニール、ヘルモッド、ロキなど。ほかにもちろん女神がいる。オーディンの妻のフリッグ、青春の女神イドゥン、トールの妻シフ、フレイの妹のフレイヤなどはもっとも有名な女神で、最初に書いた国引きの話のゲフィオンは、このフレイヤのべつの名前だともいわれる。
これらの神々のさまざまな話が北欧神話のわけだが、それらの神話でいちばん活躍するのは、主神オーディンのほか、雷の神といわれるトール、火の神とされるロキ、それに美と愛の女神フレイヤなどである。また、フレイは豊作と生殖の神として崇拝され、古いウプサラの神殿には、オーディン、トールと並んで、彼の大きな像が鎮座していたといわれる。
トールはオーディンの弟、あるいは息子といわれ、たくましい大男で、すばらしい力持ち。しかも

がよく、親切で、ことに農民の守り神と考えられている。しかし彼はいたって人た。しかも、いたって怒りっぽいときているから、巨人もひどく恐れていた。神々が巨人と戦うときの第一の武器であった。こういうトールだから、彼は神々の第一の勇士だっどんな巨人でも一撃でたおすことができ、しかも槌はひとりでに彼の手もとにもどってくる。これは神々の世界にも二つとない宝物をもっている。ミョルニールの槌といって、これを敵に投げつければ

ロキはすこぶるふしぎな神だ。知恵があって、神々の急場をいくども助けるが、気まぐれで邪悪で、しばしば神々を苦しめ、しまいには神々をうらぎり、巨人の仲間になって神々と戦い、ついに世界を滅亡させてしまう。もともとこの神は、神々の敵の巨人の一族だったのだが、遠い昔にオーディンと義兄弟になって神々の仲間に加わったのだった。こういうふしぎな神、むしろ邪悪な神が、神々の世界にもぐりこんでいて、ついに神々の世界の滅びるもとになるところなどが、北欧神話の一特色。

アスガルドには、神々のほかに多くの戦士がいる。オーディンは人間の世界で戦いがあると、すぐ戦場に部下のワルキューリたちを送って、勇敢な戦死者をアスガルドに運んでこさせる。ワルキューリとは、オーディンにつかえる〈戦いの乙女〉たち。駿足の馬にのって空をかけてくると考えられているが、また、白鳥の姿をして空をとんでいるともされている。戦死した勇士たちは、その美しい乙女たちに運ばれて天上のワルハラという大広間に迎えられ、ここでオーディンその他の神々とともに、日ごと蜜酒をのみ、御馳走をたべて、世界の最後の日がくるまで、武術の試合などに楽しい日々を送っている。

戦士を迎えるワルキューリ

　ワルハラの大広間には五百四十の扉があり、それぞれの扉は八百人の騎士が並んではいっていくだけの広さがある。天井は目もとどかぬほど高く天にそびえ、金色の盾をかけ並べたようにきらめいている。この大広間では、日ごとに宴会がもよおされ、御馳走や蜜酒がふんだんにでる。いくら飲んでも食べてもかぎりがない。なにしろ、オーディンは日ごとにセーフリムニルという大いのししを料理して皆をもてなすが、このいのししは、いくど殺されてもすぐに生きかえったから。また酒のほうはワルハラの上に覆いかぶさったイグドラシルの梢にヘイドルンという一頭の牝山羊がいて、イグドラシルの若葉ややわらかい芽を食べては、その大きな乳房から無限に蜜酒をほとばしらせたから。

　しかし、オーディンはぶどう酒を飲むだけで、いっさい食物はとらない。じぶんの食物はすべて足もとにうずくまった二匹の狼にやってしまう。狼はゲリとフレキというが、ともに〈大食い〉という意味の名にそむかず、いくら食べてもあきることがない。

## 世界と人間のはじまり

こうした神々や、巨人や、小人やら、また彼らの住むアスガルドやヨツンヘイム、また人間の住むミッドガルドなどは、どうしてできたか。北欧の人たちは、天地のはじまりをどのように考えたか。「巫女の予言」という古い歌にはうたわれている——

太古のときには
なにものもなかった
砂なく、海なく
しおからい波もなかった
下に大地なく
上に天なく
ギンヌンガ・ガップ（底しれぬさけめ）には
草一本はえていなかった……

つまり、天も地もまだなくて、草一本はえていないがらんどうが、大きく口をあけていただけだという。太陽も月もなく、そこらはただ一面霧につつまれているだけだった。穴の北には、氷と雪が無限に広がり、寒風が吹きすさんでいた。その穴の底のほうに一つの大きい泉があって、そこからいくつもの川が流れだし、水蒸気が霧となって立ちのぼっていた。ことに、その川の一つには毒気があって、そのために溶鉱炉の上に金くそがうかぶように、水の上にだんだん泡がたまってかたまり、凍りついた。すると川から立ちのぼる毒気をおびた霧が、霜になってその氷の上にたまり、こうしてギンヌンガ・ガップの大きな裂目の真中に、しだいに途方もなく大きな氷と霜の塊りができていった。

ところが、そのギンヌンガ・ガップの南側には、炎々と火がもえていた。ムスペルヘイムとよばれる炎の国だ。そこは白熱して、目が眩むほどあかるく燃えていたから、空気が熱されて四方に熱風をふき送った。

その熱気が北側の氷と霜の山にぶつかると、表面が少しずつとけて、雫になってギンヌンガ・ガップの底しれない裂目にしたたりおちる。したたりおちた雫は、また凍りつくが、そこへまたムスペルヘイムから熱風がふきつける。こうしたことを何千年もくりかえしているうちに、いつかその雫に生命がやどって、とうとうユミールとよばれる巨人になった。これが世界最初の生きもので、霜の巨人たちの先祖だという。

ではユミールはなにを食べて生きていたか。ユミールが氷から生まれたのにつづいて、やはり熱気のためにとけた氷の中から、一頭のとてつもなく巨大な牝牛が出てきた。アウドムラという牝牛で、

その乳房から流れでる乳をユミールは飲んで命をつないだのだ。ところが、ユミールがたらふく乳をのんでうとうとと眠っている間に、汗をかいた。すると、左右のわきの下から一組の男女が生まれ、両足のあいだからも、ひとりの息子が生まれた。こうしてだんだんに子孫がふえてきた。ところが彼らは、なにしろ毒気のある氷から生まれた巨人の子孫なので、みんな心に毒をもっていた。

では、牝牛のアウドムラはなにを食べて生きていたかというと、草一本まだ生えていないので、霜が塩のようにこびりついたそこいらの岩をなめていた。こうやって、なめになめているうちに、その岩の中からふしぎなものがでてきた。第一日には髪の毛のようなものがあらわれ、二日めには頭が、そして三日めには人間の全身がそっくりあらわれてきた。この男はブリといって、みごとなたくましい体をしていた。

このブリの息子のボルが巨人の娘のベストラを妻にして三人の息子を生んだ。これが、オーディン、ヴィリ、ヴェーの兄弟で、やがて天地を支配することになる。

三人の兄弟は、力をあわせて巨人ユミールを殺した。すると、おびただしい血が流れだして大洪水になり、霜の巨人の仲間は、ただひとりをのぞいてみな溺れ死んでしまった。ただひとり助かったのは、ベルゲルミルという巨人で、妻と一緒に石臼の上にあがって、ようやく助かったのだという。この夫婦から、その後の巨人たちは、みんな生まれてきた。

さてボルの息子たちは、ユミールの死骸をギンヌンガ・ガップの真中にすえて、大地をつくりにかかった。血が海や湖になり、肉が土になり、骨が山々になった。岩や石は、歯や、砕けた骨でこしら

えた。ところが、ユミールのからだが腐るにつれて、うじみたいなものがぞろぞろと肉の中からはいだしてきた。小人たちだった。

それからオーディンたちは、大きなユミールの頭蓋骨を高くもちあげて天にし、そして天がおちてこないように四つの骨のでっぱりを地にあてがって、そこに東、西、北、南という四人の小人をおいて番をさせた。

つぎにムスペルヘイムからとんでくる大きな火花をあつめると、ギンヌンガ・ガップの真中の空の上と下とにおいて、かわるがわるに天地をてらさせた。これが太陽と月だ。そうしてオーディンは、ムンディルファリという巨人のふたりの子供、女の子のソル（太陽）と、男の子のマニ（月）に、それぞれ太陽と月を、空をよこぎって馬車で運ばせることにした。ところが、二匹のものすごい狼が、その太陽と月をひとのみにしようと、猛然と追いかけてくる。そのため、北欧では太陽も月もゆっくりできないで、出たと思うとまもなく、あわてて西へ沈んでしまうのだという。

こまかい火花は星にした。それからユミールの脳みそを空に投げあげると、それがちらばって雲になった。

こうして天地がようやく形をととのえた。大地はまるい形をして、その外側はぐるっと海がとりまいている。オーディンたちはその海のむこうへ巨人を追いはらって、真中の美しい国をミッドガルド（真中の国）と名づけて人間に住まわせることにした。ミッドガルドのまわりには、ユミールのまつげを柵のように植えならべて、巨人が攻めてきたときの守りにした。

ところが、かんじんの人間が、まだいなかった。
ある日、オーディンとヴィリとヴェーが浜辺を歩いていると、流れついた二本の木が見つかった。
三人はその木をひろいあげて、それを人間の形にきざんだ。それができあがると、オーディンが、
「ではわしが、生命をふきこんでやろう。」
といって、息をふきこんだ。
「わしは、知恵と、ものを理解する力をあたえてやろう。」
と、ヴィリがいうと、
「ではわしは、ものを見たりきいたりする力と、言葉を教えてやろう。」
と、ヴェーがいった。
それから二人に着物を着せてやり、名前をつけた。男はとねりこの木で作ったのでアスク（とねりこ）、女はにれの木で作ったのでエンブラ（にれ）――人間の種族は、みんなこの二人の子孫のわけだ。もっともこの伝承には異説もある。
こうしてミッドガルドに住む人間もできた。神々はその上の方の天地の真中に美しい城をたてて、そこに住むことにした。これがアスガルドだ。
アスガルドにはいくつも神殿や館がそびえ立っているが、万物の父オーディンが住むのは〈よろこびの家〉というすばらしい御殿で、そこの玉座にすわると全世界を見わたすことができた。かれはここに坐って、神々の世界はもとより、人間の世界や、巨人や小人の世界で起ることをも、のこらず見

とおしている。
アスガルドへいくには、ビフロストの橋をわたらなくてはならない。これは大地から空高くかかっている七色の美しい橋で、それを人間たちは虹とよんでいる。橋のたもとには、ヘイムダルという神が見はり番をしている。彼は目がとてもよくて、夜でも昼でも百キロの先までも見ることができる。耳もすばらしくよくて、草ののびる音や、ひつじの毛ののびる音でさえ、きくことができる。
こういう番人を、神々が橋のたもとに見はらせておくのも、神々と人間に敵意をもつ巨人どもがいつ攻めよせてくるかわからないからだった。もし、炎の国の巨人どもが攻めよせてきたら、この美しいビフロストの橋も、たちまち焼けおちてしまうだろう。
神々のこの美しいアスガルドも、人間のたのしく日々を送っているミッドガルドも決して永遠にさかえるというわけにはいかないのだ。いつかは巨人や魔物どもに攻められて、滅びなくてはならない。そんなぶきみな予言があったのだ。それだけに神々は、じぶんたちや人間の世界をまもるために、熱心に知恵や武技をみがき、巨人や魔物たちと必死に戦いもするのである、最後の日まで。

オーディンのブロンズ像

# アスガルドの城壁づくり

神々がアスガルドにうつり住んだばかりのころだった。神々はもはや人間の住むミッドガルドもつくり、すばらしいワルハラの宮殿もたておえていた。けれども、いつ攻めてくるかわからない巨人のことを考えると、まだアスガルドの城壁ができていないのが第一の心配だった。なにしろこの城壁は、神々と人間の世界全体をまもる役目をするのだから、すばらしく巨大で、またどんな怪物が攻めてきても、びくともしないほど堅固でなくてはならない。それだけに、そんな城壁をつくることは、神々にとってもどこから手をつけていいかわからないほど困難な大事業だった。

と、ある日のこと、ひとりの石工がやってきて、どんな巨人にもこわせない城壁を築いてあげようと申し出た。神々はひどくよろこんで、きいてみた。

「で、そのお礼には、なにをやったらいいのかね。」

「お礼には、ほかでもないが、女神のフレイヤをもらいたい。それに、太陽と月もいただくとしよう。」

こういわれては、神々もかんたんには返事ができなかった。なにしろフレイヤは女神の中でも第一の美人だし、太陽と月をやってしまったのでは、世界が真暗になってしまう。

そこで神々はあつまって相談したが、べつによい知恵もない。おまけに一番豪傑のトールはあいにくと東の国へ巨人たちとの戦いにいっていて留守だった。石工はひどく威嚇的に返事を迫ってくる。とうとう神々は石工のいうままの条件で彼に城壁をつくらせることにした。ただ、それには一つの条件をこちらからもつけた。それは、こういうのだった――。

「城壁はかならず一冬の間に仕上げなくてはいけない。もし夏の最初の日がきた時に、ただの石一つぶんでも城壁にまだ仕上っていないところがあったら、礼はなにもやらない。それから、助手はひとりも使わないこと。」

　神々がこういったのは、こんな条件がついていては、まさか石工も引き受けはすまいと思ったからだった。ところが石工は、こういってきいた。

「だが、わしの馬のスワディルファアリに石をひかせるくらいは、かまわんでしょうな。」

　神々はちょっと思案したが、そのときロキ神が口を出して、それくらいは許してやるがいいといった。そこで神々もその気になって、石工の頼みをゆるした。

　さて、冬の第一日から（むかしの北欧人は、一年を冬と夏の二季に分けた）石工は仕事にかかった。まだ暗いうちから、彼はすばらしく大きな石を馬にひかせてやってくると、その石をぽいぽいほうりあげて、どんどん城壁をきずいていく。

　神々はそれを見ておどろいた。わけても物すごいのは、彼の馬スワディルファアリだった。どんな大きい岩でもらくらくとひっぱってきて、主人の倍も働くのである。主人は彼がひいてきた岩を、かた

っぱしから積みあげるだけだ。

「この石屋はどうも、ただものじゃないぞ。」

と、神々は約束を取り消したく思ったが、そうはいかない。もう証人をたてて、契約してしまったからだった。抜目のない石工は、もしトール神が帰ってきたときに怒って約束を破ろうとしてもだめなように、ちゃんと神々と正式の契約をとりかわしておいたのだ。

冬はどんどんすぎて、もはやおわりに近づいた。同時に城壁もどんどんはかどって、もう完成もまぢかに見えた。大きな岩や石を高く高くつみあげて、どんな魔物にも壊せそうもないほど、頑丈に、堂々と、アスガルドをめぐってそびえ立っていた。のこっているのは、城の門だけだ。しかし、夏がくるにはまだ三日ある。その間には、城門もたしかにできあがるであろう。

さあ、神々はこまってしまった。

「えらい約束をしてしまったものだ。頑丈な城壁ができるのはいいが、あの美しい女神フレイヤを、あんな石屋にとられてしまうのか。」

「それればかりじゃない。太陽も月もとられたら、この世は真暗になってしまうぞ。」

神々は口々にいって、なんとかあの不吉な契約をのがれる道はないものかと、会議をひらいて相談した。しかし、やっぱりうまい知恵がでない。とうとうみんなは、いったいあんな約束をすることをわれわれにすすめたのは誰だ、ふらちじゃないか、と騒ぎたてた。するとみなの意見は、ロキがあの契約を神々にすすめた張本人だということに一致した。

そこで神々は、ロキをよびだすと、

「おまえがすすめて契約をさせたんじゃないか。なんとか、逃れ道を考えてくれ。もしそれができないようなら、おまえを死刑にするぞ。」

と、頼んだりおどかしたりした。いたずらもののロキも、神々が本気で怒っているのを見て、答えた。

「じゃあ、なんとかして城壁が三日のうちにはできあがらないようにするから、どうか死刑だけはかんべんしてくれ。」

その夕がた、石工があの馬に岩をひかせて城門のほうへやってくると、一頭のわかい美しい牝馬が森の中から走りでてきて、高くいなないた。と、たちまちスワディルファリは棒立ちになって、岩をふりおとすと、夢中になって牝馬のあとを追いかけた。こちらはすばやく森の中へ姿をかくした。

こうして牝馬は、森の奥へ奥へと相手をさそいこんで、一晩じゅうそこらを走りまわってふざけあった。石工は必死で馬をつかまえようと、一晩じゅう森の中をむなしく走りまわった。

朝になっても、城門をつくる石ひとつなかった。仕事が約束の期間にはとても仕上らないのを見てとった石工は、気がちがったみたいにおこって、その正体をあらわした。彼は神々の世界の秘密をさぐりにきた、山の巨人のひとりだった。

神々はそれを見て、相手が巨人なら約束をまもる必要はないと考えて、さっそくトールに使いをだした。

トールは山や川をとびこえて、いそいでアスガルドにもどってきた。見ると、巨人はいまにもアスガルドをたたき壊しそうにしている。トールは空高くミョルニールの槌をふりあげると、一撃で巨人をうちたおした。頭蓋骨はこなごなに砕いて、霧の国の下ふかく吹きとばした。

ところで、あの牝馬はじつはロキが化けていたのであった。彼のおかげで神々は危いところで巨人の災いをのがれることができたばかりでなく、堅固な城までできあがったのだった。

しかし、最後にはあの牡馬におかされたロキは、しばらくして一頭の馬を生み落した。それは魔馬の血をうけただけに、８本の脚をもった灰色のふしぎな馬だった。これがスレイプニールといって、主神オーディンの乗馬になった馬である。

# オーディンと詩の起原

まだ世界がつくられたばかりのころだった。アスガルドの神々と海の国の神々ヴァニールたちの間に戦いが起った。戦いは長く続いたが、やがて神々は仲直りして、二度と争いをくりかえさぬよう、たがいに人質をだしあって同盟をむすんだ。この時に、海の国から人質としてきてアスガルドの神々の仲間に加わったのがニオルド親子で、アスガルドからはヘニールとミーミルが海の国へいった。

さて両方の神々は、こうして平和を結んだしるしに、両方が一つの壷のところへ歩みよって、その中へ唾をはきこんだ。そしてその唾液でひとりの人間をつくって、クワシール（知識）という名をつけた。クワシールはとても賢くて、どんなことでも知らないことがなかった。彼は人々にその知識をさずけるために世界を旅してまわった。

ところが、あるとき彼がフィヤラールとガラールという兄弟の小人のところへいくと、腹黒い小人の兄弟はクワシールを殺してしまった。そうしてクワシールの血を、二つの大きな壷と一つの鍋に入れ、それに蜂蜜をまぜて蜜酒をつくった。この蜜酒にはふしぎな力があって、それを飲んだものは詩人になって美しい歌がつくれるようになるのだった。

腹黒い兄弟は、クワシールを殺しただけでは足りないで、またいたずらを考えついた。今度はギリ

ングという巨人とその妻を自分たちの家に招待した。
やがてギリングがくると、海へ釣りにいこうといって巨人を誘いだした。こうして沖へ出たところで、いきなり岩礁にのりあげて船をてんぷくさせたので、泳ぎを知らないギリングは溺れ死んでしまった。小人は何くわぬ顔でまた船をちゃんと直して陸へもどってくると、ギリングの妻に夫は海におちて死んでしまったと話した。巨人の妻はひどく泣いた。するとフィヤラールは、いかにも同情するような顔つきをしていった。
「おくさん、ギリングさんがおちた海のあたりを眺めたら、すこしは気がはれませんか。」
巨人の妻はそういわれて、外へでて海の方を眺める気になった。ところがフィヤラールは、弟にそっとささやいた。
「あんなに泣かれちゃ、うるさくてしょうがない。おまえ、屋根の上に登っていって、あの女が外へ出るときに、上から石臼をおとしてやっつけてしまえ。」
ガラールはいわれた通りにした。こうして巨人の妻も死んでしまった。
このことがギリングの息子のスッツングの耳にはいった。彼はさっそく仇うちにでかけて、小人たちをひっつかまえると、潮がひいたときだけ海の上に顔をだす岩礁の上にのせた。満潮になれば、たちまち小人たちは波にさらわれてしまうだろう。彼らは必死になってスッツングに命ごいをしていった。「どうか命だけは助けてください。そうすればあなたに、クワシールの血でつくったふしぎな酒をさしあげます。神々も人間も、まだ誰ももっていない霊酒で、これを飲めば詩人になれるのです。」

巨人はこれをきくと、そんなにすばらしいものが手にはいるならと、小人を許してやった。そうして小人を陸地へつれもどすと、蜜酒をうけとって帰ってゆき、それをフニット山に隠して、娘のグンロッドに番をさせた。こんなわけで、のちの人間たちは詩のことを〈クワシールの血〉とか〈スッツングの霊酒〉〈フニット山の宝〉などというようになる。

ところでオーディンは、早くもこれらのことを知って、どうかしてこの蜜酒を巨人の手から奪って、神々のものにしたいと考えた。そこで彼は、さっそくアスガルドをでて、巨人の国をめざしていった。

いく日も旅をしていくと、やがて広々した草原にでた。草原では九人の下男が乾草を刈っていた。オーディンはしばらく彼らが働いているのを見ていたが、ふとあることを思いついて、こういった。

「どうも君たちの鎌はよく切れないようだ。わしがいい砥石をもっているから、砥いでやろうか。」

下男たちは「といでくれ。といでくれ。」と口々にいった。

オーディンは腰につけていた砥石をだして、みなの鎌をといでやった。下男たちがその鎌で草を刈ってみると、すばらしくよく切れる。みなはオーディンのもっている砥石がほしくなって、その砥石を売ってくれないかと、口々にたのんだ。

「売ってもいいが、これは君らもいま見たように、すばらしい砥石だから、値段は高いぜ。」

と、オーディンはいった。

「いくら高くてもいいから、売ってくれ。」と、下男たちはいった。

しかし、砥石は一つなのに、下男は九人もいて、めいめいがそれを自分のものにしたがった。
「では、わしがこれを空にほうり投げよう。第一番につかんだものが自分のものにするのだ。」
こういってオーディンは砥石を空に投げあげた。
下男たちは砥石が落ちたところに走りよって、たがいに奪いあううち、鎌で切りあってみな死んでしまった。
オーディンはその夜、バウギという巨人の家へいくと、ボルウェルクと名前をいつわって、一晩とめてくれとたのんだ。バウギはスッツングの兄弟であった。
バウギは心よくとめてくれたが、やがて夕食の時に、こういって嘆いた。
「なあ、ボルウェルク、おれは今日ひどい目にあったよ。どうしたわけか、九人の下男どもがたがいに殺しあって、みな死んでしまったのだ。これから乾草をつくらなきゃならんのに働き手が一人もいなくなってしまって、どうにもならない。」
「そんなら、わたしがこの夏は下男代りに働いてあげましょう。」
こうボルウェルクはいって、ひとりで九人ぶんの仕事をひきうけるが、もしそれをやりぬいたら、給金はいらないから、一口あなたの兄弟のスッツングがもっているという霊酒を飲ましてくれないか、ともちかけた。
「それはとてもむずかしいな。なにしろ兄貴はとても大事にしていて、このおれにだって見せもしないのだ。だれかに盗まれはしないかと心配して、酒壺のそばには人も近よせない始末だからな。」

こうバウギがいったが、でも、あいつの一人じめにさせておくのも残念だから、夏が終ったらとにかく一緒にいって、一口飲ましてくれるように頼んでみようといった。

こうして約束はきまった。オーディンのボルウェルクは、その夏じゅうバウギの家で働いて九人ぶんの仕事をした。やがて夏が終ると、二人はスッツングの屋敷にでかけた。

バウギはボルウェルクとの約束をスッツングに話して、どうか一口飲ましてやってくれと頼んだ。しかしスッツングは、ただの一口でも飲ませることをきっぱりと断った。

するとボルウェルクが、小さい声でささやいた。「こうなっては仕方がない。こっそりと少ししっけいしましょうよ。」

バウギもそれには異議はなかった。スッツングは蜜酒を大きな岩山の洞穴にかくして娘のグンロッドに厳重に見張らせている。ボルウェルクとバウギは、その岩山に出かけて四方八方から様子をうかがったが、どうにも洞穴へはいりこむことはできそうもない。

「まったく用心堅固にしているわい。だが、なんとかもぐりこむ道はありそうなものだ。」

こうボルウェルクはいって、ポケットから一つの錐をとりだすと、これで岩に穴をあけてくれとバウギにたのんだ。

バウギは錐をもみはじめたが、相手がかたい岩のことで、穴はなかなかあかない。バウギはまもなくつかれてしまった。でも、とうとう穴があいたというので、ボルウェルクは息を吹きこんでみた。するると、けずり屑が顔にはねかえってくるではないか。

「嘘をついたってだめだよ、バウギ。ほんとに穴があいたなら、けずり屑が顔にはね返ってくるわけはないじゃないか。もっとしっかり穴をあけてくれ。」

こうボルウェルクにいわれて、バウギはもう一度錐をもみにかかったが、ボルウェルクに嘘を見ぬかれたので、いまいましくてたまらない。

しばらくすると、また穴があいたとバウギがいうので息をふきこんでみると、今度はちゃんと穴がつきぬけたらしく、けずり屑が向う へ吹きぬけた。

さっそくオーディンは蛇の姿になって、その穴にもぐりこんだ。腹をたてていたバウギは、いきなり錐をとって蛇のうしろから突きたてた。しかし、蛇はすばやく向う側へすりぬけてしまった。

こうして穴をぬけたオーディンは、またもとの姿にかえって巨人の娘に近づいていった。

たったひとり山の中で蜜酒の番をしているグンロッドは、さびしくてたまらない。そこへ若い男の客がやってきたので、大よろこび。こうしてオーディンは彼女のそばで三日をすごした。グンロッドはすっかりオーディンがすきになってしまった。

やがて三日がすぎると、オーディンは娘に、どうかクワシールの霊酒をほんの少しでも飲ましてくれと頼んだ。グンロッドはいった――

「あなたのことだから、特別に飲ましてあげるわ。だけど、ほんの三口だけよ。」

ところがオーディンは、最初の一口で鍋を飲みほし、二口めと三口めでは、二つの壺を飲みほしてしまった。そして、いそいで鷲の姿に身をかえると、さっと空にとびたった。

スッツングはじぶんの屋敷にいたが、山の洞穴から鷲がとびたったのを見ると、じぶんも急いで大鷲の姿になってオーディンを追いかけた。オーディンは全速力でアスガルドに向って飛んだが、しかしスッツングはなおすばらしい早さで、オーディンを追いかけてくる。

アスガルドの神々は、二羽の鷲が空をとんでくるのを見ると、これはオーディンがスッツングに追われてきたのにちがいないと思い、急いで大きな壺を中庭にはこんできた。オーディンはアスガルドの上までくると、飲んできた霊酒を壺の中へはきこんだ。ところが、スッツングがいまにも追いつきそうになっていたため、あわてて酒をすこし壺の外へこぼしてしまった。

スッツングは、オーディンがアスガルドの領分に逃げこんでしまったのを見ると、もう彼をつかまえることをあきらめて、巨人の国へもどっていった。こうして、尊い霊酒は永遠に神々のものとなった。オーディンは、この霊酒を、神々や、それを飲むにふさわしい人々にも、わけあたえた。すると、それを飲んだ人々は詩人となって、すばらしい歌がつくれるようになり、神々や人々をたのしませてくれた。そこで詩のことを人々は〈オーディンの贈物〉〈オーディンのえもの〉〈神々の飲みもの〉などともよぶことになった。

こうしてクワシールの血でつくられた蜜酒は、空しく巨人の洞穴で眠っているかわりに、この世に喜びと楽しみをもたらすことになった。ところで、あわててオーディンが壺の外にこぼしたぶんはどうなったか？

そう、それは誰でもほしいものが手にいれて、詩人気どりになることができた。そこで、その地面

にこぼれたぶんは、〈えせ詩人のわけまえ〉とよばれるのだそうだ。
オーディンはこんなふうにして、神々と人間の世界を豊かにするために、あらゆる知恵をしぼった。北欧人が使ったむかしのルーン文字を発明して、それを人間に教えたのも、彼の仕事だった。その時にはオーディンは、われとわが身を宇宙樹イグドラシルの梢にぶらさげて、じぶんの槍グングニールにつらぬかれながら、九日九夜を考えぬいて、この魔力をもったふしぎな文字を考えついたのだといわれる。
オーディンが、ときに〈吊りさげられたもの〉とよばれるのは、このときイグドラシルの木にぶらさがったためだ。そのことから彼はまた、絞首台にかけられたものの守り神とされている。なにしろオーディンも〈吊りさげられたもの〉のわけだから。

# 神々の宝物

ロキという神は、前にもいったように、知恵もあるけれど気まぐれないたずらもので、しばしばアスガルドの神々に迷惑をかける。もともと彼はアサ神の一族ではなく、アサ神にほろぼされた古い神の生きのこり、あるいは巨人族のなかまらしい。だからオーディンと義兄弟になって、いまはアスガルドの一員として神々の世界にもぐりこんではいるが、とかくその行為は奇怪で、神々を苦しめることが多いのであった。

しかし、彼のいたずらがかえって神々に大きな利益をもたらすこともしばしばだった。アスガルド第一の勇士トールのふしぎな槌なども、このロキのいたずらから生まれた宝物だった。

トールにはシフという美しい妻があった。彼女の髪はふさふさと長く、太陽の光をあびると金のように輝いた。シフはもとよりトールもそれをひどく自慢にしていた。

ところが、ある日、シフがぐっすり眠っていたあいだに、いたずらもののロキが、それをじょきじょき切ってしまったからたまらない。

目をさまして頭がまる坊主になっているのを知ったシフは、泣きながら夫のところへいって、このことを訴えた。

「そんないたずらをするやつはロキにきまっている。よし、あいつの骨を一本のこらずへし折ってくれる。」
トールはまっかに怒ってロキを捜しにとびだしていくと、まもなく相手を捜しだして、むんずと腕をつかんだ。骨も折れそうなおそろしい力だ。
ロキはトールが本気が怒っているのを見て怖くなり、一生懸命にあやまったが、トールはどうしても許さず、いまにもつかみ殺しそうな勢いだ。
「あいたた……ちょっとその手をゆるめてくれ、トール、骨が折れて死んじまうよ。奥さんの髪の毛は、なんとか代りを見つけるから、ちょっと待ってくれたまえ。」
ロキは必死で頼んだが、トールはなかなか信用しない。
「かわりを見つけるって、そんなことができるのか。いったいきさまは、どうするつもりだ。」
「黒小人のところへいって、髪をつくってもらってくる。まじりけのない金できらきら輝いて、それを頭にかぶると、ほんものの毛とおなじように、ちゃんと頭にはえるやつだよ。なにしろ黒小人たちはすばらしい細工師で、どんなものでもつくれるんだからね。」
それをきいて、トールはようやくロキをゆるしてやる気になった。でも、はなしてやる前に、猛烈に相手をこづきまわしておいて、こうどなりつけた。
「だが、よくおぼえておけよ、ロキ。もしそいつが本物の髪の毛とおなじにくっつかなかったら、こんどこそ一本のこらずきさまの骨をおっぺしょってやるからな。それもシフの髪にまけない美しい長

い金の髪でなくちゃだめだぞ。それじゃ、いってこい。」
　ロキは命が助かったのに大喜びして、さっそく黒小人のところへでかけた。小人たちは、たいてい山の岩穴のおくに住んでいる。
　ロキがたずねたのは、ドヴァリンという有名な黒小人の息子たちだった。兄弟はロキの頼みをきくと、それくらいの仕事ならわけはないといって引き受けて、シフの髪にまけない美しいやつをこしらえてくれた上に、なおもすばらしい贈物をしてくれた。一つはグングニールという投げればかならずあいてをたおす投槍で、これはあとでオーディンのもちものになった。もう一つはスキッドブラドニールといって、小さくたためばポケットにはいり、広げれば神々が残らずのれるほど大きくなった上に、いつでも追い風をうけて海でも空でも自由に走る魔法の船だった。
　ロキはすっかり気をよくして、帰途についた。ところが、途中で彼はブロックというべつの小人にであった。ブロックは鍛冶の名人として知られているシンドリの弟である。
　じぶんの成功に気をよくしていたロキは、さっそくブロックに向って自慢していった。
「どうだい、ブロック、この品物を見ろ。おまえの兄貴のシンドリにも、これだけのものはできまいな。もしこの三つの宝にまけないものをシンドリがつくることができたら、おれはおまえにこの頭をやってもいいぜ。」
　ブロックはじぶんの兄の腕前を知っていたので、すぐさまいった。
「よし、その賭けにまちがいはないね。さあ、一緒にきたまえ。シンドリがどれだけのものをつくれ

るか、見せてやろう。」

こういってロキを鍛冶場につれていくと、兄にロキとした賭けのことを話した。シンドリはさっそく火床に火をおこした。岩穴のおくで炎がいきおいよく燃え上った。その火が十分に熱したとみると、シンドリはいきなり火の中に一枚の豚の皮をなげこんだ。

それからシンドリは弟にふいごをわたすと、おれの戻ってくるまで休まずにふいごをおしてくれといいつけておいて、岩穴を出ていった。

シンドリが出ていくと同時に、ロキは一匹の大あぶにばけてブロックの手にとまり、思いきりその手をさした。しかしブロックは、ふいごをおす手をやめなかった。

そこへシンドリがもどってきて、火の中からできあがった品物をとりだした。それは一匹のいのしし——金のたてがみをはやした、本物のすばらしいいのししだった。

つぎにシンドリは、火の中へ金をなげこんで、またも弟にふいごをおさせた。こんどはロキのあぶは、ブロックの首ねっこにとまって前のときより一層強く、二度もさしてやった。しかしブロックは、それでもふいごをおす手をやめない。

そこへシンドリが帰ってきて、火の中からみごとな金の指輪、ドラウプニールをとりだした。

いよいよ三度めだ。シンドリは今度は鉄を火の中に入れると、もう一度、

「ブロック、しっかりふいごをおすんだぞ。でないと、せっかくの品物がだめになっちまうからな。」

といって、また外へ出ていった。

こんども失敗したら、ロキの負けだ。彼はブロックの目と目の間にとまると、ありったけの力でまぶたをさした。とうとう血が流れだした。痛さはいたし、流れだした血が目にはいるので、どうしてもあぶを追っぱらわなくてはならなくなった。そこで、ほんの一瞬だけれど、ブロックは片手をふいごからはなして、いそいであぶを追いはらった。しかし、その一瞬の間にも、火勢はみるみる弱まったのである。

とたんにシンドリがもどってきて、

「どうしたんだ。火が消えかかってるじゃないか。」

と、弟をしかりつけた。それでも火の中から取り出したのは、一つのすばらしい槌だった。

「これを神々のところへもっていって、どっちの贈物がすぐれているか、見てもらうんだな。」

こうシンドリはいって、三つの品物をブロックに渡した。そこでブロックとロキは、それぞれの贈物をもってアスガルトにむかった。

神々は〈よろこびの家〉というオーディンの大広間に集まって、それぞれじぶんの席についた。オーディンとトールとフレイの三人の神が、どちらの贈物がまさっているか、最後の決定をすることにきまった。

ロキがまずじぶんの贈物を取り出して、シフのとそっくりの金の髪はトールに、グングニールの槍はオーディンに、スキッドブラドニールの船はフレイにやって、

「この髪をシフの頭にのせれば、本物の髪とおなじにくっつくし、この槍は、投げさえすればかなら

ず相手に命中する。またこの船は、どちらの方角に向けようと、かならず追風をうけてすばらしく走るし、たためば一枚のナプキンのようになって、フレイのポケットにもはいるのだ。」

と、その効能を申したてた。

こんどはブロックが贈物をとりだした。彼はオーディンには金の指輪をやっていった。

「これはドラウプニールの指輪といって、九日めの夜ごとに、じぶんとおなじ指輪を八つずつ生みます。」

つぎには金のたてがみをしたいのししをフレイにやっていった。

「これは〈金のたてがみ〉といういのししですが、どんな馬よりも早く、空中でも海の中でも走ります。また、どんな闇夜でも、あなたはこの金のたてがみの光で道に迷うことはありませんよ。」

ついでブロックは、トールには槌をやっていった。

「この槌はミョルニールといって、どんな敵でも一撃でたおすことができます。また、どんなに遠くへ投げてもひとりでに手もとへ帰ってきます。それから、あなたがもしお望みなら、小さくしてポケットにも入れられますよ。」

しかし、ブロックはいわなかったが、この槌には一つの欠点があった。柄がすこし短すぎたのだ。これは、あぶになったロキがブロックをひどくさして、ふいごをおす手をちょっと休ませたからだった。

オーディンとトールとフレイは相談したが、結局ブロックの贈物が方がすぐれていると判定した。

なにしろトールのもらった槌は、巨人どもと戦う場合のかけがえのない武器だったからである。こうなれば、いくら力の強い巨人どもも、用心しなくてはなるまい。トールはいつでもこれを投げつけることができ、しかも槌はかならず彼の手に戻ってくるのだから。

そこでオーディンは立ちあがって、ブロックの勝ちを宣言した。ブロックはさっそくロキの頭を要求した。ロキはあわてて叫んだ。

「おれの頭をとったって、しょうがないじゃないか。代りに金をどっさりやるから、堪忍してくれ。そうすりゃお前は小人第一の金持になれるんだよ。」

小人がなにより好きなのは黄金だ。だからロキは、こういってブロックをごまかそうとしたのだが、ブロックはその手にのらず、どこまでも賭けの履行を主張して、おまえの頭をよこせといいはった。

「そんなら、おれをつかまえてみろ。」

と、ロキは叫んで逃げだした。なにしろ彼は、水の上でも空でも自由にとぶ千里の靴をはいているので、あっというまにとんでもなく遠くまでいっていた。

ブロックはトールに、ロキをつかまえてくれと頼んだ。トールはまだロキのことを怒っていたから、さっそくフレイにれいの〈金のいのしし〉をかりると、さっとその背にとびのって、空をきってとんでいった。こうして、まもなくロキはつかまって、アスガルドにひきたてられた。

ブロックは喜んで、さっそくロキの頭を切りおとそうとした。ところがロキはいった。

「いいとも、さあ、頭を切りおとすがいい。だが、一センチでもおれの首に傷をつけたら承知しないぞ。頭をやるといいはしたが、首をやるとはいわなかったからな。」

さあ、首に傷をつけないで頭を切りおとすことが、できるかどうか。とうとうブロックはあきらめて、いまいましそうに叫んだ。

「もし、ここに兄貴のふくろうがいたら、おまえの憎らしい唇をぬいあわせて、口がきけんようにしてやるんだがな。」

とたんにシンドリのふくろうがとんできて、ロキの唇に食いついて、穴をあけた。ブロックはすばやく皮ひもで、その唇をぬいあわせた。

それでもロキは、平気なものだ。ブロックがいなくなるとたちまち紐をかみきってしまった。

こうしてロキは、いつものことながら、たいした罰を受けずにすんだ。しかも神々は、いくつものすばらしい宝物を手にいれることができたのであった。

## トールのヨツンヘイム訪問

アスガルドの神々の中での第一の豪傑は、なんといっても、トールだった。それがふしぎなミョルニールの槌を手にいれたのだから、まったく鬼に金棒といったところ。こうして彼は、いくども巨人をうちたおしたものだった。

しかし、トールと巨人との戦いは、いつでもトールの勝利に終ったかというと、そういうわけにもいかなかった。ときには、みごとに巨人のペテンにかかってしまったこともある。

ある日も彼は、二匹の山羊がひく得意の戦車にのって、巨人の国へ向った。ロキが相棒だった。一日旅をして、その日の夕暮、二人はある百姓家の前にでた。そこで二人はその百姓家にいって、こんや一晩とめてほしいというと、百姓はなにもお客さまにさしあげる食物がないからといって、しきりに宿をすることを断った。それでもトールは、

「なに、とめてくれさえすればいいのだ。食料はちゃんと用意してきている。」

といって頼んだ。こうして彼らはその百姓家で、その夜を過すことになった。

やがて夕飯の時刻になると、トールは百姓に大鍋を火にかけさせて、じぶんの車をひいてきた二匹の山羊をしめ殺し、その皮をはいでから大鍋の中へなげこんだ。まもなく肉は、いい匂いをたててぐ

つぐつと煮えてきた。
トールは相棒のロキはもちろん、百姓夫婦やその子供たちまでよんで、一緒にテーブルにつくと、
「さあ、肉はたっぷりある。食べたいだけ食べてくれ。ただ、骨はいためないように気をつけて、みんなこの皮の上にまとめておくんだよ。」
といって、殺した二匹の山羊の皮を、いろりのそばの床の上に広げておいた。
ところで、百姓の息子はチアルフといい、娘はロスクヴァという名だったが、この息子は食いしんぼうで、トールの言いつけをまもることができなかった。彼は骨の髄が食べたいあまりに、一匹の山羊の足の骨をつかんで、ナイフで断ちわって中身を食べてしまった。
あくる朝、トールはまだ暗いうちにおきて、床に広げてある山羊の皮のところにいき、ミョルニールの槌をふって、これを祝福した。たちまち山羊は生きかえって立ちあがったが、見ると、後足の一本がびっこをひいているではないか。
「だれだ、おれの言いつけを守らなかったのは。見ろ、後足が一本折れているじゃないか。」
こうトールにどなられて、百姓の親子はふるえあがった。トールはもう、拳の骨が白く浮き出すほどにしっかりと槌をにぎりしめている。百姓はおいおい泣きながら訴えた。
「どうか、トールさま、おゆるしください。どんなことでもして、この罪はつぐないます。わたしたちの家畜もさしあげますし、土地もあなたさまに献上します。ですから、どうぞ命だけはお助けください。」

こういわれると、トールの怒りもいくらかおさまった。そこで彼は、子供のチアルフとロスクヴァをじぶんの召使いにすることにして、百姓をゆるしてやった。こうしてこの二人はトールの召使いになり、それからというもの、いつも彼のお伴をすることになったのである。

さてトールたちは、びっこになった山羊はそこに残して、かわりにチアルフとロスクヴァをつれて旅をつづけた。

まもなく海辺にでたので、それをじゃぶじゃぶかちわたって向う岸につき、巨人の国に足をふみいれた。やがて大きな森にでたが、その森は一日歩きに歩いてもはてしがなかった。

チアルフはすばらしく足が早かったので、トールのリュックをかついで先にたって進んだ。そのリュックには、みんなの食料が入れてあった。

トールのブロンズ像

やがて暗くなってきたので、どこかにとまれる場所はないかと見まわすと、うまく一軒の家が目についた。一方は大きくあけはなしになっていて、そこをはいると広間があり、その奥にはいくつも部屋がならんでいるらしかった。家にはだれも住ん

でいないのか、あかりもついていず、ただがらんとして、ひっそりしている。でも、みな今夜はここでとまることにして、中へはいっていった。
ところが、真夜中のころすさまじい物音がして、地震みたいに大地がゆらゆらとゆれた。みなはびっくりして目をさまして、どこかに逃げ場はないかと捜すと、奥の部屋へ通じる小さい戸口が見つかった。ロキとチアルフとロスクヴァは、いそいでその部屋のいちばん奥まで逃げこんだ。しかし、さすがにトールはしっかりと槌をにぎりしめて、どんな怪物でもくるならこいとばかり、そこの戸口で一睡もせずにがんばっていた。ゴーゴー、ザワザワという物音は、あけがたまでつづいた。
やがて夜が白んでくると、トールは外にでて、あたりの様子をさぐってみた。と、森のそばに一人の巨人がねころんで、ぐうぐう高いびきをかいて眠っているではないか。ゆうべの地震のような物音の正体は、こいつと知れた。巨人がいびきをかくたびに、あたりの大地がゆらゆらゆれていたのだ。
「くそいまいましい野郎だ。目にもの見せてやるぞ。」
とばかり、トールはギュッと力帯――これをしめると力が二倍になる――をしめなおして、槌をにぎりしめた。ところが、とたんに巨人は目をさまして、むっくり起き上った。なかなかたいした巨人だ。さすがのトールもぎょっとして、この時だけは――そんなことは一生でこの時ただ一度だけだったというが――ちょっと、自慢の槌をふりあげる元気がでなかった。
そこで、相手の名をきいてみた。
「わしかね、わしはスクリミールという者さ。だが、おまえさんの名は、きくまでもないな。ちゃん

とその怒った顔にトールと書いてあるよ。――ところで、おまえさん、わしの手袋を見かけなかったかね。」

こう巨人はいって、そこらを見まわしていたが、つとかがみこむと、すこし離れたところにあった手袋をつまみあげた。それは、トールが仲間と一緒に一夜をあかした、あの家だった。あまり暗かったため、スクリミールの手袋を家とまちがえたわけだ。そして、みなが夜中の物音におびえて逃げこんだ奥の部屋というのは、その手袋の親指だったとは。

「どうだね、いっしょに旅をしようじゃないか。」と、巨人がいった。誘われては受けないわけにいかない。「いいとも。」と答えて、トールたちはまず朝飯を食べにかかった。

食事がすむと、スクリミールがまたいった。荷物をめいめいが持つのは面倒だから、一緒にしようじゃないか、と。そしてトールが賛成すると、巨人はトールたちの荷物もじぶんのリュックにおしこんで、その口をしばってさっさと肩にかついで出発した。

スクリミールはみなの先頭にたって、すごい大またで歩いていく。遅れないように後についていくのは、足の早いチアルフにとってさえ、骨がおれた。みなは一日歩きに歩いて、夕方おそく一本のすばらしく大きな樫の木の下にでた。するとスクリミールは、肩にかけたリュックをそこにおろして、

「今夜はここで寝ることにしよう。わしはさっそく一眠りするから、きみらは夕飯が食べたかったら勝手にこのリュックをほどいて、食べてくれ。」

というなり、すこし離れたところにころがると、すぐさまぐうぐう眠ってしまった。
トールの一行は、みな腹がすききっていたので、さっそくリュックをひきよせて口をあけにかかった。ところがいくら引っぱったりねじったりしてみても、すこしも紐がほどけない。とうとう腹をたてたトールは、いきなり両手でミョルニールの槌をにぎりしめると、つかつかとスクリミールがねているところへいって、ぐわんと一撃、その額をなぐりつけた。たいていの巨人なら、これでたちまちお陀仏になってしまうところだ。
ところがスクリミールは、眠そうに目をあけると、
「おや、木の葉のやつがおれの顔におちたのかな。」
と呟いただけだった。そして、トールがそこに立っているのを見るといった。
「おや、トールか。夕飯はもうすんだかね。」
「すんだとも。これから眠るところだ。」
トールはこう答えて、それから仲間と一緒にべつの樫の木の下に横になったが、腹がすいているやらくやしいやらで、眠るどころじゃない。
夜中になると、またもや巨人のいびきが、森じゅうをふるわせるほどになった。トールは起き上って巨人のねている場所に近づくと、例の槌をびゅうびゅう振り回しておいてから、力いっぱいに額めがけてうちおろした。スクリミールはたちまち目をさまして叫んだ。
「や、どんぐりのやつが落ちたのか。——おお、トールか、まだ起きていたのか。」

トールはすばやく何くわぬ顔をして、
「いや、なんでもないよ。ただちょっと目がさめたので、ぶらぶらしていたのだ。まだ真夜中だから、寝る時間はたっぷりあるさ。」
というと、仲間のところへ引き返して横になった。そうしながらも、心の中ではなんとかもう一度機会をつかんで、こんどこそ三度めの一撃でスクリミールをやっつけ、二度とあのいまいましい巨人の顔を見なくともいいようにしてやろうと考えていたのである。
スクリミールはもう一度横になって、眠りについた。あけがた近くになると、またもや高いびきがきこえてきた。トールはいそいで忍びよると、今度こそ満身の力を槌にこめて、その額をなぐりつけた。槌は柄のところまで頭蓋骨にめりこんだ。
スクリミールはむっくり起き上ると、額をなでていうのだった。
「枯枝でも顔の上におちたらしいわい。おや、トール、目がさめていたのか。そろそろ夜があけるから、出かける用意をしようか。」
こうして出発の用意がすむと、スクリミールがまたいった。「ヨツンヘイムはもう遠くない。だが、わしにひとこと忠告させてくれ。わしはきみらがわしのことをひそひそと、あいつあんまり小さくないなとか何とか噂しているのをきいたが、向うへいったら、どうしてどうして、もっと大きい奴にたっぷりあえるだろう。だから、あんまりえらそうにするんじゃないよ。ウトガルド＝ロキは、君らのようなちっぽけな人間が自慢をするのを好まんからな。あの男の下っぱの家来にだって、君らはとて

もかなうものじゃない。だからお前らは、ほんとはここから引き返すのがいいんだ。それでも、どうしても行くというなら、ずんずん東をめざして行きたまえ。わしは北に見えるあの山のほうへ行かなくちゃならないんでね。」

こういって巨人はリュックを肩にかけると、トールたちを置いてきぼりにして、さっと森の中へはいっていった。

さて、トールたちがずんずん東へ進んでいくと、ちょうど昼ごろ、荒れはてた野の真中に巨大な城がそびえ立っているのが見えた。その頂上は天にとどくほど高く、それを見るには、首がいたくなるほどそり返らなくてはならなかった。鉄の門はぴったりとしまっていた。

トールは近づいていって門をあけようとしたが、びくとも動かない。さいわい鉄格子の目があらかったので、みなはその隙間からもぐりこむことができた。やがて大きな建物の前にでた。さいわい扉はあいていた。

つかつかとはいってみると、たくましい大男が二列にならんだベンチの上に坐っていた。一段高い玉座の上に傲然と構えているのが、巨人の王のウトガルド＝ロキだろう。

トールたちが玉座の前にすすみでて、挨拶すると、王はゆっくりと彼らを見まわして、あざ笑うように白い歯を見せていった。

「旅の様子はきくまでもないわい。そこにいる小僧はアスガルドのトールと見たが、わしの目ちがいかね。ところで、君たちにはなにか得意の技があるか。なにか人並すぐれた腕前をもつ者でなくて

は、わしらは仲間に入れんのだからな。」

それをきいて、それまでみなの後にかくれていたロキが、進みでていった。

「わしは特技を一つもっている。それはものを食うことだ。いつでもお目にかけるから、誰かわしより早く食うことができそうな奴があったら、ここへ出してみたまえ。」

「それが本当なら、そいつはたしかに大した技というものだ。では、腕前を拝見するとしようか。」

こうウトガルド＝ロキはいって、さっそくベンチのはずれにすわっていたロゲという男をよぶと、「おまえ、この客人と食べくらべをしてみろ。」と命じた。

たちまち大広間の中央に、肉を山盛りにした大桶がはこばれてきた。ロキとロゲは、その両側に立つと、「はじめ。」の声を合図に猛然と両側から食べはじめた。腕前は互角らしい。二人は大桶いっぱいに盛りあがった肉の山をみるみる両側から片づけていって、ちょうど桶の中央であった。ところが、ロキは肉だけ食べて骨をのこしたのに、ロゲは骨ごと食べてしまい、おまけに最後には桶までもりもりと食べてしまった。ロキが負けたことは、誰の目にもあきらかだった。

ウトガルド＝ロキは上機嫌で、こんどはチアルフをさしていった。「そこにいる若いのは、どんなことができるかな？」

「わたしは誰かと走りくらべをしてみましょう。」とチアルフは答えた。

「それは意義のある技だ。この技で腕前を見せようというからには、お前はよほど駿足なのだろう。では、さっそくためしてみるぞ。」

王はこういって、一同をつれて外へでた。そこは平らな野になっていて、走りくらべにはもってこいの場所だった。ウトガルド＝ロキは、フギという小男をよんで、チアルフと競走させることにした。

いよいよ二人はスタート・ラインについた。フギはすばらしい走り手で、みるみるチアルフをひきはなし、こちらがまだターンのところまで行かぬうちに、悠々と引き返してきた。

「おい、チアルフ、この勝負で勝とうと思うなら、もう少し頑張らなくてはな。といっても、ここへやってきた人間で、お前ほど早く走ったものはないがね。」と、ウトガルド＝ロキはいった。

そこで二度めの競走だ。しかし、今度もフギはぐんぐんチアルフをひきはなして、まだチアルフがターンのところまでいくには大弓を射てもとどかないほど距離があるのに、もうたちまち引き返してきた。

「よく走った。しかし、どうやら三度めに走ってみても、チアルフにはとうてい勝ち味がないようだな。」と、ウトガルド＝ロキはいった。

三度めにはチアルフは、ありったけの力で走った。しかしフギは、やっぱりチアルフがまだコースの半分もいかないうちに、もはやゴールに帰りついていた。これで勝負はフギの勝ちときまった。

それからまた大広間にかえると、ウトガルド＝ロキはトールに向ってきいた。

「トール、君の手柄話はいろいろと聞いているが、今日はどういう技を見せてくれるつもりかな。」

「酒の飲みくらべでいこう。」とトールは答えた。

「それはおもしろい！」ウトガルド＝ロキは叫んで、彼らの仲間が酒盛りの時につかう巨大な角杯を持ってこさせていった。

「この杯を一息で飲みほせば、お前はよき飲み手というものだ。われわれのところにも、二回にわけて飲まなくてはならん者がいる。だが、三度で飲みほせんような者は一人もないぞ。」

トールは杯をうけとった。ずいぶん長い角ではあるが、それほど大したものとも思えなかった。しかも喉は乾ききっていた。彼は杯に口をつけると、ぐうっと一息に飲みこんだ。心の中で、これを飲みほすのに二息とはかかるまいと思いながら。

ところが、一息いれるために杯をおいてみると、おどろいたことに、酒は目に見えるほどもへっていない。

「なかなかみごとな飲みっぷりじゃ。」と、ウトガルド＝ロキはいったが、また言葉をつづけた。「だが、いくらも酒はへらんようだな。アスガルドのトールともあろうものが、これっぽっちしか飲めんのか。この目で見たのでなければ、わしにはとても信じられんな。きっとお前は、つぎの一息で飲みほすつもりなのだね。」

トールは何ともいわずにもう一度杯に口をつけると、息のつづくかぎり飲みに飲んだ。しかし、杯をおいてみると、最初の時ほどもへっていない。あいかわらず酒はなみなみと杯にたたえられている。

それを見て、ウトガルド＝ロキがいった。「どうした、トール。お前は本当の力をおさえているの

か。三口で飲みほすつもりなら、今度は思いきり大きく飲まなくてはなるまいよ。だが、いずれにせよお前はここでは、アスガルドでのように大きな顔をすることはできまいな。それとも、もっとべつの技で腕くらべをしてみるかね。」

トールは真赤になって怒った。いきなり杯をまた口にあてがうと、もうこれ以上は飲めないというまで、力のかぎり、息のつづくかぎりに飲んだ。しかし、いざ杯をおいてのぞいてみると、たしかに酒はかなりへっていたが、やっぱり杯はまだまだたっぷりしていた。憮然としたトールは、もはや杯をとろうとはしなかった。

「もうわかった。お前はわれわれが思ったほど大した豪傑ではないのだ。酒飲みの点ではどうも名誉が得られなかったようだが、なにか別の技をためしてみるかな。」と、ウトガルド＝ロキはきいた。

「よし、やってみよう。アスガルドにいるときは、もっと飲めたはずなんだ。このまま引きさがるのは、いかにも残念だ。」

「それでは、どんなことをするか。そうだ、大したことではないが、われわれのところで子供たちのやるちょっとした遊びがある。わしの飼ってる猫をもちあげるのだ。トールともあろうものにこんな遊びをもちだしては失礼だが、まったくのところ、お前はわれわれの思っていたほどの豪傑じゃないようだからな。」

ウトガルド＝ロキがこういうのに応じて、一匹の大きな灰色の猫がのっそりと広間の真中へ出てきた。トールはさっそく猫の下腹に片手をさしこむと、もちあげようとした。しかし、猫は背を丸めて

弓なりになるばかり。満身の力をこめてもちあげたときに、やっと一本の足が床をはなれただけだった。

「思っていた通りだ。なにしろ猫はとても大きいのに、トールはわれわれにくらべたらまるで子供だからな。」とウトガルド＝ロキはいった。

「なんとでもいうがいい。では、誰かここへ出てきて、おれと相撲をとってみろ。おれはほんとに怒ったぞ。」と、トールは大声でどなった。

ウトガルド＝ロキはずっとベンチを見回していたが、こう答えた。「気の毒だが、見渡したところ、ここにはお前と相撲をとって負けそうなものは、一人もおらんわい。そうだ、わしのばあやのエリをよんでこい。トールが望むなら、あの婆さんと取り組んでみることだ。あれでも婆さんは、トールにだって負けそうもない人間を、もう幾人も投げたおしたからな。」

そこへ出てきたのは、年とってよぼよぼになった老婆だった。トールはすぐさま婆さんに組みついたが、婆さんはびくともしない。いくらおしたおそうとしても、投げとばそうとしても、どうにもならない。そのうちに婆さんの方から、ぐいぐい押してきた。たちまちトールはよろよろとよろけて、片方の膝をついてしまった。

「勝負あった！」

と叫んでウトガルド＝ロキは相撲をやめさせ、二人をひきわけた。

もはや夕方になっていた。巨人の王はトールの一行をベンチに案内して、酒盛りをはじめた。こう

して神々は一晩じゅう手あついもてなしをうけたのであった。

あくる朝トールたちは目をさますと、さっそく帰り仕度をした、ウトガルド＝ロキはもう一度盛大なわかれの宴をもうけてくれた。

それがすむと、王はじぶんで城門の外までトールたちを送ってきて、いよいよ別れという時に彼にきいた——

こんどの旅はどうだったかと。

トールは力なく答えた。「すべてが思うようにいかなかった。中でも一番おれにとってつらいのは、あんたがおれのことを取るにたらぬ男だと思いはしないかということだよ。」

すると、ウトガルド＝ロキは、声をおとしていった。

「もう君たちは門の外へでたのだから、うちあけるがね。わしは生きているかぎり、もう二度とお前をここへ来させる気はないよ。まったく、お前にあれだけの力があると知ったら、はじめから城へは入れなかったろうな。お前は実際われわれを、ひどい窮地におしつめたぜ。

じつはわしは、お前を魔法であざむいたのだ。君らが森の中であったスクリミールは、じつはこのわしさ。わしは魔法の針金で食料を入れたリュックの口をしばっておいた。だから、どうしても紐がとけなかったろうが。それから、お前があの槌でわしをなぐりつけたとき、お前は気がつかなかったろうが、わしはすばやく山を替玉にしたんだ。でなけりゃ、一撃でわしは死んじまったわな。ほら、あの山が見えんかね、あそこに穴が三つあいている。あれがお前のなぐりつけた槌のあとさ。それか

ら、君らがわしの部下とやった腕くらべも、やっぱりペテンなのだ。うまくだまされたじゃないか。ロキはなるほど大食いで、すばらしく食ったがね。なにしろ相手のロゲは火なんだから、肉でも桶でも食っちまうさ。それに、チアルフと競走したフギは、じつはわしの〈考え〉なのだ。いくらチアルフが早く走ったって、〈考え〉にかなうものかね。」

「じゃあ、おれはどうやってだましたのだ。」と、トールはきいた。

「お前があの角から飲んだときは、ろくに酒がへらんように見えたろうが。だが、あれを見た時は、じつはおれはびっくり仰天したね。なにしろあの角の先は、お前は知らなかったろうが、海につづいているのだ。それなのに、お前がぐうっと飲むと、みるみる海の水がへったではないか。人間はあれを引潮というがね。

それから、あの灰色の猫だが、あれもじつは猫ではない。あいつは大地をぐるっと取り巻いてもまだ頭と尻尾がのこるという、ミッドガルド蛇だったのさ。それつをお前は、たとえ足一本にもせよ、宙にもちあげたじゃないか。正直をいえば、わしは天地がひっくり返りはしないかとはらはらしたぜ。

あの婆さんとの相撲だって、同じことだ。お前があれだけ頑張って、最後にも片膝ついただけだったのは、おどろくべきことだよ。なにしろお前が相手にしたのは、〈年〉だからね。だれだって最後には〈年〉に負けてしまうよ。」

こういって最後に、ウトガルド＝ロキはいった。

「じゃあ、これで別れるとしよう。お前ももう二度とここへは来るなよ。きたって、わしはまたありったけの魔法で城をまもって、絶対に君らに城をあけ渡すようなことはしないからな。」

トールはペテンにかけられたと知ると、例の槌をにぎりしめてウトガルド゠ロキに叩きつけようとした。ところが巨人の姿は、もはやどこにも見えなかった。そんなら城を叩きつぶしてやろうと思って向き直ったが、城ももう影も形も見えず、ただ茫々と草原がひろがっているばかりだった。

# ヒミールの大釜

毎年神々は海の王エギールの館でさかんな宴会をひらいた。ところがトールは、いつもこの宴会では彼が十分に飲むだけの酒がないのを残念に思っていた。そこでそのことを主人のエギールにいうと、相手はいった。
「それは神々が飲むだけの酒を一度にかもせるような大釜が、わしのところにはないからだ。ひとつそういう大釜を見つけてきてくれないか。」
ところが、どこにそんな大釜があるか、知っているものは誰もなかった。たいていの神々は、そんなものがあると聞いたことさえもなかったのだ。
そのとき、戦いの神のチルが思いだしていった。
「うん、わしのおやじのヒミールが、そんな釜をもっていたぞ。すばらしく大きいやつで、深さが二キロもあるんだ。」
「なんとかしてその釜を手にいれられんかね。」
と、トールがいった。
「そうさな、おやじは名題の乱暴者だが、ペテンにかければ手にはいらんこともあるまい。」

そこでトールとチルは、さっそく巨人の国へでかけていった。ヨツンヘイムにつくと、チルの母親は息子がはるばるやってきたのを喜んで、酒をだしてすすめた。それから梁にのせてある八つの大釜をさしていった。

「お前たちはあの釜のかげに隠れるといいよ。ヒミールはあんまり客がくるのを喜ばないからね。」

主人の巨人が漁から帰ってきたのは、夕方も遅くなってからだった。雪にすっかり覆われて、ひげからつららが下がり、身体を動かすたびにそれがぶつかってはかちかち鳴った。

細君は愛想よく出迎えていった。「お帰りなさい、ヒミール。息子がかえってきたんですよ。お友だちのトールをつれてね。あそこの破風の下のお釜のかげにいますよ。」

ヒミールはすさまじい顔つきで、トールとチルの隠れている方を睨みつけた。あまりに鋭い目つきに、柱はさけ、頭の上のふとい梁もめりめりと砕けて、釜はすべて床にころげおちた。おかげで、ただ一つ一番ごついやつが助かっただけで、後はこなごなにわれてしまった。

トールとチルは、隠れ家からはいだしてきた。巨人と神々とは睨みあった。巨人の敵のトールが家にやってきたのが、ヒミールには気にくわなかったのだ。それでも、客人に食物をだすのは忘れなかった。彼は三匹の鹿をつれてきて、これを夕飯にだすようにいった。

トールはその二匹ぶんを平らげてしまった。その大食いにはさすがのヒミールもおどろいて、「明日はもっと食料を用意しなくてはいけまいな。食べものがうまく見つかればいいが。」と、怒ったように呟いた。

朝になると、ヒミールは釣りにいく用意にかかった。トールが一緒にいっていいかときくと、行ってもかまわぬという返事だった。

「じゃあ、餌は何をつかうのかね。」と、トールがきくと、ヒミールはいかにも不機嫌な顔で、「かってに家畜小屋の方へいって捜してこい。なにか餌になるものが見つかるだろうよ。」と答えた。

トールが牧場へ出ていってみると、ヒミールの家畜たちが草をたべていた。彼は中でも一番大きな牡牛をつかまえて、その頭をねじ切った。

ヒミールはトールがそんな餌をもって帰ってくるのを見ると、あきれはててぼやいた。「お前はちょっとでも目をはなすと、何をやらかすかわからん奴だな。」

いよいよヒミールが船をだすと、トールは船尾にすわりこんで二本の櫂をとって漕ぎはじめたが、船がすばらしい早さで進むのが、ヒミールにもよくわかった。ヒミールはへさきにすわって漕いだ。船はぐんぐん沖へ出ていった。

やがてヒミールは櫂をおいて、もういつもの釣り場まできたといった。しかしトールは、もっと先までいこうといって、なおも力いっぱいに漕いだので、船は矢のようになおも先へ進んだ。

しばらくするとヒミールがいった。「もう漕ぐのはよせ。これより先へいっては危険だ。海の底にミッドガルド蛇がいるぞ。」

「なに、まだとまるのは早い。」とトールはいって、なおも漕ぎつづける。ヒミールはもう怖気づいて、びくびくしていた。

しばらくすると、トールは櫂をおいて釣りの用意にかかった。ヒミールは鯨を釣りにかかってたちまち二頭を釣りあげた。
トールは牛の頭を針につけると、力いっぱい海に投げこんだ。みるみる釣り針は海の底まで沈んでいった。彼が釣ろうとするのは、鯨なんかではなく、ミッドガルド蛇そのものだったのだ。
海底にいたミッドガルド蛇は、トールが投げこんだ牛の頭を見て、がっぷりと食いついた。たちまち針はあごにささった。蛇は針にひっかかったのを知ると、恐ろしくはねて縄を引いたので、両手で縄をにぎっていたトールの拳は、ぐいぐいと船べりにおしつけられた。あまりの痛さに腹をたてたトールは、満身の力を両足にこめて船べりに突っ立って縄をひいた。とたんにめりめりと足は船べりをふみぬいて、海の底までとどいた。
そのままトールはおそろしい力で船べりまでミッドガルド蛇をたぐりよせた。見るもすさまじい光景だった。とても正視はできないので、横目でながめると、蛇は毒気をはいて、猛烈に水をはねとばしている。おかげで海底の怪物どもも、みなぶるぶると震えだした。岩はとどろき、大地そのものまでが地ひびきをあげてゆれた。ヒミールはもう恐怖で蒼白になっている。
トールはミョルニールの槌をふりあげて、いまにも怪物を一撃しようとした。とたんに怖気をふるったヒミールが、ナイフをつかんで船べりにかかっていたトールの釣り縄をたち切った。蛇は海底ふかく沈んでいった。
火のようにおこったトールはにぎり拳をかためてヒミールをなぐりつけた。巨人はまっさかさまに

海におち、足の裏だけが水の上に浮んだ。トールはそれをまたつかんで船の上に引きあげてやった。
　彼はがっかりして岸に漕ぎ戻ったが、そのあいだヒミールは、物もいわずにしょんぼりと船尾に坐っていた。それでも彼は、岸に近づくにつれていくらか元気を取り戻して、またもやトールをためしてみようとこんなことをいった。
「おい、トール、お前は船を浜へ引きあげるか、それとも鯨をうちまで運んでいくかね。」
　どちらにせよ、トールにはおそらくできまいと思ったのだ。船はものすごく大きかったし、浜と家との間はけわしい坂道になっていたからである。
　ところがトールは、物もいわずにかがみこむと、船の中にたまった水をかい出すこともせず、片手で船を浜に引きあげてしまった。それから、船や櫂やあか桶はもちろん二頭の鯨まで一緒にひょいとつまみあげると、かるがると巨人の家まで運んでいくのだった。それでもまだヒミールは満足せず、
「いくら船を漕ぐのがうまく、また重たい荷物を運べるからって、もしこのコップが割れんようなら、わしはお前をほんとの豪傑とは呼ばんぞ。」
といって、夕飯の席についたとき、一つのコップをトールにわたした。
　トールはコップをうけとると、いきなり巨人の家の石の大黒柱にたたきつけた。しかし、柱にはひびがはいったが、コップには傷ひとつつかなかった。
　そのときヒミールの細君が、そっとトールにささやいた。
「ね、ヒミールの頭にぶつけてごらん。あれはどんなガラスよりもかたいんだから。」

トールは立ちあがると、ありったけの力でヒミールの額にコップをたたきつけた。と、ヒミールに傷はつかなかったが、コップはこなごなに砕けてしまった。

巨人はだいじなぶどう酒のコップを失ってしまったことをひどく悲しんだが、トールに文句をいうことはできなかった。そこで今度はこんなことをいいだした。「もしお前らに、この釜をもちだすことができたら、釜はお前らにやってもいいぞ。」

はじめにチルがもちあげてみた。だが、ありったけ力をだしてみても、一センチでも釜を動かすことはできなかった。

今度はトールがためしてみた。ふちを両手でつかんで、「うん。」とばかりに足をふんばったとたん、あまりに力がはいって、床をばりばりとふみぬいてしまった。それでもとうとう、釜を頭からすっぽりとかぶることができた。釜はものすごく大きかったので、そうやってかぶると、取手が踵にぶつかるほどだった。

そこでトールとチルは、いそいで家をとびだした。休みなしに道をいそいで、しばらくしてから振り返ってみると、ヒミールが大勢の巨人をつれて追いかけてくる。それを見るとトールは立ちどまって、大釜を地におろすと、ビュービュー槌を頭上でふりまわしてから、巨人の群の真中に、力いっぱい投げこんだ。と、ただの一撃で全部がたたきつぶされてしまった。

こんな具合にしてヒミールの大釜を手にいれると、トールはそれを神々のところまで運んでいった。それからというもの、エギールの館で宴会をするときも、酒に不足することはなかったのだ。

# イドゥンのりんご

オーディンはよくアスガルドからでかけて、世界や人々の様子を見るために、あちこちと旅をして回った。

ある日、彼はロキとヘニールをつれて、そんな旅にでかけた。山や荒野をぬけてどこまでも歩いていくうちに、みんなはひどく腹がすいてきたが、そこらはとても荒れはてた地方で、食物が一向に見つからない。

それでもうまい具合に、ある谷間で牛の群が草をたべているのを見つけた。

「とうとう食いものが見つかったぞ。」

と、三人は谷間へおりていき、まもなく一頭の牛を殺して火で焼きはじめた。そうして、肉がやけるのを待つあいだ、草の上に寝ころんでいた。

やがて、もういいころだろうと思って、彼らは肉を取り出してみた。ところがちっとも焼けていない。そこでまた火をかきたてて肉をのせた。

しばらくすると、ロキがいった。「おれは腹がすいてもう死にそうだ。これ以上は待っていられない。きっと、もう焼けたろう。」

そこで神々はもう一度肉をひきだしてみた。ところが、まだまるっきり焼けていなくて、食べられたものではない。

「どうもおかしいな。」

こういって神々は考えてみたが、知恵者のオーディンにさえ、わけがわからなかった。ところが、そのとき頭の上の樫の大木の梢から声をかけたものがある。

「きみらの火にまじないをかけて、肉が焼けんようにしたのは、このおれだよ。」

見あげてみると、そこの枝に一羽の大鷲がとまっていたのだ。そうして鷲は、「その肉をおれにもわけてくれるなら、肉が焼けるようにしてやろう。」という。

べつに手だてもないので、神々は肉をわけてやることにした。鷲はさっそく木からまいおりて火のそばに坐ったが、たちまち肉はいい香りをたてて焼きあがった。とたんに鷲は、二本の腿肉と両肩のつけねの部分を、両方ともひっつかんだ。

これではあんまりだ。ロキは怒って、いきなり火の中から太い棒をぬきだすと、力いっぱいに鷲をなぐりつけた。鷲は棒の下をくぐって空にまいあがったが、棒の先は鷲の背中にくっつき、もう一方の端はロキの手にくっついたまま、どうしても離れない。鷲は低空飛行をやったりぐるっと旋回したりしながら、どこまでもロキをひきずっていく。そこらの木や岩や石に滅茶苦茶にぶつかり、腕はいまにも肩からもぎれそうなロキは、泣きだしそうな声でさけんだ。

「お願いだからおろしてくれ。そしたら牛は残らずきみにやるよ。」

「おれは牛なんかいらないよ。」と鷲はいった。「おれのほしいのは――あのイドゥンと、あいつのりんごだ。あれをおれのところへつれてくると誓うまでは、お前ははなしてやらないよ。」
イドゥンはアスガルドきっての美しい女神で、ブラギがとても大切にしている妻だ。しかも彼女は、神々の第一のたから〈青春のりんご〉の木の見はり番をしていた。このりんごをときどき食べないと、神々だって年をとって、人間とおなじに死んでしまわなくてはならない。このりんごのおかげで、神々はいつまでも若さをたもつことができるのである。だからイドゥンと彼女のりんごは、神々にとって何より大切なものであった。
「イドゥンとりんごをよこせと？　そいつは絶対だめだよ。」とロキは叫んだ。
「そんならおれも、いつまでだって飛んでいるわい。お前はさんざ岩にでもぶつかって、くたばるがいい。」
こう鷲はいうと、木の間や岩のごろごろころがった荒地をぬけて、どこまでもとんでいく。ロキの全身はもうたんこぶや、ひっかき傷だらけ。もうこれ以上は我慢ができないで叫んだ。「お前のいう通りにするから、どうかはなしてくれ。イドゥンもつれてくるし、りんごももってくるよ。」
「まちがいはないな。」と、鷲は念をおした。
そこでロキは、いつまでにイドゥンを鷲のところへつれてくるか、はっきり日をいって誓いをたてた。
鷲はすぐさまロキを放して、空高くとんでいった。ロキは傷だらけになって仲間のところへ帰り、

それから三人はアスガルドに引き返した。だがオーディンもヘニールも、ロキが鷲とした約束のことは何も知らなかった。

どうやって鷲との約束をはたしたものかと、ロキは頭をなやました。あの鷲は、巨人のチアシが化けていたのに違いなかった。約束をやぶったら大変である。

約束の日がくると、ロキはイドゥンのところへ出かけて、もっともらしくいいだした。「イドゥンさん、昨日わたしはすばらしい実のなっているりんごの木を見つけましたよ。アスガルドの北の方の森の中にあったのです。その実はあなたのりんごに色も形もそっくりだったから、きっと効目もおなじだと思うんだ。あのりんごをアスガルドへとってこようじゃないですか。」

イドゥンがいった。「わたしのりんごとおなじものが、どこの世界にあるものですか。」

「そんなことをいったって、」と、ロキはいい返した。「なにしろそっくりなんでね。まあ、来てじぶんで見てごらんなさい。そうだ、あなたのりんごをもっていって、ひとつくらべてみようじゃないですか。」

こういわれて、イドゥンはじぶんのりんごをもって、ロキについて森へでかけた。するとチアシが、鷲の姿をしてまいおりてきて、さっとイドゥンとりんごをさらっていったのである。

神々はじきにイドゥンがいなくなったのに気がついた。りんごも同時に見えなくなってしまい、神々の上には早くも老年の衰えが見えてきた。みな身体がこわばり、腰がまがってきたのだ。

オーディンはあわてて神々をよび集めて相談した。みなは誰かイドゥンがどこにいるか知っている

ものはないかと、たがいにたずねあった。

最後にあの女神を見かけたのはだれかと、オーディンがきくと、ヘイムダルが思いだして、いつか彼女がロキと一緒にアスガルドを出ていくのを見かけたといった。そのまま彼女の姿はアスガドルから消えてしまったのだ。

オーディンはさっそくトールに、ロキをつかまえてこいと命じた。やがてロキがつれてこられると、神々は彼をさんざんこづきまわして、イドゥンをどこへやったか白状しろとせめたてた。

ロキはすっかり脅えて、イドゥンがヨツンヘイムへつれて行かれたことをうちあけ、もしフレイヤが〈鷹の羽衣〉をかしてくれるんなら、じぶんで彼女を捜して来ようといった。

フレイヤはよろこんで羽衣を貸してやった。ロキはその羽衣をつけると、ヨツンヘイムをめざして北へとびたっていった。まもなく彼は巨人チアシの屋敷へきた。ゆっくりと輪をかいて舞いおりていってみると、イドゥンが下のほうを散歩しているではないか。りんごも金の籠に入れてもっていた。チアシの姿はどこにも見えなかった。ちょうど海へ釣りにいっていたのだ。

ロキは急いでイドゥンのそばに舞いおりると、すぐさま彼女をくるみの実にかえて、それをつかんでとび立った。

まもなく家にかえってきたチアシは、イドゥンと大切なりんごが見えなくなったのに、すぐに気がついた。急いで彼は、鷲に身をかえると、空にまいあがった。見ると、はるか遠くに一羽の鷹がとんでゆく。すぐさま彼は追いかけた。力づよい鷲のつばさは、大風のようにうなりをたてて空をきっ

た。みるみるチアシはロキにせまった。

ロキは全速力でとんだが、鷲はぐんぐん間をちぢめて迫ってくる。ようやくアスガルドの塔が見えてきた。ロキは金色に輝いている神々の宮殿めがけて、最後の力をふりしぼって急いだ。

ロキの帰りを待ちわびていた神々は、いま、一羽の鷹が爪の間にくるみをつかんで空をとんできて、それを鷲が追いかけているのを見ると、大いそぎでアスガルドの門のそばに高々と薪の山をつんだ。ロキはその薪の山をかすめるようにして、さっとアスガルドにとびこんだ。

鷹がアスガルドに逃げこむ前につかまえようと思ったチアシは、低くまいおりて追いかけてきた。彼が薪の山の上にさしかかったとたん、神々はいっせいに薪に火をつけた。たちまち火は勢いよく燃えあがった。猛然ととんできたチアシは引き返すことができず、みるみる羽に火がついて、火だるまになって地におちた。そこへ神々がかけつけて、切り殺してしまった。

イドゥンがぶじに帰ってきたので、アスガルドは喜びにわきたった。こうして神々は光り眩ゆいような若さをもう一度とり戻したのであった。

# ニオルドとスカディの結婚

巨人のチアシが神々に殺されてから、まもなくのことだった。神々がアスガルドで宴会を開いていると、だしぬけに一人の女巨人が、つかつかとその席にはいってきて神々を睨みつけた。彼女は光りかがやく鎧かぶとに身をかため、大きな雪靴をはいていた。背には鋭い弓矢をおい、手にはきらきら光る投槍をもっている。その姿はまことにすさまじくも、また凛々しかった。

「おまえは何者だ。いったいここへ何しにきたのか。」と、神々は驚いてたずねた。

「わたしはチアシの娘のスカディだ。父を殺された仇をうちにきたのだ。」と娘はいう。

神々はたしかにチアシをうち殺したおぼえがあるので、これは困ったことになったと思った。それに、この美しく凛々しい乙女がすっかり気にいってしまったので、なんとかして彼女の怒りをなだめて仲直りしたく思った。そこでオーディンはいった。

「もともとおまえの父親がイドゥンをさらったのがいけなかった。そのためにチアシは命を失うことになったのだ。だが、わしは、その霊を慰めるために、彼の目を天に投げあげておいた。そら、あそこに見える二つの星が〈チアシの目〉だ。それで彼を殺した償いはついたと思うんだが、お前はそれでもまだ不満なのか。」

しかしスカディはきかずに、「そんなことで満足できるものですか。わたしの心臓は復讐をねがい、わたしの投槍は、神々の血にうえているのだ。」と叫んだ。そして神々がいくらいろいろとなだめたり、弁償金をはらうからそれで許してくれといってもききいれず、なおも怒りにもえた目で神々を睨みつづけるのだった。

これは困ったことになった。あの勢いでは、おれの命をとらなくては帰っていきそうにない。なんとかしてスカディの怒りをやわらげることはできないものか。それにはあの娘を笑わせるにかぎるのだが——こう思って、なかでも心配したのはロキだった。チアシが命をおとすようなことになったのも、結局は、ロキのいたずらがもとだったからだ。

と、ふっとロキはうまいことを考えついた。

彼は一匹の山羊をひっぱってくると、その鬚に紐をむすびつけ、もう一方の端をじぶんの腰に結びつけて、こうして互いに引きつ引かれつ、おどけた踊りをはじめたのだ。そのエロっぽい踊りを見て、神々はげらげら笑いこけた。ところがスカディは笑いをこらえて、相変らずむっつりしている。

ロキはそれを見ると、なおもおどけた姿をして踊りながら、いきなりスカディの膝の中にころげこんだ。とうとうたまらなくなって、スカディも笑いだし、さすがの怒りもとけてしまった。

そこで神々は、彼女と一緒にいろいろと仲直りを相談した。その結果スカディは神々の一人をえらんで夫にして、神々の仲間に加わること、ただしその夫をえらぶには、神々の足だけを見てきめる、ということになった。スカディもそれを承知した。そこで神々は、スカディに厚い布で目かくしをし

て、神々の足だけが見えるようにした。
スカディは心の中で考えた。「夫にえらぶなら、神々のうちでいちばん美しいバルドルにしたいものだ。バルドルのようにきれいな神は、きっと足だっていちばんきれいにちがいない。」
そこで彼女は、まわりにならんだ神々の足をぐるっと見回して、いちばん真白い、美しい足を見つけると、しっかりとその人をつかまえて叫んだ――
「わたし、このかたを夫にきめたわ。」
ところが、いよいよ目かくしをはずしてみると、それはバルドルではなくてニオルドだった。しまった！　と思ったが、もうおよばない。今さら約束をやぶるわけにはいかないので、彼女は心に失望をかくしながらニオルドと結婚することにした。
しかし、こんな失望を心の底にもっていたためか、この結婚は結局うまくいかなかった。
ニオルドは、新しい花嫁を、じぶんのノアツンにつれていった。ノアツンとは船つき場という意味で、海ばたにあるニオルドの大きな館である。彼はおだやかな海をおさめる神で、航海や漁業の守り手だったのだ。
ところがスカディは巨人チアシの娘だから、こんな海ばたのおだやかな景色は気にいらない。じきにあきてしまって、父親の住んでいたトリムヘイムのピューピューふきまくる北風やなだれの音や、狼のほえる声をなつかしんだ。なにしろ彼女は、そんな荒々しい北国の野山を、凛々しく武装し、雪靴をはいて、けものを追いまわしてくらしていたのだから。

とうとう彼女は、夜もろくろく眠れなくなってしまい、思わずこんな歌をくちずさんだ――

波うちぎわの寝床では
鳥のさけびがうるさくて
夜もろくろく眠れない
なにしろ　毎朝
海から鷗どもがやってきて
わたしの目をよびさます

気のやさしいニオルドは、それをきいて妻をかわいそうに思い、今度はスカディの故郷のトリムヘイムにいって、しばらくそちらで暮すことにした。でも、一年じゅう雪と氷に覆われたような山国でくらす気には、どうしてもなれなかった。そこで二人で相談して、トリムヘイムで九カ月、残りの三カ月はノアツンで暮すことにした。

ところが、いよいよトリムヘイムで暮してみると、嵐のふきすさぶ音や谷川の氷の割れる音、狼の叫びなどが耳について、どうにも眠ることができない。たった九夜トリムヘイムで過しただけで、ニオルドはもう故郷が恋しくてたまらなくなった。

そこでニオルドは、思わずこんな歌をくちずさんだ――

山に住むのはつらいもの
わしは長くも暮さなかった
まだただの九夜だけだ
でも　白鳥の歌のほうが
狼どものほえる声より
わしにはずっと楽しいな

こんなふうで、とてもスカディとニオルドが一緒にくらすのは無理だった。ニオルドはとうとう自分の海辺の家に帰ってしまった。

そこでスカディは父の家に残って、昔ながらの生活をすることになった。弓矢で武装し、雪靴をはき、スキーを乗りまわして、狼や雷鳥を追いまわすのが、何よりの楽しみだったのだ。そんなわけで、彼女はよく〈雪靴の女神〉とよばれる。

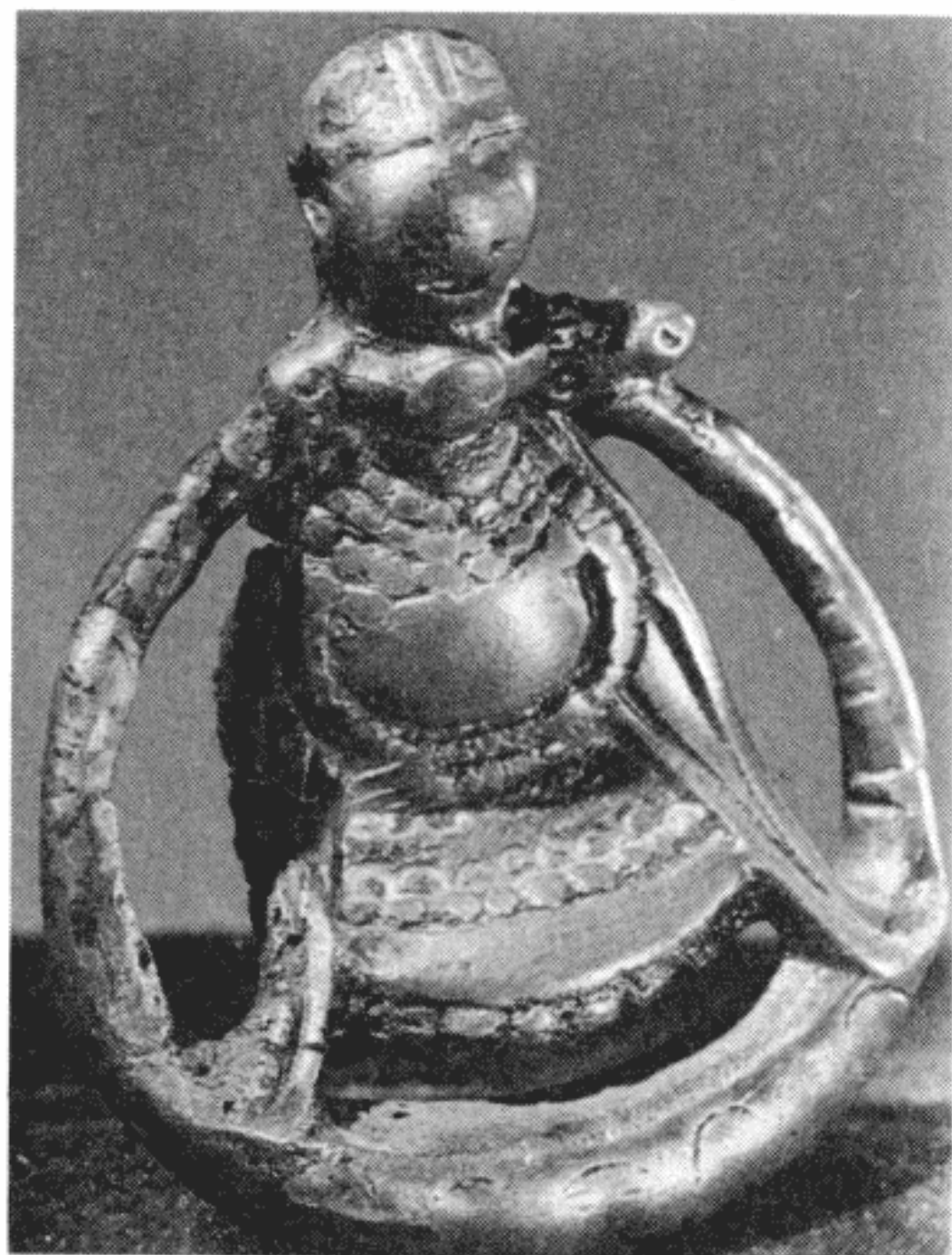
こんな男まさりのスカディだったが、やっぱり山での一人ぐらしがさびしかったのか、やがて彼女は冬の神ウラーと新しく結婚した。ウラーはなにしろ冬の神だから、ふきすさぶ風や、なだれの音や狼のほえる声も、ぶきみどころか、かえって快く感じた。こうしてウラーとスカディの夫妻は、その後はたのしく月日を送るようになった。

## フレイヤのさすらい

フレイヤはアスガルドの神々のうちで、もっとも美しい女神である。美と愛の神、また、子宝や畑のみのりをめぐむ神として、北欧人のあいだでは、どの神にもおとらず崇拝された。金曜日を英語でフライデーというのは〈フレイヤの日〉という意味だし、りっぱな婦人のことをドイツでフラウ、北欧の国々ではフルーというのも、フレイヤからきた言葉である。そして、いまでもこれらの国々で結婚式がこのんで金曜日に行われるのも、それが愛と美の女神フレイヤの日だからだという。（もっとも、フライデーやフラウは、オーディンの妻フリッグの古名フリーアから来るとする説もある。）

フレイヤはもとヴァニール（海神族）の生まれで、兄のフレイとともにニオルドの子だった。アスガルドの神々とヴァニールたちが、長い戦いの末に仲直りをして、ニオルドがアスガルドに人質としてやってきたとき、フレイとフレイヤの兄妹も、父につれられてアスガルドの神々の仲間入りをしたのである。

アスガルドの女神たちのうちで、一番みなに敬われていたのは、もちろんオーディンの妻フリッグだ。しかし、神々はフレイヤの美しさとしとやかさがすっかり気にいって、誰にもまけないひろい土地を彼女の領地としてあたえた。彼女はそこにセスリムニルという大きな館をかまえて住んだ。そう

フレイのブロンズ像

フレイヤのブロンズ像

してだんだん彼女はフリッグにとってかわり、しまいにはオーディンの妻になったと見られている。

フレイヤは愛の女神として、愛らしい歌を何より好んだ。愛しあっている恋人同士や夫婦のねがいに喜んで耳を傾け、またその人たちが死ぬと、じぶんのセスリムニルの館に彼らを招いて、たのしい日々を送らせるのであった。

一方でまたフレイヤは勇ましいことがすきで、戦場で名誉の戦死をとげたものがあると、いちはやく〈鷹の羽衣〉をつけ、戦いの乙女ワルキューリたちをひきいて戦場にかけつけ、その半分をじぶんの館に運んでくると考えられた。あとの半分は、もちろんオーディンがワルハラに迎え入れるのだ。そんな彼女は、〈戦いのフレイヤ〉と

よばれる。そこで昔の北欧の女たちは、恋しい愛人や夫が戦場で死ぬと、じぶんもその場にかけつけて、フレイヤの館に一緒に迎え入れられることを願って、すすんで敵の刃に命を落したり、じぶんで愛人の屍をやく薪の上に身を横たえたものだった。

またフレイヤは農作の神で、そんな時の彼女は、兄のフレイと一緒に金の毛まばゆいのししのひく車にのって天をかけめぐりながら、両手で惜しげもなく花や果物を地上にまきちらすのである。でも、彼女の一番すきな乗物は、二匹の猫がひく車だった。猫は多産と愛情のしるしとして、フレイヤのお気にいりの動物だったのだ。燕や郭公も、また春をつげる鳥として、彼女のお気にいりだったらしい。

彼女は美の女神として、すべて美しいものを愛したが、わけても彼女が誇りにしていたのは、小人たちにもらったブリシンガメンという首かざりだった。このすばらしい宝を手に入れるためには、彼女は幾人かの小人と一夜ずつを共にしたといわれる。また、自由自在に空をとべる〈鷹の羽衣〉も彼女の宝物といわれ、トールやロキなどの神々が、これをちょいちょい借りうけたものだった。

さてフレイヤは、太陽の光をあらわすといわれるオッドあるいはオズルという神を夫にした。彼女は夫を心から愛して、夫のそばにいる時はかぎりない幸福にひたり、いつでもにこにこしているほどだった。

やがて子供も二人生まれた。二人とも女の子で、しかもフレイヤの子だけにすばらしく美しかった。ひとりはフノス、もうひとりはゲルセメといった。ことにフノスは光りかがやくように美しかっ

たので、それからというもの、北欧の人たちは美しく輝くものをすべてフノシルと呼ぶようになった。

ところが夫のオズルは、こんな美しいフレイヤとの生活にもあきてしまって、ふらりと旅にでたま、いつまでたっても帰ってこない。フレイヤはさびしい思いをしながら、いつ帰るかいつ帰るかと夫の帰りを待ちくらした。しかしオズルは、いつまで待っても帰らず、行方さえもわからなかった。フレイヤは、夫の姿がどこかに見えはしないかと思って、よく高い岩にのぼって四方を見回したが、どこにもいとしい人の姿は見あたらなかった。

彼女はそこに坐りこんでさめざめと泣いた。涙は彼女の頬をつたってぽとりぽとりと岩の上におちた。すると、彼女の熱い涙にひたされて、鉄のようにかたい岩もとけ、岩のわれめにしみこんだ彼女の涙は、大地のそこで結晶して黄金になった。そんなわけで北欧の人たちは、金のことを〈フレイヤの涙〉とよぶ。

とうとうフレイヤは、恋しい夫をさがしに旅にでた。れいの二匹の猫のひく車にのって、彼女は東に行き、西に行き、北へ、南の国へと、いたるところをたずねてまわった。しかし、いとしい人の姿はどこへいっても見つからない。それでも彼女はどうかしていなくなった夫を捜しあてたいものと、泣く泣くさすらいの旅をつづけるのだった。

世界のいたるところに少しずつ金がちらばっているのは、フレイヤがそこいら中に涙をこぼしながら、こうして世界をさすらったからだという。また世界の各地の人々は、このさすらいの美しい女神

を見て、それぞれ自分流の名前で彼女をよんだ。そこでフレイヤには、いくつもの違った呼び名ができた。マルデルとか、ホルンとか、ゲフン、シル、スキャルフなど。そこで〈フレイヤの涙〉とよばれた黄金は、また〈マルデルの涙〉とも呼ばれることがある。

いま残っている『エッダ』の話では、フレイヤが恋しい夫にめぐりあったことは書かれていない。しかし、いい伝えによると、フレイヤはとうとう南の国で夫にめぐりあったことになっている。オズルはあたたかい南の国で、美しく咲きほこっている天人花のあいだに、なにもかも忘れてうっとりと坐りこんでいたという。

フレイヤはその姿を見つけると、走りよって夫にすがりつき、うれし涙にむせびながらも、長いこと夫がじぶんを見捨てていたことをかきくどいた。

オズルの胸には愛がよみがった。夫はフレイヤの手をとって、

「ほんとにすまなかった。さあ、一緒にアスガルドへかえろう。」

といった。涙にぬれたフレイヤの顔には、みるみる涙のあとが消えて、あたらしい花嫁のような微笑がうかんだ。北欧の花嫁たちは、そんなわけで、いまでも天人花を好んで髪にさすのだという。

オズルとフレイヤは、手に手をとってアスガルドに向った。フレイヤの足どりはいままでとちがって、いかにも軽やかだった。そして、彼女の一足ごとに大地は青々とよみがえり、木も草も花をつけはじめた。昨日まで悲しみの歌をうたった小鳥たちも、いまは愛の女神フレイヤが戻ってきたことを喜んで、楽しげにさえずるのだった。

この神話は、太陽の光にみすてられて長いあいだ悲しみにとざされていた北国に、いまは春がたち帰ってきたことをあらわしたものであろう。

## フェンリス狼の話

ロキはアスガルドに住んで神々の仲間にはいり、オーディンと義兄弟になったが、じつは巨人の種族の出であることは前にいった。だから、彼はいつも心の中にひそかな悪だくみをかくしていた。

ロキがまだ山の巨人たちの間でくらしていた頃、彼はアングルボダという巨人の女を妻にして、三人の子供をもうけた。一人はフェンリルという狼（続けていう時はフェンリス狼となる）、二番めはヨルムンガンドという蛇、三番めはヘラという女である。

まもなく神々は、ロキの三人の子供が巨人の国にいることを耳にした。オーディンはその子供たちがやがて世界に災いをもたらすのではないかと心配した。そんな子供たちから出てくるのは、悪いことにきまっているからだ。そこでオーディンは、その子供たちをアスガルドにひっぱってこさせた。

ロキの子供たちがオーディンの前にひきだされると、オーディンはすぐさま蛇をつかんで海の中に投げこんだ。

しかし、蛇は死ななかった。何年もたたぬうちに彼はすさまじく大きくなって、人間の住むミッドガルドの大地を一まきしてもまだあまり、じぶんの尻尾を口にくわえるほどの大蛇になった。そこでミッドガルド蛇ともいう。

つぎにはオーディンは、ヘラをつかむと、

「おまえは地下の世界へいって、死人の王になるがいい。」というなり、ニフルヘイム（霧の国）の底深く投げこんだ。

戦場でたおれた勇士はアスガルドのワルハラに運ばれていくが、病気や老年のために死んだ人間はみな霧に包まれた地下の国にいくというのが、昔の北欧の人々の考えだった。彼らは高い壁をめぐらした女王ヘラが治める国で、暗いしめっぽい日を送るのである。ヘラは半身が肉色で、半分は氷河のように青い色をしていた。

しかしオーディンは、フェンリルだけはアスガルドにとどめておいた。もちろん神々がきびしく見はっているのである。といっても、なにしろフェンリルはあまり気性がはげしいため、餌をやる役目は戦いの神チルでなくてはつとまらなかった。

狼が一日ましに驚くほど大きく逞しくなってゆくのを見て、神々はいつかあの予言が実現するのではないかと怖れおののいた。その予言は、やがて大きな狼がきて神々の世界を滅ぼすだろうと、はっきりといっていたからである。

なんとかして、いまのうちにこのフェンリルを押えつけなくてはと神々は考えて、一本の太い鎖をつくると、狼のところへいって鎌をかけてみた。「お前は力が強いから、こんな鉄の鎖くらいわけなく切れるね。」と。

狼はその鎖を見ると、こんなものを切るのはぞうさもないと思っていった。「いいから縛ってごら

んよ。」
そこで神々はしっかりと狼を縛ったが、フェンリルがぶるんと身体を一ゆすりすると、たちまち鎖はずたずたに切れてしまったではないか。
神々はこんどは倍も太い鎖をこしらえて、それをフェンリルのところへもっていくと、この鎖は前のより二倍も丈夫だ、こいつを切ったら、それこそお前の名声はいよいよ高くなるだろうよとおだてあげた。
狼はその鎖を見て、どんなにそれが巧みな鍛冶の手で丈夫につくられているかに驚いたが、しかしじぶんの力だとて、最初の鎖を切った時からみれば、ずっと強くなっているのを知っていた。それに、名声をあげようと思えば少しは危険もおかさなくてはならない。そこでフェンリルは今度も、
「まあ、いいから、縛ってごらんよ。」といった。
神々は、できるだけしっかりと狼を縛ると、これでいいと思った。フエンリルはぶるっと武者ぶるいをして一気に鎖をたちきろうとしたが、今度はなかなか切れなかった。彼は大地に身をこすりつけたり、鎖をかきむしったりして、猛烈にあばれた。そのはげしい勢いに、ついに鎖は切れて跳ねとんだ。
二度も失敗したので、神々はすっかり怖れをなして、もうフェンリス狼を縛ることはできないのではないかと心配した。とうとうオーディンが一計を案じた。彼はフレイの部下のスキルニルを黒小人のところへ使いにやって、一つのふしぎな鎖をつくらせたのである。

その鎖は六いろの品――猫の足音と、女のひげと、岩のねっこと、熊の足の腱と、魚の息と、鳥の唾液をよりあわせて作ってあった。いずれもふしぎな品ばかりだ。いったいこんなもので鎖がつくれるのだろうか。

しかし、たしかにこれらの品が使われた証拠に、それ以来猫には足音が、女にはひげが、岩には根が、熊には腱が、魚には息をすることが、鳥には唾液がなくなったのである。だから、いまいったことに間違いはないはずと、『エッダ』の作者はいっている。

黒小人がつくりあげたこの鎖は、まるで絹のリボンのようにやわらかですべすべしていた。それでいて、どんな鉄の鎖よりも丈夫だった。

スキルニルがこの鎖をアスガルドにもってくると、神々は手から手にわたしてそれぞれ力いっぱい引張ってみたけれど、どうしても切れなかった。神々は喜んで湖の中にある小島へ狼をつれていってフェンリルにその絹の細いリボンのような紐を見せていった。

「この紐はいかにも細くて弱そうに見えても、なかなか丈夫なんだ。でも、おまえに切れんことはあるまい。」

すると狼はいった。「こんな紐は、切ったところで名誉になりそうもありません。もっとも、悪だくみと魔法でこしらえたものなら、細くて弱そうに見えても油断はできんがね。いずれにせよ、こんなもので縛られるのはごめんです。」

こういわれて神々はこまったが、知恵をしぼっていった。「お前は太い鉄の鎖でも切ったのだから、

こんな絹紐が切れないわけはない。またもしこれが切れないようなら、神々はなにも心配することはないわけだ。だから自由にはなしてやるよ。」
するとと狼はいった。
「一度しばられてしまったら、鎖をといてもらう日を待っていたって、らちがあきますまい。ぼくはどうもこの紐には何か仕掛けがありそうで、縛られるのは気がすすまないのだ。しかし、意気地なしと思われるのはいやだから、まあ縛ってもらいますが、そのかわり、あなたがたがぼくをペテンにかけるのでない証拠に、だれか一人、ぼくの口の中に手をさしこんでいてください。」
もし神々がペテンにかけるなら、すぐさまその手をかみ切ってやるというわけなのだ。これをきいて、神々はたがいに顔を見合せるばかりで、一人としてすさまじい狼の口の中に手をさしこむ勇気のあるものはなかった。
フェンリルは、それみたことかとばかりにせせら笑った。
とたんにチルがぐいと右手をつきだして、狼の口の中にさしこんだ。
神々はすばやく絹紐で狼をしばりあげた。フェンリルは必死でそれを切ろうとしてもがいたが、紐は彼が力をいれればいれるほどいよいよ肉にくいこんでくるばかり。それを見て、神々ははじめて笑った。しかし、片手を食いちぎられたチル神だけは笑うことができなかった。
狼がもう紐を切れないとわかると、神々は太い鎖にその紐をむすんで、その鎖を大きな岩にしばりつけ、それからその岩を土ふかく埋めて、大きな岩をまたその上にのせたのである。

それでもフェンリルは、大きく口を開いて咆えにほえ、鎖にしばられたまま暴れにあばれて、神々に食いつこうとする。そこで神々は、その上顎と下顎のあいだに一本の刀をつきたてた。こうなっては、いくら狼でも、かみつくことはできない。もう安心だった。

こうしてフェンリルは神々と巨人族との最後の戦いの日まで、じっと縛られていたのである。

# バルドルの死

バルドルは神々の中で一番美しく、またみなに最も愛されていた。彼はギリシャ神話のアポロンに似た神で、彼の行くところにはどこにも喜びと光があふれた。賢くて親切で、行いは正しく、彼は神々にも人間にも深く愛され、誰からもオーディンのあとつぎと考えられていた。

ところがそのバルドルが、あるとき、じぶんの命をおびやかすような不気味な夢をみた。夢はいく夜もいく夜も、彼をおそって苦しめた。その夢をみなに話すと、神々もあやしい不安におそわれた。

——バルドルに生命の危険がせまっているのではないか。

誰しもがこう感じた。そこで神々は会議をひらいて、バルドルを助けるすべを相談し、みなでバルドルの安全をまもるために、あらゆる危険をふせぐことを申し合せた。

母親のフリッグは世界をまわって、どうか息子の命を傷つけないでくれと、すべてのものに頼んで歩いた。火も水も石も土も、あらゆる木や金属や鳥や獣も、病気や蛇さえもが、決してバルドルに害を加えないことを女神に約束した。

こうしてバルドルはあらゆる危険をまぬがれることになった。神々は大いに喜んで、一つの遊戯を思いついた。バルドルをみなの真中に立たせておいて、四方から石やら矢やらを投げつけてみるの

だ。それでもバルドルは、傷一つうけずに平気でそこに立っている。これは神々にとってはとてもおもしろい遊戯だった。こうしてバルドルの人気は、いよいよすばらしいものになった。

ところがロキひとりは、バルドルが一向に傷をうけないのが、癪でたまらない。根性まがりで悪だくみにたけた彼は、さっそくバルドルをひどい目にあわせる計画をたくらみ始めた。

彼はまず年とった老婆に身をかえて、バルドルの母親を訪ねて秘密をさぐりにかかった。

「神々は、広場でふしぎな遊戯をやっていましたよ。バルドルを真中に立たしておいて、みんなで石やら矢やら、いろんなものを投げつけていましたが、ふしぎなことに、何をぶつけてもバルドルは少しも怪我をしないのですよ。」

こうロキは、婆さんのつくり声をしていった。

「そりゃバルドルには、石だって木だって、どんな武器だって歯がたちませんさ。だって、みんなはわたしに、バルドルには決して害を加えないって約束してくれたんだもの。」と、フリッグは得意そうにいった。

「へえ、世界中のものがそんなことを誓ったんだかね。」と婆さんはきいた。

「そうですとも。ワルハラの広間の西にはえているやどり木ひとりをぬかしてはね。なにしろ、あれはまだほんの小さい木で、誓いをたてさせるのはむりだものね。」と、フリッグは答えた。

それを聞きだすと、婆さんはさっそく別れをつげた。それからロキはもとの姿にかえると、ワルハラの西へいってそのやどり木を根こぎにして、神々の遊んでいるところへでかけた。

ロキとホズル（クワーンストレム）

バルドルの兄弟のホズルは、盲目なので遊びの仲間に加わることができずに、しょんぼりとみなの輪の外に立っていた。ロキはそこへ近よっていって言った。

「あんたはどうしてバルドルになにも投げつけないのかね。」

「バルドルがどこに立っているんだか、ぼくには見えないもの。それにぼくは投げつけるものももたないんだ。」

と、ホズルは答えた。するとロキはいった。

「あんたもバルドルに敬意を表して投げつけてみるんだね。あんたの兄弟の立っている場所は、わしが教えてやる。さあ、この棒を投げつけてごらん。」

そこでホズルは、やどり木をつかんでバルドルをねらった。ロキが方角を教えてやった。棒はさっとんでいってバルドルをつらぬいた。バルドルは地にうちたおれて死んだ。

バルドルがたおれたのを見て、神々は悲しみとおどろきとで口がきけず、走りよってその死骸をだきあげる元気さえなかった。たがいに顔を見合せて、誰がいったんこんな凶悪なことをしたかと嘆き

悲しむばかりだった。しかも、みなは神聖な社の境内にいたので、仇をうつこともできなかった。なかでも一番悲しんだのはオーディンだった。バルドルの死が神々と人間にとって、どれだけ大きい損失になるかをよく知っていたからだ。

最初に口をきったのは母親のフリッグだった。

「あなたがたのうちで、このわたしの愛と恵みを残りなく受けたいと願う者があったら、どうかヘラの国へいってみてください。そして、死人の間でバルドルをさがして、ヘラにどんな贈物をしてでも、あの子がこのアスガルドへ戻れるようにはからってください。」

他ならぬ大神フリッグの頼みである。剛勇ヘルモッドがこの困難な旅の役目をひきうけた。八本脚のオーディンの乗馬スレイプニールが、そこへひきだされた。ヘルモッドはそれにとび乗ると、ただちに死の国をめざした。

その間に神々はバルドルの屍を海辺に運んだ。バルドルの船が浜にひきあげられていた。神々はその船に薪をつみあげて、バルドルを火葬にしようとしたのだ。

ところが、船を水におろそうとしても、どうしても船は動かなかった。そこでオーディンは、力持ちで知られる女巨人のヒロキンをよびにやった。彼女が船を力まかせに海におしこむと、そのはげしい勢いで大地はふるえおののき、船の下にしいた丸太が火をふいた。

いよいよ船の上に薪がつみあげられると、神々はバルドルの屍をその上にのせた。それを見たバルドルの妻のナンナは、悲しみに胸がはりさけ、そこにうちたおれて死んだ。神々は悲しみのうちに、

彼女の死骸をバルドルのそれと並べて薪の上にのせた。
いよいよ火がつけられた。トールがそばに立って、その槌をふって炎を浄めた。
その葬式には、あらゆる神も人もやってきた。第一はオーディンで、彼のお気にいりの二羽の大がらすは、ぱたぱたと主人のまわりをとんで羽ばたいた。フリッグが彼にならんで立った。名誉ある死者をワルハラ宮へつれていくワルキューリたちもきていた。フレイは〈金のたてがみ〉のひく戦車にのって来たし、フレイヤは猫に車をひかせてやってきた。ほかの男女の神々も残らずやってきた。
霜の巨人や山の巨人の国からさえ、多くのものがやってきた。それほどバルドルの死はみなから悲しまれたのであった。
オーディンはその火の上に彼の指輪をのせた。これはドラウプニールといって、九日めの夜ごとに自分とおなじ金の指輪を八つずつ生みおとすふしぎな指輪である。弔いの船から立ち昇る煙は、まばゆく空と海の上に輝きながら、高く高くのぼった。その煙を見るにつけても、神々の胸は不吉な思いと悲しみで重たくおしつけられた。
その間にもヘルモッドは、ヘラのもとへ急いでいた。何ひとつ目に見えるものもない暗黒の谷をぬけて、彼は九日九夜馬を走らせて、やがて、ヨルの川岸にでた。そこには、きらきらかがやく金をしきつめた橋がかかり、モットグッドという乙女が橋番をしている。
ヘルモッドがその橋を渡っていくと、乙女が彼の名前と生まれと用向きとをたずねていった。
「つい昨日も、五人の死者がこの橋をふみとどろかして通っていきましたのに、今日はあなた一人が

通るだけで橋は昨日にまけないほど鳴りとどろいています。しかもあなたの顔色は死人とも見えません。あなたはどういう人で、何のためにここへきたのですか。」
「わしは死者の国へいってバルドルを捜してこいと、大神に命じられてきた者だ。バルドルはもうこの橋を渡ったかね。」
　こうヘルモッドがいうと、乙女はもはやバルドルが橋を渡ったことをいって、道はこれからずんずん北へくだっていけばよいと教えてくれた。
　とうとうヘルモッドは、ヘラの国のいかめしい城門の前にのりつけた。彼は馬をおりて鞍をしっかりとしめなおし、それからまた馬にとびのってはげしく拍車をかけた。馬はさっと一躍りして城門をとびこえた。
　こうして死者の集められている大広間にのりつけると、彼はうまをおりて中へはいっていった。と、バルドルがりっぱな玉座に坐っているではないか。
　ヘルモッドはその夜はそこでバルドルと共に一夜をすごした。
　あくる朝になると、かれはヘラの前にすすみでて、どうかバルドルを一緒につれ帰らせてくださいといって、
「神々はバルドルを失って悲しみきっています。世界のありとあらゆるものが、彼の帰りを待ちわびているのです。」
と、言葉をつくして頼みこんだ。

すると、半身は氷のように青く、半身は肉色をしたヘラは、不気味な笑いをうかべて、それほどバルドルがみなに愛されているかどうかは、ためしてみなければわからぬことだといってこう答えた。「もし、世界の生きたもの死んだもののすべてが彼の死を嘆き悲しんでいるのなら、バルドルはアスガルドに帰してやりましょう。しかし、たとえ一人でも彼を愛さないで、その死を泣き悲しまない者があったら、バルドルはわたしの手許にとどめておきますよ。」

やがてヘルモッドが別れをつげると、バルドルは広間の外まで彼を送ってきてドラウプニールの指輪をヘルモッドに渡し、これをぼくの記念にオーディンのところへ持ち帰ってくれと頼んだ。バルドルの妻のナンナは、リンネルの上っ張りその他を、フリッグへの贈物にした。

ヘルモッドはアスガルドに帰ると、じぶんの見聞きしてきたことをくわしく神々に話した。そこで神々は世界じゅうに使いをだして、「どうかバルドルのために泣いてくれ。そうすればあの神は死の国から帰ってこられるのだ。」と、あらゆるものに伝えさせた。

すべてのものが彼のために泣いた。——人間もあらゆる動物も、大地や石や木々や、あらゆる種類の金属までが。朝早くおきてみれば、人々は草の上にその涙がたまっているのをいまも見ることができるだろう。

やがて使いの者たちは、りっぱに使命をはたしたことを喜びながらアスガルドにもどってきた。すると、一人のみにくい老婆が洞穴のそばに坐っているのを見た。そこで彼らは、他のすべての者にしたように、婆さんにもきいてみた。

「おばあさん、あんたもバルドルを死人の国からよび戻せるように、彼のために泣いてくれるだろうね。」

しかし、老婆は答えた。「わしはバルドルのために泣くことはごめんだよ。あの男はすかないでな。あいつはヘラにまかしておけばいいのさ。あの女にまかしておけば。」

こんなわけで、世界にただひとりバルドルのために泣きたくないという者があったため、彼は死の国に残らなくてはならなかったのである。そこで世界は、神々にとっても人間にとっても、二度と前のように美しい姿に戻ることはできなかった。

神々と人間は、これがまたもやロキのしわざであることを知った。今度こそ断じてロキを罰してやらなくてはならない。そこで神々はロキに復讐することになった。

## ロキのこらしめ

神々はロキを宥すことができなかった。バルドルを殺したのはロキであり、かれがヘラの国に残らなくてはならなくなったのも、彼のせいだということを神々はよく知っていたからである。しかし、彼がアスガルドの聖地にいる間は復讐をするわけにはいかなかった。

それをいいことにして、ロキは相変らず神々をからかったり苦しめたりした。とうとうある日、トールはもう我慢ができなくなって、「ロキ、口をつつしまんか。でないと、この槌でたたき殺すぞ。」と、槌をふりあげてどなりつけた。

たちまちロキはおとなしくなった。神々が自分にたいして腹をたてていること、トールなどは自分を殺してしまいたいと思っていることを、彼はよく知っていたのだ。

そこで彼はアスガルドを逃げだして、山奥ふかくに隠れ、そこに戸口が四方についた家をたてて住んだ。戸口が四方についていたから、どちらの方角でも眺めることができた。きっと神々は、彼を捜しにくるだろう。だから、どの方角からやってきてもよくわかるようにしておいて、神々がきたらいちはやく反対の方へ逃げようと考えていたのだ。

彼はよく鮭に姿をかえては、家の近くを流れる大きな川で泳いで遊んだ。ある日彼は川で泳いでい

たが、ふと、――いったい神々は、どうしたら川の中にいるおれをつかまえられるだろうかと考えた。

そこで家に帰ると、さっそく麻のより糸をもってきて、いろいろ工夫して一つの網をつくりあげた。それは、いま漁師たちがつくる網と、そっくりのものだった。

一方神々はアスガルドで、ロキをつかまえる相談をしていた。オーディンは高い玉座についていたが、そこに坐ると全世界を見渡すことができた。こうしてオーディンが谷間を眺め海のほうを眺め、また山々を眺めていると、とうとうロキの隠れている場所が見つかった。さっそく神々はロキをつかまえに出かけた。

ロキはいろりの前に坐ってせっせと網を大きくしていたが、神々がやってきたのを見ると、急いで網を火の中へ投げこみ、すぐさま川の中へ躍りこんで鮭にばけて水底ふかくもぐった。

神々はロキの家につくと、知恵者のクワシールを先頭に家の中へはいってきた。クワシールは炉の中にロキの投げこんだ網が白い灰になっているのを見ると、すぐさまこれは魚をとるのに使えそうなものだ見ぬいた。

ところが、ロキの姿はどこにも見えない。きっと魚にばけて水にもぐったにちがいないと、神々は考えた。

「こうなったらあいつをあいつ自身のトリックでつかまえてやるばかりだ。」とトールは叫んだ。

そこで神々は、麻糸をたっぷり持ってきて、大きな網をあみにかかった。ロキのつくった網の燃え

鉄の鎖につながれたロキ

がらがきれいな灰の模様になって残っていたので、それを真似てどんどん網をあんでいった。

いよいよ網ができあがると、神々はそれをもっていって川に投げた。トールが一方の端をもち、ほかの神々が力を合せてもう一方の端をもった。

川の上手には大きな滝があったのでみんなはその滝壺の近くに網をはって、海の方へ追い下していくことにした。神々が近づいてくると、ロキは川底の二つの大岩の間にひっそりと身をひそめた。網は彼の上をかすめて通りすぎた。しかし神々は、何物かが水の底で身じろいだのを感じた。

そこで神々は二度めにはもっと滝の近くまで網を投げこみ、しかも今度は網の下に石をむすびつけたので、何物もその下をくぐって逃げることはできなかった。ロキはどんどん網に追われて逃げていったが、もう海まではほんの少しだけになった。絶対絶命ロキは力いっぱいに躍りあがると、網をとびこえて滝壺に泳ぎもどった。

もうロキの隠れ場所はわかった。神々は二組にわかれて網の両端をもち、トールは川の真中にはいって、みなが海の方へ網をひいていくあとを、ロキを逃がさぬように追っていくことにした。

こうなっては、ロキには二つの道しかない。といって海へ追いたてられていっては命があぶなかっ

た。ただ一つ残された道はもう一度網をとびこえて滝壺に逃げ帰ることである。
　彼は満身の力をこめて空中にとびあがった。しかし、今度はトールが待ちかまえていた。彼がとびあがったところを、トールの大きな手がぱっと空中でつかまえてしまった。ぬれた魚は危く彼の手の中をすべりぬけそうになったが、トールはしっかりと尻尾をにぎりしめた。そのために鮭の尻尾は今でも細くなっているのだという。
　こうしてロキは聖地の外でつかまってしまった。こうなっては慈悲をねがっても無駄だった。乾いた土の上へでると、彼はもとの姿に戻った。そのロキを神々は山奥の洞窟へつれていき、それから三つの平たい岩をとってくると、それに穴をあけて鉄の鎖を通してロキをつないだ。
　それから一匹の毒蛇をつかまえてくると、ちょうど蛇のはく毒が彼の顔の上にしたたり落ちるように、それをロキの頭上にくくりつけた。こうして神々はそこをたち去った。
　ロキの妻のシギンだけは、夫をかわいそうに思ってそこに残った。彼女は縛られている夫のそばに立って、したたり落ちる蛇の毒を鉢に受けてやった。でも、鉢がいっぱいになるたびにそれを捨てなくてはならない。その間に毒はロキの顔の上にしたたりおちた。するとロキは大地もふるえるほどものすごい力で苦しがって身をもがく。人々はそれを地震だと思うのだった。
　こうしてロキはこの世の最後の日まで鎖につながれていなくてはならなかった。

## 神々のたそがれと新しい黎明

ロキがこうして鎖につながれている間に、いよいよ神々と巨人たちとの最後の戦いの日が、不気味に近づいてきた。

それは、昔からラグナレク――〈神々のたそがれ〉――とよばれた、神々とこの世界がほろびる運命の日なのだ。「巫女の予言」という古詩には歌われていた――

やがてフィンブルの冬がやってくる
光はささず四方から雪がふきつけて
あいだに夏をはさむことなく、ぶっつづけに三つの冬がつづく
それからまた三冬つづいて
全世界がおそろしい戦争にまきこまれる
そのとき兄弟はたがいに殺しあい
その息子らは一族のよしみをやぶる
世界は苦しみもだえ　姦通はおそろしくふえ

## 一人として他をいたわるものがない

そして、そんな動乱の中で巨狼が太陽と月を呑みこみ、大地も山もくずれおちて、あらゆる巨人や魔物が神々と人間の世界に攻めよせ、この世は火に包まれて滅び去るのだという。

全知のオーディンは、その予言をよく知っていた。この美しい世界も、決して永遠につづくわけではない。バルドルの死が、もはやそのことを示していた。地上からは、もう美しさも清らかさも消えていった。青春のりんごをもった女神イドゥンも、イグドラシルの梢からまっさかさまにおちて姿を消した。暴力やいろんな悪が、どんどんふえてきている。兄弟はたがいに争い、子と父が戦っている……。

予言にいわれた通りのことが起るのだろうか。

日の光も熱も、ぐんぐんへってきた。一つづきの長い冬のように、三年のあいだ、冬がつづいた。四方から身を切るような風がふきつけて、雪がすさまじいほど降りつもった。太陽も月も隠れ、星は姿を消した。大地も山々もふるえて、木々は根こぎになってたおれ、あらゆる鎖や縛めはちぎれとんだ。

そこで、ロキとフェンリス狼は躍りでた。ミッドガルド蛇も、海の底からたけり狂ってはいだしてきた。すると海の水ははげしくわきたって、猛然と陸地におしよせた。川は堤を切ってあふれ、湖はたがいにつながりあい、水は谷々をうずめ、山々をおおった。そんな大洪水の中で、水底からナグルファールの船もぽっかりと浮かびでた。それは死人の爪でこしらえた船で、舵をとっているのはフリ

フェンリルに呑みこまれるオーディン

ムという巨人だった。

フェンリス狼は、下顎は地に上顎は天にとどくほど口を大きくあけて、その目と鼻の穴から火をふきながらアスガルドめがけて走ってきた。彼と並んで、ミッドガルド蛇も、天地も暗くなるほどもうもうと毒気をはきながら進んでくる。そのとき天が真二つに裂けたかと思うと、炎の国ムスペルヘイムの巨人らが乗りつけてきた。前後左右に炎をまきちらしながら、その先頭にスルトルが立っていた。彼の巨大な火の剣は、太陽よりもあかるくかがやいている。彼がアスガルドへわたる〈虹の橋(ビフロスト)〉をわたったら、橋はたちまち焼けおちてしまうのだ。

アスガルドのそばに広がるウィグリドの野には、もう地獄の住人どもを残らずしたがえて、あのロキもやってきていた。霜の巨人や山の巨人もおしよせてきた。

もはや最後と、橋番のヘイムダルはギャラルホルンの角笛をとって、力のかぎり吹きたてた。神々ははねおきて急いで会議をひらき、オーディンはミーミルの泉におりていって賢者の助言を求めた。天地をつらぬいてそびえるイグドラシルの巨木はざわめき、天地間の万物は恐れおののいた。

神々とワルハラに住むすべての戦士は、武器をとってヴィグリドの野に向った。先頭にたつのは、光まばゆい金のかぶとをかぶったオーディン。手にはグングニールの槍をもってフェンリス狼めがけ

て突進した。

彼と並んで走っていくのはトールだ。しかし、彼はミッドガルド蛇を相手にしなくてはならないので、オーディンの助太刀をするわけにはいかない。フレイはスルトルめがけてとびかかったが、その宝剣を失ってしまっていたため（ある美人を手に入れるため使者のスキルニルに与えた）ついにはげしい戦いののちにたおれた。チルは地獄のガルム犬と戦って、相討ちになって死んだ。

トールはついにミッドガルド蛇をたおしたが、九歩あとへさがったまま、ばったりとそこにたおれて死んだ。蛇のはきかけた毒気にやられたのだ。

フェンリルはついにオーディンを呑みこんだ。が、すぐさまヴィダルがとびかかって、狼の下顎に鉄の靴をはいた足をかけ、上顎をつかんでばりばりと口をひきさいて父の仇をうった。その間にヘイムダルは、ロキと戦って相討ちになり、枕を並べて死んでいった。

そこへスルトルが巨大な火の剣を投げつけた。全世界は火の海になって燃えあがり、イグドラシルの宇宙樹もついに炎に包まれてどうとたおれ、大地は海の底へ沈んでいった。

こうして「巫女の予言」に歌われた通り、神々の世界は滅び去っていった。

だが、それが最後ではなかった。沈黙と暗黒のあとには、またあたらしい日がくるのだ。海の底から、あたらしい陸地が青々と美しく浮かびでてきた。その土は種をまかなくても収穫ができた。古い太陽の娘のあたらしい太陽が、その母親よりももっと美しく空にかがやき出た。以前の悪や罪はみな消えてしまった。バルドルはまた生きかえって、光と美とがまた世界にかえってきた。

ほんの二、三人だったが、ヴィダルやヴァリや、トールのむすこのマグニなど、生きのこった神もあった。かれらは以前のアスガルドのあとに、もう一度すまいをたて直した。そこの草の中には、むかし神々がそれで遊びたわむれた金の将棋盤も見つかった。かれらはそれを見て、むかしのオーディンやトールのことをなつかしく思いだすのだった。

いっぽう、スルトルの火があれくるったときにも、リフとリフトラシールというふたりの人間が、森のおくにかくれて、朝つゆをすって命をつないでいた。この夫婦から、やがて全世界をみたすほどのおびただしい子孫が生まれてきたのだといわれる。

# 鍛冶ヴェールンド

鍛冶ヴェールンドは、ヴィーランド、ヴェーレントなどともいい、ゲルマン族の間に古くから伝えられた伝統的な名工である。彼が鍛えたという刀や精巧な金銀細工の話が、いろいろと残っている。『古エッダ』の「ヴェールンドの歌」は、こんなふうに始まっている——

暗い森をぬけて、南から乙女が飛んできた
戦いをよびさます白鳥処女たちが
ある湖の岸に下りたって
南の乙女らは高価な亜麻を織っていた

その一人の美しい乙女は
雪のような胸にエギルを抱いた
もう一人の白鳥の翼したスワンヴィトは
まばゆい腕にスラグフィドを抱き

ヴェールンドの像を刻んだ8世紀の象牙箱

その妹の三番目のアルヴィトはヴェールンドの白いうなじに
手を回した……

この詩の前書きでは、ヴェールンドは極北の民フィン族の王の息子で、三人兄弟の末っ子とされているが、ほかの伝承では、デンマークの王家の出となっている。いったいに北欧人は、フィン人やラップ人は魔法使いや妖精の種族と考えたらしい。そこで伝説の名工ヴェールンドをも、その仲間としたのだろう。この詩の中でも、後には妖精の王と呼ばれているくらいだ。とにかくここでは『古エッダ』の詩にしたがって、そのふしぎな物語を書いてみる。

三人の王子はスキーをはいて南に下って、スウェーデン王ニドウドの治める地方にきた。エギルは弓の名人として知られ、スラグフィドは〈鉄の打ち手〉と呼ばれ、ヴェールンドは鍛冶の名人として名高い。やがて彼らは、獣を追って狼谷と呼ばれる暗い谷間に入り、そこの狼湖の岸をしばらくの住所にした。

と、ある朝早く、彼らはその岸辺で亜麻を織っている三人の美

人を見かけた。それはオーディン神に仕える乙女ワルキューリで、白鳥の姿をして飛んでいる最中に、おそらく飛ぶことに倦んで一休みしていたところだった。詩中には歌われていないが、たぶんは翼をぬいで湖で水を浴びたあと、まだおそらくは翼をかたわらにぬぎ捨てたまま、人間の運命をさだめる機(はた)を織っていたのだろう。そしてその間に、こっそりと忍びよった三人に、その羽衣を奪われて、やむなく妻になることを承知したものだろう。

三組の夫婦は、森の中の湖畔で、七年のあいだ幸福にくらした。しかし、八年目になると、天上の乙女たちは地上の生活に倦んできた。彼女らは遠い彼方にあこがれて、落ち着かなくなった。ついにある日、夫たちが狩りに出て留守の間に、（おそらくは夫たちが隠していた羽衣を見つけ出して）無断で飛び去った。

まもなく帰ってきた兄弟は、家が空っぽなのを見出した。置き手紙ひとつなかった。

「何か用事ができて外出したのだ。夜になれば帰ってくるだろう。」

こう思って彼らは、待ちくらした。しかし、夜になっても妻たちは帰らず、幾日たっても帰ってくる気配はなかった。まもなく冬がやってきて、湖は氷にとざされ、野山も家も雪に埋もれた。とうとうエギルとスラグフィドは辛抱をきらしてしまった。いとしい妻のいなくなった森の中のさびしい家は、もはや彼らには見るのも厭わしいものでしかなかった。二人はスキーをはいて飛び出すと、エギルは東に、スラグフィドは西へと、それぞれ失われた妻を捜しに旅立った。

しかしヴェールンドは、いつかきっと恋しいアルヴィト〈純白〉という意味）が帰ってくるもの

と考えて、狼谷の湖のそばに残った。そして彼は、つれづれの時間をつぶすために、鍛冶の仕事に精を出した。つくったのは精巧な細工をほどこした純金の指輪で、その多くにはすばらしい宝石をはめこんだ。アルヴィトが帰ってきたら、贈物にするつもりで。彼の眼の前には、それをもらった時のアルヴィトのうれしそうな顔が、まざまざと見えていた……。

指輪は次から次へとできていって、まもなく七百個にもなった。ヴェールンドはそれを紐にさしつらぬいて、天井から壁へとかけ渡した。高価な宝石をちりばめた指輪たちはキラキラ星のように輝き、ふとヴェールンドがその紐にさわったりすると、ふれあって鈴のように鳴った。

ところが、そのことがスウェーデン王ニドゥドの耳にたまたま入った。王は名工ヴェールンドの宝を一つでも得たいものと思い、彼が家をあける時を待ちうけた。こうして一夜、王は狼谷にやってきて、部下を見張りに立てておいて家に忍びこみ、指輪の一つを盗んだ。指輪ははたしてすばらしい出来で、はめこまれていた宝石が、王の手にしていた炬火(たいまつ)の光をうけると、あやしく光り輝いた。それを見ると、ニドゥド王の胸底には罪ふかい欲心が燃え上った。彼は部下をあたりにひそませて、ヴェールンドが帰ってきたら引捕えるべきを命じた。

あけがた近く帰ってきたヴェールンドは、指輪が一つ足りなくなっているのにすぐさま気づいたが、これを恋しいアルヴィトが帰ってきたしるしと取った。しかし、いつまで待っても彼女は姿をあらわさない。あやしい不安が彼の胸をさわがせた。それでも、遠歩きに疲れきっていた彼は、まもなく深い眠りにおちた。

突然彼は、夢魔に胸をおさえつけられるような胸苦しさをおぼえて、はね起きようとした。だが、もはや身体は頑丈な鉄の鎖——それは彼自身が作ったものだった——にいましめられているではないか。足には重たい足かせもはめられている。

「ははは、鍛冶屋が自分でつくった鎖にしばられたわい。わしはこの狼谷の領王ニドゥドじゃ。お前のその宝は、どこから取ってきたのか白状せい。それはもともとわれらのものじゃ。」

ニドゥドがあざ笑うように、意地わるくいった。ヴェールンドは、この国には黄金がないことをいい、宝は故郷から持ってきたのだといったが、王はきかなかった。そこへ蛇のような眼をした妃がはいってきていった。

「この男は邪悪な眼をしています。不幸のもとになるかもしれないから、足の腱を切って、動けぬようにするがいいでしょう。そうすれば、この男とその財宝をどうしようと、もう復讐を恐れる必要はありません。」

こうして誇り高いヴェールンドは不具にされ、宝物もすべて奪われた。王は彼が秘蔵していた剣まで取り上げて、自分の腰につるした。最初に盗んだあの指輪は、記念に娘のベズヴィルに与えた。ヴェールンド自身は、湖中の小さい島セーヴァルスタッドにつながれて、びっこひきひきそこの鍛冶場で王のために仕事をさせられることになった。

この屈辱と労苦をヴェールンドは、ただ一つのことのために耐えた——ニドゥド一族にいつかは復讐してやること。そのために彼は、憎しみをおしかくし、不具の足をなおさら苦しそうに引きずって

見せながら、じっと機会をねらっていた。

ニドゥド王は、誰にもヴェールンドをとじこめた島に近づかせなかった。宝をひとり占めにするためと、彼の非道を人に知られることを欲しなかったから。しかし、運命は彼よりももっと狡猾だ。ある日、王の二人の若い王子が、そんなにも有名な鍛冶を見たいと思って、湖を渡って訪ねてきた。苦しい経験で多くを学んでいたヴェールンドは、笑顔で王子たちを迎えていった。

「ようこそ、王子たち。この鍛冶場にあるものは、なんでも進呈しますから、よく見てください。」

そういって、武器や指輪やブローチのたぐいから、鍛冶場の槌やふいごまで見せた。父親に似て欲深い王子たちの眼はぎらぎらと燃え、精巧な金銀細工にふれる手はぶるぶるとふるえた。ヴェールンドはぶきみにほくそ笑んでいった。

「わたしは喜んで、これらの物の何でも君たちにあげたい。でも、君たちが今日ここへ来たことは、お父さまたちも知っていらっしゃる。だから、持って帰ったところで、取りあげられてしまうだろう。だから、明日また、誰にも気づかれないようにして、こっそりいらっしゃい。そして好きな物を持ち帰って、隠しておくといい。」

少年たちは残りおしそうに帰っていったが、あくる日さっそくやってくると、「早く宝物を見せてよ。」と、せきたてた。

ヴェールンドは鍛冶場の隅にあった大きな箱のそばにつれて行くと、ふたの片側を持ちあげて、中をのぞきこんで自分の好きなのを選び出すようにいった。箱は大きく高かったので、少年たちは爪先

だちで立って、首をふちにかけてのぞきこんだ。とたんにヴェールンドは、力まかせにふたを打ちおろした。へりは刃のようにとぎすましてあった。二少年の頭は音をたてて箱の中に落ち、胴体は丸太のように床にころがった。

まもなく鍛冶場の煙突からは濃い煙が立ちのぼった。ニドゥドの王子たちは、肉も骨も衣服の一片も残さずに灰になった――ただ頭蓋骨だけを残して。それにヴェールンドは銀をかぶせてみごとな杯に仕上げ、王に献じた。王子の眼球は、妃の黄金の首飾りに宝石としてはめこんだ。彼らの歯は象牙がわりに用いて、姉のベズヴィルのふくよかな胸を飾る二つのブローチにした。これほどみごとな細工物はかつてスウェーデンになかった。王はその杯をつねに食卓におき、妃は首飾りを首からはなさず、ベズヴィル姫はまた決して金と象牙のブローチを、父王からもらったれいの黄金の指輪とともに、肌からはなさなかった。

ある日、その指輪がこわれた。おとなしい姫は、父王に叱られるのを怖れて、そっと船を出してセーヴァルスタッドを訪ねると、誰にも気づかれぬようにこれを直してくれとヴェールンドに頼んだ。

「よろしい。父上にも母上にも、以前より美しく見えるほどに直してあげましょう。まあここで一休みして待っていらっしゃい。」

鍛冶屋は姫に食べものと飲みものをすすめた。酒には強い眠り薬がまぜてあった。まもなく彼女は深い眠りに落ちた。ヴェールンドは彼女を思うがままにした。

やがて目ざめた姫は、素裸で、不具の鍛冶屋に抱かれている自分を見出した。恐怖と汚辱に身をふ

るわせて、彼女は指輪のことも忘れ、喪心して島を去った。
ヴェールンドは復讐が完了したのを知った。いずれニドゥド王が事態を知って、激怒してやってくるにちがいない。この上ぐずぐずと島に留まることは無用だった。彼はかねて用意しておいた、精巧な銀のあみ細工の翼を広げ、そのあみ目ごとに白鳥の羽をさしこんだ。この羽は、弓の名人の兄エギルが打ち落した白鳥の翼から取ったものだった。翼ができ上ると、彼はひと打ちして空にまい上った。彼の鍛冶場も、周囲の湖や森も、みるみる下に沈んだ。
まもなく対岸の、豪壮なニドゥド王の館の上にきた。妃は庭で空を見上げていたが、彼の姿を見かけると、顔色をかえて広間の王の許へいそいだ。ニドゥドはあの銀の杯を前に壁ぎわのテーブルに坐って、失われた息子たちのことを嘆いていた。
「きっとヴェールンドのやつが殺したのだ！　誰かボートの用意をしろ、わしは出かけてあいつを問いつめてやらねばならぬ。夜も昼も疑惑と不安が胸をかんで、気がくるうばかりじゃ！」
そこへ妃が入ってきて叫んだ。「ボートも馬も用はありません。ヴェールンドがこちらへやって来ます。あなたに話があるのでしょう。」
王が庭へ出て行くと、ヴェールンドは低く舞い下りてきた。王は空に向って叫んだ。
「妖精の王ヴェールンドよ、わしの息子たちをどうしたか、話してくれ。」
「ニドゥド王よ、まず一つのことを誓ってくれ。わたしはお前の娘ベズヴィルを妻にしたが、彼女はいずれ子供を生むだろう。どうか彼女を殺さぬように。」と、ヴェールンドは空からいった。

「それは誓おう。だが、息子たちはどうした？」と、王と妃はいった。
「頭蓋骨はお前の食卓の上にのっているし、眼玉は妃の首飾りについている。歯はベズヴィルの胸を飾っている。残りは灰になって空にとんだよ。」
「あなたの強欲の呪いよ！」
「お前の残忍さの受けた罰じゃ！」
と、王と妃は互いに罵りあった。王はじだんだふんで何とかしてヴェールンドに思い知らしてやりたいと思ったが、相手はまたもや矢もとどかぬほど空高く舞い上って、カラカラと笑った。しかし、金髪の美しいベズヴィルが父母に呼びたてられてしおしおとやってくるのを見ると、さすがに剛気のヴェールンドも心いたんで、目をそむけた。
「姫よ、わしの聞いた話は本当か？　お前はあのヴェールンドと二人で島にいたのか。」
と、王はきいた。
「お父さま、あなたの聞かれたのは本当なのです。わたしとヴェールンドは二人だけで島にいました。ああ、夢ならばよかったのに。わたしには身を守るすべがありませんでした。守る力もありませんでした。」
　風にのってくるそんな言葉をかすかに耳にしながら、ヴェールンドは遠く森をこえ、湖をこえて飛び去った。惜しいことに、詩はそこで切れていて、彼がやがて恋しい妻のアルヴィトや兄弟にめぐりあったかどうかは、知ることができない。

# 龍殺しのシグルト

ある時、オーディンがまたヘニールとロキをつれて、世界を見回りに出た。
やがて三人は川のそばに出たので、それを溯ってゆくと、滝があった。傍らの岩の上では一匹のカワウソが、滝壺でとってきた鮭を、さもうまそうに食べていた。
それを見ると、いたずら者のロキは、すばやく石を拾って投げつけた。石はみごとにカワウソの頭にあたって、彼は即死してしまった。ロキはそのカワウソと鮭を取りあげると、二人の神に見せて自慢をした。
「どうだい、ただ一つの石でカワウソと鮭を仕とめるなんて、わしでなくてはできない芸当だろうが。」
神々がカワウソと鮭をもってまた歩いていくと、まもなく大きな屋敷の前にでた。主人はフレイドマールという百姓だった。彼はなかなかの豪族で、また魔法にすぐれていた。
三人の神はその家にはいっていくと、「今夜はお宅にとめてくれませんか。食べものはもっていますから。」といって、もってきたカワウソと鮭を見せた。
ところがフレイドマールは、カワウソの死骸を見るとさっと顔色をかえた。彼はすぐさま二人の息

子のファフニールとレギンをよぶと、お前たちの兄弟のオッタル（かわうそという意味）が殺されたぞ、といって、そこにいる三人の神々を指さして、
「こいつらが殺したのだ。」
というなり、神々につかみかかった。二人の息子もすぐさま神々に躍りかかって、とうとう親子は神々を縛りあげてしまった。
神々は、知らずに大切な息子を殺してしまったことをわびて、弁償金は君たちの望むだけ出すから、どうか命だけは助けてくれといって、約束はかならずまもることを誓った。
すると、金に目のないフレイドマールは、死んだカワウソの皮をはいでそこにひろげていった――
「では、この皮がすっかり隠れるだけの金をよこせ。そしたら許してやろう。」
すぐさまオーディンは、ロキを黒小人のところへ使いにやった。黒小人にたのんで、金をだしてもらおうと思ったのだ。
ロキはさっそくアンドヴァリという小人のところを訪ねたが、相手はロキがやってくるのを見ると、すぐさま魚にばけて水にもぐった。しかし、そんなことで欺かれるロキではない。たちまち小人を捕えると、命がおしかったら、岩の割れめに隠している金を残らずさしだせといって嚇しあげた。
小人は岩のあいだに隠していた黄金を残らずさしださなくてはならなかった。それは大した宝の山だった。ところが小人は、小さい金の指輪を一つだけ、こっそりと袖の中に隠した。
すばやくそれを見たロキは、どなった。

「こら、その指輪もだすんだ。」

「どうか、この指輪だけは取り上げないでください。これさえあれば、また宝をふやすことができますが、これを取られてしまってはどうにもなりません。」

と、小人は必死で指輪だけは助けてくれるように頼んだ。しかしロキは、それさえ許してやらずに取り上げてしまったのである。そうして帰途につこうとすると、絶望した小人は呪いの言葉を投げつけた。

「黄金の指輪よ、お前をもつものの命とりになれ！」

それでもロキは、「そんなことは平気だよ。この指輪をつぎに持つ人によく注意しておくからな。」というなり、さっさと引き上げてきた。

やがてフレイドマールの家にもどると、彼はオーディンに小人のところから取ってきたものを見せた。オーディンは指輪を見るとすっかり気にいってしまって、それだけは手許に残して、あとの黄金はフレイドマールに渡した。

フレイドマールはその黄金をカワウソの皮の上にならべた。毛皮はみるみる、光りかがやく金で隠れてしまった。それを見てオーディンはいった。

「どうだ、これだけ皮がかくれりゃ十分だろう。」

フレイドマールはじいっとそれを睨んでいたが、一本の口髭がまだ隠れていないのを見つけてどなった。

「ほれ、ここがまだ出てるじゃないか。これも隠れるようにしなくては約束がちがう。」

なるほどフレイドマールのいう通り、口髭が一本だけ、まだぴんと立って外にはみでていた。

仕方がないので、オーディンはれいの指輪をだして、それを口髭の上においた。こうしてようやくオッタルの弁償金をすますことができたのであった。

そこでフレイドマールは、オーディンの投槍やロキの千里靴を返してくれた。こうなれば、もう何も恐れることはなかった。いよいよフレイドマールの家をでていくとき、ロキは叫んだ――

「おい、フレイドマール、よくおぼえておけ。その指輪には小人の呪いがこもっているんだ。そいつを持っている者はきっと命を失うようになるんだぞ。」

フレイドマールは、息子の弁償金として大金を手に入れたので大満足だった。こうなると、いよいよ貪欲になって、すこしも息子たちにわけてやらない。ファフニールとレギンが分前を要求しても、子供のくせに生意気をいうなとばかり、一言ではねつけてしまった。

腹を立てた兄弟は、ついに金がほしいばかりに父を殺した。ところが今度は兄のファフニールが父の全財産をひとりじめにして、弟には少しも分けてやらない。

「兄さん、その金の半分はぼくのものですよ。」

と、レギンは分前を要求した。しかしファフニールは、

「お前にわけてやるつもりはないな。なにしろお前は金のためにはじぶんの父親でも殺すやつだ。おやじと同じ運命におちたくないなら、さっさとここを出ていくがいい。」

シグルトの龍退治（岩壁画）

とうそぶくと、父親のもっていた〈エギルのかぶと〉をかぶり、やはり父親のものだったフロティという名刀をとって、弟を睨みつけた。この〈エギルのかぶと〉は、見るも物すごい姿をしていて、それを見たものは誰しも体が震えださずにはいない名高いかぶとだった。レギンは恐れて父の家をにげだした。

するとファフニールは、グニタの原へいって穴をほり、その中に宝を埋めて、じぶんは龍の姿になってその上でとぐろを巻いていた。

その間にレギンはユトランドのヤルプレク王の許へきて、そこの刀鍛冶になった。彼は自分のところに弟子入りしたヴォルスング家のシグムンド王と妃ヨルディスの遺子シグルトを養子にした。シグルトは、その生まれからいっても、武勇からいっても、そのころ第一の勇士だった。『ニーベルンゲンの歌』のジークフリートである。

一日、レギンはシグルトにファフニールのことを話して、

「あの龍を殺して、あいつの隠している宝をとったら、すばらしい名誉になる上に、大した財産が手にはいるわけだ。」

とけしかけて、すばらしい名剣グラムをきたえてやった。
　シグルトがその刀をもっていって川の中につき立て、羊の毛を上から流してみると、羊毛は刀にさわるなり、次々に真二つに切れて左右にわかれて流れていった。ついでレギンの鍛冶場にはいっていき、はっしと金床に切りつけると、刀は真二つに金床を切って台木まで切りこんだ。
「これさえあれば、どんな毒龍だって退治してみせる。」
と、シグルトは勇みたってレギンと一緒にグニタの原にでかけた。
　見ると、たけ高い草がなにか重いものにおしつぶされたように、ずっと一すじ、泉のほうまでたおれふしている。
「たしかにファフニールが水を飲みにいったのだ。帰りを待ちうけてやっつけよう。」
　シグルトはその通り道に穴をほって、中に隠れていた。そしてファフニールが帰ってきて穴の上を通りかかったとき、さっとグラムの剣で心臓をつらぬいた。
　龍はもうもうと毒気を吐いてのたうちまわったが、穴の中にいたシグルトは平気だった。全身に龍の血しぶきをあびながらも、ついにこれをたおしてとどめをさしてしまった。
　そこへ、それまで龍を怖れて遠くに逃げていたレギンがやってきて、
「おまえが殺したのは、じつはわしの兄弟だ。よくも殺してしまったな。その罪はゆるしてやるかわりに、心臓はおれがもらう。火であぶって焼いてくれ。」
というと、龍の血を飲んでそこに寝ころんで、さも気持よげに眠りこんだ。

シグルトはいわれた通り龍の心臓を串にさして焼いていた。やがて心臓がジュージューいってやけてきたので、もういいかなとばかり、指でちょっとさわってみた。とたんに、熱しきった脂がとんで指にはねかかった。

「あっちっち!」思わず叫んで指を口に入れたとき、ふしぎやシグルトは急に鳥の言葉がわかるようになった。龍の心臓の血をなめたからである。

すぐ目の前で、七羽の小鳥が囀っていたが、その一羽が歌っていった。

龍の血をあびたシグルトが
火のそばでファフニールの心臓を
焼いているよ
あの心臓をじぶんで食べれば
かしこくなるのにさ

もう一羽が歌った——

いい気でレギンは
眠っている

じぶんを信じている友を
裏切ることを考えながら
あの悪党の鍛冶屋は
兄弟の仇をうつつもりなのだ

これをきくと、シグルトはレギンの眠っているところへいって、その首を切りおとした。それからじぶんで龍の心臓を食べてしまうと、名馬グラニをひっぱって龍の穴へいき、宝物を残らずとって馬につけた。穴には、〈エギルのかぶと〉をはじめ、おびただしい財産が隠してあった。
こうして彼は〈龍殺しのシグルト〉として、いよいよ名声を高めたのであった。

ギリシャ神話関係地図
ドドナ
マケドニア
トラキヤ
マルマラ海
サモトラケ島
オリンポス山
トロイ
オッサ山
レムノス島
ヘレスポント海峡
イダ山
ペリオン山
小アジア
コルキュラ島
アケロオス川
プティア
スキュロス島
エウボイア
パルナソス山
オルコメノス
エーゲ海
デルフォイ
イタカ島
キオス島
テーバイ
イオニア海
マラトン
コリント
アテナイ
エピダウロス
ミュケナイ
オリンピア
ミレトス
アルゴス
アルペイオス川
ティリンス
デロス島
アルカジア
セリポス島
ナクソス島
ピュロス
スパルタ
ペロポンネソス半島
メロス島
テラ島
ロドス島
地中海
クレタ島
イダ山
クノッソス
パイストス

# あとがき

ヨーロッパの文学や美術を味わうのに不可欠なギリシャ神話の大要を、若い読者に知らせるような本を書いて欲しいとの依頼で、社会思想社の教養文庫のためにとりかかったのは、もう三十年近い前のことだ。ギリシャ神話については多くのすぐれた解説書があり、これを専攻としている人もあるので、ギリシャ語も読めない私などの出る幕ではないことは承知している。しかし、ギリシャ神話と並んでヨーロッパの二大神話をなす北欧（ゲルマン）神話については、筆者も多少はつついてきた上に、未だによい紹介書がなく、研究者もほとんどない始末なので、この領域なら私にもいくらか発言の余地があるかもしれない。そう思ってこれを加えることを条件にして、元気を出してまとめてみたのがこの本だ。そして、これらの神話に取材した絵や彫刻を挿絵にして、できるだけ親しみやすい本をと心がけた。

それにしても、これはまったく筆者としては自信のない仕事だった。ところが、どこか見所があったと見え、大変売行がよかったばかりでなく、呉茂一さんのようなギリシャ神話の権威者からも「なかなかよく出来ているよ」と褒められて、少しは自信をえた。北欧神話の紹介も多くの人に喜んでもらえた。そんなわけで版に版を重ねて、とうとう紙型がすり切れて用をなさくなった。そこでこれを機会に、Ｂ６版に改めた新版を出したが、本文には若干の誤りを訂正したのと、図版を大幅に改めたほかは、ほとんど手を加えなかった。その後も多少は研究を重ねてきた

が、全体を書きかえるだけの新しい知見を摑むにはいたっていないし、この本はこれでいいと思ったからでもある。それを今度はまた最初に戻って文庫版にすることになった。

ギリシャ神話のおもしろさ美しさについては、今さらここで説くまでもないだろう。しかし北欧神話がそれに劣らぬ美しさ、またおもしろさをもっていることは、まだ広く知られるにはいたっていない。それはただおもしろいだけでなく、近代ヨーロッパとその文化を形成する上で根幹的役割を果してきたゲルマン民族の原精神を伝える神話なのだから、もっともっと注目され研究されなければならぬものなのだ。

「北欧神話の世界は奇妙な世界だ。それは人間の空想した他のいかなる天国にも似ていない。そこには何ら喜びの輝きはなく、幸福の保証もない。しかもその上に避けがたい破滅の脅威がのしかかっている深刻厳粛な場所だ。神々は知っている、いつか彼らの滅びる日がくることを。いつか彼らは敵を迎えて、敗北と死の中へ没しなければならぬだろう。善の力の悪の力に対する防戦は絶望的だ。にもかかわらず神々は最後まで戦うだろう。このことは人間性にとっても不可避なのだ。」(エディス・ハミルトン)

こんな点を、ギリシャ神話のエロスの力が大きい役割をする華麗で明るい世界と対比して考えてみるのも、得るところが多いはずだ。神話の魅力は非常に複雑で豊かで、まだまだ究めつくされるには遠い。むしろ謎はつつけばつつつくほど深まる感じがする。

私のこの小著も、そんな魅惑の一端を諸兄姉にのぞかせることができたら幸いと思う。

一九八一年一月　著　者

## マ行



## ヤ行



## ラ行



## ワ行

## サ行



## タ行



## ナ行



## ハ行

## ヤ行



## ラ行



# 北欧神話　索引

## ア行



## カ行

## マ行

## ナ行



## ハ行

## サ行



## タ行

## カ行

# ギリシャ神話　索引

## ア行

## 著者略歴

山室　静（やまむろ　しずか）

1906年　鳥取市に生まる

東北大学美学科卒

《現　在》　詩人，文芸評論家，文芸家協会会員

《著訳書》　「北欧文学の世界」「タゴール詩集」アンデルセン全集，ヤコブセン全集，イプセン選集，「聖書物語」「世界むかし話集」「北欧神話と伝説」（グレンベック著）「アンデルセンの生涯」「晩秋記」他多数

《現住所》　〒214　川崎市多摩区片平 339

〈お願い〉

☆現代教養文庫の定価は，すべてカバーに明記してあります。

☆万一，落丁乱丁の場合は，直接小社にお送りくだされば早速お取替します。



現代教養文庫　430　　ギリシャ神話

1962 年 7 月 30 日　初版第 1 刷発行

1981 年 3 月 30 日　再版第 1 刷発行

1989 年 2 月 15 日　再版第29刷発行

著　者　山　室　静

発行者　宮　川　安　生

社會思想

発行所　株式会社 社　会　思　想　社

（113）　東京都文京区本郷 3 の25の13

電 話 （03）813－8101（代表）

振替東京 6－71812

ISBN4-390-10430-6

横山印刷・小林共文堂

ギリシャ神話〈付北欧神話〉

山室 静著

教養文庫

430

D

178

¥480

ISBN4-390-10430-6 C0114 ¥480E

社会思想社 定価480円

カバー印刷・方英社